

潤地頭給遺跡Ⅰ

(第Ⅲ区)

—福岡県前原市立東風小学校建設に係る発掘調査報告書—

前原市文化財調査報告書

第 93 集

2 0 0 6

前原市教育委員会

潤地頭給遺跡Ⅰ

(第Ⅲ区)

—福岡県前原市立東風小学校建設に係る発掘調査報告書—

前原市文化財調査報告書

第 93 集

2 0 0 6

前原市教育委員会

国史跡 志登支石墓群

潤地頭給遺跡Ⅴ区

Ⅰ区

Ⅱ区

Ⅲ区

Ⅳ区

潤地頭給遺跡

志登松本遺跡

潤中町遺跡

雷山川

上空から見た潤地頭給遺跡と
周辺の遺跡

古屋敷遺跡





a. 潤地頭給遺跡 III-E区 全景 (西側上空から)



b. 潤地頭給遺跡 III-W区 全景 (東側上空から)



a. Ⅲ-E 区出土 水晶原石



b. Ⅲ-E 区出土 管玉製作資料



c. Ⅲ-E 区出土 筋砥石



a. Ⅲ-E区 大溝出土 筒形器台



b. Ⅲ-W区 1号溝出土 窓開土器



c. Ⅲ-E区 大溝出土 甕



d. Ⅲ-W区 1号溝出土 壺

序

前原市はかつて「魏志倭人伝」に登場する「伊都国」の所在した地として知られております。市内には伊都国の王都と考えられる三雲・井原遺跡を始めとする弥生時代以降の遺跡が密集しており、数多くの歴史学の研究者や愛好家の注目を集めております。

平成16年秋には伊都国のガイダンスや調査研究の核として、伊都国歴史博物館がオープンし、これまで、国内のみならず中国や韓国を始め海外からのお客様も多数来館されるなど、伊都国の重要性が改めて認識されております。

本報告書に掲載しました潤地頭給遺跡は小学校の新設に伴い発掘された遺跡です。波多江、前原小学校区の人口増加に伴い、児童数が増加したため、波多江小学校と前原小学校の分離校として新たに東風小学校の建設が潤地区に計画されました。敷地面積は約4万㎡、このうち調査面積はおよそ2分の1にのぼり、市内では近年稀にみる大規模な調査となりました。建設予定地は旧海岸線の近接地に位置し、調査前から歴史的に重要な地域と考えておりましたが、調査の開始直後には弥生時代を中心とする遺構や遺物が広範囲に検出され、さらには九州初の大規模な玉作工房群の発見へと続きました。この一連の発見により、本遺跡はたびたび新聞やテレビ、ラジオなどマスコミにも取り上げられ、世間の注目をあびることとなりました。

本遺跡の調査終了後も、出土遺物が文化庁主催の新発見考古速報展「発掘された日本列島2004」をはじめ、国内各地での博物館の企画展に出展されるなど、現在もなお、注目を集めております。

本報告書では遺跡南西部の第Ⅲ調査区の調査成果について報告しております。本遺跡の発掘調査報告書として端緒となるものであり、今後、刊行を予定しております他の調査区の報告書の成果とあわせてご活用いただければ幸いです。

なお、本報告書に掲載された調査区の大部分は小学校のグラウンドの下に保存されることとなりました。今後、本遺跡が生きた教材として東風小学校をはじめとする市内の小中学生の歴史教育に役立つと共に、将来、この小学校から巣立つ子供たち一人一人の母校に対する思い出や誇りとなれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査にあたってご理解とご協力を頂きました周辺住民の方々、ご指導とご助言を頂きました先生方、また、暑さや寒さをいとわず調査に参加して頂いた作業員の皆様に心から感謝を申し上げます。

平成18年3月31日

前原市教育委員会
教育長 菊竹利嗣

例言

1. 本書は前原市大字潤字地頭給にて、前原市立東風小学校建設に伴い実施した文化財調査の報告書の第1冊目である。

本書では全調査区のうち、南西側の第Ⅲ区について報告する。

2. 本書に使用した遺構の実測および平板による地形の測量は主に、江野道和、江崎靖隆、瓜生秀文、平尾和久、牟田華代子、平野隆之、西村康子、藤野さゆり、川内真智子、田中阿早緑、川淵恵子、川原秀子、谷脇友子、菅原千恵子、末永優子、神谷三枝子、北海京子、中山健介、木下真紀、織田優平、古家いずみ、加藤優香、田中裕美が行った。

3. 現場における写真および出土遺物の撮影は江野が行った。

4. 現場における空中写真撮影は有限会社空中写真企画(代表 壇睦夫)に委託した。

5. 本書に掲載した遺構図および全体図で使用した座標は国土座標系第2系を用いている。方位に関しては磁北で示している。

6. 遺物の復元は主に、藤木和子、中田朋子、川上辰子、藤森啓子、和多治子、柏田睦子、三嶋弘美が行った。

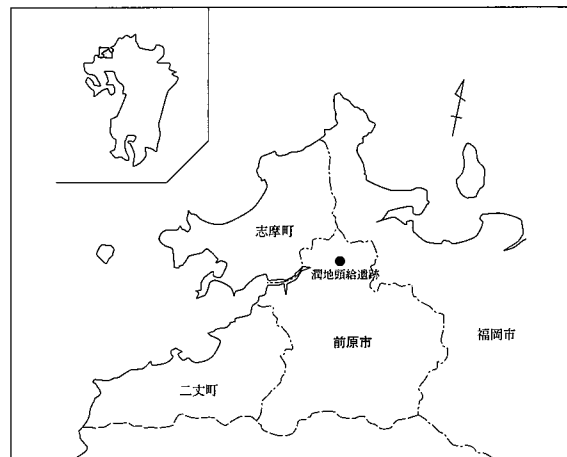
7. 遺物実測図は主に、藤野、田中、川淵、三嶋、名取さつき、平尾、江野と福岡大学の小嶋篤と加藤が作成した。

8. 製図は主に、藤野、田中、友池真由美が行った。

9. 本書の挿図中の遺物番号は写真図版の番号と統一している。なお、写真図版中の遺物は主なものを選択して掲載した。

10. 本書で掲載した遺物や記録類は順次、伊都国歴史博物館にて収蔵保管する予定である。

11. 本書の執筆および編集は江野が行った。



前原市の位置

本文目次

I. はじめに	1
1. 調査に至る経過	1
2. 調査の工程	1
3. 調査の組織	3
II. 調査の記録	5
1. 位置と環境	5
2. III-E 区の調査	8
(1) 概要	8
(2) 集落関連の遺構と遺物	9
a. 大溝	9
b. 掘立柱建物	86
c. 甕棺墓	91
d. 土坑	93
e. 井戸	98
f. 溝	100
(3) 玉作関連の遺構と遺物	103
a. 工房および屋外周溝	103
b. 玉類	114
c. 玉作関連の工具類	116
(4) その他の出土遺物	125
3. III-W 区の調査	126
(1) 概要	126
(2) 弥生時代の集落の遺構と遺物	127
a. 1号溝	127
(3) 古代以降の集落の遺構と遺物	146
a. 1号掘立柱建物	146
b. 井戸	147
c. 2号溝	152
d. その他の出土遺物	153
III. 小結	154
(1) III-E 区	154
(2) III-W 区	155

挿図目次

第1図	発掘調査前の地形と試掘調査地点(1/3000) ……1		
第2図	試掘調査 出土遺物実測図(1/3、1/4) ……2		
第3図	第1回現地説明会資料表紙 ……3		
第4図	第Ⅲ区の調査区配置図(1/1500) ……4		
第5図	周辺の主な遺跡(1/50000) ……6		
第6図	周辺の地形と過去の調査地点(1/2500) ……7		
第7図	Ⅲ-E区 主要遺構配置図(1/600) ……9		
第8図	Ⅲ-E区 大溝 土層横断面図(1/30) ……10		
第9図	Ⅲ-E区 大溝 平面および縦断面図(1/150) ……11・12		
第10図	I区 試掘調査トレンチ土層断面図(1/250) ……11・12		
第11図	Ⅲ-E区 大溝 A区上層 出土遺物実測図1(1/4) ……15		
第12図	Ⅲ-E区 大溝 A区上層 出土遺物実測図2(1/4) ……16		
第13図	Ⅲ-E区 大溝 A区上層 出土遺物実測図3(1/4) ……18		
第14図	Ⅲ-E区 大溝 A区上層 出土遺物実測図4(1/4) ……19		
第15図	Ⅲ-E区 大溝 A区上層 出土遺物実測図5(1/4) ……21		
第16図	Ⅲ-E区 大溝 A区上層 出土遺物実測図6(1/4) ……22		
第17図	Ⅲ-E区 大溝 A区上層 出土遺物実測図7(1/4) ……24		
第18図	Ⅲ-E区 大溝 A区上層 出土遺物実測図8(1/4) ……25		
第19図	Ⅲ-E区 大溝 A区上層 出土遺物実測図9(1/4) ……27		
第20図	Ⅲ-E区 大溝 A区上層 出土遺物実測図10(1/4) ……28		
第21図	Ⅲ-E区 大溝 A区上層 出土遺物実測図11(1/4) ……29		
第22図	Ⅲ-E区 大溝 A区上層 出土遺物実測図12 (1/3、1/4) ……30		
第23図	Ⅲ-E区 大溝 A区上層 出土遺物実測図13 (1/2、1/3) ……32		
第24図	Ⅲ-E区 大溝 A区上層 出土遺物実測図14 (1/2、1/3、1/4) ……33		
第25図	Ⅲ-E区 大溝 A区上層 出土遺物実測図15 (2/3、1/2、1/3) ……35		
第26図	Ⅲ-E区 大溝 A区下層 出土遺物実測図1(1/4) ……37		
第27図	Ⅲ-E区 大溝 A区下層 出土遺物実測図2 (1/3、1/4) ……38		
第28図	Ⅲ-E区 大溝 B区上層 出土遺物実測図1(1/4) ……40		
第29図	Ⅲ-E区 大溝 B区上層 出土遺物実測図2(1/4) ……42		
第30図	Ⅲ-E区 大溝 B区上層 出土遺物実測図3 (1/3、1/4) ……43		
第31図	Ⅲ-E区 大溝 B区上層 出土遺物実測図4 (1/2、1/3) ……44		
第32図	Ⅲ-E区 大溝 C区上層 出土遺物実測図1(1/4) ……46		
第33図	Ⅲ-E区 大溝 C区上層 出土遺物実測図2 (1/3、1/4) ……47		
第34図	Ⅲ-E区 大溝 C区上層 出土遺物実測図3 (2/3、1/2、1/3) ……48		
第35図	Ⅲ-E区 大溝 C区下層 出土遺物実測図1(1/4) ……50		
第36図	Ⅲ-E区 大溝 C区下層 出土遺物実測図2(1/4) ……51		
第37図	Ⅲ-E区 大溝 C区下層 出土遺物実測図3 (1/2、1/3) ……52		
第38図	Ⅲ-E区 大溝 D区上層 出土遺物実測図1 (1/3、1/4) ……54		
第39図	Ⅲ-E区 大溝 D区上層 出土遺物実測図2 (2/3、1/2、1/3) ……55		
第40図	Ⅲ-E区 大溝 D区中層 出土遺物実測図1 (1/2、1/3、1/4) ……57		
第41図	Ⅲ-E区 大溝 D区中層 出土遺物実測図2 (1/2、1/3) ……58		
第42図	Ⅲ-E区 大溝 E区上層 出土遺物実測図1(1/4) ……59		
第43図	Ⅲ-E区 大溝 E区上層 出土遺物実測図2 (1/2、1/3、1/4) ……60		
第44図	Ⅲ-E区 大溝 E区上層 出土遺物実測図3 (2/3、1/2、1/3、1/4) ……61		
第45図	Ⅲ-E区 大溝 F区上層 出土遺物実測図1(1/4) ……63		
第46図	Ⅲ-E区 大溝 F区上層 出土遺物実測図2(1/4) ……64		
第47図	Ⅲ-E区 大溝 F区上層 出土遺物実測図3 (1/2、1/3) ……65		
第48図	Ⅲ-E区 大溝 G区上層 出土遺物実測図1(1/4) ……67		
第49図	Ⅲ-E区 大溝 G区上層 出土遺物実測図2(1/4) ……68		
第50図	Ⅲ-E区 大溝 G区上層 出土遺物実測図3(1/4) ……69		
第51図	Ⅲ-E区 大溝 G区上層 出土遺物実測図4(1/4) ……70		
第52図	Ⅲ-E区 大溝 G区上層 出土遺物実測図5(1/3) ……71		
第53図	Ⅲ-E区 大溝 G区上層 出土遺物実測図6 (1/2、1/3) ……72		
第54図	Ⅲ-E区 大溝 G区中層・下層 出土遺物実測図 (1/3、1/4) ……74		
第55図	Ⅲ-E区 大溝 I区上層 出土遺物実測図1(1/4) ……75		
第56図	Ⅲ-E区 大溝 I区上層 出土遺物実測図2(1/4) ……76		
第57図	Ⅲ-E区 大溝 I区上層 出土遺物実測図3(1/4) ……78		
第58図	Ⅲ-E区 大溝 I区上層 出土遺物実測図4 (1/2、1/4) ……79		
第59図	Ⅲ-E区 大溝 I区上層 出土遺物実測図5(1/3) ……81		
第60図	Ⅲ-E区 大溝 I区上層 出土遺物実測図6 (1/3、1/4) ……82		
第61図	Ⅲ-E区 大溝 I区上層 出土遺物実測図7 (1/2、1/3) ……83		
第62図	Ⅲ-E区 大溝 I区下層 出土遺物実測図 (1/3、1/4) ……85		
第63図	Ⅲ-E区 大溝 上部包含層 出土遺物実測図 (1/3、1/4) ……85		
第64図	Ⅲ-E区 1号掘立柱建物 出土遺物実測図(1/4) ……86		
第65図	Ⅲ-E区 1号掘立柱建物実測図(1/60) ……86		
第66図	Ⅲ-E区 2号掘立柱建物実測図(1/60) ……87		
第67図	Ⅲ-E区 3号掘立柱建物 出土遺物実測図(1/4) ……88		
第68図	Ⅲ-E区 3号掘立柱建物実測図(1/60) ……88		
第69図	Ⅲ-E区 4号掘立柱建物 出土遺物実測図(1/4) ……89		
第70図	Ⅲ-E区 4号掘立柱建物実測図(1/60) ……89		
第71図	Ⅲ-E区 5号掘立柱建物 出土遺物実測図 (1/3、1/4) ……90		
第72図	Ⅲ-E区 5号掘立柱建物実測図(1/60) ……90		
第73図	Ⅲ-E区 1～3号甕棺墓実測図(1/20) ……91		
第74図	Ⅲ-E区 1号甕棺実測図(1/6) ……91		

第75図	Ⅲ-E区	2、3号壘棺実測図(1/4)	92
第76図	Ⅲ-E区	1～4号土坑実測図(1/30)	94
第77図	Ⅲ-E区	5、6号土坑実測図(1/40)	95
第78図	Ⅲ-E区	土坑 出土遺物実測図 (1/2、1/3、1/4)	96
第79図	Ⅲ-E区	1号井戸実測図(1/30)	98
第80図	Ⅲ-E区	1号井戸 出土遺物実測図(1/3、1/4)	98
第81図	Ⅲ-E区	2号井戸実測図(1/30)	99
第82図	Ⅲ-E区	2号井戸 出土遺物実測図(1/3、1/4)	99
第83図	Ⅲ-E区	2、3号溝実測図(1/60)	101
第84図	Ⅲ-E区	1～3号溝 出土遺物実測図(1/3、1/4)	102
第85図	Ⅲ-E区	1号竪穴住居および屋外周溝実測図(1/60)	104
第86図	Ⅲ-E区	1号竪穴住居および屋外周溝 出土遺物実測図 (1/1、1/4)	105
第87図	Ⅲ-E区	2号竪穴住居および屋外周溝実測図(1/60)	106
第88図	Ⅲ-E区	3号竪穴住居および屋外周溝 出土遺物実測図(1/4)	107
第89図	Ⅲ-E区	3号竪穴住居および屋外周溝実測図(1/60)	107
第90図	Ⅲ-E区	4号竪穴住居および6号屋外周溝実測図(1/60)	108
第91図	Ⅲ-E区	4号竪穴住居および屋外周溝出土遺物実測図(1/4)	109
第92図	Ⅲ-E区	5号屋外周溝実測図(1/20、1/60)	110
第93図	Ⅲ-E区	5号屋外周溝 出土遺物実測図1(1/4)	111
第94図	Ⅲ-E区	5号屋外周溝 出土遺物実測図2 (1/2、1/3、1/4)	112
第95図	Ⅲ-E区	5号屋外周溝 出土遺物実測図3 (1/2、1/4)	113
第96図	Ⅲ-E区	玉類製作資料実測図(1/1、2/3)	115
第97図	Ⅲ-E区	工具類1(筋砥石)(1/3)	117
第98図	Ⅲ-E区	工具類2(筋砥石)(1/3)	118
第99図	Ⅲ-E区	工具類3(筋砥石)(1/2、1/3)	119
第100図	Ⅲ-E区	工具類4(砥石、その他)(1/3、1/4)	121
第101図	Ⅲ-E区	工具類5(砥石、その他)(1/3)	123
第102図	Ⅲ-E区	工具類6(その他)(1/3、1/4)	124
第103図	Ⅲ-E区	遺構検出中 出土遺物実測図 (1/1、1/3、1/4)	125
第104図	Ⅲ-W区	主要遺構配置図(1/400)	126
第105図	Ⅲ-W区	1号溝平面および土層断面図 (1/30、1/100)	127
第106図	Ⅲ-W区	1号溝A群 出土遺物実測図(1/4)	128
第107図	Ⅲ-W区	1号溝B群 出土遺物実測図(1/4)	128
第108図	Ⅲ-W区	1号溝C群 出土遺物実測図(1/4)	129
第109図	Ⅲ-W区	1号溝D群 出土遺物実測図 (1/2、1/4)	130
第110図	Ⅲ-W区	1号溝E群 出土遺物実測図 (1/3、1/4)	131
第111図	Ⅲ-W区	1号溝F群 出土遺物実測図 (1/3、1/4)	132
第112図	Ⅲ-W区	1号溝G群 出土遺物実測図1(1/4)	133
第113図	Ⅲ-W区	1号溝G群 出土遺物実測図2(1/3)	134
第114図	Ⅲ-W区	1号溝H群 出土遺物実測図(1/4)	135
第115図	Ⅲ-W区	1号溝I群 出土遺物実測図1(1/4)	137
第116図	Ⅲ-W区	1号溝I群 出土遺物実測図2(1/4)	138

第117図	Ⅲ-W区	1号溝I群 出土遺物実測図3(1/4)	139
第118図	Ⅲ-W区	1号溝I群 出土遺物実測図4(1/4)	141
第119図	Ⅲ-W区	1号溝I群 出土遺物実測図5(1/4)	142
第120図	Ⅲ-W区	1号溝I群 出土遺物実測図6 (1/2、1/3、1/4)	143
第121図	Ⅲ-W区	1号溝I群 出土遺物実測図7 (1/2、1/3)	145
第122図	Ⅲ-W区	1号掘立柱建物 出土遺物実測図(1/3)	146
第123図	Ⅲ-W区	1号掘立柱建物実測図(1/60)	146
第124図	Ⅲ-W区	1～4号井戸実測図(1/40)	148
第125図	Ⅲ-W区	5～8号井戸実測図(1/40)	149
第126図	Ⅲ-W区	1～4号井戸 出土遺物実測図 (1/3、1/4)	150
第127図	Ⅲ-W区	6～8号井戸 出土遺物実測図 (1/3、1/4)	151
第128図	Ⅲ-W区	2号溝 出土遺物実測図 (1/3、1/4)	152
第129図	Ⅲ-W区	2号溝 平面および断面実測図(1/60)	152
第130図	Ⅲ-W区	東側谷部 出土遺物実測図(1/3)	153
第131図	Ⅲ-E区	玉作作業区域概略図	155

図版目次

巻頭図版1	上空から見た潤地頭給遺跡と周辺の遺跡
巻頭図版2	a. 潤地頭給遺跡 Ⅲ-E区全景(西側上空から) b. 潤地頭給遺跡 Ⅲ-W区全景(東側上空から)
巻頭図版3	a. Ⅲ-E区出土 水晶原石 b. Ⅲ-E区出土 管玉製作資料 c. Ⅲ-E区出土 筋砥石
巻頭図版4	a. Ⅲ-E区 大溝出土 筒形器台 b. Ⅲ-W区 1号溝出土 窓開土器 c. Ⅲ-E区 大溝出土 壘 d. Ⅲ-W区 1号溝出土 壺
図版1	a. 潤地頭給遺跡 Ⅲ区 全景(北東から) b. 潤地頭給遺跡 Ⅲ-E区 全景(南から)
図版2	a. Ⅲ-E区 大溝検出状況(北東から) b. Ⅲ-E区 大溝A、B区上層遺物出土状況(東から) c. Ⅲ-E区 大溝I区東側土層断面(西から)
図版3	a. Ⅲ-E区 大溝C区遺物出土状況(北から) b. Ⅲ-E区 大溝G区遺物出土状況(北から) c. Ⅲ-E区 大溝E区遺物出土状況(北から)
図版4	a. Ⅲ-E区 1号および2号掘立柱建物(東から) b. Ⅲ-E区 2号井戸 c. Ⅲ-E区 5号掘立柱建物(東から) d. Ⅲ-E区 6号土坑 杓子形土製品出土状況
図版5	a. Ⅲ-E区 壘棺墓全景(西から) b. Ⅲ-E区 1号壘棺墓検出状況 c. Ⅲ-E区 3号壘棺墓検出状況 d. Ⅲ-E区 2号壘棺墓検出状況
図版6	a. Ⅲ-E区 1号、4号竪穴住居および5号屋外周溝

- 検出状況（西から）
- b. Ⅲ-E区 2号堅穴住居検出状況（北西から）
 - c. Ⅲ-E区 3号堅穴住居検出状況（南から）
- 図版 7
- a. Ⅲ-E区 1号堅穴住居近景（北東から）
 - b. Ⅲ-E区 1号堅穴住居床面検出状況（西から）
 - c. Ⅲ-E区 1号堅穴住居屋外排水溝（東から）
 - d. Ⅲ-E区 1号堅穴住居屋外排水溝 筋砥石出土状況
- 図版 8
- a. Ⅲ-E区 5号屋外周溝 筋砥石出土状況（西から）
 - b. Ⅲ-E区 5号屋外周溝 筋砥石出土状況
 - c. Ⅲ-E区 5号屋外周溝 遺物出土状況
- 図版 9 Ⅲ-E区 大溝A区上層出土遺物1
- 図版 10 Ⅲ-E区 大溝A区上層出土遺物2
- 図版 11 Ⅲ-E区 大溝A区上層出土遺物3
- 図版 12 Ⅲ-E区 大溝A区上層出土遺物4
- 図版 13 Ⅲ-E区 大溝A区上層出土遺物5
- 図版 14 Ⅲ-E区 大溝A区上層出土遺物6
- 図版 15
- a. Ⅲ-E区 大溝A区下層出土遺物
 - b. Ⅲ-E区 大溝B区上層出土遺物1
- 図版 16
- a. Ⅲ-E区 大溝B区上層出土遺物2
 - b. Ⅲ-E区 大溝C区上層出土遺物1
- 図版 17
- a. Ⅲ-E区 大溝C区上層出土遺物2
 - b. Ⅲ-E区 大溝C区下層出土遺物1
- 図版 18
- a. Ⅲ-E区 大溝C区下層出土遺物2
 - b. Ⅲ-E区 大溝D区上層出土遺物1
- 図版 19 Ⅲ-E区 大溝D区上層出土遺物2
- 図版 20 Ⅲ-E区 大溝D区中層出土遺物
- 図版 21 Ⅲ-E区 大溝E区上層出土遺物
- 図版 22 Ⅲ-E区 大溝F区上層出土遺物1
- 図版 23 Ⅲ-E区 大溝F区上層出土遺物2
- 図版 24 Ⅲ-E区 大溝G区上層出土遺物1
- 図版 25 Ⅲ-E区 大溝G区上層出土遺物2
- 図版 26
- a. Ⅲ-E区 大溝G区中層出土遺物
 - b. Ⅲ-E区 大溝G区下層出土遺物
- 図版 27 Ⅲ-E区 大溝I区上層出土遺物1
- 図版 28
- a. Ⅲ-E区 大溝I区上層出土遺物2
 - b. Ⅲ-E区 大溝I区下層出土遺物
 - c. Ⅲ-E区 大溝上部包含層出土遺物
- 図版 29 Ⅲ-E区 大溝I区上層出土遺物3
- 図版 30
- a. Ⅲ-E区 1号掘立柱建物出土遺物
 - b. Ⅲ-E区 3号掘立柱建物出土遺物
 - c. Ⅲ-E区 4号掘立柱建物出土遺物
 - d. Ⅲ-E区 5号掘立柱建物出土遺物
- 図版 31
- a. Ⅲ-E区 1号甕棺
 - b. Ⅲ-E区 2号甕棺
 - c. Ⅲ-E区 3号甕棺
- 図版 32 Ⅲ-E区 1、3～6号土坑 出土遺物
- 図版 33
- a. Ⅲ-E区 1号溝出土遺物
 - b. Ⅲ-E区 2号溝出土遺物
 - c. Ⅲ-E区 3号溝出土遺物
 - d. Ⅲ-E区 2-3号溝出土遺物
- 図版 34 Ⅲ-E区 1、2号井戸および1、3号堅穴住居出土遺物

- 図版 35 Ⅲ-E区 4号堅穴住居および5号屋外周溝出土遺物1
- 図版 36 Ⅲ-E区 5号屋外周溝出土遺物2
- 図版 37 Ⅲ-E区 5号屋外周溝出土遺物3
- 図版 38 Ⅲ-E区 工具類1
- 図版 39 Ⅲ-E区 工具類2
- 図版 40
- a. Ⅲ-W区から北を望む
 - b. Ⅲ-W区全景（北から）
- 図版 41
- a. Ⅲ-W区南側全景（南から）
 - b. Ⅲ-W区 1号溝（東から）
 - c. Ⅲ-W区 1号溝土層断面
 - d. Ⅲ-W区 4号井戸
- 図版 42
- a. Ⅲ-W区 1号溝A群出土遺物
 - b. Ⅲ-W区 1号溝B群出土遺物
 - c. Ⅲ-W区 1号溝C群出土遺物
 - d. Ⅲ-W区 1号溝D群出土遺物
 - e. Ⅲ-W区 1号溝E群出土遺物
 - f. Ⅲ-W区 1号溝F群出土遺物1
- 図版 43
- a. Ⅲ-W区 1号溝F群出土遺物2
 - b. Ⅲ-W区 1号溝G群出土遺物
- 図版 44
- a. Ⅲ-W区 1号溝H群出土遺物
 - b. Ⅲ-W区 1号溝I群出土遺物1
- 図版 45 Ⅲ-W区 1号溝I群出土遺物2
- 図版 46 Ⅲ-W区 1号掘立柱建物、井戸および2号溝出土遺物

表 目 次

表1 潤頭給遺跡発掘調査工期概要表	3
表2 Ⅲ-E区 遺構一覧表	156
表3 Ⅲ-W区 遺構一覧表	156

付 図

- 第1図 Ⅲ-E区 遺構配置図（1/200）
- 第2図 Ⅲ-W区 遺構配置図（1/200）

I. はじめに

1. 調査に至る経過

潤地頭給遺跡は福岡県前原市大字潤字地頭給地内に所在する。

前原市は福岡市の西隣にあり、以前から都心部への通勤圏内として注目されていた。近年はJRと福岡市営地下鉄の相互乗り入れや筑肥線の複線化、西九州道前原道路と福岡都市高速道路との接続などの要因により、都心部への移動時間の短縮化が図られ、人口の増加が急速に進んでいる。また、今後は九州大学糸島キャンパスの開校に伴い、学生人口の増加や周辺産業の発達も見込まれている。

このような状況のなか前原小学校と波多江小学校では児童数が急速に増加したため、分離校建設計画が策定された。用地は両小学校のほぼ中間に当たる潤地区北部の水田地に計画された。敷地面積は当初、40,014 m²で、小学校とコミュニティーセンターが配置される計画であった。

当該計画に基づき、平成15年1月15日に事業主体の前原市教育委員会では文化財保護法第57条の3第1項の規定に基づく埋蔵文化財発掘の届出を提出するとともに、同年4月に試掘調査、翌年1月から本調査を開始した。

2. 調査の工程

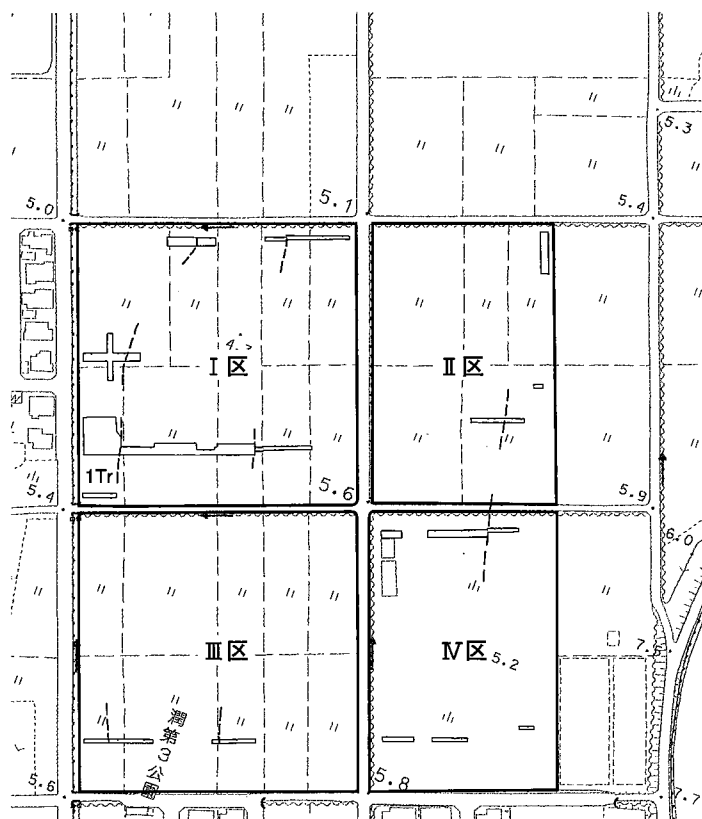
調査予定地域の周囲には国史跡「志登支石墓群」、や「潤中町遺跡」などの遺跡が数多く存在しており、重要遺構の存在が想定されていた。しかしながら、圃場整備の実施が早くになされていたため、整備当时には埋蔵文化財の確認調査が充分に行われていなかったことから遺構の遺存状況や、内容については

不明であった。

このため、本調査に先立つ試掘調査を早い段階で実施し、遺跡の内容を確認し、調査期間、方法、費用などを算出する必要性がでてきた。

そこで、用地取得以前に地権者の承諾を得た用地について試掘調査を行うこととした。試掘調査は平成14年4月17日～同年5月13日までの約1ヶ月間におよんだ。調査は細長いトレンチを掘削する方法で実施し、0.7 mのバックホーによる掘削を行った後、土層や詳細な遺構の確認を人力によって行った。順序としては、まず小学校の校舎やコミュニティーセンターの建設によって遺跡の保存が困難と思われる北西側（調査I区）から開始し、終了時まで合計16本のトレンチを掘削した（第1図）。この結果、調査区内における旧地形と遺構の内容が確認された。

旧地形については、圃場整備後の平坦な現地形と大きく異なり、微高地と谷部が入り組む複雑な地形を呈することが判明した。また、遺跡の内容については、出土遺物から、弥生時代を中心として、中世にいたる複合遺跡であることが判明した。また、出



第1図 発掘調査前の地形と試掘調査地点 (1/3000)

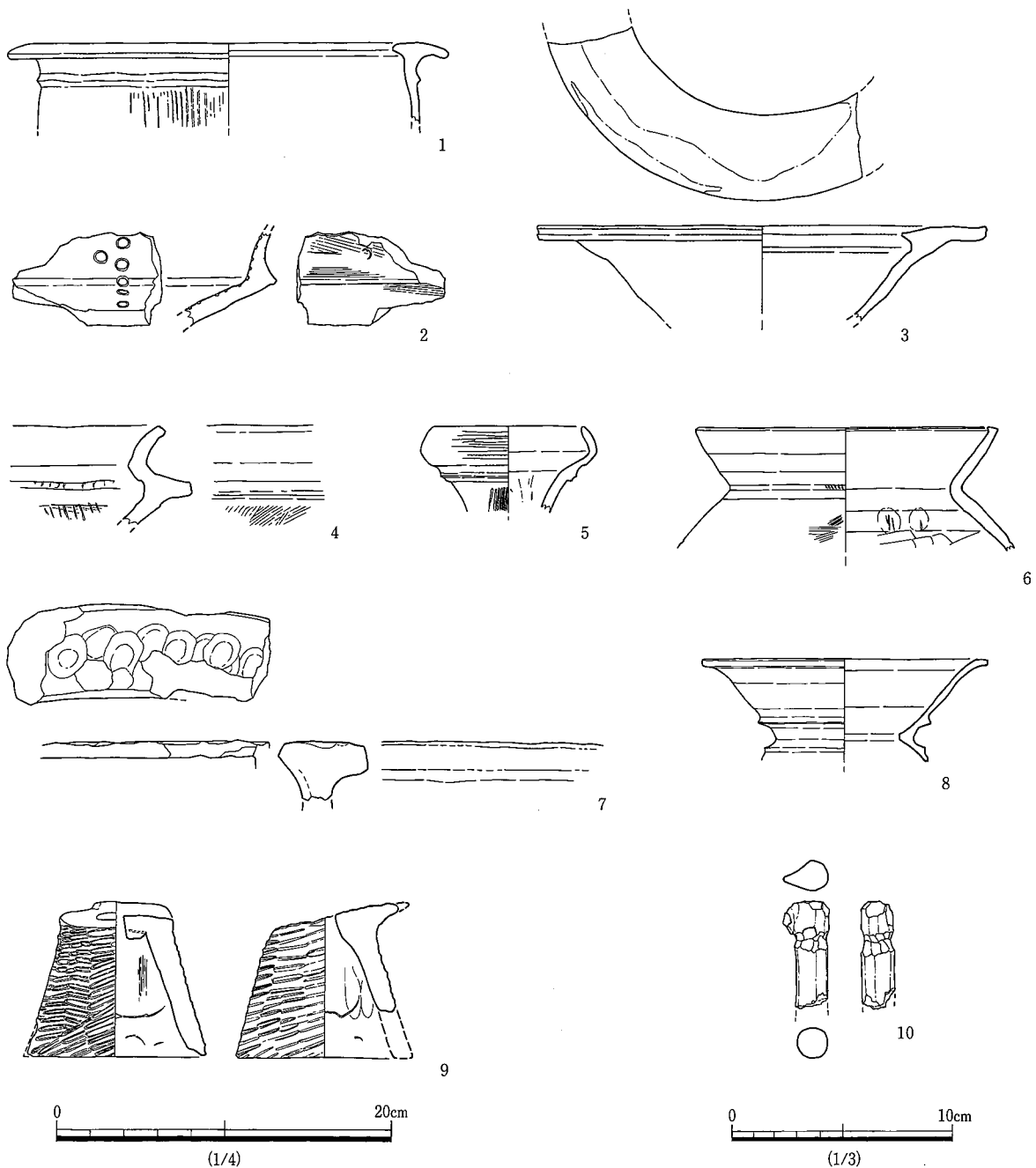
土遺物の中に、外来系と思われる遺物（第2図-2,8）や丹塗り土器（3, 5）、木器類（10）などが存在することから、多様な遺構・遺物が埋存している可能性がでてきた。

この試掘調査の結果を受けて、本調査の計画を立案した。調査期間は平成15年1月15日～翌、平成16年3月19日までの1年2ヶ月をかけて実施した。

調査は敷地の中央付近で十字に交差する道路を基準にして、4つの調査区を設け、これに工事用仮設

道路敷き部分の1つを加えて計5工区とした。調査はまず、運動場予定地と道路敷きに当たるIV区から開始し、続いて同じく運動場と道路敷きのIII区、仮設道路敷部分のV区、校舎とコミュニティーセンター部分のI区、校舎および道路敷き部分のII区の順に行った（表1）。調査対象は広大な敷地面積であるのに対して工期は1年ほどと短期の余裕しか得られなかったことから、保存が図られると考えた谷部分は外し、微高地上に絞ることとした。

それぞれの調査区ごとの調査状況を概観すると、



第2図 試掘調査 出土遺物実測図 (1/3, 1/4)

前半に行ったⅣとⅢ区には学校建設後も遺構の保全が図られる部分が多いため、道路などにより掘削を受ける箇所以外は遺構の内容確認にとどめ、遺構の保護に努めた。

また、Ⅰ、Ⅱ区については、建設工事の開始が迫ってきたため、工事計画と調査の進捗の足並みを合わせる必要性がでてきた。したがって、最初に各調査区の外周部分から先に調査を開始し、後に内側の調査に着手した。これら調査区を合わせた最終的な調査面積は敷地面積のおよそ半分の約 22,000 m²である。

なお、調査期間中に周辺の住民を対象とした遺跡の現地説明会を 2 回実施した（第 3 図）。1 回目は南側のⅢ、Ⅳ区の調査終了に伴い平成 15 年 5 月に実施し、2 回目は北側のⅠ、Ⅱ区の終了時点で平成 16 年 3 月に実施した。1 回目は台風の翌日で雨天、2 回目は雪がちらつくなど天候に恵まれなかったものの、合わせて 200 名を超える参加者があった。

また、調査終了の翌平成 16 年度末には遺跡の概要を示した調査概報を発刊した。

3. 調査の組織

平成 14、15 年度の発掘調査に係る組織は以下のとおりである。

調査主体者：前原市教育委員会

- 総括 教育長 菊竹利嗣
- 教育部長 上田勇介（平成 14 年度）
 久我和彦（平成 15 年度）
- 文化課長 小池史哲（平成 14 年度）
 鬼木武信（平成 15 年度）
- 文化課長補佐 中村鉄弥
- 文化財係長 林 覚（平成 14 年度）
 岡部裕俊（平成 15 年度）
- 庶務 文化振興係主事 浜地 克
- 調査 文化財係主査 瓜生秀文
 主事 江野道和
 江崎靖隆
 平尾和久
 牟田華代子

発掘作業

- 平野隆之、加藤優香、笠文子、小嶋篤、田中裕美、福井菊雄、益戸ミユキ、林勝利、林毬子、瀬知昌夫、中山健介、織田優平、末松繁光、米山八重子、柏田睦子、川上久美子、和多治子、市丸千賀子、石原美恵子、溝口英太郎、小金丸勲雄、吉村政統、生田弘毅、山田敏朗、北海京子、神谷三枝子、江藤晴美、井上狭衣、山崎チヨ子、平山富士子、高月幸子、徳永美根子、三島美也子、川内真智子、江口富美子、島秀子、宮下ヤス子、黒木岩男、

	平成 14 年度												平成 15 年度											
	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3
Ⅰ-W																								
Ⅰ-E																								
Ⅱ																								
Ⅲ-W																								
Ⅲ-E																								
Ⅳ																								
Ⅴ																								
試掘																								
説明会																								

表 1 潤地頭給遺跡発掘調査工期概要表



第 3 図 第 1 回現地説明会資料表紙

はじめに

渡辺二三男、波多江勝義、徳重英俊、宮本ミキヨ、永島直子、高井智規、波多江徳光、吉村レイ子、浅田みどり、柴田敏一、蓑田ミツ子、井口祐三、西村康子、田中阿早緑、中田朋子、藤木和子、藤野さゆり、三嶋弘美、石田勝代、梅津睦子、高江芳男、土井幸子、吉原耕太郎、中原尚美、田中弘、諸熊三枝子、荒木治子、小林正昭、大内進、木下真紀、西郷陽子、藤森啓子、川渕恵子、川原秀子、谷脇友子、菅原千恵子、末永優子、宮本博子、宮本伸一、村島雪夫、柚木貴博、波多江武利、蒲池重治、嶋崎禮子、高橋政子、無津呂麻里、伊藤美穂、合歓垣淑子、石垣房子、荻野スマ子、國田静江、石尾久美子、古家いずみ、浦田勝昭、浦田雪子、馬場義照、鹿児島一代、一ノ宮嘉弘、田中康夫、佐藤秀行、高橋マツ子、原口マツノ、杉本美智子

整理作業

柴田由美子、末益真奈美、檜崎直子

平成 16、17 年度の遺物整理、報告書作成業務に係る組織は以下のとおりである。

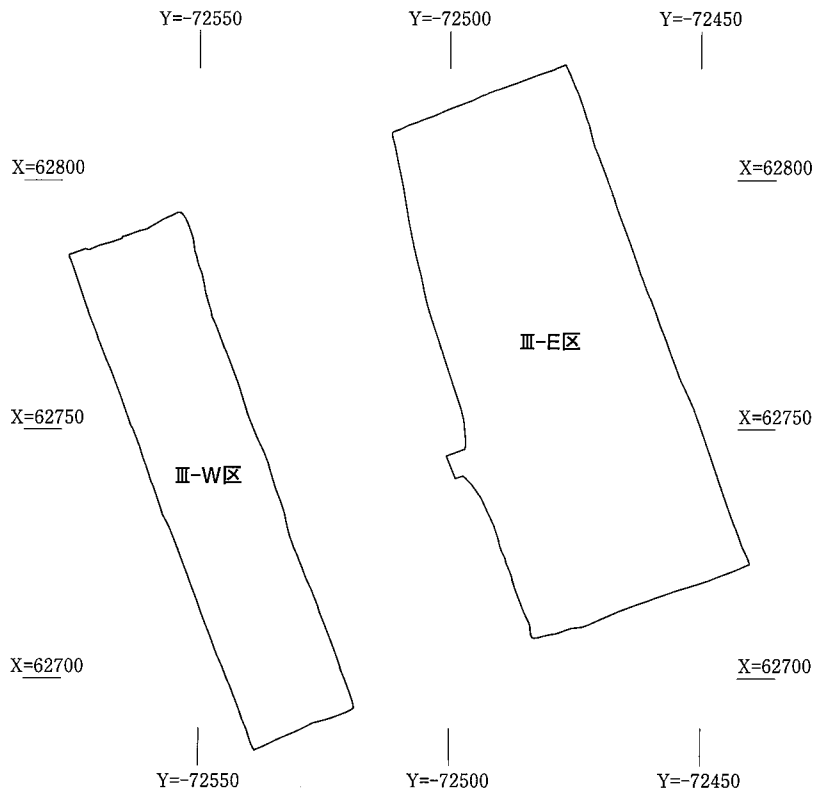
総括	教育長	菊竹利嗣
	教育部長	久我和彦
	文化課長	鬼木武信
	文化課長補佐	中村鉄弥
	文化財係長	岡部裕俊
庶務	文化財係主事	中野幸功
調査	文化財係主事	江野道和 (平成 16 年度)
		江崎靖隆
		牟田華代子

伊都国歴史博物館係

主事 江野道和 (平成 17 年度)
平尾和久

復元、整理作業

川渕恵子、田中阿早緑、三嶋弘美、藤野さゆり、名取さつき、友池真由美、中田朋子、藤木和子、川上辰子、末益真奈美、藤森啓子、柏田睦子、和多治子、石原美恵子、川原秀子



第 4 図 第 III 区の調査区配置図 (1/1500)

II. 調査の記録

1. 位置と環境

潤地頭給遺跡は糸島平野のほぼ中央部、標高 4.5～2.75 m の低地に位置する。遺跡から東西方向を眺めると、標高 5m 弱の低い水田地帯が帯状に広がっていることに気づく。かつて、この低地帯は西の加布里湾から東の今津湾まで通じる海峡であったと考えられており、糸島水道と呼ばれていた。このことは海岸部から離れている地区に荻浦、大浦、浦志、泊、津和崎などの海に関する名が残っていることや、寛仁 3 (1019) 年に襲来した刀伊が糸島水道を西から東へと通り抜けたとされる事象などが根拠となっている。これに対して、近年は下山正一らが行った貝化石層の分布調査により、遅くとも縄文時代後期以降において泊～志登間は陸地として繋がっていた可能性が高いと考えられている。また、日野尚志によると、中世末期ごろまでは加布里湾から入り込んだ潟状の内海があったといわれており、干拓されたと考えられる地には新開北、新開南などの地名が残る。これらから考えると、かつて本遺跡は海浜部に程近い位置にあり、隣接する志登地区と共に陸上にあつては志摩と怡土を結ぶ要衝の地として、対外的には海と陸とを結ぶ交易の拠点として重要な地であったことが分かる。

糸島地域には本遺跡と同様な性質の遺跡が海浜部または少し内陸部に入った場所に点在する。西から順に挙げると、二丈町深江井牟田遺跡、石崎曲り田遺跡、前原市東下田遺跡、上罐子遺跡、上町向原遺跡、浦志遺跡、志登遺跡群、志摩町新町遺跡、御床松原遺跡、福岡市西区今宿五郎江遺跡などである。このうち、深江井牟田遺跡と御床松原遺跡は伊都国の港としての機能があったと考えられている。これを裏付けるように、前者からは貨泉や半両銭、楽浪

土器や三韓土器、鑄造鉄斧などが出土し、後者からは大量の楽浪土器が出土しており、対外交易の窓口として栄えていたと考えられる。また、この他の遺跡についても石崎曲り田遺跡からは楽浪土器、東下田遺跡からは三韓土器、上罐子遺跡からは貨泉、上町向原遺跡からは素環頭大刀、浦志遺跡 (A 地点) からは小銅鐸と把手付壺、志登遺跡群からは三韓土器、今宿五郎江遺跡からは浦志遺跡と同様に小銅鐸が出土しており、それぞれ時期にばらつきがあるものの、いずれも中国や朝鮮半島との結びつきがあったことを示している。また、内陸部に位置する三雲・井原遺跡で出土する外来系遺物はこれら海浜部の集落を介して搬入されたことも考えられる。

このように見ていくと、潤地頭給遺跡や志登遺跡群周辺は海上交通によって運ばれてきた文物が、陸揚げされる地点であり、ここを介して内陸の三雲・井原遺跡などに運ばれていたことが想定される。

これまで本遺跡の歴史的環境を述べてきたが、つづいて近隣の状況についてみていきたい。

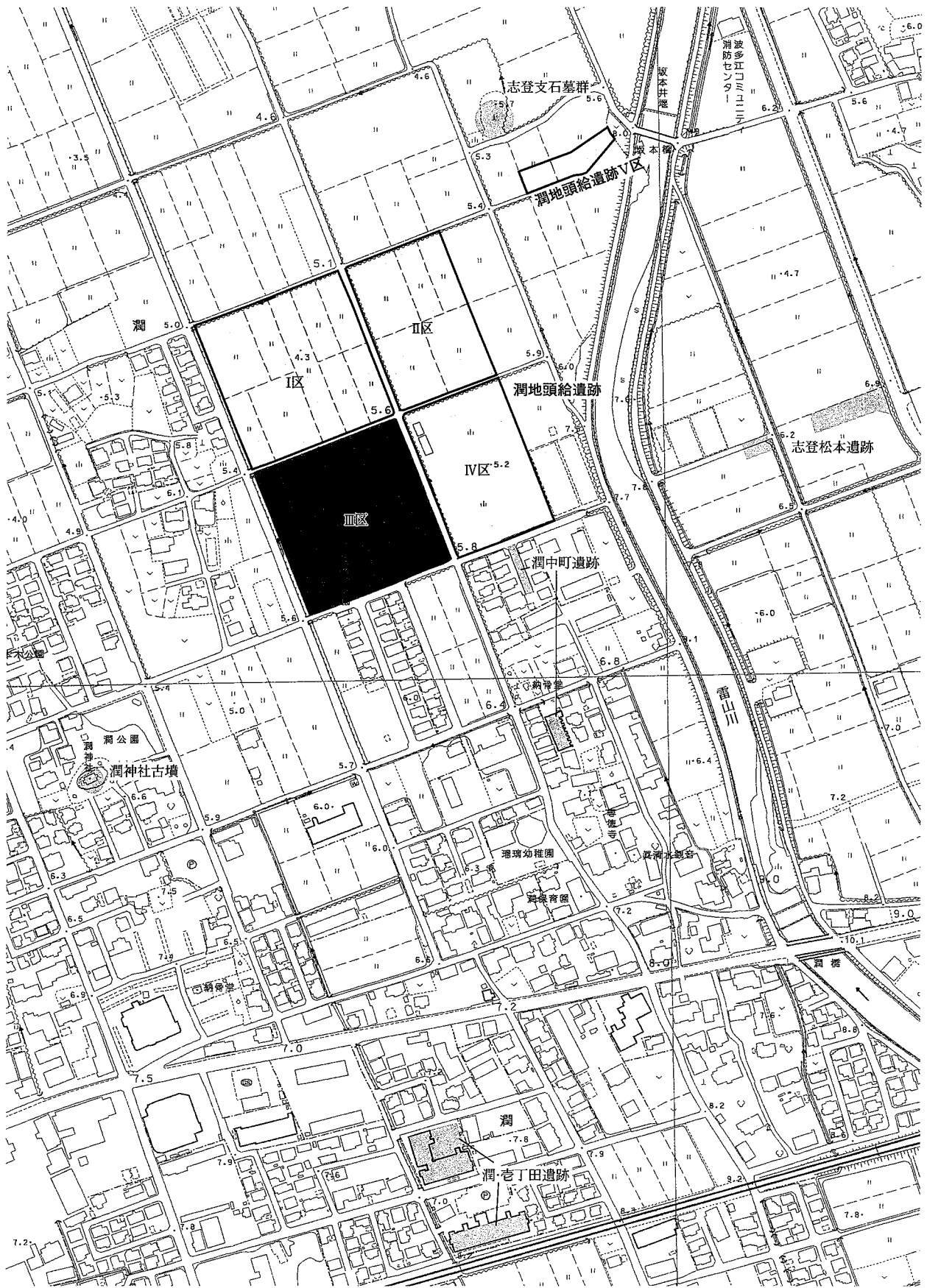
潤地頭給遺跡は糸島平野の主要河川の 1 つである雷山川の左岸に位置する。付近は流路が北から西に向かって大きく湾曲する部分にあたり、遺跡はこの内側に位置する。調査前の周辺の地形は雷山川が最も高く、あたかも丘陵の鞍部の稜線に沿うような位置にあり、ここから派生した傾斜面が南東側から北西側へなだらかに向かう。このように、現在、遺跡周辺は大まかに、川に近づくと標高が高くなり、離れるにしたがって低くなっている様子が、わかっているが、かつての地形はこれと大きく異なっていたことが、過去の調査によって指摘されている。

本遺跡のすぐ北西に位置し、昭和 28 年に調査された国史跡の志登支石墓群が周辺地域の歴史や地形を知るうえでの最初の機会であったといえる。この調査報告書の中で、報告者の一人である山崎光夫は先述の雷山川について疑問を投げかけている。文中には「(前略) 雷山川の流路を見ると、かつては支石墓の東側を屈曲せず北方に直流していたと思われ



- 1. 酒地頭給遺跡 2. 酒中町遺跡 3. 酒神社古墳 4. 酒老丁田遺跡 5. 御床松原遺跡 6. 一の町遺跡 7. 木舟の森遺跡
- 8. 木舟・三本松遺跡 9. 深江・井牟田遺跡 10. 塚田遺跡 11. 石崎 曲り田遺跡 12. 東下田遺跡 13. 東五反田遺跡
- 14. 上糴子遺跡 15. 蔵持鏡遺跡 16. 蔵持古屋敷遺跡 17. 蔵持遺跡 18. 志登支石墓群 19. 志登松本遺跡
- 20. 波多江丹波守屋敷 21. 波多江遺跡 22. 平原遺跡 23. 三坂七尾遺跡 24. 三雲南小路遺跡 25. 井原鑛溝遺跡
- A. 酒地頭遺跡群 B. 東遺跡群 C. 東五反田遺跡群 D. 萩浦遺跡群 E. 筒井町遺跡群 F. 北新地遺跡群 G. 北本町遺跡群
- H. 上町向原遺跡 I. 浦志遺跡群 J. 泊遺跡群 K. 志登遺跡群 L. 波多江遺跡群 M. 蔵持遺跡群 N. 三雲・井原遺跡群

第5図 周辺の主な遺跡 (1/50000)



第6図 周辺の地形と過去の調査地点 (1/2500)

るが、その他洪水の氾濫によつて支石墓群を中心として、ある時は西に、ある時は東に流路を変えて現在のような流路をとるに至つたものであろう。(中略) 雷山川の通路を通観すると普通の川の流路と異なり甚だしく屈曲している。これは支石墓群の西側に流路をとつていた雷山川はその沖積作用が進むと共に流路を変えるに当たり支石墓群所在台地にさまたげられて現在のような屈曲の甚だしい流路をとるようになったものと思われる。(後略)^{註1)}とあり、雷山川が志登支石墓群を境にして流路を西から東へ変えていったと推測した。この記述を元に考えると、潤地頭給遺跡と志登支石墓群の間は河川によって隔てられていた時期があったといえ、これは調査V区や周辺のトレンチ調査でもある程度確認されている。また、他の方向に目をやると、西側にI-W区とIII-W区の両区と同一微高地となる潤古屋敷遺跡が所在し、これから一本谷を隔てて前方後円墳である潤神社古墳が存在し、南には大型の複合口縁壺を出土した潤中町遺跡が所在する。

これらのことにより、潤地頭給遺跡周辺は現在の平坦な地形と大きく異なって、複雑に谷と微高地が複雑に入り組んでおり、それぞれの微高地上ごとに集落や墓域などが営まれていたことが分かる。

(註)

1. 山崎光夫、鏡山猛「遺跡の環境」『志登支石墓群』埋蔵文化財発掘調査報告 第四 (文化庁、1956年)。

(参考文献)

由比章祐『怡土志摩地理全誌 2 志摩編』(糸島新聞社、1989年)。

岡部裕俊『荻浦一古墳編』前原市文化財調査報告書 第58集 (前原市教育委員会、1995年)。

伊都歴史資料館『伊都国の国際交流』平成15年伊都歴史資料館秋季企画展—新館開館プレ記念企画展—(2003年)。

2. III-E区の調査

(1) 概要

潤地頭給遺跡の旧地形は南から北に向かって緩やかに傾斜する2本の微高地と、これらを隔てる2本の谷によって構成される。このうち、この場で報告を行うのは中央部分の微高地上に位置する遺構と出土遺物である。III-E区は隣接するI-E区、II区、IV区と同一の微高地にあり、大溝と名付けた大規模な遺構や、北端に位置する遺構などはそれぞれIV区やI-E区などの隣接する調査区にまたがっている(第7図)。

遺構は全面で確認されているが、調査区の中央付近を東西に横断する大溝付近を境として分布の密度に濃淡があることがわかる。大溝から南側には2棟の掘立柱建物や南北方向に掘削された数条の溝、土坑や柱穴が数基見られるものの、遺構の存在しない空白地が目立つ。これに対して、北側についてみると、大溝の近隣では南側と同じく遺構の分布が疎であるものの、これから少し北へ向かうと分布が次第に密になり、各種、各時代の遺構が激しく切り合っている様子が確認できる。これらの分布状況の理由については時代ごとの遺構の分布状況などを考慮に入れた上で、考えていきたい。

本調査区の報告であるが、大きく2つに分けて行う。最初に、「集落関連の遺構と遺物」と題して、先述した大溝の遺構と遺物について報告し、続いてその他の掘立柱建物や土坑、井戸、溝などについて、時代で区分せず、遺構を種類別にして報告する。この後に、調査区の北側に位置し、本遺跡が注目を集めるきっかけとなった玉作関連の遺構と遺物について、報告する。

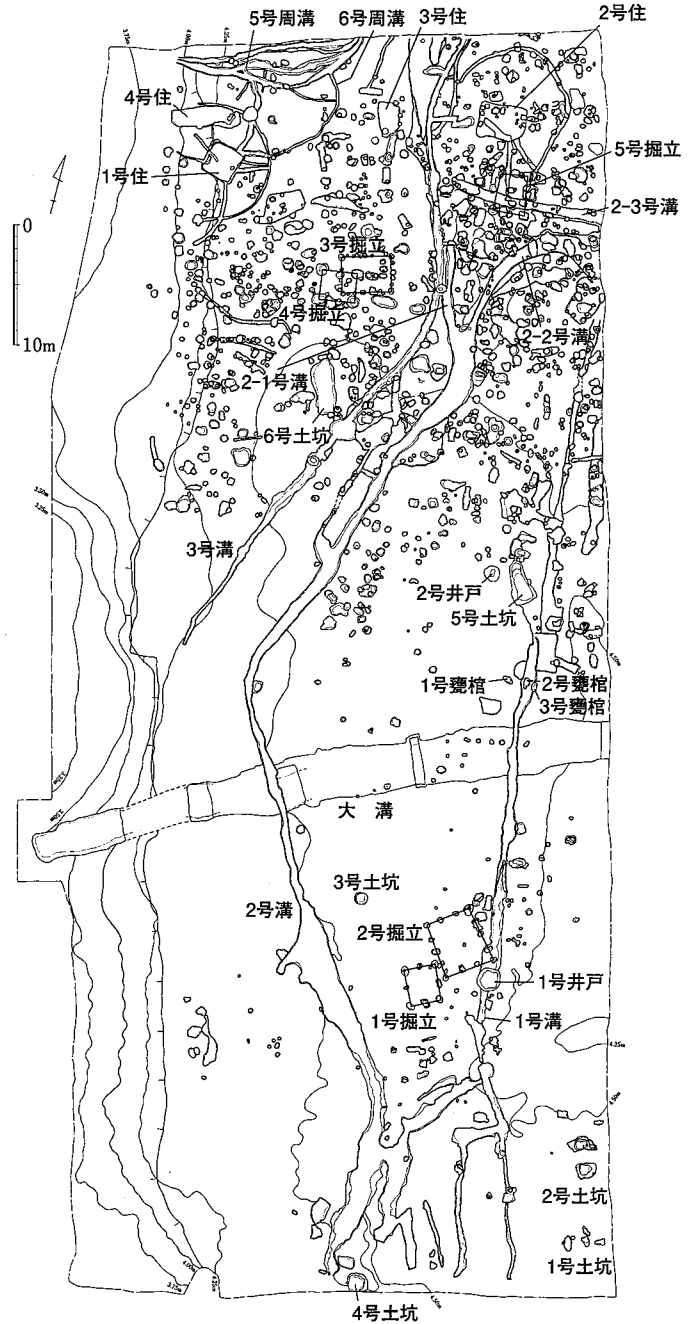
(2) 集落関連の遺構と遺物

a. 大溝

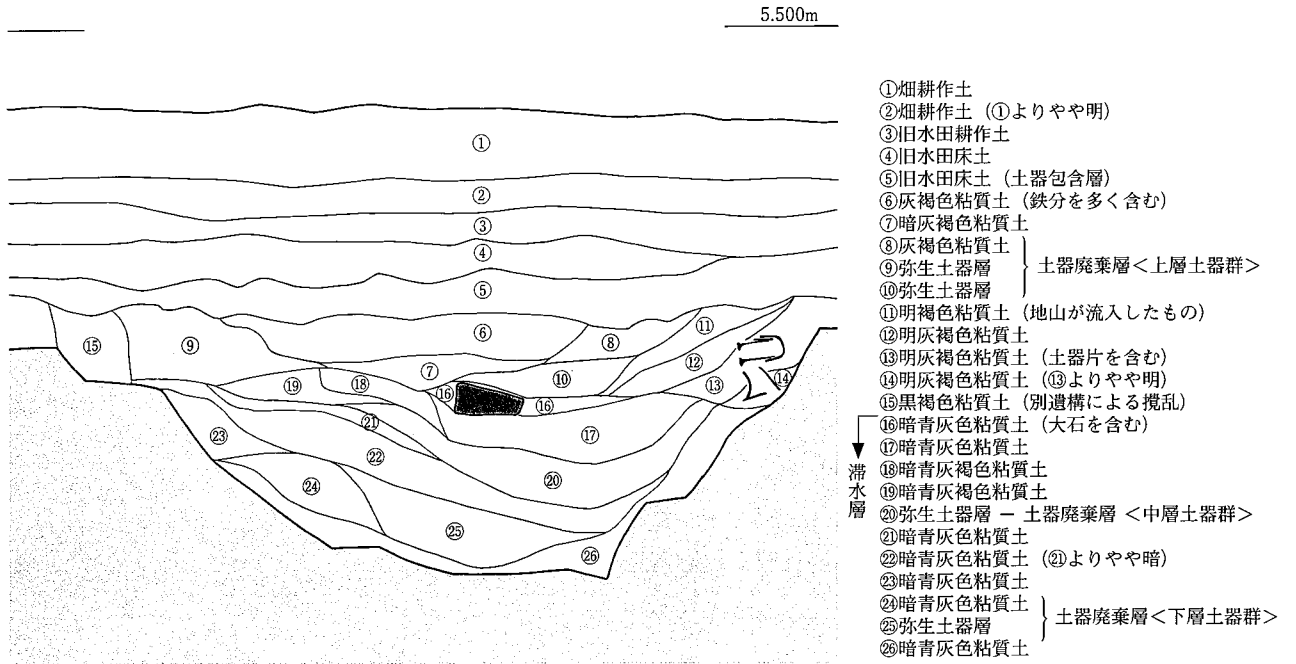
大溝は本調査区の位置する微高地を東西方向に横断するように掘られており、東側は調査区を跨ぎ、Ⅳ区まで達している。全長約 56 m で、西および東側の端はそれぞれ谷部や低地部へ繋がる。

調査に当たってはまず、この長大な遺構を 9 つに小区分し、それぞれに東側から A ～ I までの調査区名を付した (第 9 図)。調査方法は本溝が小学校建設計画の中で運動場部分に当たっていたため、全掘を目的とせず、遺構の保全を重視して最低限の調査にとどめた。したがって、遺構の下層に達する掘削は横断面観察のために設けた 5 ヶ所のトレンチ部分のみで実施しており、このため、下層の遺物の採取量は少なくなっている。一方、上層出土遺物については遺構のプランを確定するために一定の掘削を行っているため、遺物の出土量が多くなっている。また、H 区については遺構検出の段階でプランが確定できたため、掘削を行っていない。

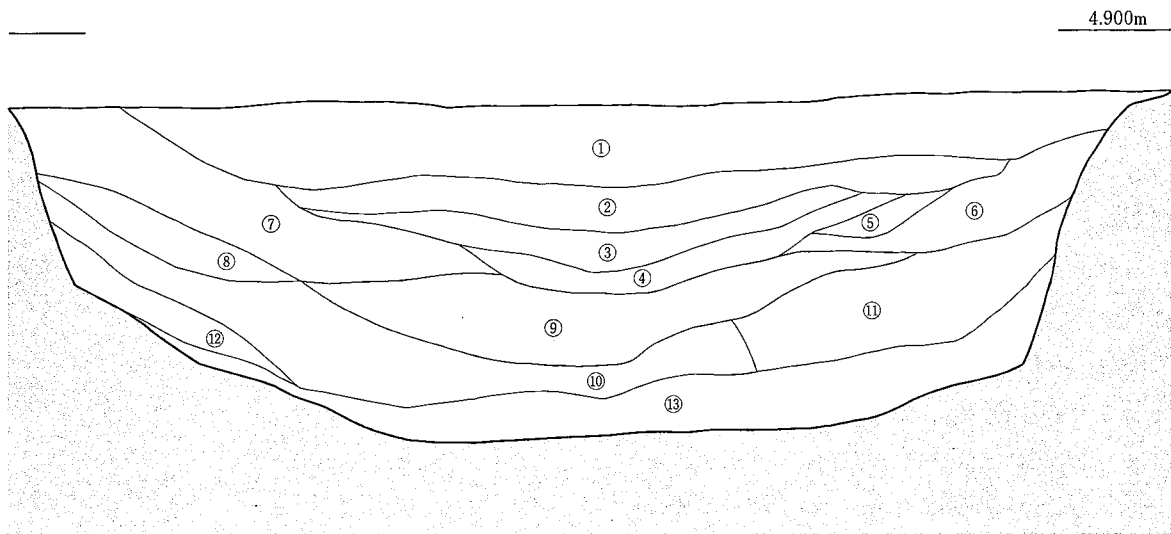
さて、ここで遺構の断面状況についてみていきたい。まず、縦断面であるが (第 9 図)、これには調査した部分の深さと溝底部の推定ラインを入れている。▲で示している部分がトレンチ調査により底面まで掘り下げた部分であり、これを元にして底面の縦断面の想定ラインを点線で示している。調査時の地山レベルから見ると、向かって右側の東側方向が 1.1 m 前後で、深く掘られており、左側の西側方向の最も浅い部分においてはほとんど立ち上がりがない状況である。したがって、見た目には東側が深く掘られ、西に向かうにつれ徐々に浅くなっているように見える。しかし、それぞれの標高の差を見ると、東側では標高約 3.3 m、西側では標高約 3.3 m となっており、全く同一であることが分かった。



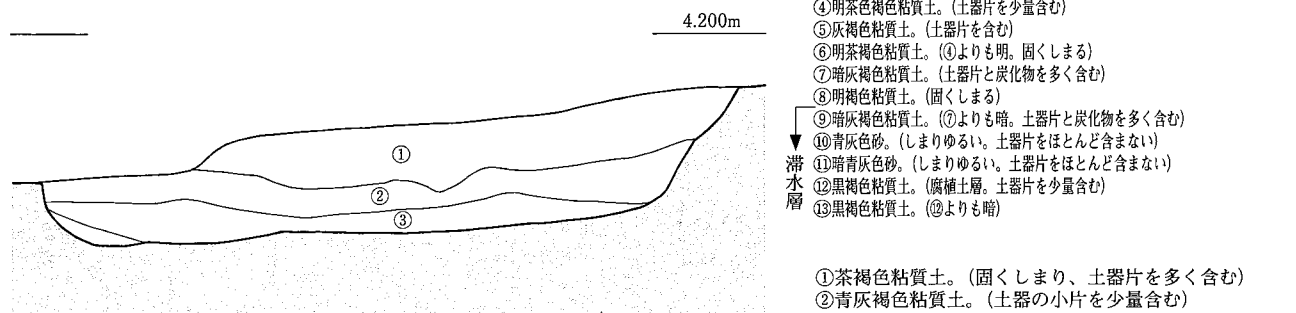
第7図 Ⅲ-E 区 主要遺構配置図 (1/600)



1. A区トレンチ東壁土層断面



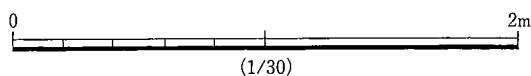
2. D区トレンチ東壁土層断面



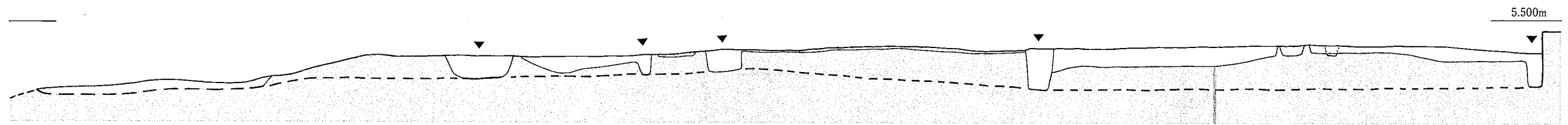
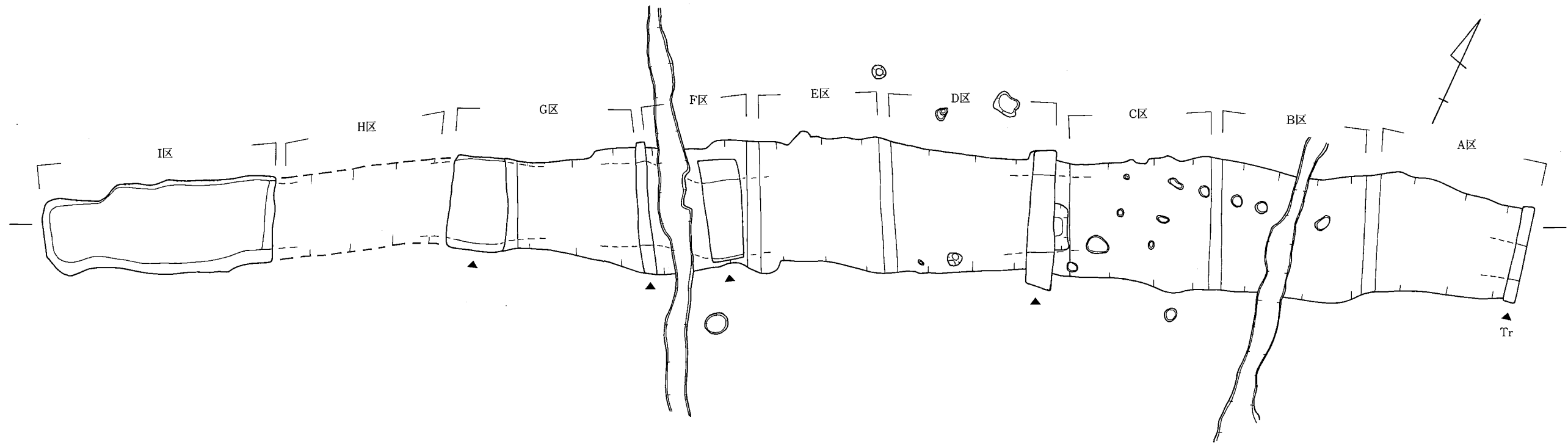
3. I区トレンチ東壁土層断面

- ①茶褐色粘質土。(固くしまり、土器片を多く含む)
 ②青灰褐色粘質土。(土器の小片を少量含む)
 ③暗青灰褐色粘質土。
 (腐植土層。土器片をほとんど含まない)

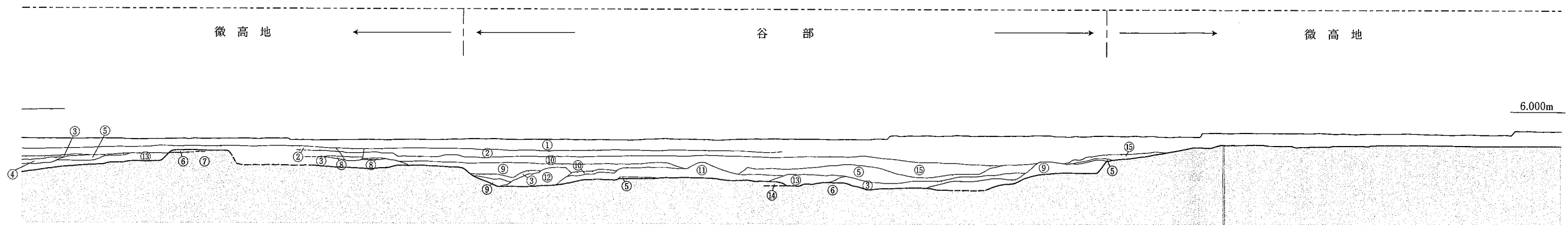
※アミカケは土器が大量に投棄されている層



第8図 III-E区 大溝 土層横断面図 (1/30)



第 9 図 III-E 区 大 溝 平 面 お よ び 縦 断 面 図 (1/150)



- | | | |
|----------------|------------------|--------------------------|
| ① 耕作土 | ⑥ 黄褐色粘質土 (固くしまる) | ⑪ 暗褐色粘質土に青灰色粘質土がブロック状に混入 |
| ② 水田床土 | ⑦ 青灰色シルト (固くしまる) | ⑫ 黄褐色粘質土と暗褐色粘質土の混合土 |
| ③ 腐植土 | ⑧ 灰色砂層 | ⑬ 黄褐色砂層 |
| ④ 青灰色シルト (ゆるい) | ⑨ 青灰色砂層 | ⑭ 明灰色砂層 |
| ⑤ 青灰色シルト (しまる) | ⑩ 暗褐色粘質土 | ⑮ 暗褐色粘質土 |

第 10 図 I 区 試掘調査トレンチ土層断面図 (1Tr 北壁) (1/250)

続いて横断面の土層に移る。横断面については5ヶ所ほど掘削したトレンチのうち状態の良かったものについて取り上げる。

A 区東側断面 (第8図-1)

A 区東側断面はIII-E 区の大溝における最も東端にあたる。規模は上端幅 2.99 m、深さ 1.05 m を測り、底面の標高は 3.3 m である。断面プランは底面に平坦部をもつ逆台形を呈しており、向かって左側の北斜面の上位と底面近くに段を有し、反対の南斜面においても上位 1/3 と 2/3 の部分で緩やかな段とはっきりとしたテラスを持った段を有する。

土層の堆積状況を観察してみると、北壁の1段目のテラス部分を境として、これより下位は帯水層となっており、水分が多く、しまりがゆるく、グライ化している。

これら土壌の堆積に挟まれるようにして大量の土器を中心とした遺物が出土している。大きく3つのグループに分けられ、上位から⑧～⑩、⑳、㉔と㉕である。これらをそれぞれ上層出土遺物、中層出土遺物、下層出土遺物に分類した。これらの層にはほとんど土砂などが混入しておらず、土器などが詰まった状態であったため、ごく短期間に遺物の廃棄が行われたと考えられる。

D 区東側土層断面 (第8図-2)

D 区東側土層断面は大溝の東寄りに位置する。この付近で大溝の幅が広がり、規模は上端幅 4.63 m、深さ 1.31 m を測り、底面の標高は 3.27 m である。断面形態は逆台形で、左側の北側斜面は途中で傾斜の角度が変わり、上半は急斜面であるが、半ば付近で緩斜面になる。これに対して、右側の南側斜面は傾斜変換点やテラスを持たず、急斜面となる。

土層の堆積状況を確認してみると、中位より下位に向けて帯水層となっており、グライ化した部分が見られ、底面近くには腐植土層が堆積している。このため、大溝の存続時期においては、底面付近が常

に帯水していた可能性がある。

出土遺物については先述の A 区に比べて上層の遺物が少なく、中層にまとまった出土量があり、下層は比較的少ない。また、中層出土遺物は、土器のみの出土ではなく、炭化物も同時に混入している。したがって、D 区付近においては A 区と異なり、一度に土器を投棄した状態ではないと考えられる。

I 区東側断面 (第8図-3、図版2-c)

I 区東側土層断面は大溝の西端にあたり、ここで谷へと繋がる。規模は上端幅 2.7 m、深さ 50cm を測り、底面の標高は 3.3 m である。断面プランは北側が削平を受けているためはっきりとしないが、逆台形を呈しており、右側の南側斜面においては比較的急となり、中位付近で傾斜の角度が変わる。

土層の堆積状況を観察してみると、3層しか残っておらず、最下層が D 区東側土層と同じく腐植土層となっており、帯水時期があったと考えられる。

出土遺物は最も上層である①が多い。この層は帯水層ではなく、堅くしまっているため、他の地区の上層に相当すると考えられる。

大溝 A 区上層出土遺物 (第11～25図、図版9～14)

1と2は胴部に張りをもつ小型の直口壺である。1は完形で、外面の底部側面付近から頸部の内面にかけて丹塗りを施す。口縁径 9.4cm、胴部径 18.5cm、器高 16.8cm。

2は1と同様に底部側面付近から頸部の内面にかけて丹塗りを施す。ほぼ全体が分かるが、外面の口縁部から胴部にかけておよそ半分が失われている。口縁部の復元径は 9.8cm、器高 19.2cm。

3～10は広口壺の口縁部である。

3は内面に横ハケを施す。小片であるため口縁径を復元するのが困難であるが、およそ 31.5cm 程度と考えられる。

4は外面に丹塗りの痕跡が観察されるが、残りが悪い。破片資料であり、復元径は 22.2cm。

5は内外面共に丹塗りが残る。胎土が密であり、作りは丁寧である。口縁部の復元径は30.6cm。

6は内外面共に丹塗りを施す。口縁部の復元径は23.6cm。

7は外面に丹塗りが残り、口縁の下から頸部にかけて縦方向の暗文状の縦ミガキを施す。また、口縁端部には刻み目が入る。口縁部の1/3ほどが残存しており、復元径は24.4cm。

8は口縁の内外面付近に丹塗りが残る。これ以下の外面についても丹塗りを行っていた可能性が高いが、表面の残りが悪く、観察できなかった。口縁のおよそ1/4が残存しており、復元径は33.7cm。

9は外面に縦方向のミガキの痕跡と丹塗りが残り、頸部の付け根に1条の沈線が巡る。内面はナデ仕上げを行う。口縁部の半分弱が残っており、復元径は31cm。

10は外面が丹塗りで、頸部の付け根に1条の沈線が巡る。内面は丹塗りの痕跡が残っていなかったものの、口縁部付近については丹塗りを行っていた可能性がある。口縁部の復元径は40cm。

11は頸部から肩部にかけてで、肩部の外面に4条を一単位とした縦方向の沈線が刻まれている。現状では2ヶ所のみしか残存していなかったが、かつては、周囲の4ヶ所に配置されていたものと考えられる。内外面ともにナデ仕上げで、内面には若干、指頭痕が残る。全体的に作りが丁寧な感じを受ける。口縁部は残存していなかったため、径は不明であるが、頸部の付け根付近の径は13.4cmである。

12は頸部から胴部下半にかけてである。風化により、表面の剥落が進んでおり、調整は不明である。口縁部の径は不明であるが、頸部の付け根付近の径は復元で15.8cmである。

13～37までは壺である。

13は口縁部から頸部にかけてで、口縁部は未発達なT字形でやや外傾する。器面の調整は内外面共に風化が激しく不明である。口縁径は14.4cm。

14は口縁部付近と考えられ、口縁部は内側にや

や張り出しをもつ逆L字形を呈する。内面に丹塗りの痕跡がみられるが、外面は剥落しており、丹塗りの有無は不明である。口縁径は23.7cm。

15は口縁部から頸部にかけてで、全周が残る。口縁部は未発達なT字形で、やや外傾する。調整は内外面共に風化が激しく不明である。口縁径は19.2cm。

16は外面の中位付近に1条の突帯が巡る。この突帯から上位にかけてはハケ目の痕跡が残っており、肩部付近では縦方向、突帯付近では斜め方向で、一部分これをナデ消した痕跡もみられる。内面はナデ仕上げで、とくに突帯の内側付近は強く横にナデを行った痕跡が見られる。口縁部は失われているため径は不明だが、突帯付近で16cmを測る。

17は口縁部の下位から頸部にかけて縦方向の暗文を施した後に、黒塗りをを行う。口縁部は少し内側にも張り出しをもつT字形で若干、外傾する。口縁部の復元径は約20cm。

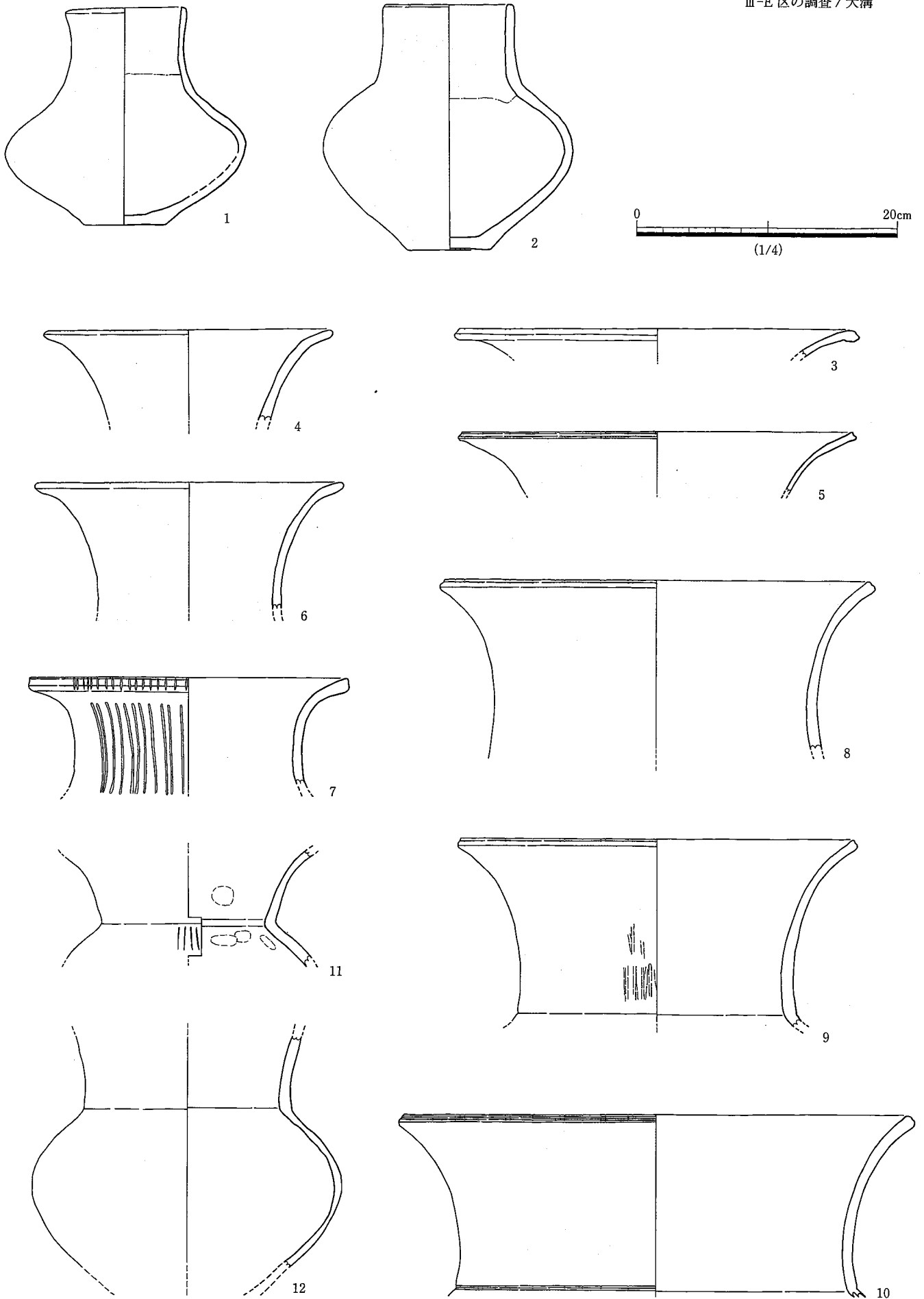
18の口縁部はT字形を呈し、若干、内傾する。調整については器表の状態が悪く、不明である。口縁部の復元径は22.4cm。

19は外面から内面の口縁部付近まで丹塗りが残る。口縁部はわずかに内側に張り出すT字形である。口縁部の復元径は17.6cm。

20は口縁端部に縦方向のキザミ目を施す。口縁部はT字形で、外側に大きな張り出しをもち、やや内傾する。調整は器面が剥落しているため不明。口縁部の復元径は40.1cm。

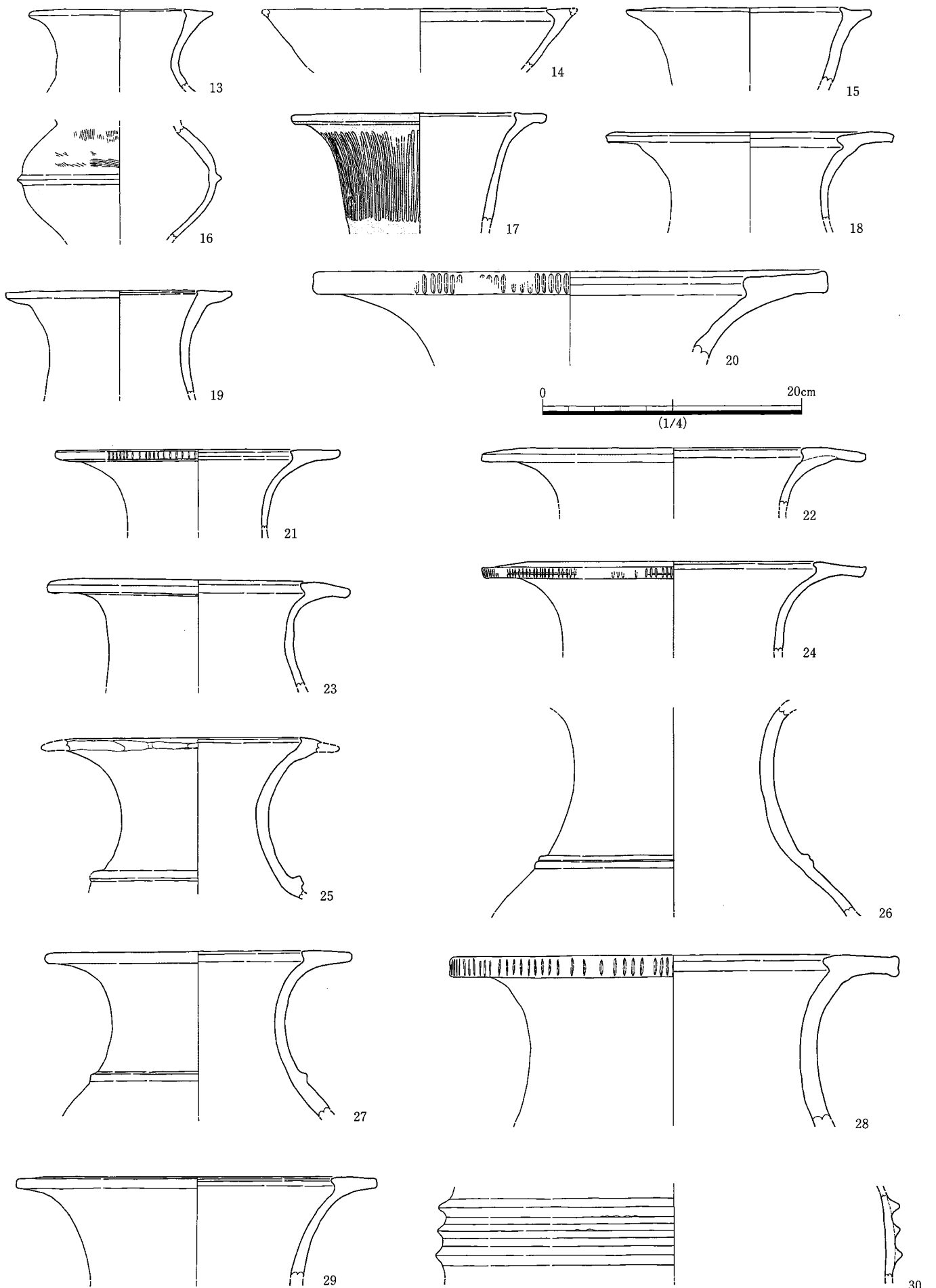
21は口縁部に縦方向のキザミ目を施す。口縁部はT字形で、内側にわずかに張り出す。外面は器表の残りが悪いためはっきりしないが、暗文状の縦ミガキがうっすらと残っている。口縁部の復元径は22.2cm。

22は口縁上端に丹塗りが残る。その他の箇所では器面の状態が悪く、確認ができなかったが、外面および口縁部の内面付近には丹塗りを施していた可能性が高いと考えられる。口縁部の形態はT字形で、



第11図 Ⅲ-E区 大溝 A区上層 出土遺物実測図1 (1/4)

調査の記録



第12図 Ⅲ-E区 大溝 A区上層 出土遺物実測図2 (1/4)

内側はわずかに張り出し、若干、外傾する。口縁部の復元径は 30cm。

23 は全周が残る。外面から内面の口縁付近にかけて丹塗りを施している。口縁部は T 字形で、やや外傾する。口縁径は 23.6cm。

24 は口縁端部に縦方向のキザミ目を施し、口縁上端と内面の一部に丹塗りが残る。もとは、外面についても丹塗りを施していたものと思われるが、剥落しており、観察できなかつた。口縁部はやや外傾する T 字形で、口縁部の復元径は 30cm。

25 は口縁の端部を打ち欠いた可能性がある。頸部の付け根には突帯を巡らしており、調整は器面の状態が悪いため不明である。口縁径は端部を打ち欠いた状態で 19.6cm である。

26 は頸部から肩部にかけてで、外面に丹塗りを施す。頸部の付け根には低く、稜のあまい M 字突帯を巡らせる。

27 は口縁部上端から外面にかけて丹塗りの痕跡が残る。頸部の付け根には低い三角突帯を巡らせる。口縁部は内側に少し張り出しをもつ T 字形で、口縁部の復元径は 23.8cm。

28 は口縁端部に縦方向のキザミ目を施す。内外面ともナデ仕上げを行う。口縁部は T 字形で、復元径は 35.2cm。

29 は内外面共にナデ仕上げを行う。口縁部は T 字形で、復元径は 28cm。

30 は胴部で、三重の突帯を巡らせる。胴部の復元径は 36cm である。

31 は口縁部に縦方向のキザミ目を施し、頸部に二段の M 字突帯を巡らせる。全体的にミガキを行っており、外面は口縁から突帯および突帯間に縦方向の暗文状のミガキを施し、内面の頸部上半は横方向のミガキを行う。また、丹塗りが外面から内面の頸部上半にかけて施される。口縁部は T 字形で、やや外傾する。口縁部の径は 26.7cm である。

32 は袋状口縁壺である。口縁部下に M 字の突帯が 1 条巡っており、これから口縁部に向かってと、

下位方向に縦方向の暗文を施す。内外面ともに丹塗りを施している。内面はナデを行っているが、頸部を絞った時にできた縦方向の皺が消しきれずに残る。口縁部の復元径は 15.6cm。

33 は口縁部から胴部にかけてである。口縁部は朝顔状に広がり、端部にやや斜め方向のキザミ目が入り、一ヶ所に焼成前の穿孔が施されている。頸部の付け根に 1 条、胴部に 2 条の稜のあまい M 字突帯が巡る。調整は全体的にナデ仕上げを行う。口縁径は 20.7cm。

34 は袋状口縁壺の口縁部下から頸部にかけてである。3 段の M 字突帯を巡らせており、それぞれの突帯の間に縦方向の暗文を施す。外面から口縁部の内面付近まで丹塗りを施す。

35 は口縁端部に縦方向のキザミ目を施し、口縁部下に 1 条の M 字突帯を巡らせる。外面から口縁上端にかけては丹塗りの痕跡が残る。口縁部は逆 L 字形で内傾し、復元径は 10.5cm である。

36 は口縁端部に縦方向のキザミ目を施し、口縁部下に稜のあまい M 字突帯を巡らせる。外面から口縁部の内面付近まで丹塗りを施す。口縁部は逆 L 字で内傾し、復元径は 22.2cm である。

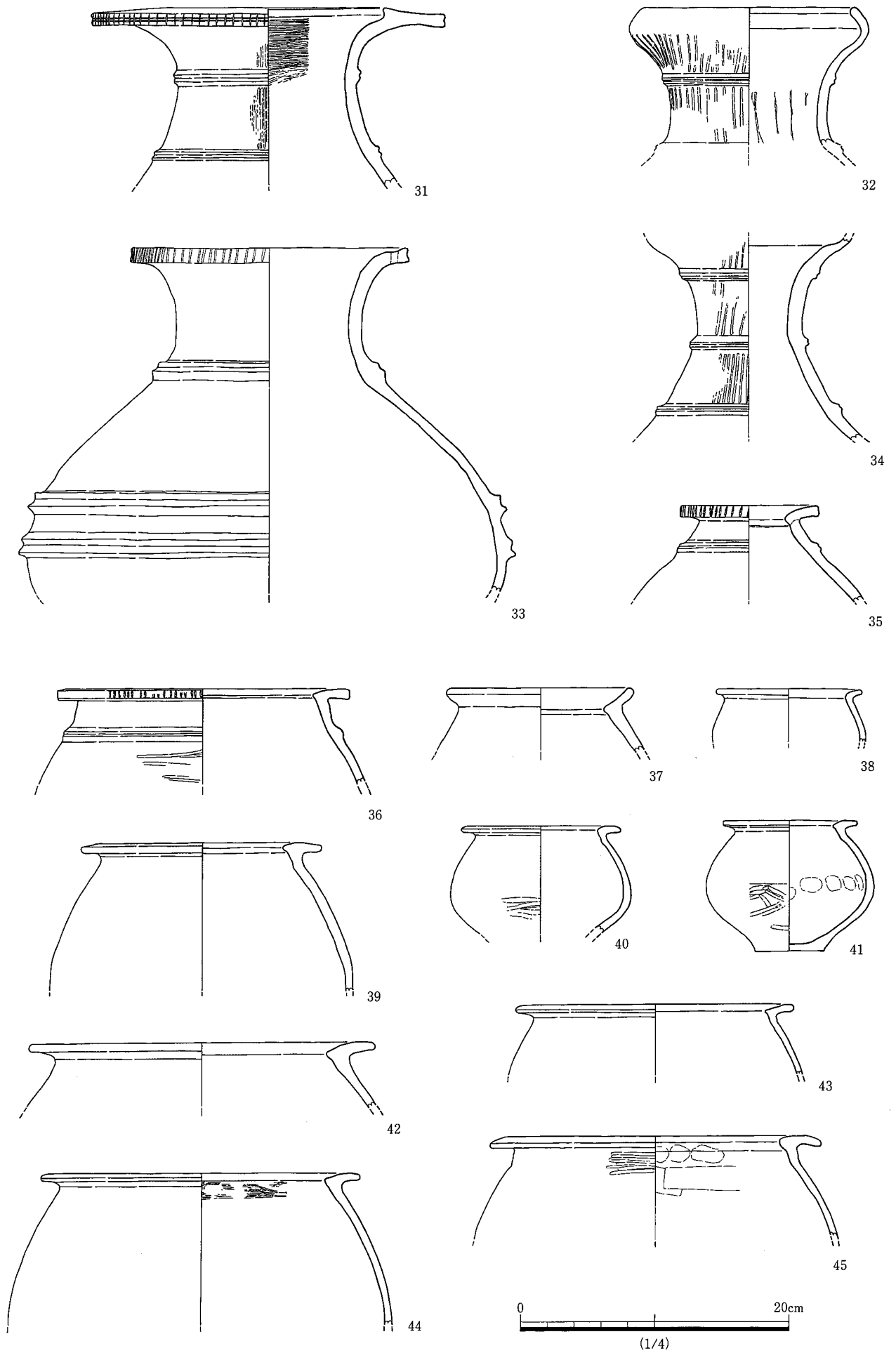
37 は口縁部が内傾する。外面から口縁部内面付近にかけて丹塗りが厚く残る。口縁部の復元径は 14.2cm。

38 は無頸壺である。外面から口縁部内面付近にかけて丹塗りを施す。口縁部はやや内傾し、復元径は 10.8cm である。

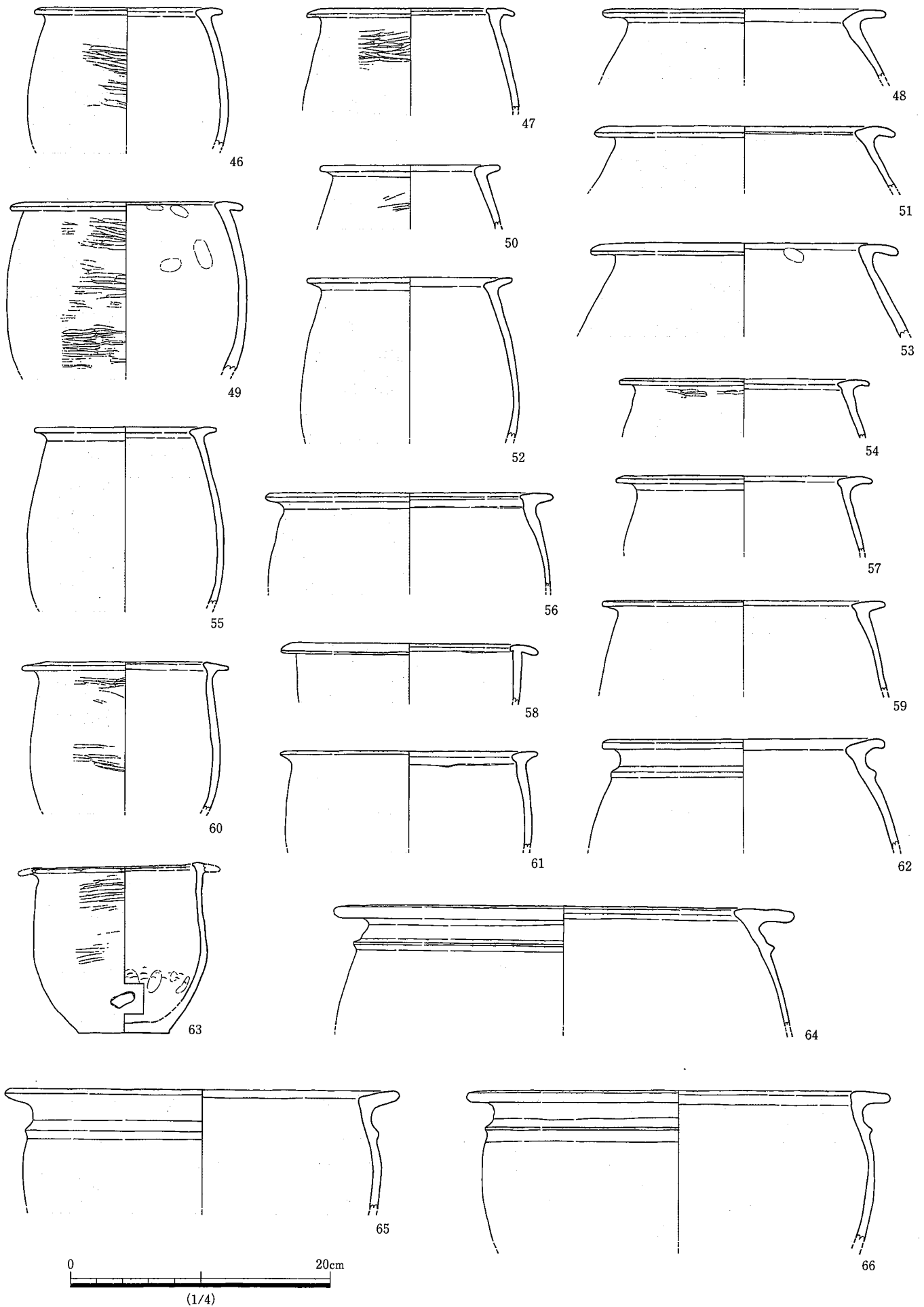
39 は甕である。外面から口縁部上端にかけて丹塗りを施す。口縁部の復元径は 18.1cm。

40 は無頸壺である。外面から口縁部上端にかけて丹塗りを施す。外面の下半部には横方向のミガキ痕が観察された。口縁部の復元径は 12.1cm。

41 は無頸壺である。外面の底部側面から口縁部上端にかけて丹塗りを施す。外面は主に横方向のミガキを行い、内面はナデを行う。口縁部には穿孔が施されており、復元径は 10.1cm。



第13図 Ⅲ-E区 大溝 A区上層 出土遺物実測図3 (1/4)



第14図 Ⅲ-E区 大溝 A区上層 出土遺物実測図4 (1/4)

42～64は甕である。

42は外面から口縁部上端にかけて丹塗りを行う。口縁部の復元径は26cm。

43は外面から口縁部上端にかけて丹塗りを行う。口縁部の復元径は20.9cm。

44は外面から口縁部の内面付近にかけて丹塗りをを行う。器面の残りが悪いが、口縁内側に横方向のミガキの痕跡が観察された。復元径は24cm。

45は外面の上位に横方向のミガキがみられ、内面に強いナデを行った痕跡と指頭痕が観察された。口縁部の復元径は25cm。

46は体部外面に横ミガキを行い、口縁部近辺はナデを行っている。外面から口縁部上端にかけて丹塗りが施されている。口縁部の復元径は14.7cm。

47は体部外面に横方向のミガキが施されており、外面から口縁部の内面付近まで丹塗りが行われる。口縁部の復元径は16.1cm。

48は外面から口縁上端にかけて丹塗りが施される。口縁が内傾しており、復元径は22cm。

49は外面に横ミガキ、内面にナデに伴う指頭痕が残り、外面から口縁部上端にかけて丹塗りが施される。口縁部は若干外傾しており、復元径は18cm。

50は外面にわずかな横方向のミガキ痕跡が残り、外面から口縁部上端にかけて丹塗りが施される。口縁部は内傾し、復元径は14cm。

51は外面から口縁部内面付近にかけて丹塗りが施される。口縁部は内傾し、復元径は23.5cm。

52は外面から口縁部上端にかけて丹塗りが施される。口縁部は内傾しており、復元径は15.9cm。

53は外面から口縁上端にかけて丹塗りが施され、内面の口縁部付近にはナデに伴う指頭痕が残る。口縁部の復元径は24cm。

54は外面から口縁上端にかけて丹塗りが施され、外面の口縁部下にはミガキの痕跡がうっすらと残る。口縁部は若干内傾しており、復元径は19.6cm。

55は外面から内面の上位まで丹塗りが施される。調整は器面の状態が悪く不明。口縁部の復元径は

14.1cm。

56は外面から口縁の内側にかけて丹塗りが施される。内面の口縁直下には板状工具で強くナデを行った痕跡が残る。口縁部の復元径は22.4cm。

57は口縁が少し内傾しており、調整は器面の状態が悪いため不明。口縁部の復元径は20cm。

58は内外面共に丹塗りを施す。口縁部は外傾しており、復元径は20cmである。

59は外面から内面上位まで丹塗りを施す。口縁部は内傾しており、復元径は22cm。

60は外面から口縁部上端まで丹塗りを施しており、外面には所々に横方向のミガキの痕跡が残る。口縁部は外傾しており、復元径は16cm。

61は外面から口縁部内側まで丹塗りを施す。口縁は若干内傾しており、復元径は20cm。

62は外面から口縁部内側まで丹塗りを施しており、口縁部下には稜のあまい三角突帯を1条巡らせる。口縁部は内傾しており、復元径は22cmである。

63は胴部下位に焼成後の穿孔を行い、口縁端部を打ち欠いている。外面から口縁上端にかけて丹塗りをを行うが、外面下位は残りが悪い。調整は外面に横方向のミガキが部分的にみられ、内面の下位にはナデに伴う指頭痕が多数観察できた。口縁部は打ち欠きを受けている現状で13.6cm。

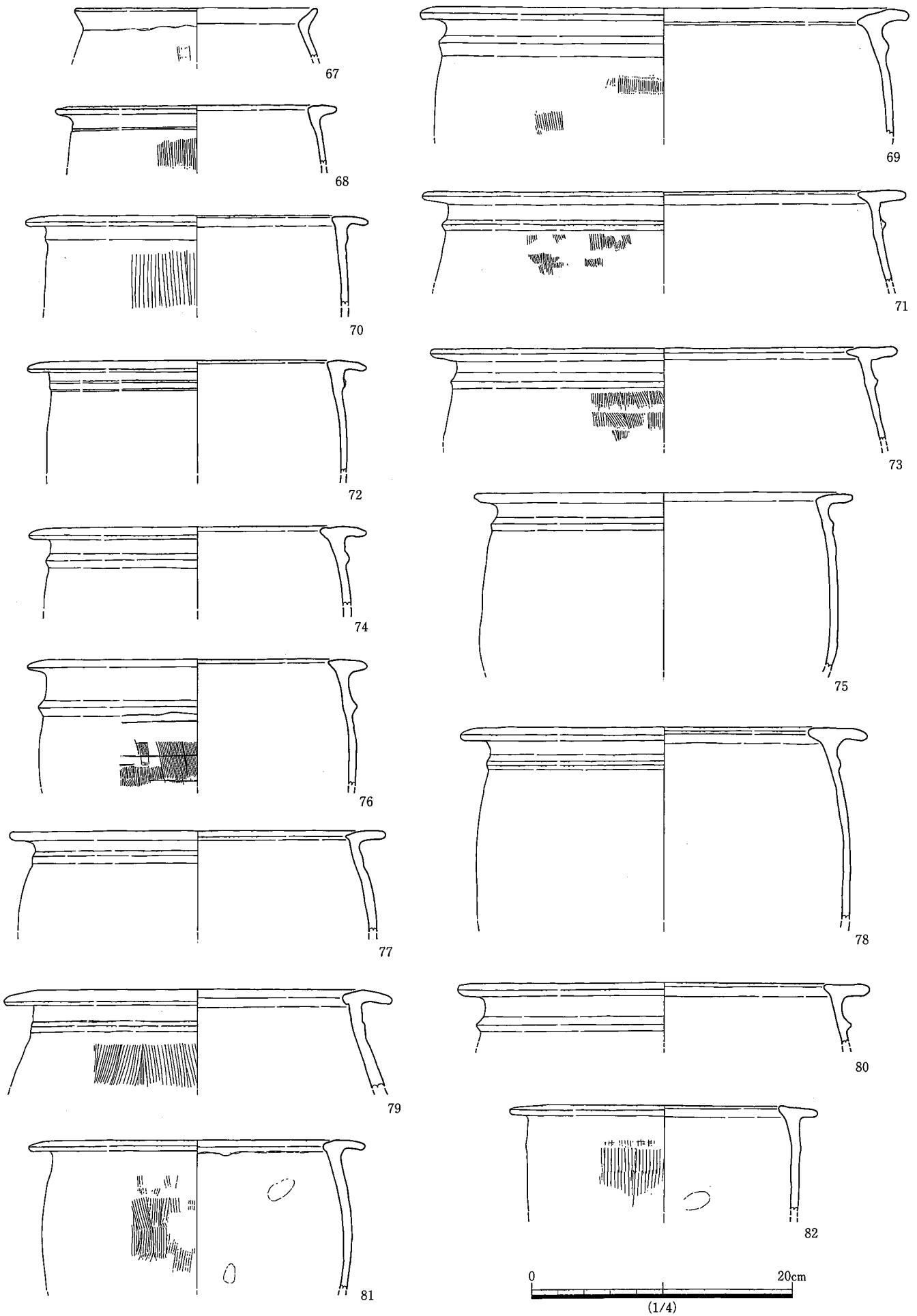
64は口縁下に三角突帯を1条巡らせる。調整は器面の状況が悪く不明だが、外面の下位にハケ目らしき痕跡がうっすらと見える。口縁部の復元径は35.8cm。

65は鉢と考えられ、内外面共に丹塗りを施す。口縁部下になだらかな三角突帯を1条巡らせる。口縁部は内傾しており、復元径で30.7cmである。

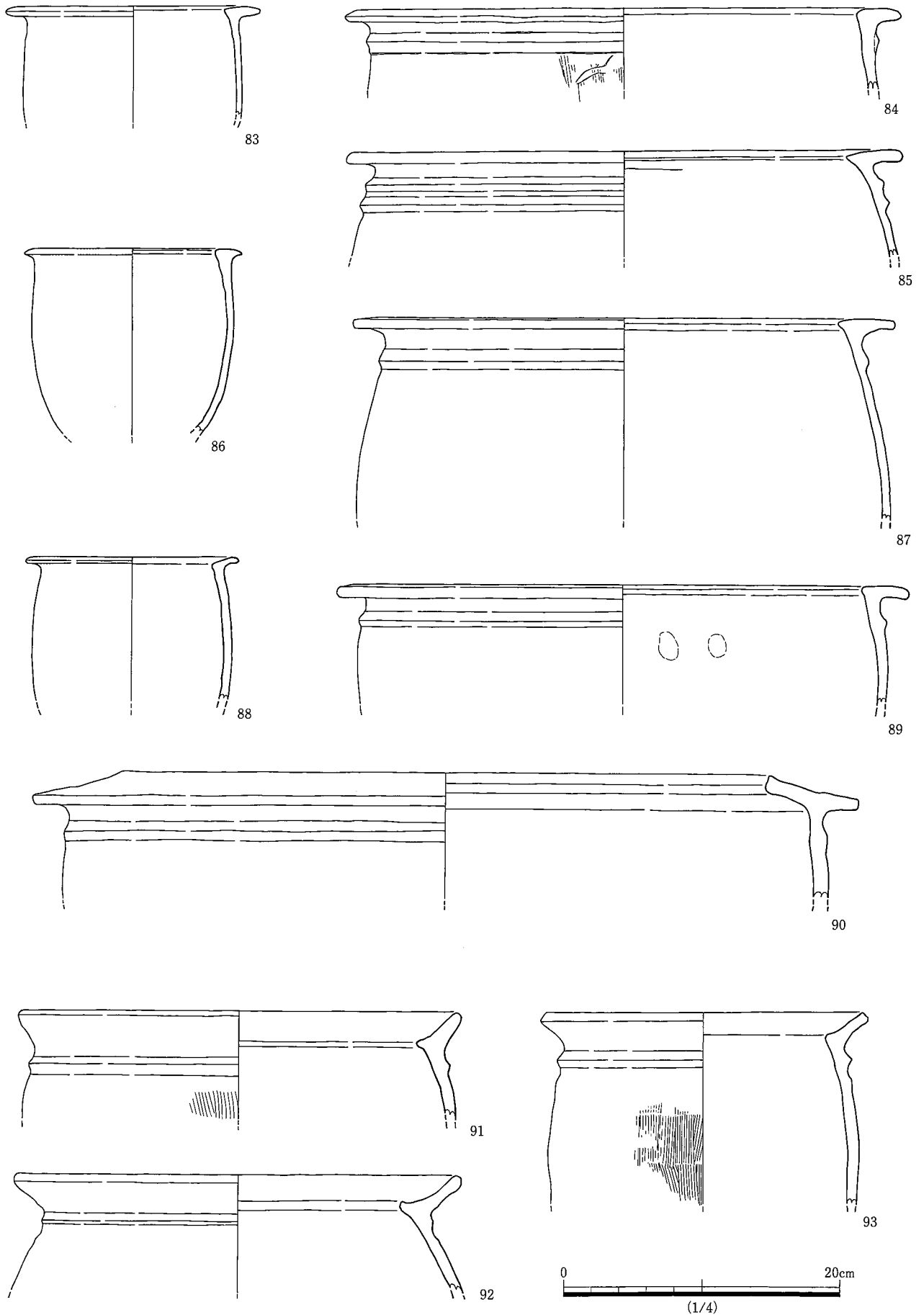
66は鉢と考えられ、内外面共に丹塗りを施す。口縁部下には低い三角突帯を巡らせる。口縁部の復元径は33cmである。

67～88は甕と考えられる。

67は口縁が大きく内傾しており、外面は縦ハケを行った後にナデ消す。口縁部の復元径は18.8cm。



第 15 図 Ⅲ-E 区 大溝 A 区上層 出土遺物実測図 5 (1/4)



第16図 Ⅲ-E区 大溝 A区上層 出土遺物実測図6 (1/4)

68 は外面が縦ハケで、口縁下に1条の沈線を施す。口縁部の復元径は 21.6cm である。

69 は外面に縦ハケを施し、口縁部下には低くてなだらかな三角突帯を巡らせる。口縁部は内傾しており、復元径 37.9cm。

70 は外面に縦ハケを施す。口縁は若干、外傾しており、復元径は 26.4cm。

71 は外面に縦ハケを施したのちに、部分的に横方向のナデ消しを行う。口縁部の下に低いが稜のはっきりとした三角突帯を巡らせる。口縁部の復元径は 37.5cm。

72 は口縁部下に断面が長方形の低い突帯を巡らせる。口縁部の復元径は 26cm。

73 は外面に縦ハケを施した後に、部分的に横方向のナデ消しを行う。口縁部下には低く、なだらかな三角突帯を巡らせる。口縁部は復元で 36.2cm。

74 は口縁部下に三角突帯を1条巡らせる。口縁部の復元径は 26cm。

75 は外面にうっすらと縦ハケがみえ、内外面共に2次焼成に係わると思われるススが付着している。口縁部下には低い三角突帯が巡る。口縁部の復元径は 29.4cm。

76 は口縁部の下に突帯を1条巡らせる。その下の体部に縦ハケが施され、これを切るように横方向の沈線が数条残る。内外面とも口縁部下に2次焼成に係わると思われるススが付着している。口縁部の復元径は 26.2cm。

77 は口縁部の下に極めて低く、なだらかな三角突帯が巡る。口縁部の復元径は 29cm。

78 は口縁部の下に低くなだらかな三角突帯が巡る。突帯下には縦ハケが施されているものと思われるが、器面の状態が悪く、確認はできなかった。口縁部の復元径は 31.6cm。

79 は口縁部の下に低くなだらかな突帯が巡り、この下に縦方向のハケ目が施される。外面には下方から突帯までの間に2次焼成に係わると思われるススが付着している。口縁部の復元径は 30cm である。

80 は口縁部下に三角突帯を1条巡らせる。内外面共に2次焼成に係わると思われるススが付着している。口縁部の復元径は 31.9cm。

81 は外面に縦ハケが施されるが、口縁部付近ではナデ消されている。口縁部の復元径は 26cm。

82 は外面に縦ハケが施されるが、口縁部付近ではナデ消されている。外面の下位から口縁部下まで2次焼成に係わると思われるススが付着している。口縁部の復元径は 23.8cm。

83 は器面の残りが悪いが、外面にうっすらと縦ハケの痕跡が残る。口縁部の復元径は 18.7cm。

84 は口縁部下に低く、なだらかな突帯を巡らせる。突帯の下には縦ハケが施されており、これと切りあうように不定形の沈線が刻まれる。外面の下位から口縁部下まで2次焼成に係わると思われるススが付着している。口縁部の復元径は 41cm。

85 は口縁部下に2条の突帯を巡らせる。口縁部の復元径は 40.7cm。

86 は外面から口縁部上端にかけて丹塗りを施す。口縁部の復元径は 16cm。

87 は口縁部下に低く、なだらかな突帯を1条巡らせる。口縁部の復元径は 39.8cm。

88 は外面から口縁部内側にかけて丹塗りを施す。口縁部の復元径は 15.6cm。

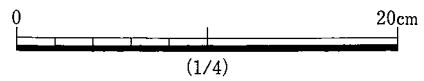
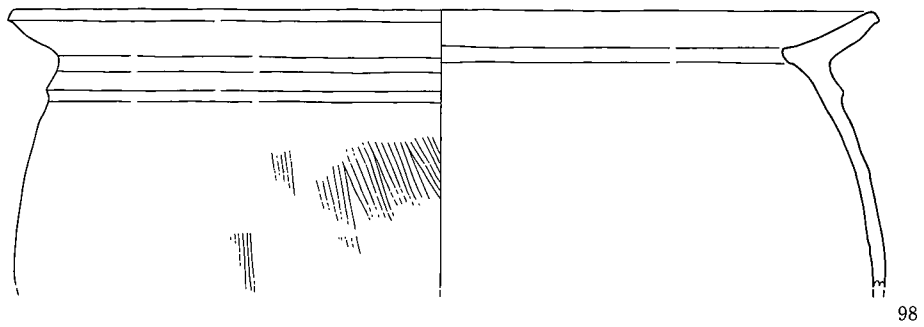
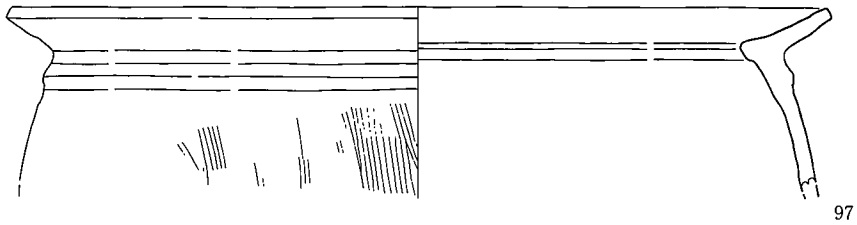
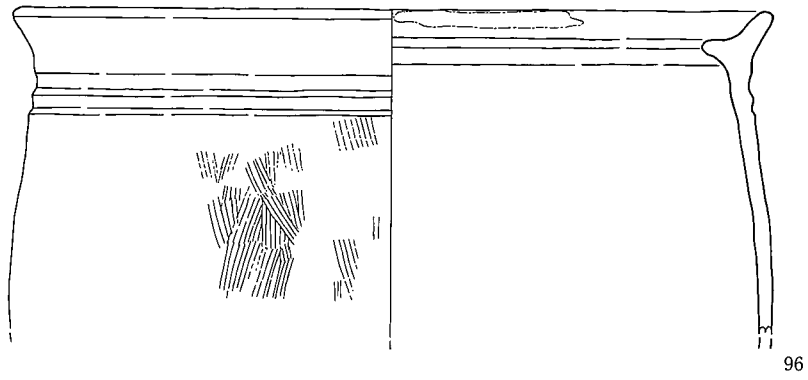
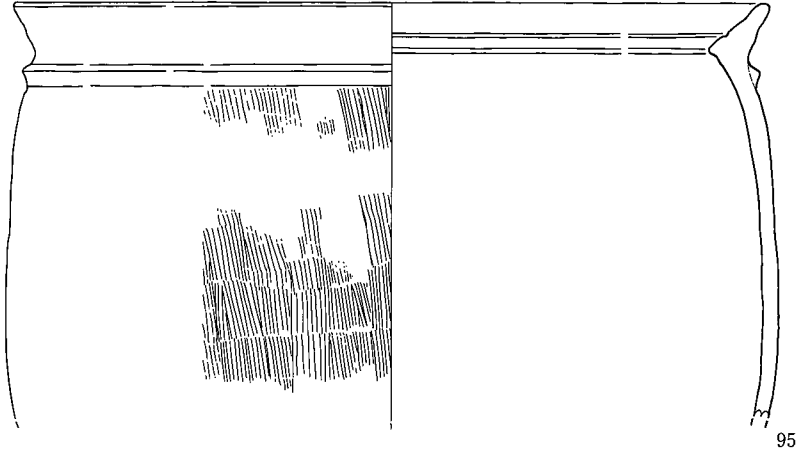
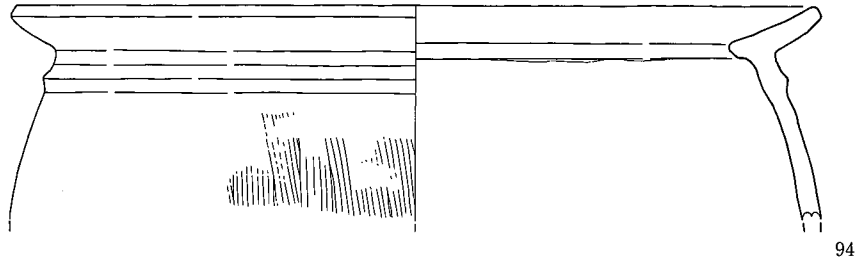
89 は甕または鉢である。口縁部下に突帯を1条巡らせる。口縁部の復元径は 42cm。

90 は甕棺の破片である。口縁部下に低く、なだらかな突帯を1条巡らせ、内外面共、ナデによる仕上げを行う。口縁部はT字形で、外傾する。口縁部の復元径は 60.4cm。

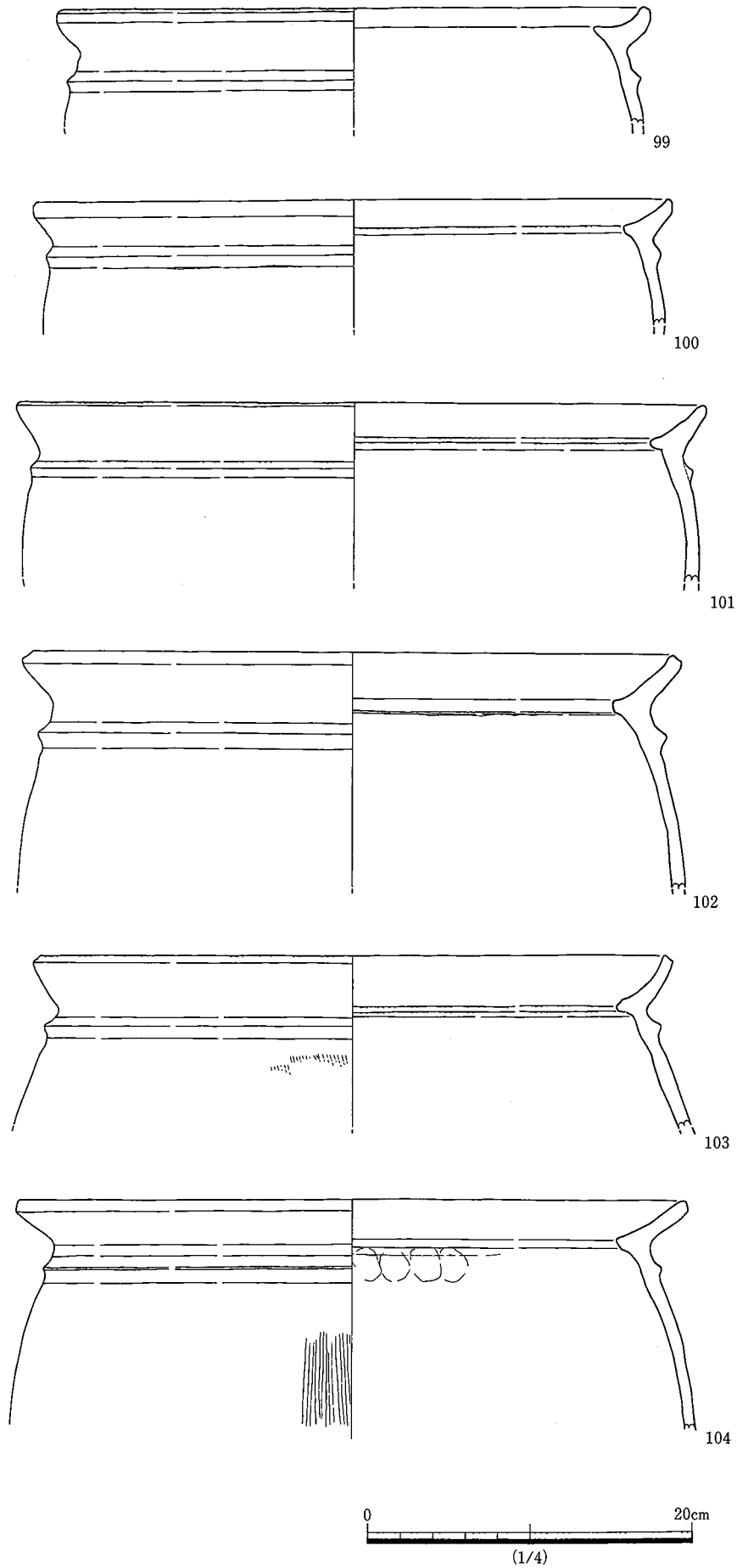
91 ~ 104 は甕の破片である。

91 は口縁部の付け根に低くなだらかな三角突帯を1条巡らせ、この下に縦ハケを施す。口縁は大きく内傾しており、復元径は 32.5cm。

92 は口縁部の付け根に低くなだらかな三角突帯を1条巡らせる。口縁部は大きく内傾しており、復元径は 33cm。



第17図 Ⅲ-E区 大溝 A区上層 出土遺物実測図7 (1/4)



第 18 図 Ⅲ-E 区 大溝 A 区上層 出土遺物実測図 8 (1/4)

93 は口縁部の付け根に三角突帯を1条巡らせ、この下に縦ハケを施す。口縁部は大きく内傾しており、復元径は24cm。

94 は口縁部の付け根に低く、なだらかな三角突帯を1条巡らせ、この下に縦ハケを施す。口縁部は大きく内傾しており、復元径は42.8cm。

95 は口縁部の付け根に三角突帯を1条巡らせ、この下に縦ハケを施し、部分的にナデ消す。胴部の下半分にはススが付着する。口縁部の上端の中央部には1条の沈線を巡らせる。口縁部は大きく内傾しており、復元径は40cm。

96 は口縁部の内側の一部に丹塗りの痕跡が残る。口縁部の付け根に低い三角突帯を巡らしており、突帯の上下に強くナデを行ったときにできた窪みが残る。突帯の下には縦ハケが残っており、部分的にナデ消しを行っている。口縁部の復元径は40cm。

97 は口縁部の付け根付近に低く、なだらかな三角突帯を1条巡らせ、この下に縦ハケを施す。口縁部の上端には強く押さえた痕跡が残っている。口縁部の復元径は43.7cm。

98 は口縁部の付け根付近に低く、なだらかな三角突帯を1条巡らせ、この下に縦ハケを施し、部分的にナデ消している。口縁部の復元径は46cm。

99 は口縁部下に1条の突帯を巡らせる。口縁部は内湾しながら内傾し、復元径は37.2cm。

100 は口縁部の付け根付近に低く、なだらかな三角突帯を1条巡らせる。口縁部は内傾しており、復元径は40cm。

101 は口縁部の付け根付近に低く、なだらかな三角突帯を1条巡らせる。口縁部は大きく内傾しており、復元径は43cm。

102 は口縁の下に三角突帯を1条巡らせる。口縁部は大きく内傾しており、端部を押さえて面取りをする。口縁の復元径は41.2cm。

103 は口縁部の付け根付近に三角突帯を1条巡らせ、この下に縦ハケを施した後にナデ消す。外面にはススが付着している。口縁部は大きく内傾してお

り、端部を押さえて面取りをする。口縁の復元径は40cm。

104 は口縁部の付け根付近に低く、なだらかな三角突帯を1条巡らせ、この下に縦ハケを施す。口縁の内面の付け根付近には多数の指頭痕が残されており、強く押さえたことが分かる。口縁部は内傾しており、復元径は41.2cmである。

105～110 は壺である。

105 は口縁部の一部を失うがほぼ完形で、体部から口縁部にかけてやや内湾する。外面の下半分に部分的に縦ハケが残り、他の箇所は丁寧なナデ仕上げとなっている。口縁径15.2cm、器高8cm。

106 は内外面共に丹塗りを施す。口縁部の復元径は19cm。

107 はほぼ対角線上の2ヶ所に、半円形の打ち欠きを施している。全体的にナデ仕上げであり、内面の中位付近に指頭痕が残る。体部から口縁部にかけてはやや内湾しており、口縁端部は押さえて軽い面取りを行う。口縁径18.2cm、器高12.4cm。

108 は内外面共に横方向のミガキを施した後に、丹塗りをを行う。口縁部の復元径は15.2cm。

109 は口縁部が逆L字状に外反する。内外面共に丹塗りであり、口縁部の復元径は21.4cm。

110 は口縁部の下1/3付近で大きく湾曲する。口縁部の復元径は21.6cm。

111～127 は高坏である。

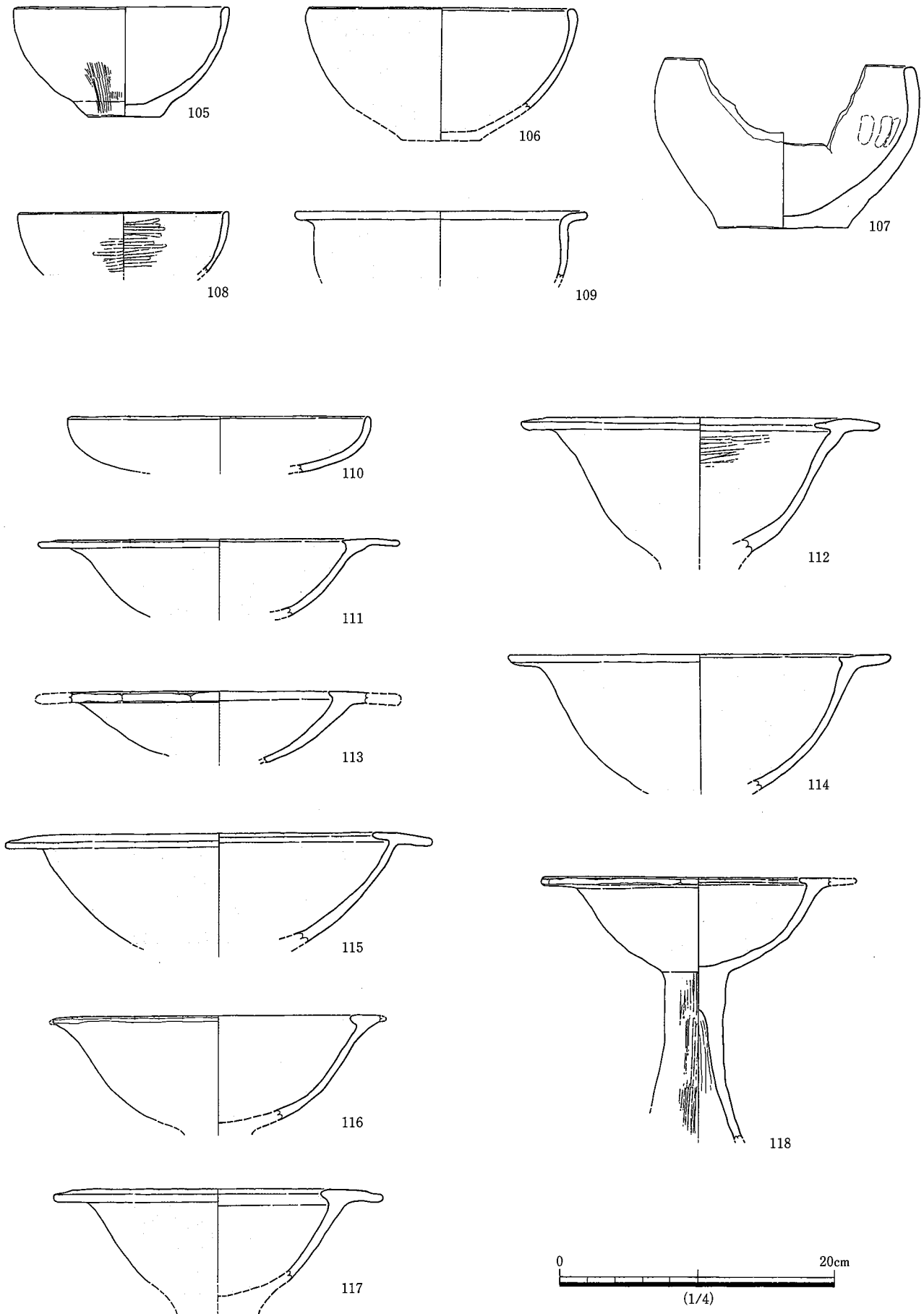
111 は内外面とも器面の状態が悪く、調整ははっきりしないが、丹塗りの痕跡が部分的に残る。口縁部の復元径は26.4cm。

112 は内面に横方向のミガキを施し、内外面共に丹塗りをを行う。口縁部の復元径は26.1cm。

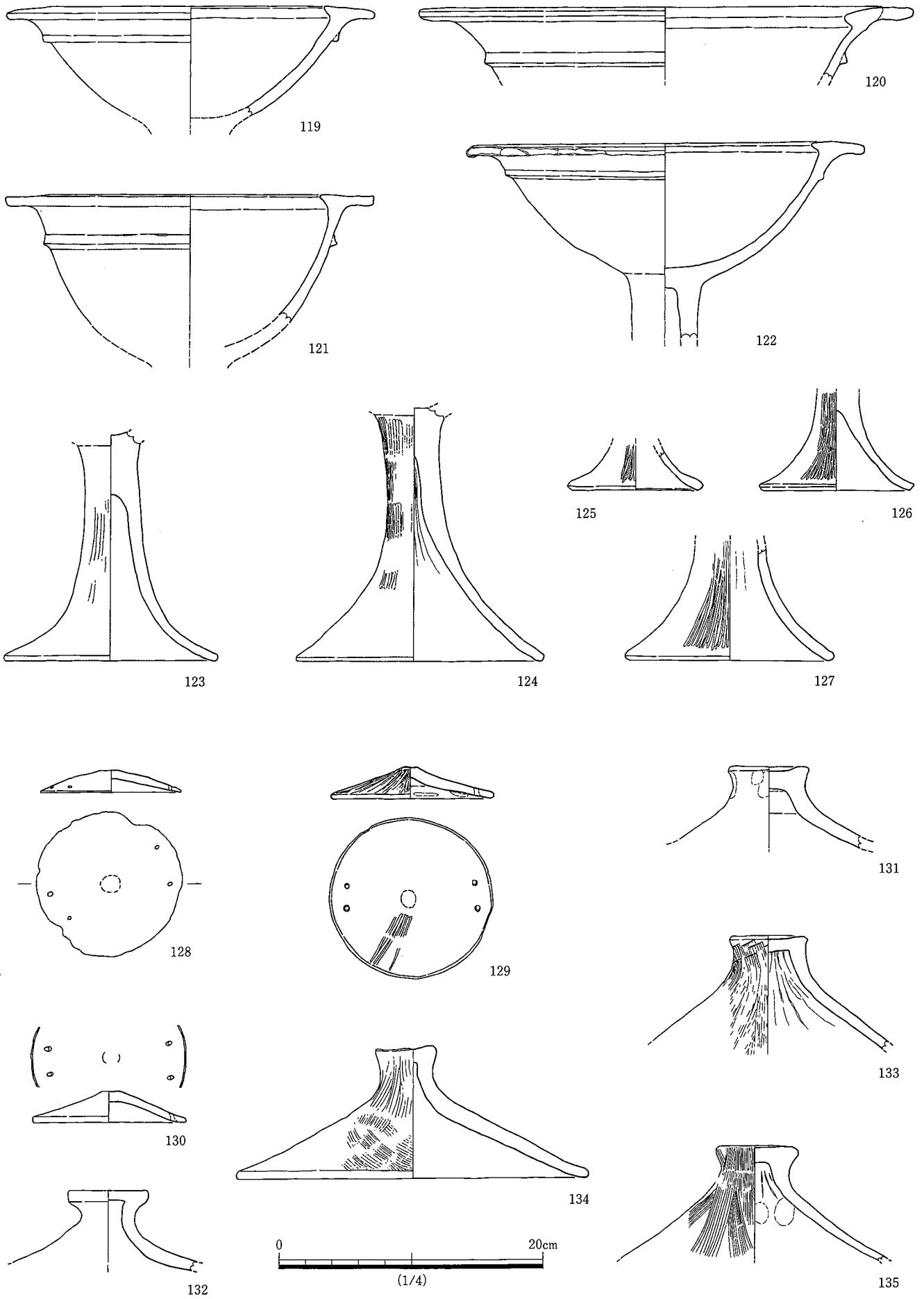
113 は口縁端部が打ち欠きである可能性があり、丹塗りが内面に残る。打ち欠き部分で口縁径は21.6cm。

114 は内外面とも丹塗りを施す。口縁部の復元径は28cm。

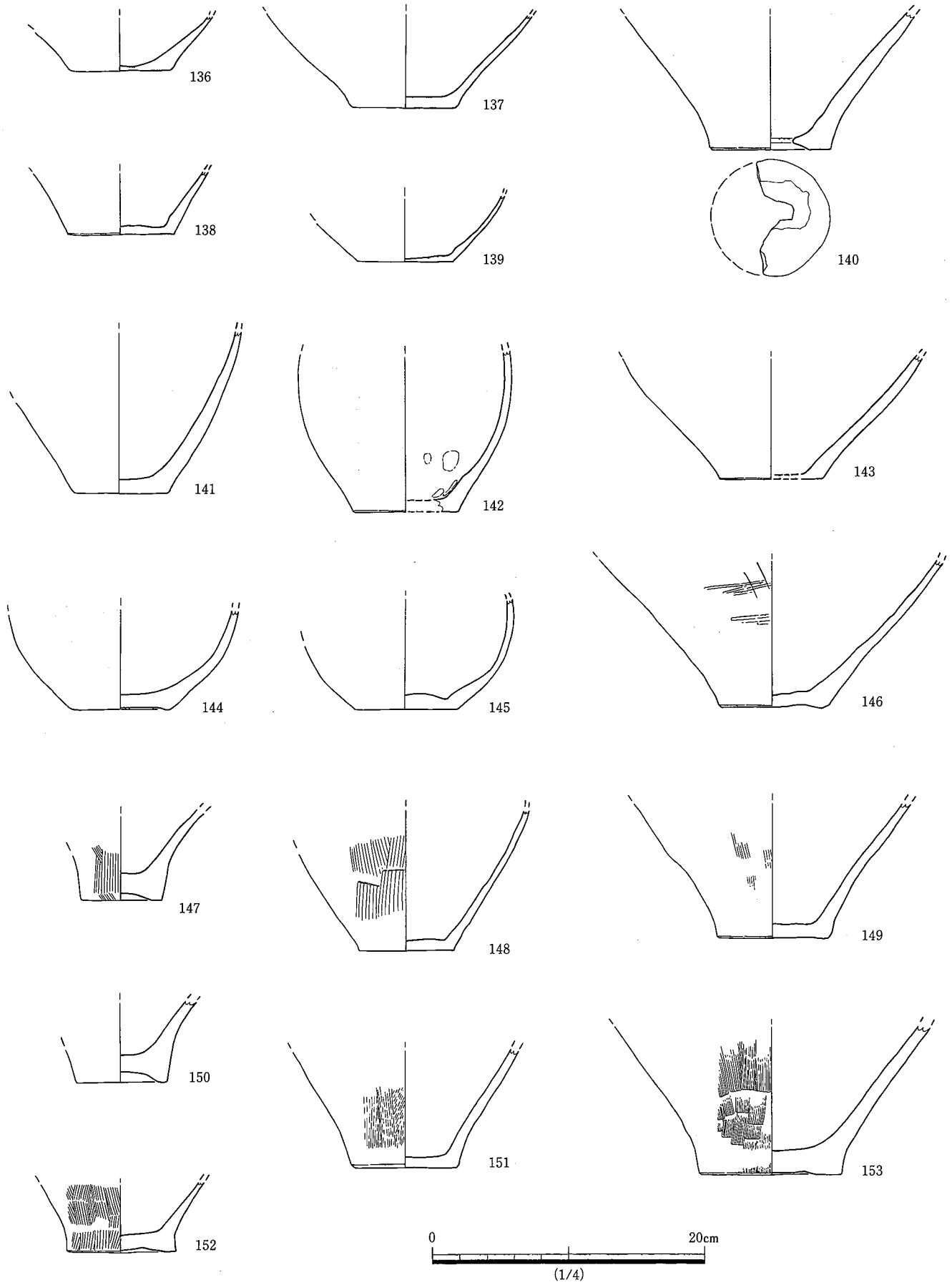
115 は内外面共に丹塗りを施す。口縁部の復元径



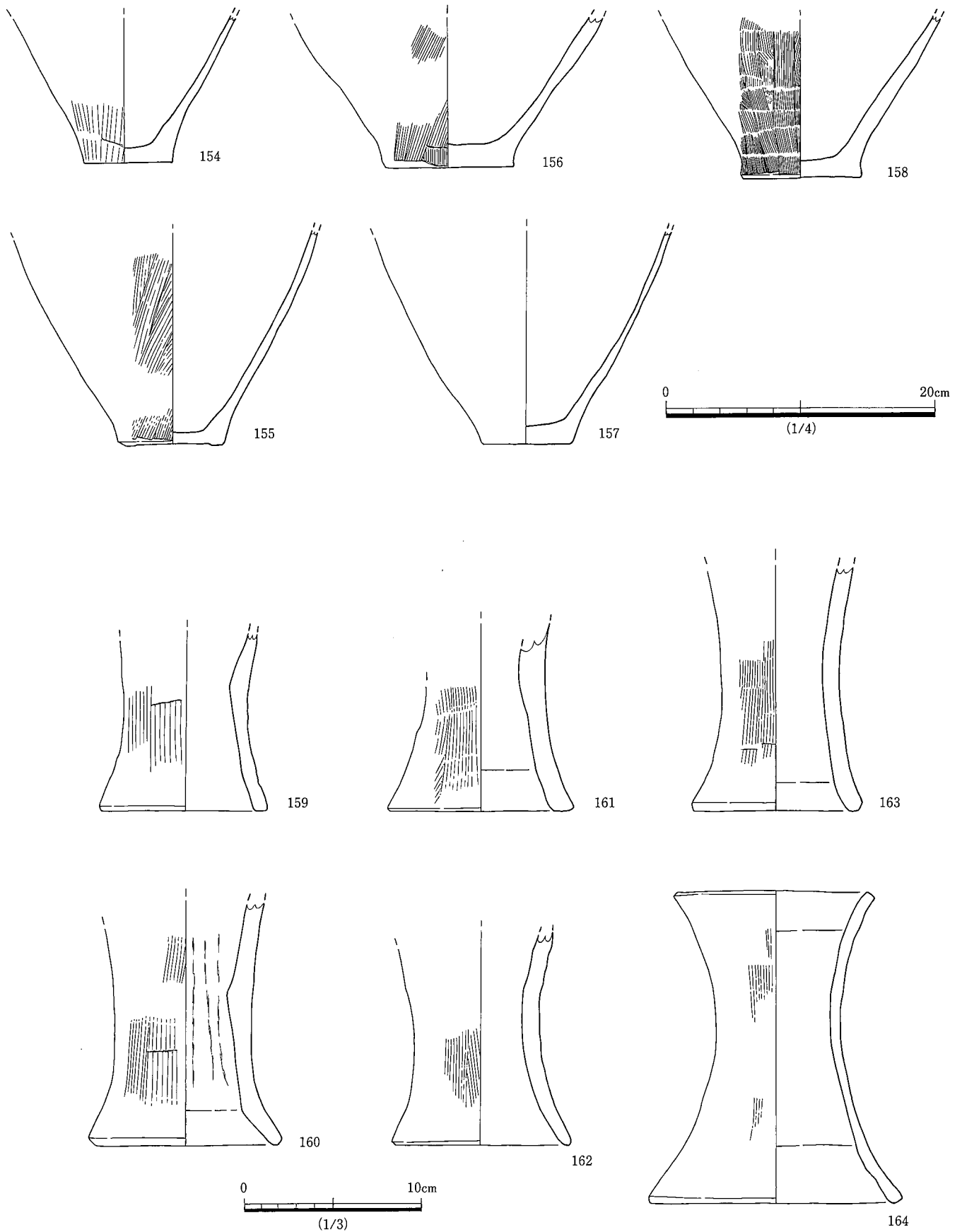
第19図 Ⅲ-E区 大溝 A区上層 出土遺物実測図9 (1/4)



第20図 Ⅲ-E区 大溝 A区上層 出土遺物実測図10 (1/4)



第 21 図 Ⅲ-E 区 大溝 A 区上層 出土遺物実測図 11 (1/4)



第22図 Ⅲ-E区 大溝 A区上層 出土遺物実測図12 (1/3, 1/4)

は 31cm。

116 は口縁端部が失われており、打ち欠きの可能性も考えられる。口縁部が未発達な T 字形で、内面から口縁上端にかけて丹塗りを施す。口縁径は 24cm。

117 は内外面共に丹塗りを施す。口縁径は 24cm。

118 は口縁端部および脚裾部が打ち欠きである可能性がある。脚部の外面に縦方向のミガキが入り、丹塗りが残る。坏部は内面に丹塗りの痕跡が残り、外面は器面の状態が悪く丹塗りの痕跡は残っていないが、丹塗りであったと思われる。口縁部は打ち欠きの状態で 21.2cm である。

119 は口縁部の下に三角突帯を 1 条巡らせる。内外面とも器面の残りが悪く、調整や丹塗りの有無については不明である。口縁部の復元径は 28.1cm。

120 は口縁部の下に三角突帯を 1 条巡らせる。内外面共に丹塗りで、内面にはうっすらとミガキらしき痕跡が残る。口縁部の復元径は 37.4cm。

121 は口縁部の下に三角突帯を 1 条巡らせる。内外面共に丹塗りで、口縁部の復元径は 27.8cm。

122 は口縁部を打ち欠いている可能性がある。口縁部の下に三角突帯を 1 条巡らせ、内面には丹塗りが残っており、口縁上端から外面にかけては剥落している。口縁径は打ち欠きの状態で、30.2cm。

123 は外面にミガキと丹塗りの痕跡が部分的に残る。底部の径は 16.4cm。

124 は外面の上半部に比較的良好にミガキの痕跡が残り、丹塗りが施される。底部径は 18.4cm。

125 は外面にミガキを行い、丹塗りを外面から裾部の内面にかけて施す。底部の復元径は 10.6cm。

126 は外面にミガキを行い、丹塗りを外面から裾部の内面にかけて施す。底部の径は 11cm。

127 は外面にミガキを施す。底部の径は 15.8cm。

128 ~ 135 は蓋である。

128 はほぼ完形で、外面に丹塗りが施される。2 つを 1 組とした穴が対角線上の 2 ヶ所に穿たれており、径は 11cm。

129 は完形で、外面にミガキと丹塗りが施される。2 つを 1 組とした穴が対角線上の 2 ヶ所に穿たれており、径は 12.5cm。

130 は完形で、外面に丹塗りが施される。2 つを 1 組とした穴が対角線上の 2 ヶ所に穿たれており、径は 11.8cm。

133 ~ 135 は外面にハケ目が残る。134 の径は 26.6cm。

136 ~ 157 は壺または甕の底部である。

140 は底部に焼成後の穿孔と思われる打ち欠きが見られる。外面の底部側面付近から内面にかけて丹塗りを施す。底径は 8.8cm。

142 は外面の底部側面付近から上に丹塗りを施し、内面の底部付近には強いナデに伴って付いたと思われる指頭痕が残る。底部の復元径は 4cm。

143 は外面の底部側面付近から上に丹塗りを施す。底部の復元径は 7.5cm。

144 はやや上げ底で、外面の底部側面付近から上に丹塗りを施す。底径は 7cm。

145 は外面の底部側面付近から上に丹塗りを施す。底径は 7.6cm。

146 は外面の一部に横ミガキが残っており、底部側面付近から上に丹塗りを施す。底径は 7.6cm。

147 は上げ底で、底部側面に縦方向のハケ目が残る。底径は 6cm。

148 は外面に縦ハケを施す。底径は 7cm。

149 は外面に縦方向のハケ目を施した後、ナデ消す。底径は 8.2cm。

150 は上げ底で、底径は 6.6cm。

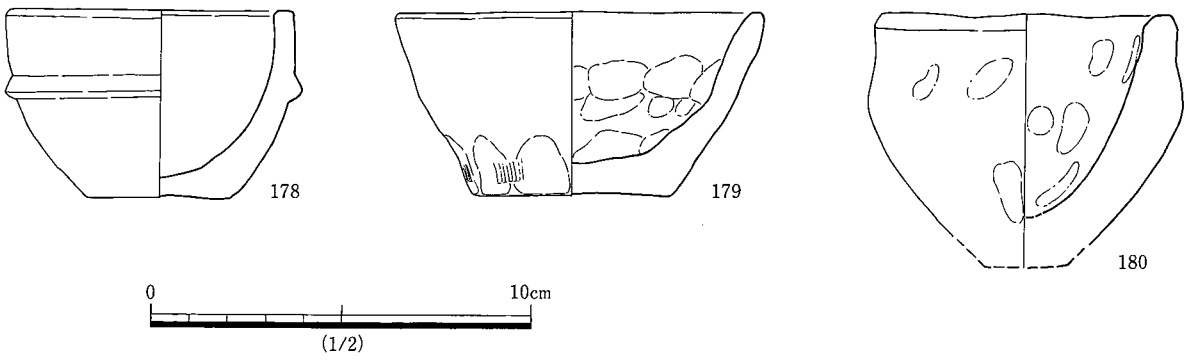
151 は外面に縦ハケが残る。底径は 7.6cm。

152 は内面の底面付近に丹が付着し、外面には縦ハケが残る。やや上げ底で、底径は 8cm。

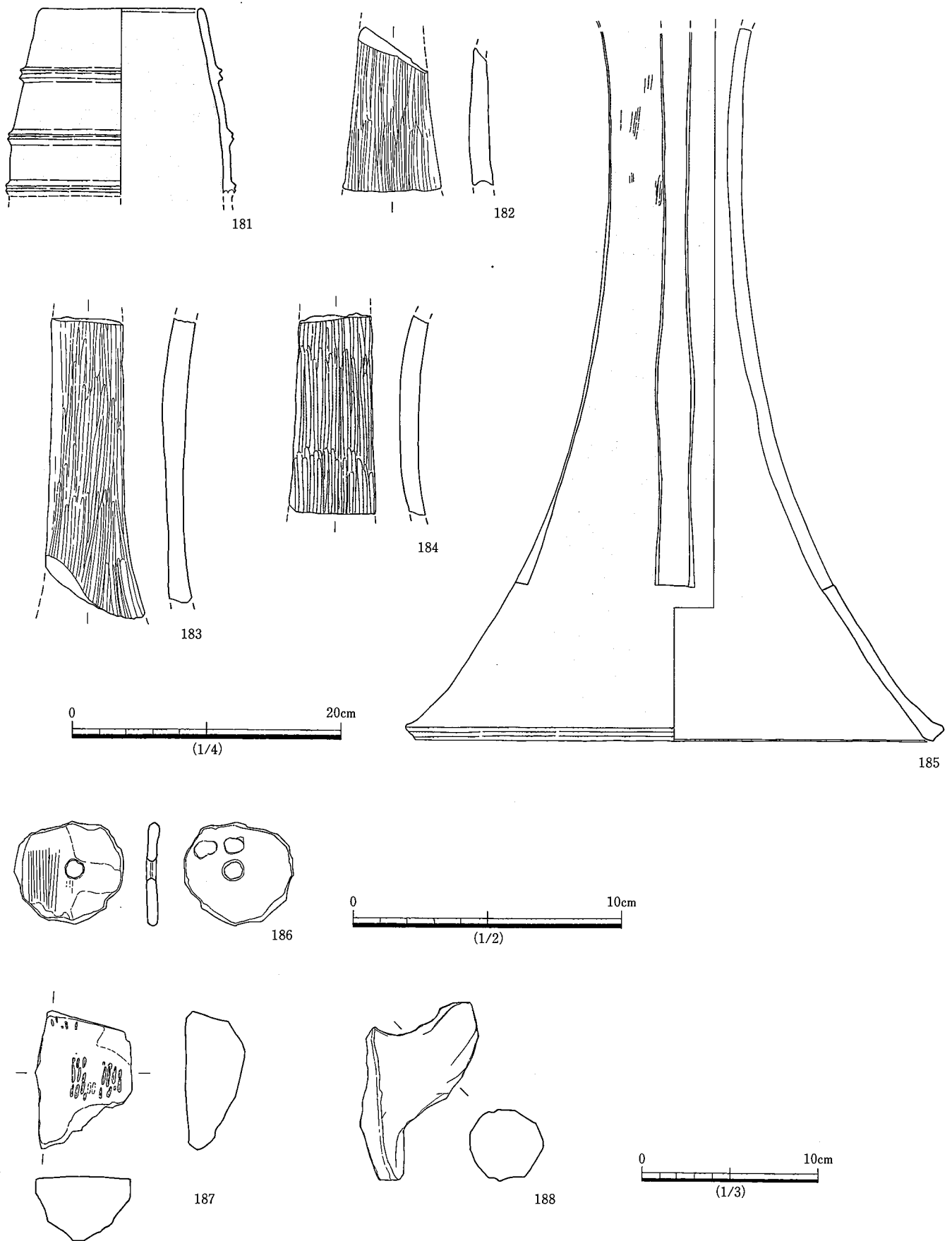
153 は外面に縦方向のハケ目を施した後、底面に近い所をナデ消す。底径は 10.6cm。

154 は底部側面に縦ハケが残る。底径は 6.6cm。

155 は外面に斜め方向のハケ目が残る。底径は 7.6cm。



第23図 Ⅲ-E区 大溝 A区上層 出土遺物実測図13 (1/2、1/3)



第24図 Ⅲ-E区 大溝 A区上層 出土遺物実測図14 (1/2、1/3、1/4)

156 は外面に斜め方向のハケ目が残る。底径は 9.6cm。

158 は外面に縦ハケを施す。底径は 8.8cm。

159 ～ 164 は器台である。

159 は外面の中央付近に縦ハケが残り、底部付近はナデ消す。底径は 9.3cm。

160 は外面に縦ハケが残り、底部付近はナデ消す。内面には、成形時にできた皺が消しきれずに残る。底径は 10.9cm。

161 は外面に縦ハケが残り、底部付近はナデ消す。底径は 10.5cm。

162 は外面に縦ハケが残り、底部付近はナデ消す。底径は 10cm。

163 は外面に縦ハケが残り、底部付近はナデ消す。底径は 9.6cm。

164 は外面の一部に縦ハケが残り、口縁部および底部付近は横方向のナデを行う。口縁径は 11.2cm、底部の復元径は 14.2cm、器高は 17.5cm。

165 ～ 177 は支脚である。手捏ねであるため、内外に多くの指頭痕が残る。胎土は他の器形のものとは異なり、黒、金、白雲母を多く含む。

165 は底部付近のみで、底部の復元径は 8.2cm。

166 は中空で、外形はまっすぐに立ち上がる筒形を呈する。底径 6.7cm。

167 は中空で、裾が少し広がる。底径 9cm。

168 は裾が大きく外へ広がる。底部の復元径 9.5cm。

169 は裾が大きく広がる。中空でない可能性が高い。底部の復元径 10.2cm。

170 は裾が少し外側へ広がる。底径 8.6cm。

171 は裾が少し広がり、底面は刳り込みなどが無く、平坦である。底径 8.8cm。

172 は完形である。口縁部と裾部の広がり少なく、筒形を呈しており、中空となる。口縁径 7.2cm、底径 7.8cm、器高 13.9cm。

173 は完形である。口縁部と裾部の広がり少なく、筒形を呈しているが、中空でない。口縁径

6.6cm、底径 8.5cm、器高 12.9cm。

174 は裾が若干広がるが、筒形に近い。底径 7.2cm。

175 は完形で、底部と口縁部が外側に広がり、中空である。口縁径 7cm、底径 8.3cm、器高 14.2cm。

176 は完形で、底部から口縁部に向けてすぼまる。口縁径 5.5cm、底径 9cm、器高 13.6cm。

177 は完形である。口縁部と裾部の広がり少なく、筒形を呈しており、中空となる。口縁径 7.5cm、底径 7.9cm、器高 14.1cm。

178 はミニチュアの鉢で、完形。胴部中位に三角突帯を 1 条巡らせており、内外面ともナデによる丁寧な仕上げを行う。口縁径 7.5cm、器高 5cm。

179 はミニチュアの鉢で、ほぼ完形である。内面に指頭痕が多く残り、外面の底部側面付近にハケ目と指頭痕が残る。口縁径 9.6cm、器高 4.8cm。

180 はミニチュアの鉢で、内外面共に指頭痕が多く残る。焼きが悪く、胎土も粗いため全体的に粗雑なイメージを受ける。口縁の復元径は 7.5cm。

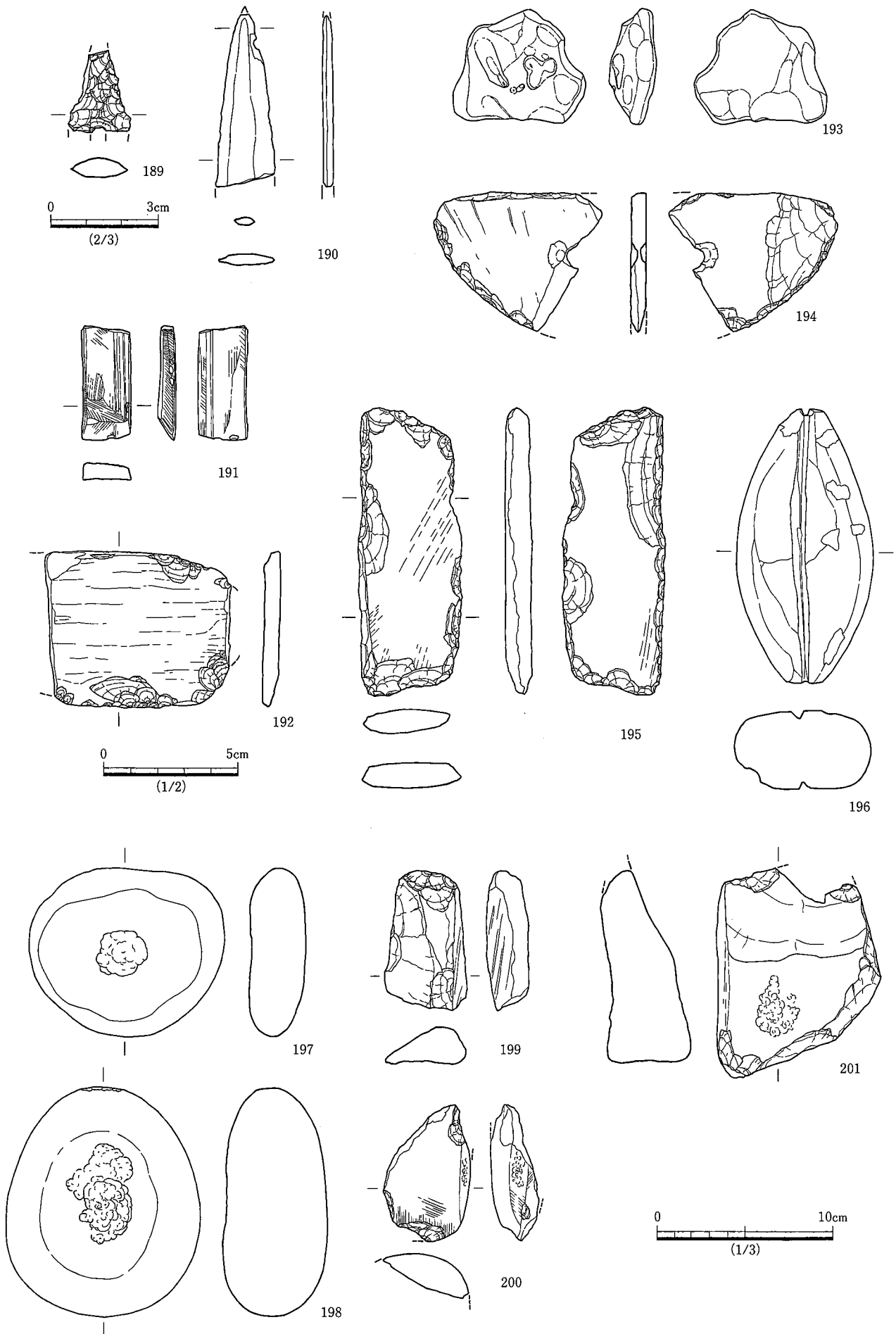
181 は壺で、脚台が付く可能性がある。3 段の M 字突帯が巡り、内外面とも丹塗りを施す。このうち、外面の丹塗りの上には一部分黒色の顔料を塗った痕跡が残っており、かつては赤と黒の 2 色によって構成されていたと思われる。口縁の復元径は 12cm。

182 ～ 185 は透かし入りの筒形器台である。

182 ～ 183 はいずれも左右の透かしに当たる部分をヘラ切りによって面取り調整する。表面は縦方向のミガキが丁寧に施されており、184 には丹塗りの痕跡が残る。

185 は裾部から脚部の上位までを復元したもので、10 個の破片に分かれていた。出土状態が特異で、A 区上層出土の破片と、D 区出土の破片が復元段階で接合し、同一個体であることが分かった。この 2 地点はおよそ 10 m 離れており、自然に分かれて堆積したとは考え難いため、人為的に分けて投棄した可能性があると思われる。底面の復元径 40cm。

186 は土器片を打ち欠いて再生した紡錘車であ



第25図 Ⅲ-E区 大溝 A区上層 出土遺物実測図15 (2/3、1/2、1/3)

る。径 4.1cm × 3.9cm、孔径 6.5mm。

187 は素焼きの瓦で、表面に平行タタキが残り、裏面については欠損している。

188 は甑の把手である。

187 と 188 については時代が下るため、他の遺構からの流れ込みと考えられる。

189 は凹基式の石鏃で、先端部と両脚部を失う。サヌカイト製。長さ 2.4cm、幅 1.8cm、厚さ 6mm、重量 1.92g。

190 は石剣の切先部分と考えられ、表裏面とも風化が著しく、調整が確認できない。また、先端部を失う。頁岩製。長さ 6.5cm、幅 2.2cm、厚さ 3.3mm、重量 7.15g。

191 は扁平片刃石斧で、基部が失われる。表裏面に二次的に付いた縦方向の筋と擦痕があり、砥石として再利用された可能性がある。粘板岩製。長さ 4.3cm、幅 1.8cm、厚さ 6.5mm、重量 9.21g。

192 は石庖丁の未成品と考えられる。安山岩製。長さ 5.9cm、幅 6.8cm、厚さ 6mm、重量 59.72g。

193 は顔を表現したと思われる石製品で、表面に目や鼻と思われる窪みがある。裏面は赤変しており、火を受けた可能性がある。砂岩製。長さ 4.3cm、幅 5.1cm、厚さ 1.8cm、重量 38.62g。

194 は石庖丁の未成品である。穿孔途中で折損しており、孔は貫通しておらず、表裏面や周囲は調整剥離や敲打の段階で終わっている。凝灰岩製。長さ 5.3cm、幅 6.4cm、厚さ 6mm、重量 26.17g。

195 は石鎌または石庖丁の未成品と考えられる。安山岩製。長さ 10.9cm、幅 3.9cm、厚さ 1.0cm、重量 67.89g。

196 は石錘で、長軸に沿って 1 条の溝が刻まれる。滑石製。長さ 10.4cm、幅 5.2cm、厚さ 3.0cm、重量 231.46g。

197 と 198 は磨石である。197 は凝灰岩製で、長さ 9.45cm、幅 10.8cm、厚さ 3.6cm、重量 486.30g。

198 は片麻岩製で、長さ 12.9cm、幅 10.9cm、厚さ 5.9cm、重量 1275.48g。

199 と 200 は石斧である。199 は表面が 1 面残るものの他の面は剥離する。凝灰岩製。長さ 7.8cm、幅 4.6cm、厚さ 1.9cm、重量 114.64g。200 は表面が 2 面残る。玄武岩製。長さ 7.3cm、幅 4.8cm、厚さ 2.2cm、重量 85.01g。

201 は砥石で、研磨痕の他に敲打痕も残る。砂岩製。長さ 10.9cm、幅 9.3cm、厚さ 4.6cm、重量 563.82g

大溝 A 区下層出土遺物 (第 26、27 図) (図版 15)

1、2、5～14 は甕である。

1 は口縁部付近で、2ヶ所の穿孔が残る。調整は器面の状態が悪く不明。口縁部の復元径は 20cm。

2 は外面から口縁部の上端付近にかけて丹塗りを施す。内面にナデに伴う指頭痕が残る。口縁部の復元径は 16.4cm。

3、4 は広口壺の口縁部で、いずれも内外面に丹塗りをを行う。4 は外面の口縁部下に 2 本を 1 単位とした暗文を縦方向に施す。口縁部の復元径は 3 は 37.6cm、4 は 35.8cm。

5 は口縁部の下に 1 条の三角突帯を巡らせ、この下は横ナデを行う。口縁部の復元径は 30.8cm。

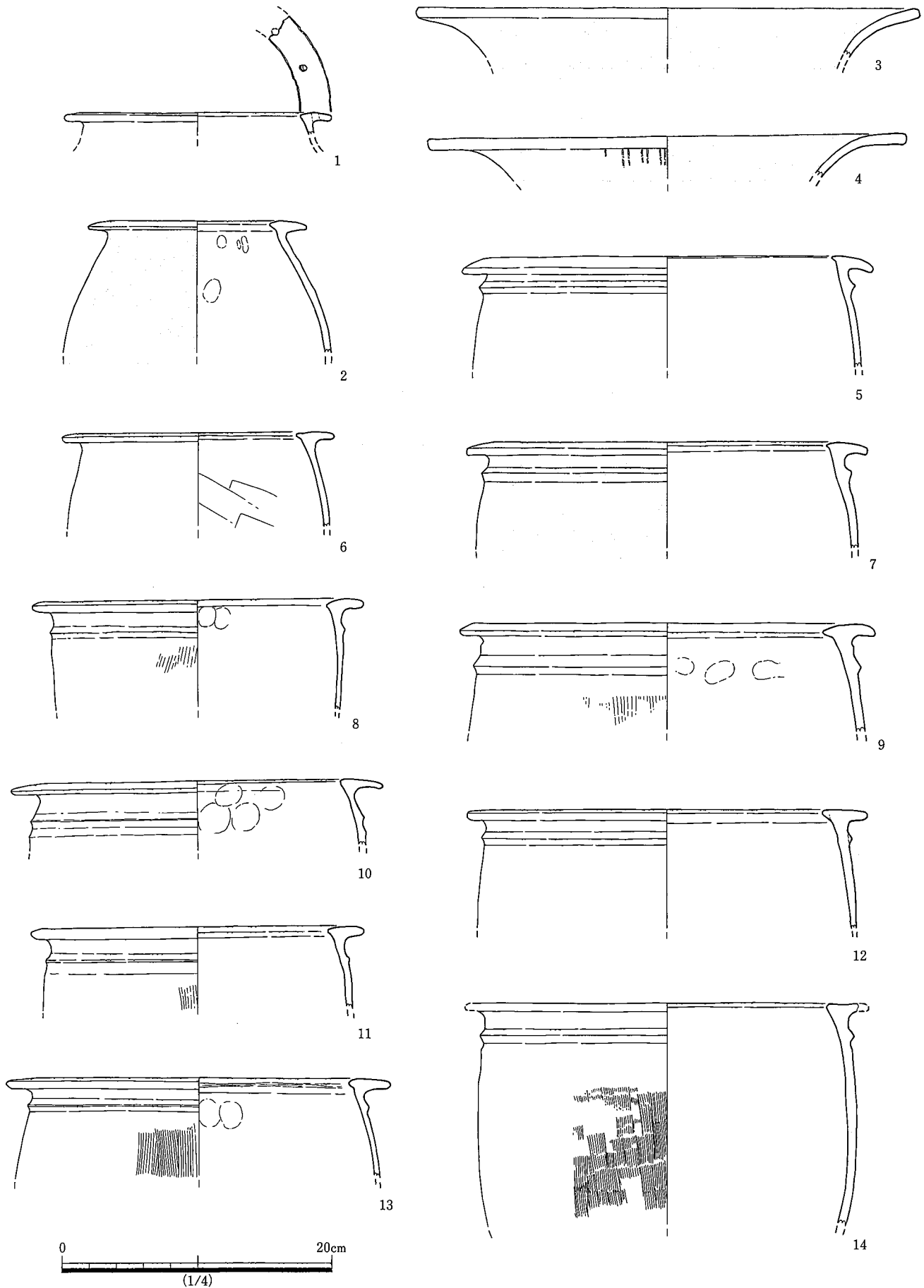
6 は内面に強いナデを行う。口縁部の復元径は 20.2cm。

7 は口縁部下に 1 条の三角突帯を巡らせる。丹塗りが口縁部上端に残っており、他は剥落しているが、かつては外面にかけて施されていたと考えられる。口縁部の復元径は 30.2cm。

8 は口縁部下に低く細い三角突帯を 1 条巡らせており、この下には縦方向のハケ目が残る。口縁部の復元径は 24.6cm。

9 は口縁部下に低くならかな三角突帯を 1 条巡らせており、この下には縦方向のハケ目が残る。口縁部の復元径は 31.2cm。

10 は口縁部下に低くならかな三角突帯を 1 条巡らせており、直下には突帯を貼付した時についたナデの痕跡がはっきりと残る。また、これより



第 26 図 Ⅲ-E 区 大溝 A 区下層 出土遺物実測図 1 (1/4)

下には縦方向のハケ目が残る。口縁部の復元径は27.8cm。

11は口縁部下に低く細い三角突帯を1条巡らせており、この下には縦方向のハケ目が残る。口縁部の復元径は24.8cm。

12は口縁部下に低く細い三角突帯を1条巡らせる。内外面共に器面の状態が悪く、調整は不明。口縁部の復元径は30cm。

13は口縁部下に低くなだらかな三角突帯を1条巡らせており、この下には縦方向のハケ目が残る。口縁部の復元径は28.6cm。

14は口縁部下に三角突帯を1条巡らせており、この下には縦方向のハケ目が残る。内外面とも、ハケ目の高さ付近まで2次焼成に係わると思われるススが付着する。口縁部の復元径は30.2cm。

15は高坏である。坏部の内面に丹塗りの痕跡が残る。外面は全体的に大きく表面が剥離しており、

内部の粘土構造がみえる。特に、脚部には粘土を反時計回りにねじって成形した痕跡が観察できる。

16～21は壺または甕の底部である。

16は底部付近しか残っていないが、やや上げ底である。底部の復元径は7.8cm。

17は外面の底部側面付近から上へ向かって丹塗りの痕跡が残る。底径は5.4cm。

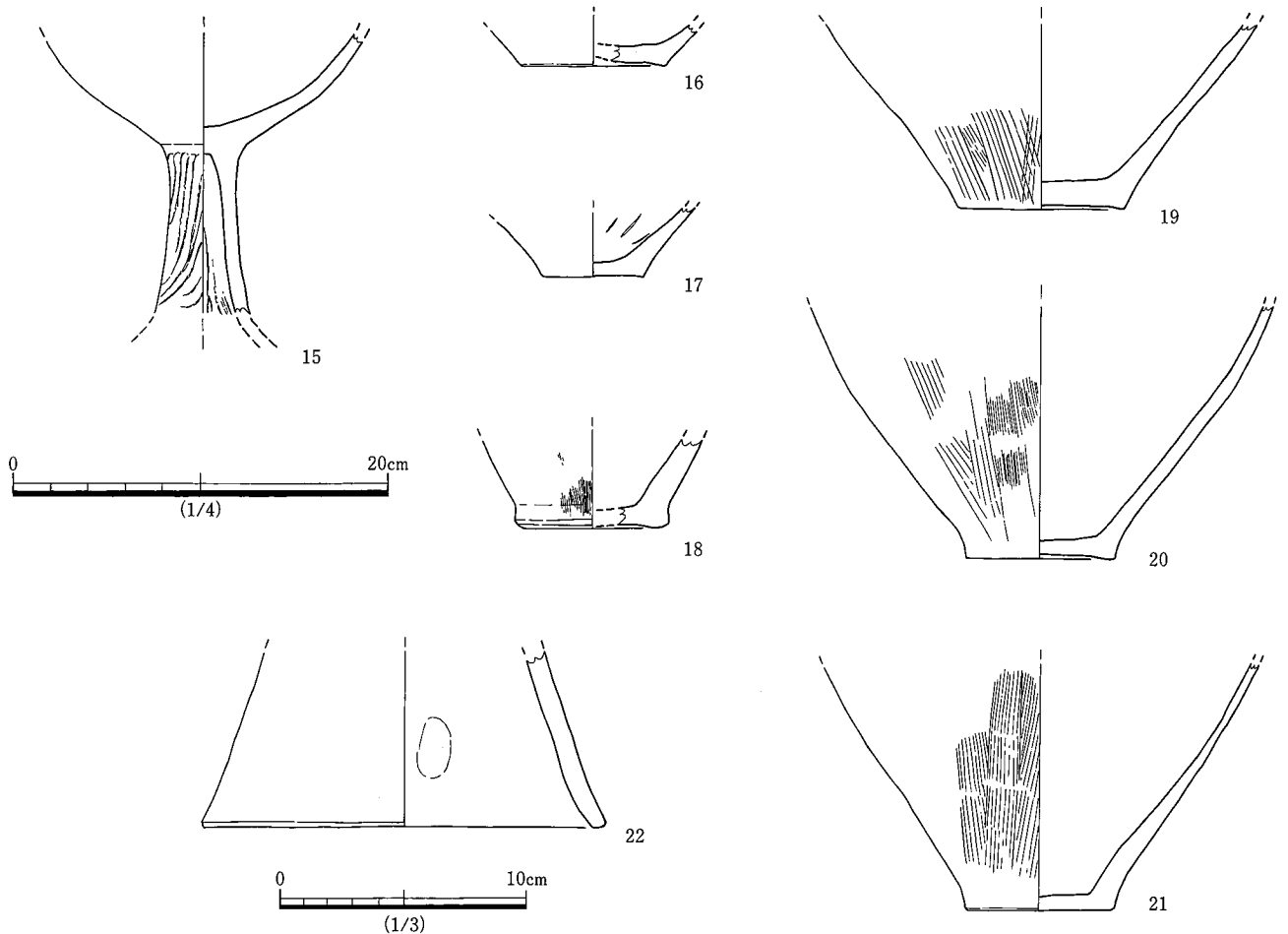
18は底部側面に縦ハケが残る。底径は7.4cm。

19はやや上げ底で、底部側面に縦ハケが残る。底径は9cm。

20はやや上げ底で、底部側面付近から上へ向かって縦ハケが残る。底径は8cm。

21は外面に縦ハケが残る。底径は7.8cm。

22は器台の裾部で、器面の状態が悪くはっきりとしないが、外面に縦ハケがうっすらとみえる。底径16.2cm。



第27図 III-E区 大溝 A区下層 出土遺物実測図2 (1/3、1/4)

大溝 B 区上層出土遺物 (第 28 ~ 31 図) (図版 15、16)

1 ~ 10 は壺である。

1 は内外面に丹塗りを施す。外面の口縁部の下には横方向に強いナデを行った痕跡が残り、内面には粘土の接合痕が観察できる。口縁部の復元径は 12cm。

2 は内傾する逆 L 字突帯を呈し、内外面ともにナデ仕上げを行う。口縁部の復元径は 12.1cm。

3 は口縁部上端から下端まで斜め方向に抜ける穿孔が一ヶ所残る。口縁部の復元径は 14cm。

4 は袋状の口縁を呈しており、内外面共にナデ仕上げを行った後に、外面から口縁内面にかけて丹塗りを施す。口縁部の復元径は 12cm。

5 は袋状の口縁を呈しており、外面から口縁部の内側にかけて丹塗りを施す。風化により器面の状態が悪く、調整は観察できないが、口縁部付近はナデ、これ以下の外面はナデまたはミガキによる仕上げを行っていると思われる。口縁部の復元径は 13cm。

6 は口縁が内傾し、外面から口縁部上端にかけて丹塗りを施す。口縁部の復元径は 18cm。

7 は外面から口縁部上端にかけて丹塗りを施しており、内面にはナデによって付いたと考えられる指頭痕が多く残る。口縁部の復元径は 16.4cm。

8 は口縁端部に縦方向のキザミ目を施す。丹塗りの痕跡が口縁部上端のみに残っているが、かつては外面にかけても施されていたものと思われる。口縁部の復元径は 22cm。

9 は発達した T 字口縁を呈している。口縁部の復元径は 29.8cm。

10 は外面の口縁付近から内面にかけて丹塗りの痕跡が残る。丹塗りの残っていない口縁部下の外面もかつては丹塗りが行われていたと思われる。口縁部の復元径は 30.6cm。

11 ~ 23 は甕であり、ほとんどが破片資料である。

11 は外面から口縁部上端にかけて丹塗りを施す。内外面共に器面の状態は悪い。口縁部の復元径は 20cm。

12 は内外面共にナデ仕上げを行っており、口縁部付け根のくびれ部を強く押さえる。口縁部の復元径は 20cm。

13 は口縁部の下に低くなだらかな三角突帯を 1 条巡らせる。全体的にナデによる仕上げを行っており、突帯下においては横方向のナデを行う。口縁部の復元径は 24cm。

14 は内外面共にナデ仕上げを施しており、口縁部付け根のくびれ部を強く押さえる。口縁部の復元径は 24cm。

15 は外面に縦ハケを施しており、口縁部下ではこれをナデ消す。口縁部から内面にかけてはナデ仕上げを行う。口縁部の復元径は 25.8cm。

16 は口縁部の下に三角突帯を巡らせ、内面には強い横ナデの痕跡と指頭痕が残る。突帯下の調整については、器面が剥落しており観察できない。口縁部の復元径は 26.4cm。

17 は外面に縦ハケを施しており、口縁部の下はこれをナデ消す。また、口縁部から内面にかけてはナデ仕上げを行う。口縁部の復元径は 26.3cm。

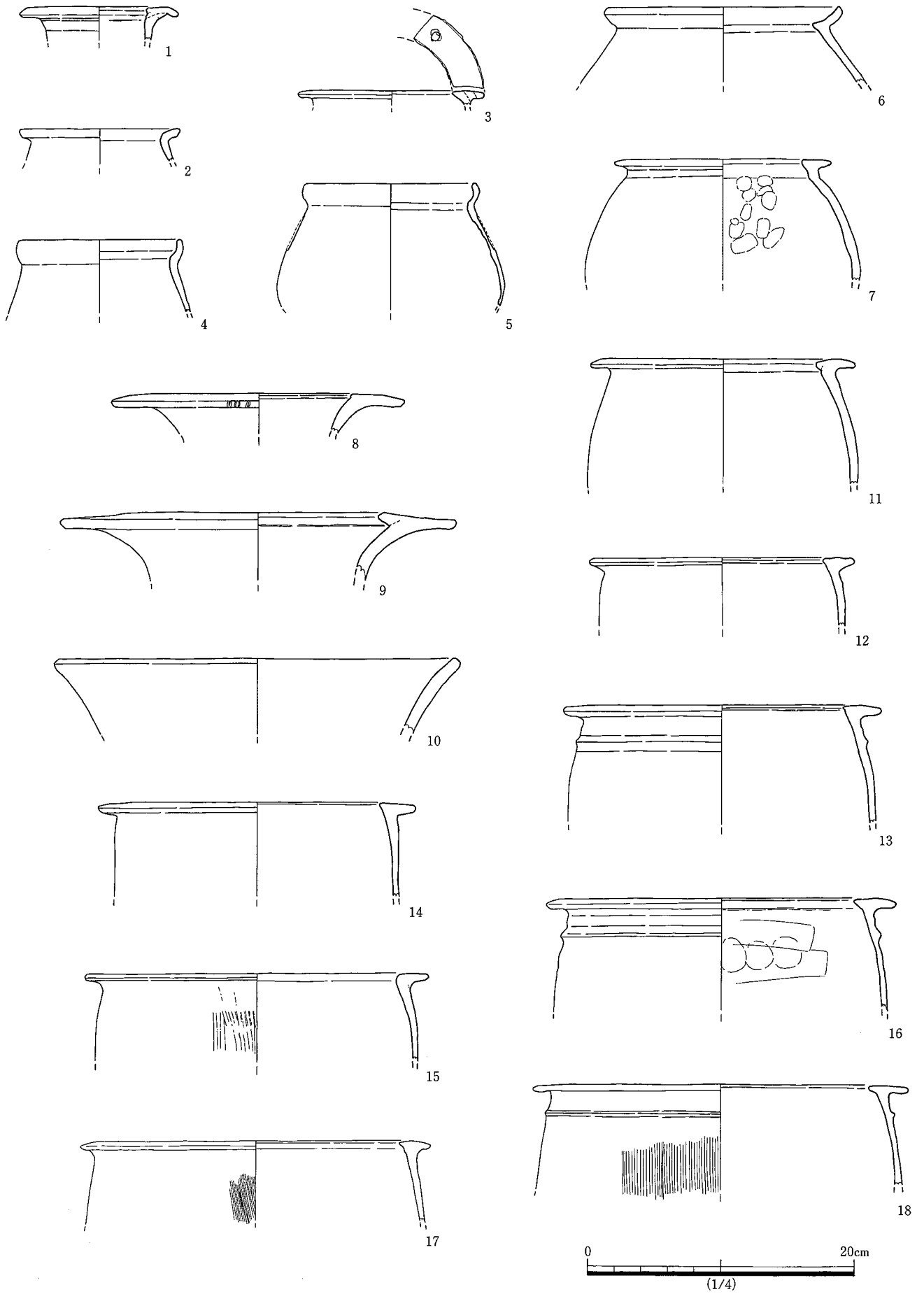
18 は口縁部の下に低い細い三角突帯を巡らせており、この下に縦方向のハケ目が残る。口縁部の復元径は 28.4cm。

19 は口縁部のすぐ下に低くなだらかな三角突帯を巡らせており、内外面ともナデ仕上げを行う。口縁部の復元径は 28.6cm。

20 は口縁部の下に低くなだらかな三角突帯を巡らせる。外面には縦ハケが残るが、突帯の下ではナデ消す。口縁部の内側には粘土紐の接合部分がみられ、体部外面から口縁部付近にかけて 2 次焼成に係わると考えられるススが付着する。口縁部の復元径は 28cm。

21 は口縁部の下に低くなだらかな三角突帯を巡らせる。外面には縦ハケが残るが、突帯の下では荒いナデ消しを行っており、ハケ目が部分的にみられる。体部外面の下半部分には 2 次焼成に係わると考えられるススが付着する。口縁部の復元径は 29cm。

調査の記録



第28図 Ⅲ-E区 大溝 B区上層 出土遺物実測図1 (1/4)

22 は口縁部の下に三角突帯を巡らせ、外面には縦ハケが残る。体部外面から口縁端部付近にかけては2次焼成に係わると考えられるススが付着する。口縁部の復元径は30cm。

23 は大きく内傾する口縁部をもち、口縁部の付け根に三角突帯を巡らせる。体部外面には縦ハケが残っており、突帯の下から内面にかけてはナデ仕上げを施す。口縁部の復元径は37.6cm。

24 は鉢である。内面に丹塗りが施されており、外面は器面の状態が悪く不明である。口縁部の復元径は18cm。

25 ～ 32 は高坏である。

25 は外面から口縁部上端にかけて丹塗りを施す。口縁部は外側に大きく張り出すT字形で、やや外傾し、径は30cm。

26 は口縁の下に低くならかな突帯を1条巡らせる。口縁上端から内面にかけて丹塗りが残り、口縁端部から外面にかけては剥落した可能性がある。口縁部の復元径は30cm。

27 は口縁の下に三角突帯を1条巡らせる。内外面共に丹塗りを施していたと考えられるが、突帯と口縁部の間は風化により残りが悪い。口縁部は大きく外側へ張り出す逆L字形で、復元径は36cm。

28 は口縁部の下に三角突帯を1条巡らせ、内外面共に丹塗りを施す。口縁部は外側へ大きく張り出すL字形で、復元径は35cm。

29 は口縁部の下に低く細い突帯を1条巡らせる。内外面共に丹塗りを施していたと考えられるが、口縁端部から外面にかけては風化によるものか残りが悪い。口縁部は外側へ大きく張り出す逆L字形で、外傾しており、打ち欠きを行っている可能性がある。口縁部の復元径は36cm。

30 は坏部と脚部で、坏の付け根から若干下がった位置に、M字突帯を1条巡らせる。外面は器面の状態が悪く、調整などは不明であるが、内面には成形時のものと思われる粘土の皸が残される。

31 は裾部の2ヶ所に円形の透かしが入る。調整

は器面の状態が悪く、不明。

32 は内面の上部に赤色顔料らしきものが付着しているものの、他の場所には残っておらず、丹塗りの有無は不明。底部の復元径は14cm。

33 ～ 35 は蓋である。33 は内外とも器面の状態が悪く、調整は確認できない。復元径28cm。34 は内外面共にナデ仕上げである。35 は内外面共にナデ仕上げである。径16.2cm。

36 ～ 45 は壺または甕の底部である。

36 は底部側面から上方の外面に丹塗りを施す。やや上げ底で径は6.6cm。

37 はやや上げ底で、径は6.6cm。

38 は底部付近で少しくびれる。底部径は8.2cm。

39 は縦方向のミガキが部分的に残る。やや上げ底で、径は7.8cm。

40 は底面の器壁が薄い。底部径は6.2cm。

41 は外面から底部下面にかけて丹塗りを施す。やや上げ底で、復元径は8cm。

42 の底部の復元径は9cm。

43 は底部付近でくびれる。外面に縦ハケが残っており、内面にはナデを行った時に付いた指頭痕が横に並んで残る。底部径は7.6cm。

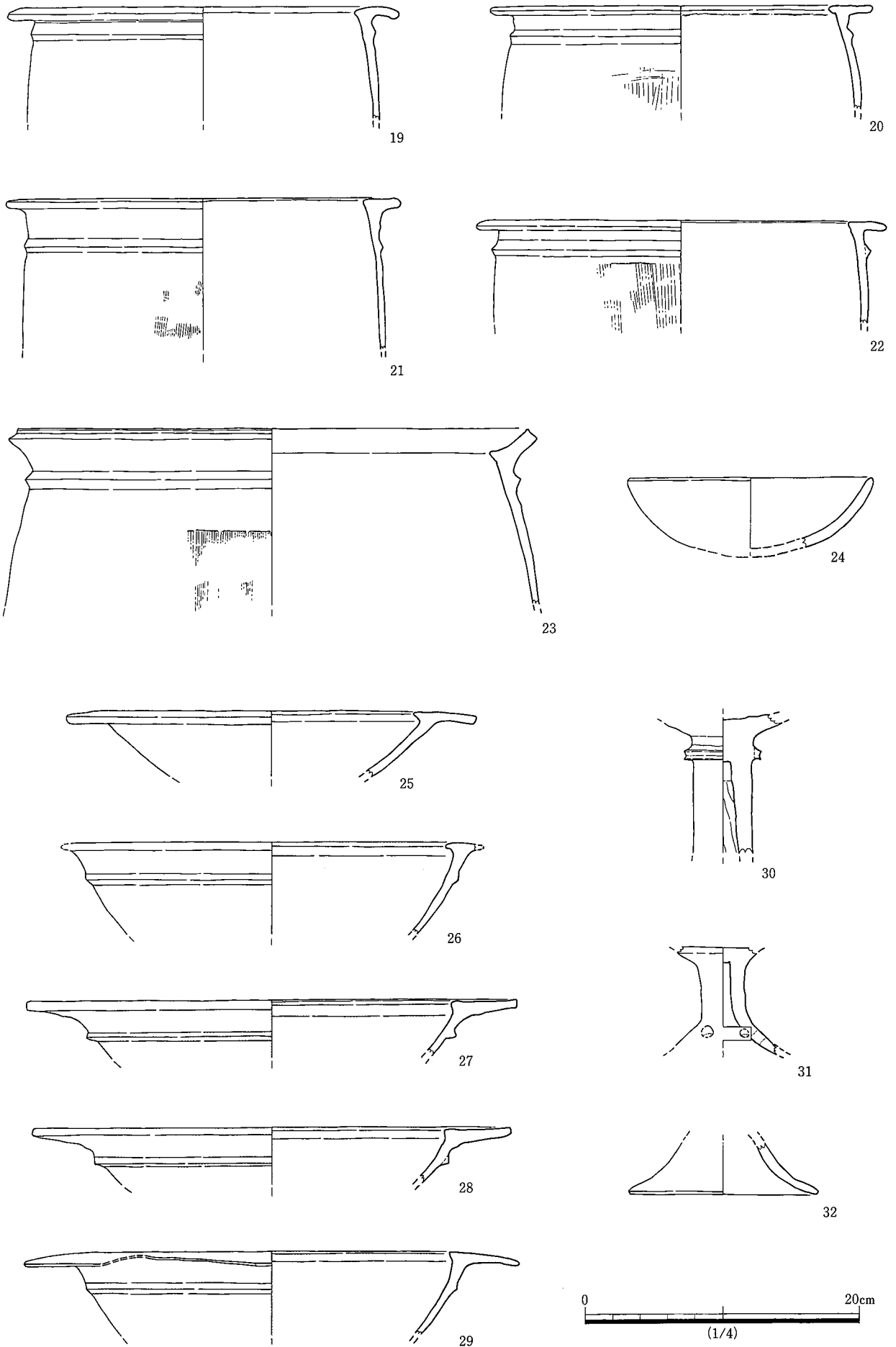
44 は外面に縦方向のハケ目が残る。底面の器壁は若干、薄めで、径は7cm。

45 は外面に縦方向のハケ目が残る。やや上げ底で、径は7.8cm。

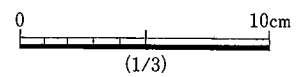
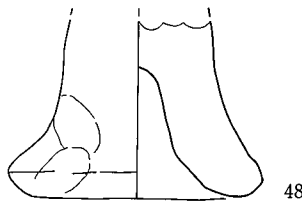
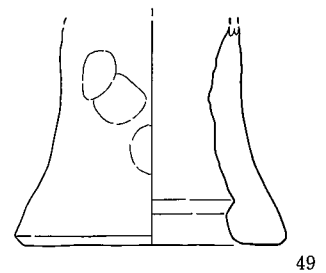
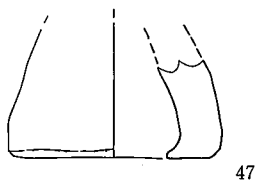
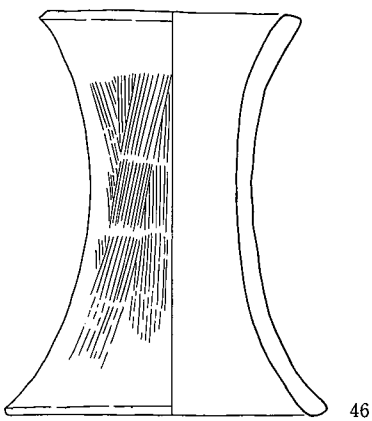
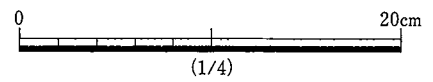
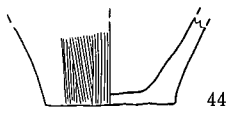
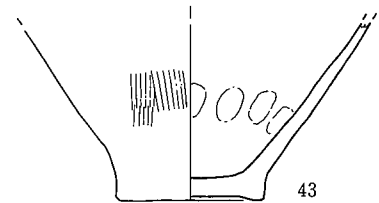
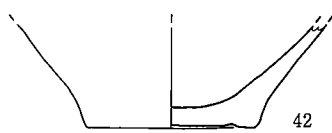
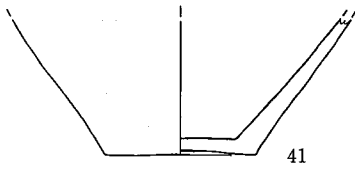
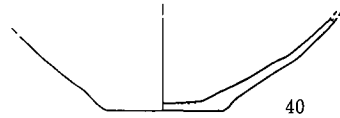
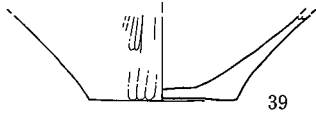
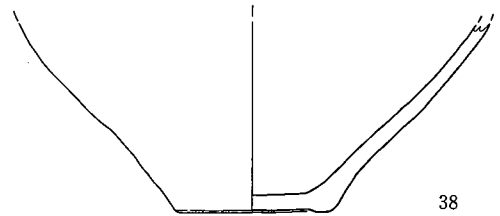
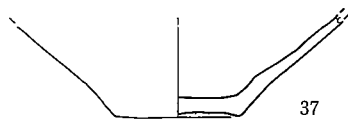
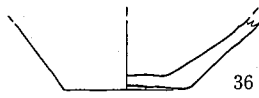
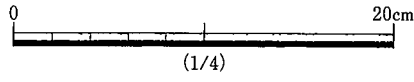
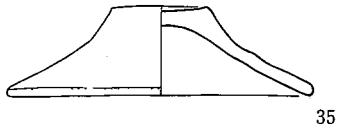
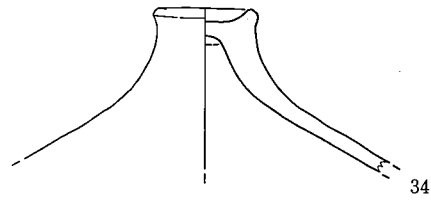
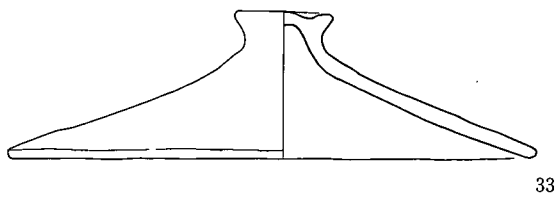
46 は器台である。口縁部と裾部が大きく外反しており、それぞれの端部は押さえる。外面には縦方向のハケ目が比較的良好に残っており、口縁部と裾部の近くでは横方向のナデのため消えている。口縁部径10.3cm、底部径12.7cm。

47 ～ 49 は支脚で、手捏ねによって成形されているために、器面に多くの指頭痕が残る。

47 は裾部が外側へ開かず内湾しており、端部は内側に張り出す。胎土が粗く、径3mmを超える大きさの長石や石英、黒・白雲母などを大量に含む。底部径8.4cm。



第29図 III-E区 大溝 B区上層 出土遺物実測図2 (1/4)



第30図 Ⅲ-E区 大溝 B区上層 出土遺物実測図3 (1/3、1/4)

48は裾部が底面付近で大きく外に開き、器壁が厚い。胎土は粗く、3mm程度の長石や、2mm程度の金雲母などを多く含む。底部径10.1cm。

49は裾部がやや広がり、内側が、張り出す。胎土が粗く、長石や石英の他に、金雲母を多く含む。底部径10.8cm。

50～57は鉢または壺などである。

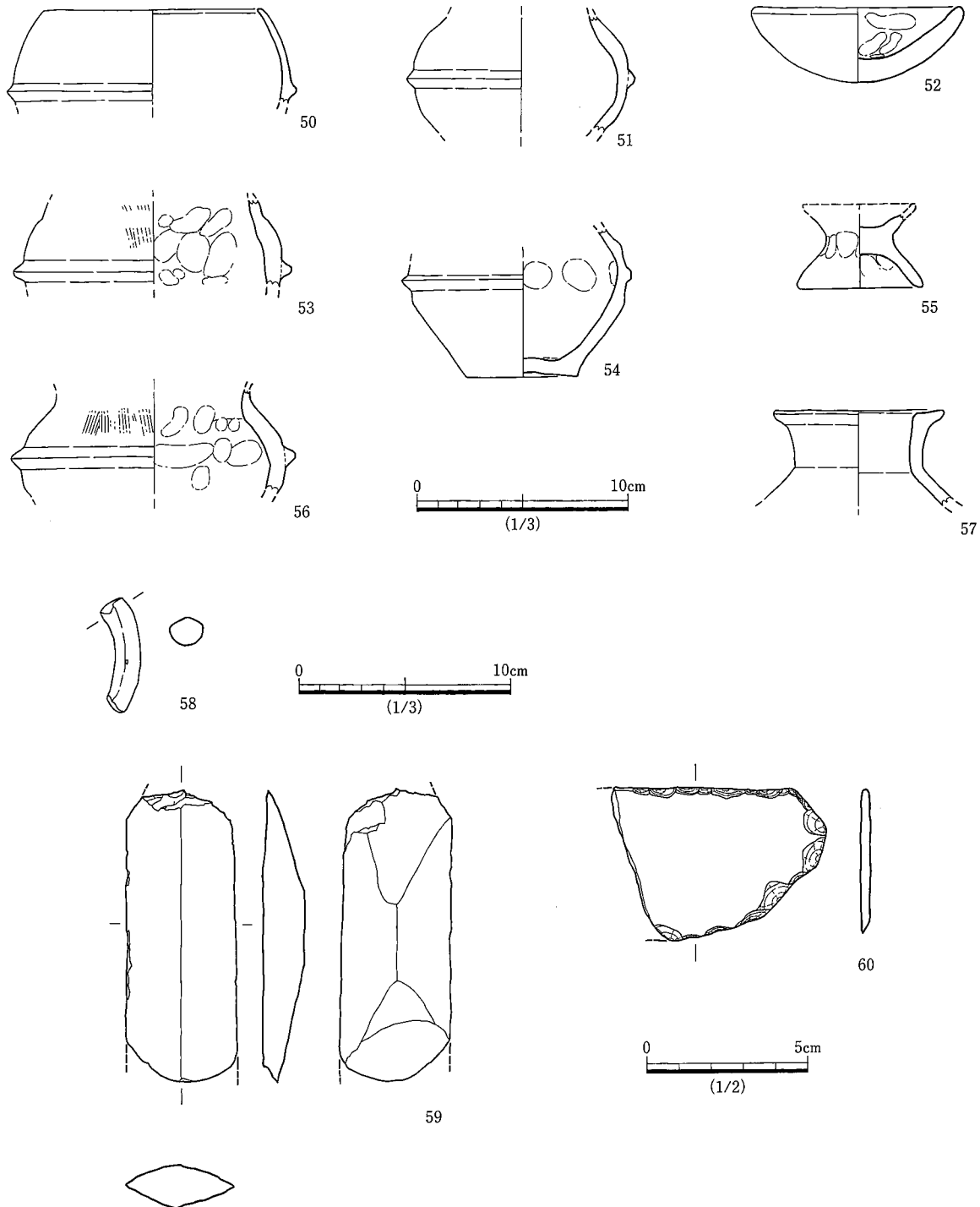
50は胴部中位に三角突帯を1条巡らせ、内外共

ナデ調整を施す。口縁部の復元径は10cm。

51は胴部の中位に三角突帯を1条巡らせる。

52は浅く、扁平な鉢で、手捏ねによって形作られている。器壁が分厚く、胎土は粗く、1mm以下の長石や石英、黒・白雲母を多く含む。焼成は不良であり、支脚と雰囲気が似る。口縁部の復元径は9.9cm。器高は3.6cm。

53は胴部の中位に三角突帯を1条巡らせる。外



第31図 Ⅲ-E区 大溝 B区上層 出土遺物実測図4 (1/2, 1/3)

面はハケの後、ナデ消しを行うが、一部、縦方向のハケ目が消されずに残る。内面はナデを行うが、指頭痕が多く残る。

54 は上部が失われる。胴部の中央に1条の突帯を巡らせている。内外面共にナデを施しており、内面には指頭痕が残る。底部はやや上げ底で、径は5.2cm。

55 は手捏ねで、器台を象ったものであろうか。底部の復元径は6cm。

56 は胴部の中位に突帯を1条巡らせる。外面の突帯より上位には縦方向のハケ目が残る。また、内面にはナデに伴うと思われる指頭痕がみられる。

57 は内外面共に器面の状態が悪く、調整はみられないが、ナデを施すものと思われる。口縁部の復元径は8cm。

58 は把手で、丹塗りが施される。断面の径は1.6cm × 1.3cm。

59 は石剣で、先端と基部の両端が失われる。硬質砂岩製。長さ9.2cm、幅3.4cm、厚さ1.3cm、重量58.02g

60 は石庖丁で、表裏面とも研磨の痕跡がない。凝灰岩製。長さ4.7cm、幅6.5cm、厚さ3mm、重量18.48g。

大溝 C 区上層出土遺物 (第32～34 図) (図版16、17)

1～17 は壺である。

1 は袋状口縁で、内外面共に丹塗りであるが、外面の中位付近が剥落する。口縁部の復元径8.6cm。

2 は口縁部付近しか残っていないが、かつては玉葱形に胴部が張る形状であったと思われる。口縁部の復元径5.4cm。

3 は直口壺の口縁部で、口縁端部を強めに押さえて面取りする。口縁部の復元径は13cm。

4 は胴部の中位付近に低く、稜のあまい三角突帯を1条巡らし、この上に、4条のヘラ描き沈線を縦方向に施す。内面はナデを行っており、頸部の付け根付近に成形時に付いたと思われる指頭痕が残る。

胴部の復元径は21.4cm。

5 は口縁部から頸部にかけて、ヘラを軽く横に押し当てて引いた暗文が縦方向に入る。この付近は表面が黒くなっている部分があり、黒色の顔料を塗布した可能性がある。また、胴部中位には低く、稜のあまい突帯が1条巡っている。口縁径は16.5cm。

6 は内外面共に丹塗りを施すが、外面の一部で、器面ごと剥落する。口縁部の復元径は16.4cm。

7 は外面から内面の上部付近まで丹塗りを施す。口縁部の復元径は16cm。

8 は口縁部が緩やかな逆L字形を呈しており、やや内傾する。口縁部上端から下端に向かう穿孔が1ヶ所のみ残る。口縁部の復元径は14cm。

9 は外面から口縁部の下端にかけて丹塗りが残るが、他の箇所については剥落しており、不明。口縁部の復元径は20.2cm。

10 は口縁部の上端から外面にかけて丹塗りが施される。内面や口縁部の端部などが風化により剥離または欠損する。口縁部の復元径は15.8cm。

11 は、口縁上端に丹塗りが残存しており、ここから下端へやや斜め方向に抜ける穿孔が2ヶ所残る。口縁部の形態は外側に向かって発達した逆L字形で、復元径は20cm。

12 は肩部が大きく張り出す。内外面ともナデ仕上げを施しており、口縁端部と頸部を強く押さえる。口縁部の復元径は38.6cm。

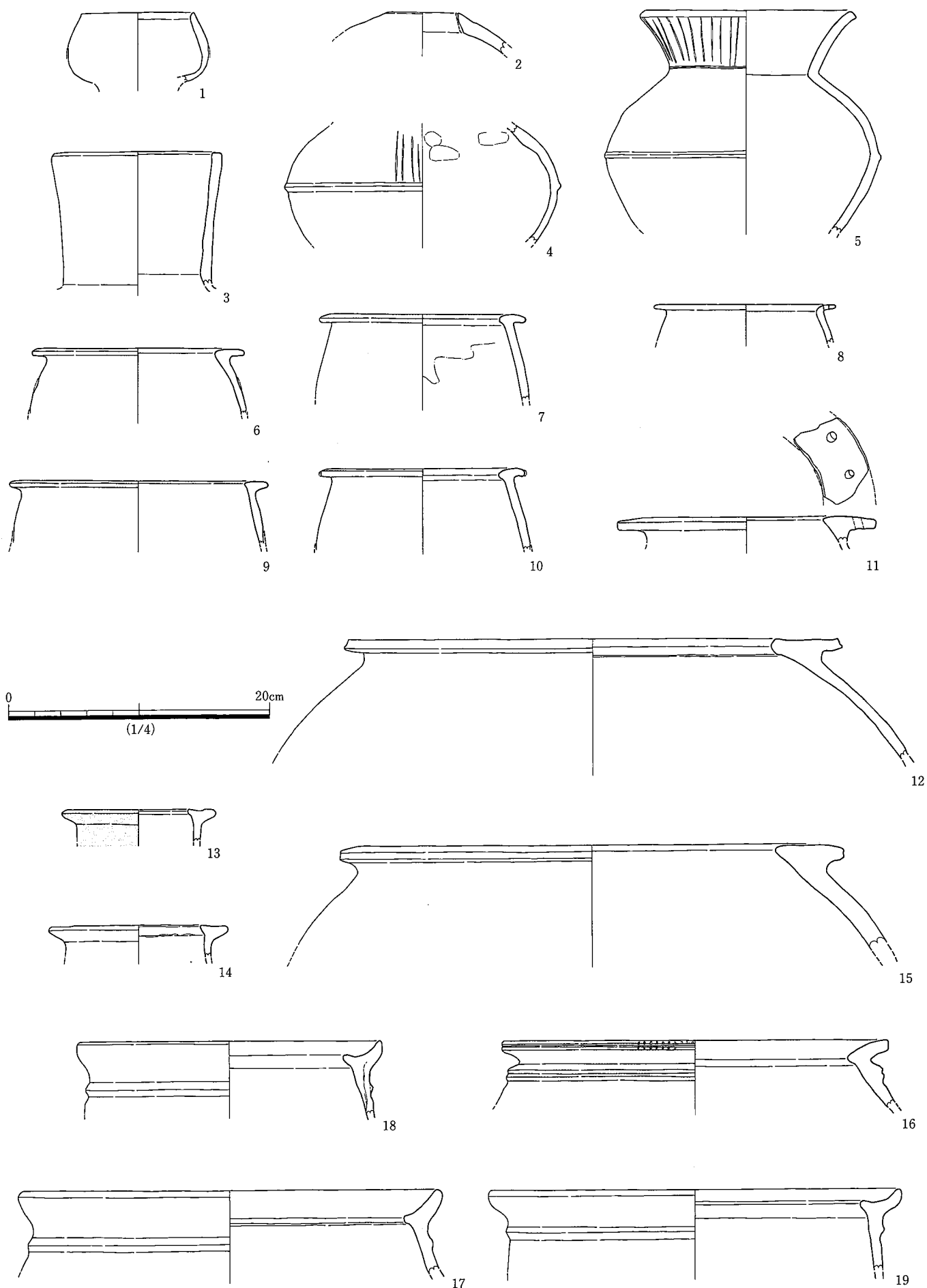
13 は外面から口縁上端にかけて黒色の顔料を塗布している可能性がある。全体的にナデ仕上げで、口縁上端は押さえる。口縁部の復元径は12cm。

14 は全体的にナデ仕上げを施す。口縁部の復元径は14cm。

15 は12と同様、肩部が大きく張り出す形態で、口縁端部を押さえており、器壁は厚い。口縁部の復元径は39cm。

16 は口縁部が大きく内傾しており、端部には縦方向のキザミ目を施した後に、横方向に1条の沈線が引かれる。口縁部の付け根付近には、幅広のM

調査の記録



第 32 図 Ⅲ-E 区 大溝 C 区上層 出土遺物実測図 1 (1/4)

字突帯が1条巡り、外面から口縁の内側にかけて丹塗りが施される。口縁部の復元径は 29.8cm。

17 は口縁部が大きく内傾しており、口縁部の下に低く、なだらかな1条の三角突帯が巡る。内外面共にナデ仕上げで、口縁部の復元径は 32.8cm。

18、19 は甕である。

18 は口縁上端が内湾しながら内傾しており、口縁部の付け根のやや下に、低くなだらかな三角の突帯が1条巡る。口縁部の復元径は 23.6cm。

19 は口縁上端が内湾しながら内傾しており、口縁部の付け根のやや下に、低くなだらかな三角の突帯が1条巡る。口縁部の復元径は 31.8cm。

20 ~ 22 は甕または壺の底部である。

20 は底部側面から上位にかけて縦ハケが施されており、内面はナデ仕上げを行う。底部の径は 7.4cm。

21 は底部径 4.2cm。

22 は底部側面から上位にかけて縦方向のハケ目が施されており、内面はナデ仕上げを行う。底面の

ほぼ中央付近には焼成後に行われた穿孔がある。孔径 2cm × 1.8cm。底部径 8.2cm。

23 は蓋である。内外面とも器面の状態が悪く、調整は確認できない。復元径は 30cm。

24 は支脚で裾部が大きく広がっており、中空であった可能性がある。手捏ねによって成形されているため、全体に指頭痕が多く残り、胎土は粗く、他の土器と異なり雲母片を多く含む。底部径 10.5cm。

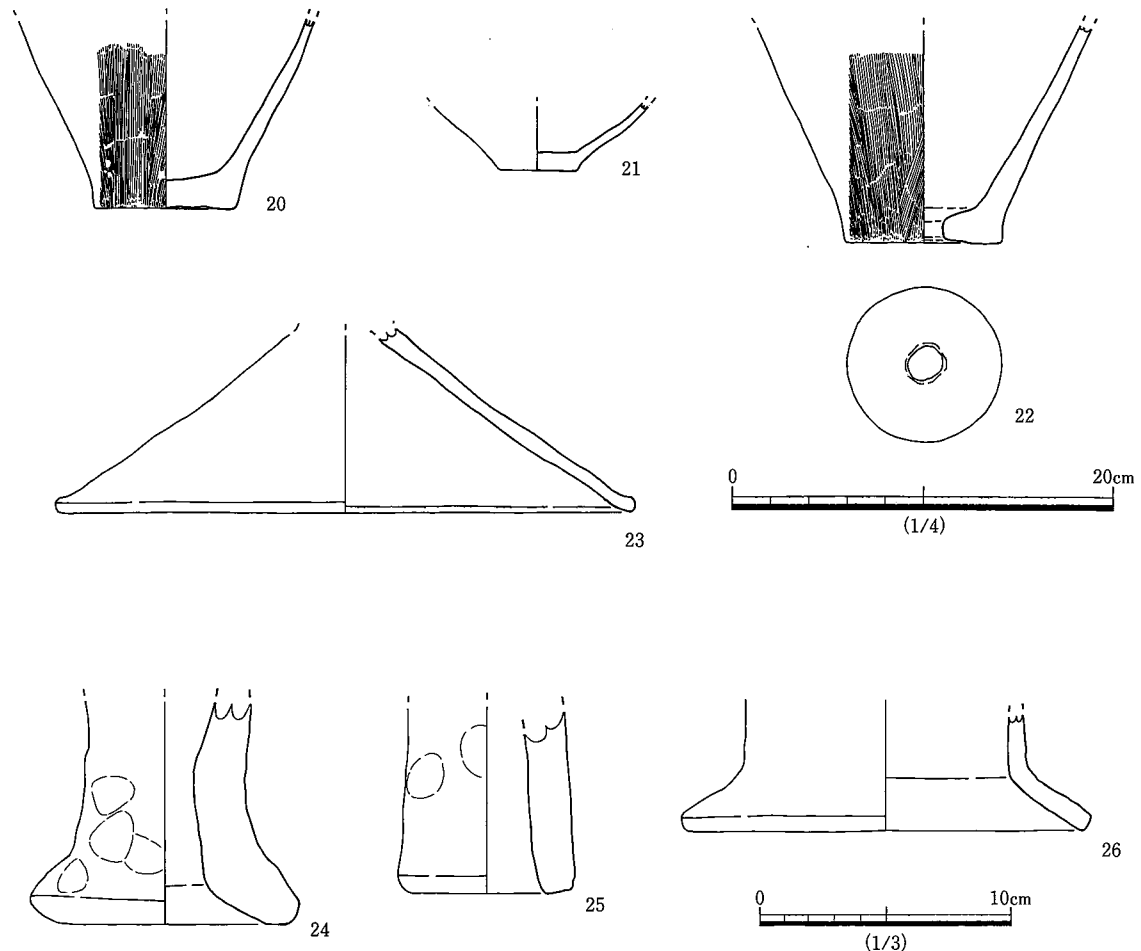
25、26 は支脚である。

25 は筒形で器壁が分厚く、裾端部を押さえて面取りをする。底部径 9.7cm。

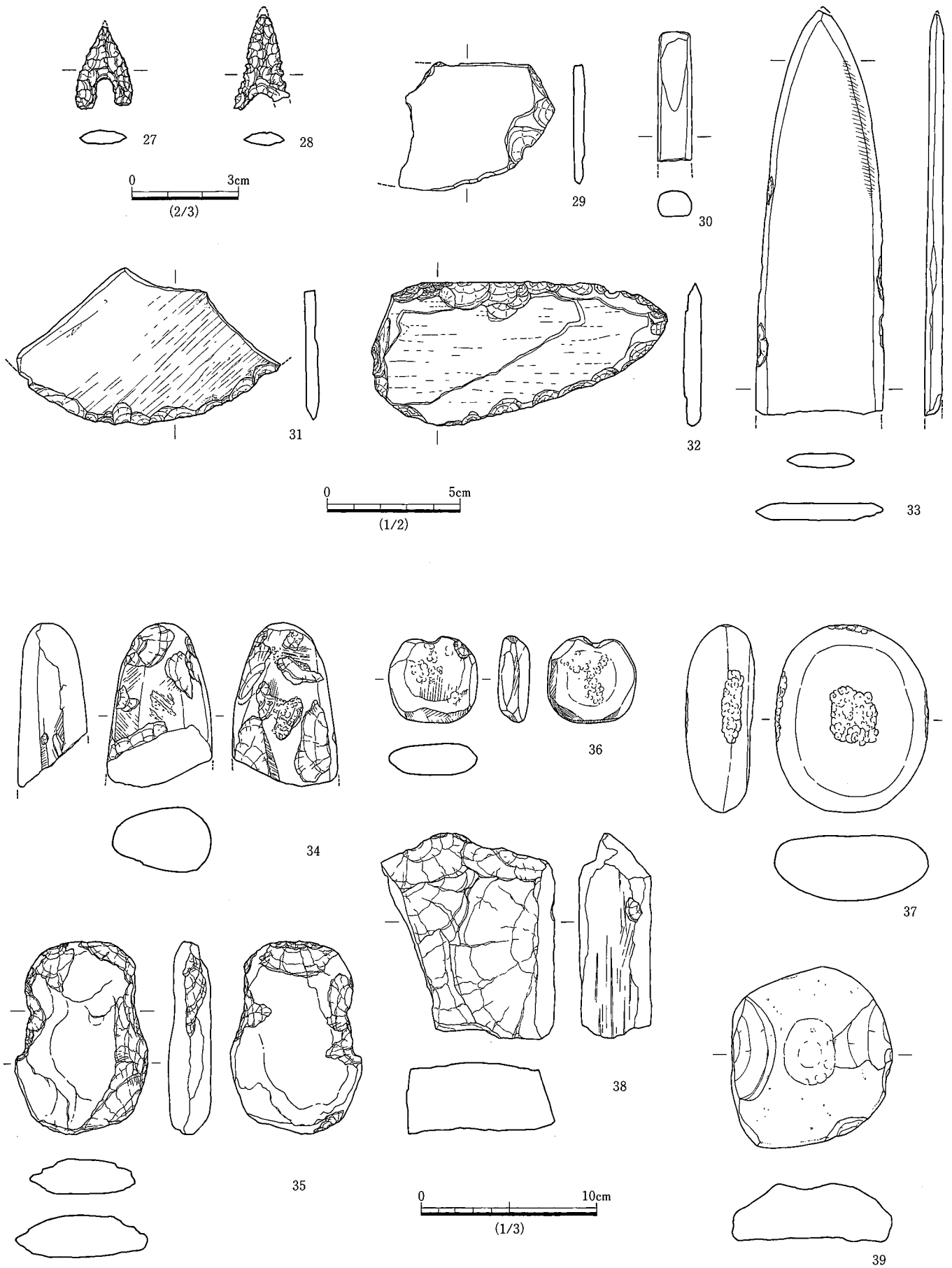
26 は裾部が大きく開く。底部径 15.4cm。

27 は凹基式の石鏃で、先端部を失うが、ほぼ完形。作りが丁寧で、全面に2次調整がおよぶ。黒曜石製。長さ 2.3cm、幅 1.6cm、厚さ 3.7mm、重量 0.92g。

28 は凹基式の石鏃で、先端部と基部の一部を失い、全面に2次調整がおよぶ。黒曜石製。長さ 2.4cm、幅 1.6cm、厚さ 3.5mm、重量 0.93g。



第33図 III-E 区 大溝 C区上層 出土遺物実測図2 (1/3, 1/4)



第34図 Ⅲ-E区 大溝 C区上層 出土遺物実測図3 (2/3、1/2、1/3)

29 は石庖丁の未成品と考えられ、半分ほどで折損しており、研磨の痕跡がない。凝灰岩製。長さ 4.6cm、幅 5.6cm、厚さ 4.2mm、重量 18.47g。

30 は柱状石斧または鑿状石斧の基部と考えられ、横断面はやや扁平な隅円長方形を呈する。長軸方向に沿った研磨痕が側面にみられ、基部の 1ヶ所には窪みがある。粘板岩製。長さ 4.9cm、幅 1.25cm、厚さ 1cm、重量 12.25g。

31 は石庖丁で、全体的に研磨がほとんど行われておらず、裏面は表面が剥落する。未成品の可能性もある。凝灰岩製。長さ 5.9cm、幅 10cm、厚さ 4.5mm、重量 45.12g。

32 は石庖丁と考えられ、刃部は調整段階で、表面もほとんど研磨が行われていない。未成品と思われる。凝灰岩製。長さ 5.4cm、幅 11.1cm、厚さ 6mm、重量 61.92g。

33 は石戈と考えられ、先端部と基部を欠損する。幅広で、扁平な形を呈しており、中央部には鏑をもたない。表面は風化が進んでいるものの、切っ先に近い刃部に研磨の痕跡がみられる。硬質砂岩製。長さ 15.1cm、幅 4.8cm、厚さ 6.5mm、重量 72.81g。

34 は石斧の基部で、刃部は折損する。凝灰岩製。長さ 9.3cm、幅 5.8cm、厚さ 3.6cm、重量 276.92g

35 は抉入扁平石斧で、両側面から抉りが入り、刃部は鈍い。全面は剥離と敲打によって成形されており、平坦面には荒い研磨が施される。安山岩製。長さ 11.0cm、幅 7.4cm、厚さ 2.4cm、重量 253.32g

36 は自然の河原石を利用した石錘と考えられ、側面の 1ヶ所に抉りが入る。緑泥片岩製。長さ 4.9cm、幅 5.0cm、厚さ 1.8cm、重量 76.47g。

37 は敲石である。表裏両面と、両側面、頂部付近に敲打の痕跡が残る。花崗岩製。長さ 10.6cm、幅 8.7cm、厚さ 3.8cm、重量 505.51g。

38 は砥石と考えられる。ほとんどの面が剥落しているが、右側面のみが残っており、長軸方向の研磨痕がみられる。凝灰岩製。長さ 11.7cm、幅 9.6cm、厚さ 3.7cm、重量 688g。

39 は磨石または敲石で、表面中央部分に窪みが見られ、側面の一部に敲打痕が残る。裏面は大きく剥落する。砂岩製。長さ 10cm、幅 9cm、厚さ 3.1cm。重量 446.61g。

大溝 C 区下層出土遺物 (第 35～37 図、図版 17、18)

1～11 は壺である。

1 は未発達な T 字口縁で、内側に少し張り出しをもち、やや外傾する。内外面ともナデ仕上げと考えられるが、頸部については器面の状態が悪く、観察できなかった。口縁部の復元径は 14cm。

2 は口縁部が大きく外反する。口縁部下から頸部にかけては縦方向の暗文状のミガキが施される。口縁部の復元径は 20cm。

3 は頸部の上半部付近で折れ曲がり、外反する。内外面とも器面の状態が悪く、調整はほとんど観察できないが、外面は縦ミガキ、口縁部から内面にかけてはナデによる仕上げを施している可能性がある。口縁部の復元径は 19.6cm。

4 は口縁部付近で外反する。全体的に器面の状態が悪く、口縁の内側に施された横ミガキのみが観察できる。口縁部の復元径は 25.2cm。

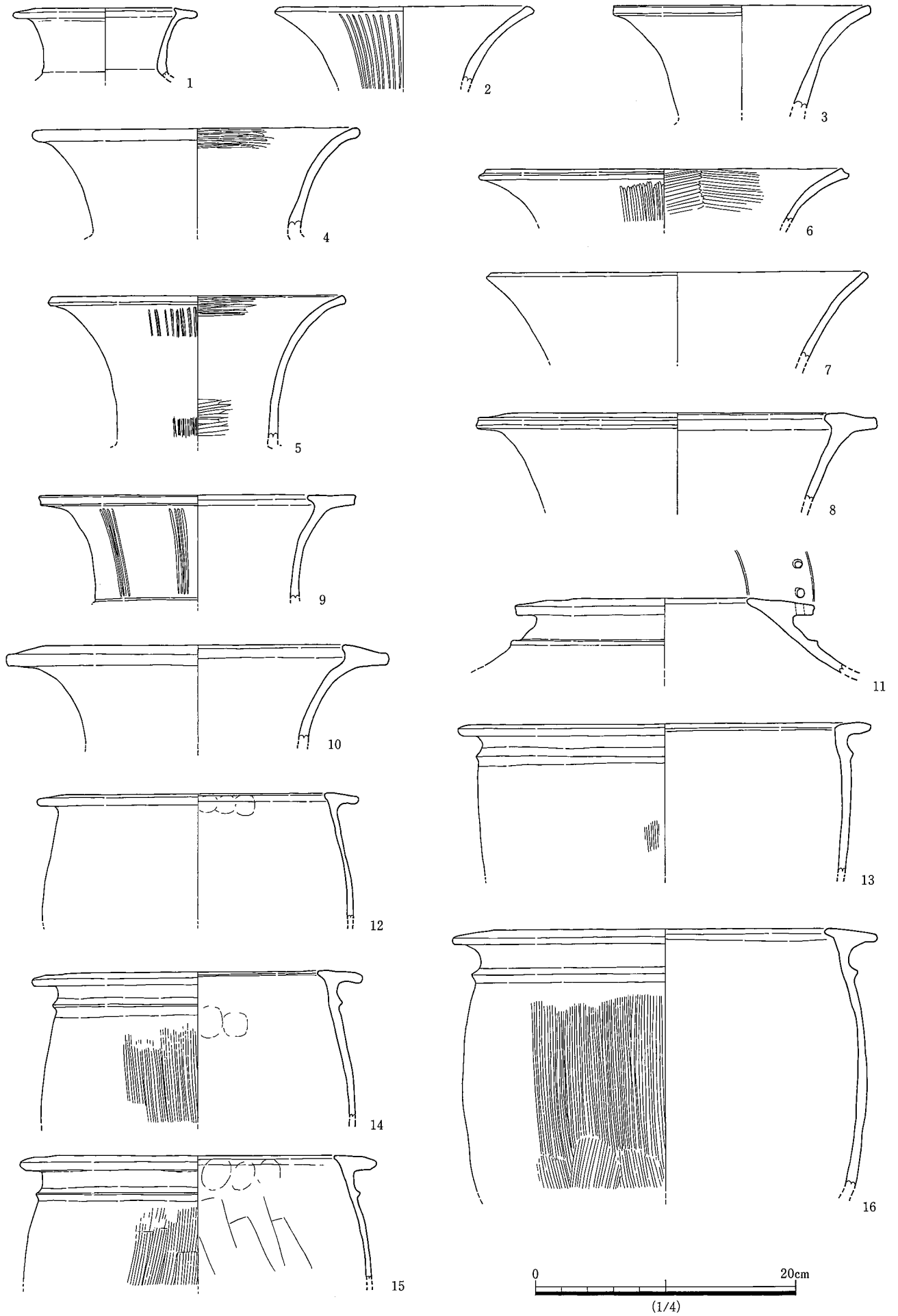
5 は頸部の上位付近で大きく外反する。口縁部の下から頸部にかけては縦方向の暗文状のミガキを施しており、内面には横方向のミガキが口縁部付近と下部に残る。口縁部の復元径は 23cm。

6 は口縁部が大きく外反しており、端部は強い押さえにより窪む。口縁部の下の頸部外面には縦ミガキが残る、内面には横方向のミガキがみられる。口縁部の復元径は 27.4cm。

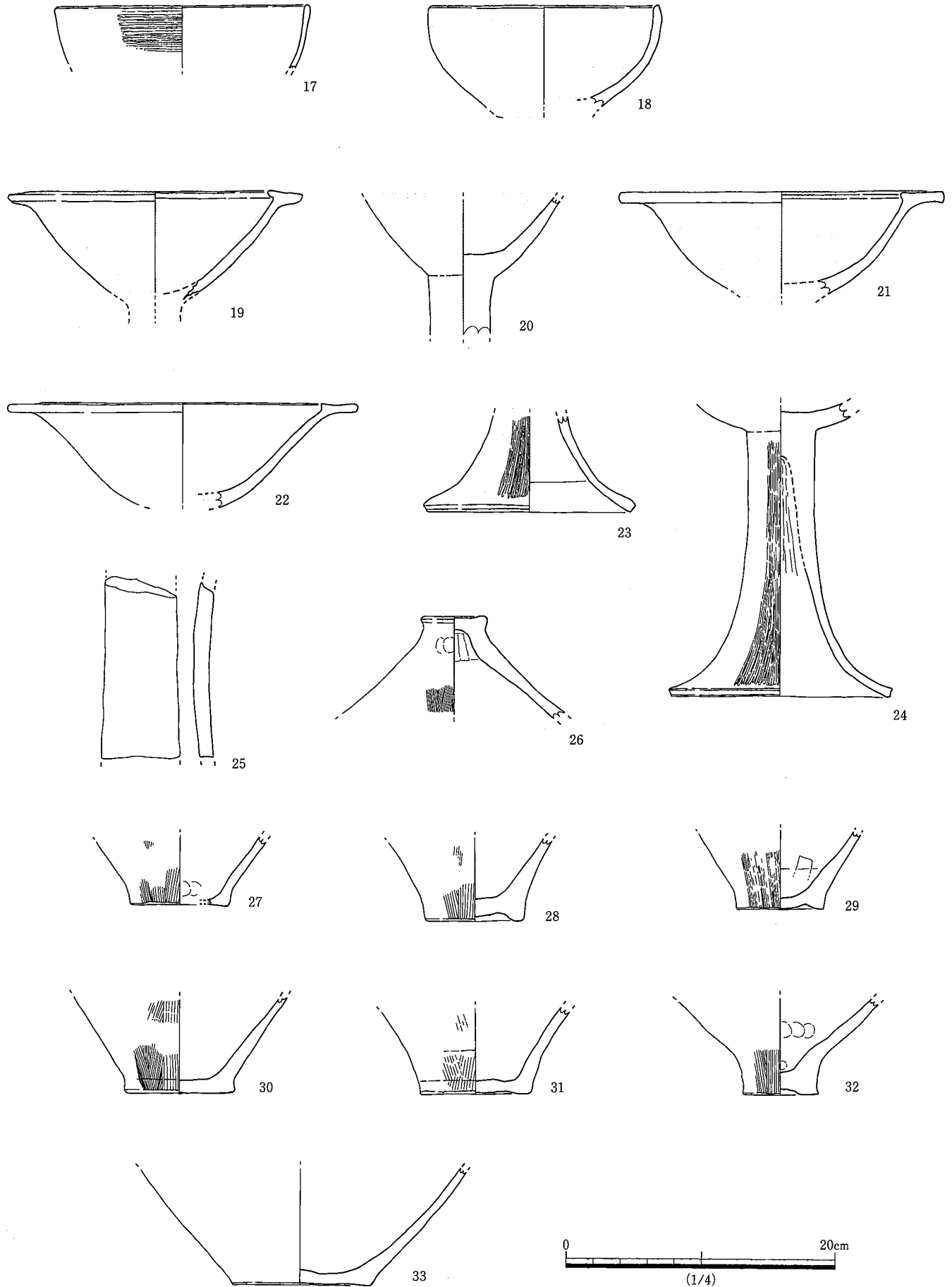
7 は頸部から口縁部がほぼ直線状に広がる。口縁部付近の内外面はナデ仕上げを行っている。口縁部の復元径は 29.4cm。

8 は口縁部が T 字形口縁を呈しており、やや外傾する。外面の口縁部から下と内面の下位にススが付着しており、2次焼成を受けた可能性が考えられる。口縁部の復元径は 30.8cm。

調査の記録



第35図 Ⅲ-E区 大溝 C区下層 出土遺物実測図1 (1/4)



第36図 III-E区 大溝 C区下層 出土遺物実測図2 (1/4)

9は口縁部がT字形を呈しており、口縁部下の頸部外面には4条を1単位にする暗文状の縦ミガキが施される。暗文の個々の間隔は1～1.5mmで、各単位は5cm前後離れる。口縁部の復元径は24.4cm。

10はT字形口縁を呈しており、やや外傾する。器面の残りが悪く、口縁付近のナデ調整のみが確認できた。口縁部の復元径は29.6cm。

11は逆L字形の口縁部をもち、上端から下端にかけて2つを1単位とする穿孔を行う。口縁部からやや下がったところに三角突帯を1条巡らせており、内外面ともナデ仕上げを施す。口縁部の復元径は23cm。

12は口縁部が逆L字形を呈し、やや外傾しており、内側には指頭痕が多数残る。口縁部の復元径は24.8cm。

13は口縁部が逆L字形を呈し、やや内傾しており、口縁部下の外面には三角突帯を1条巡らせる。胴部の内外面はいずれも器面の残りが悪いが、一部に縦方向のハケ目が残っており、突帯の下にはかつて縦ハケが施されていたものと思われる。口縁部の復元径は31.8cm。

14は口縁部が内側に若干張り出すT字形を呈しており、やや外傾する。外面の口縁部下には三角突帯を1条巡らせており、突帯の下には縦ハケが施され、内面の突帯付近には指頭痕が残る。胴部の下位にはススが付着しており、2次焼成を受けた可能性がある。口縁部の復元径は15.4cm。

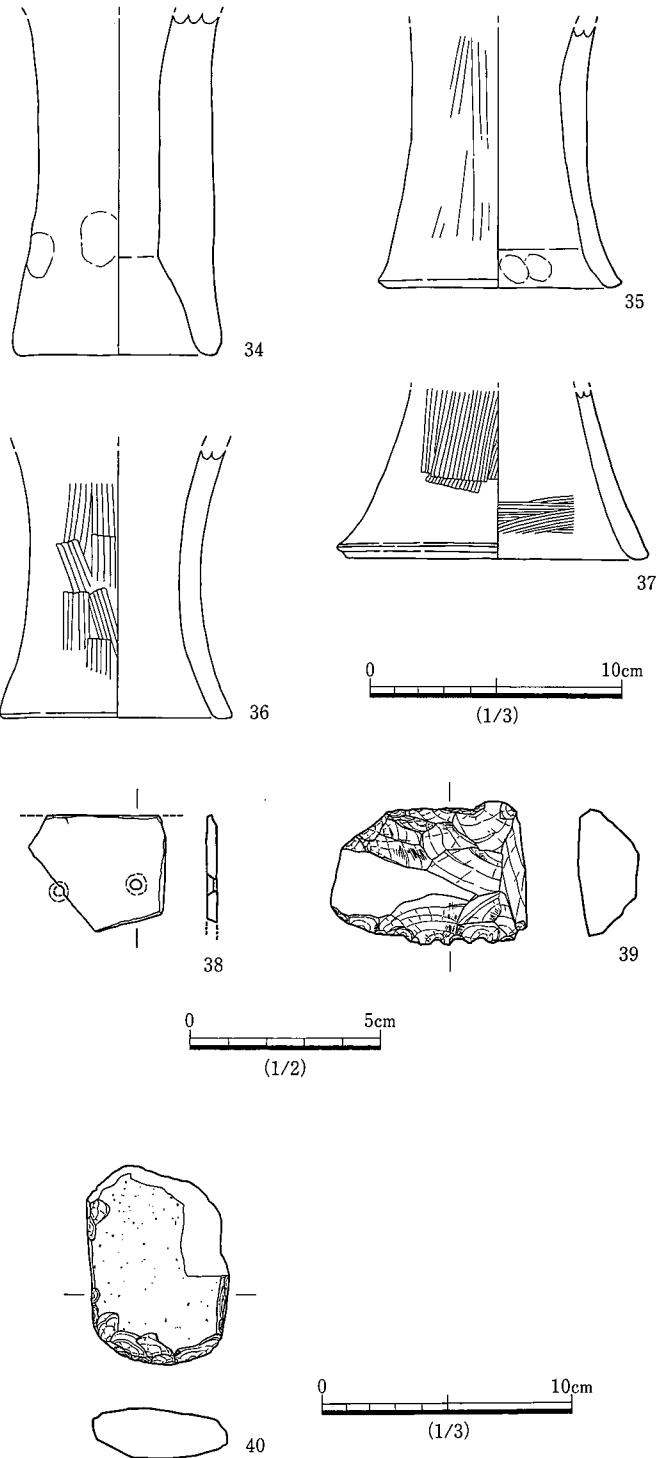
15は口縁部が逆L字形を呈しており、やや外傾する。外面の口縁部下には細めの三角突帯が1条巡っており、その下には縦ハケが施される。また、内面には口縁部付近に指頭痕が残り、これより下には縦方向に強いナデを行った痕跡がみられる。口縁部の復元径は27.6cm。

16は口縁部が内側に若干張り出すT字形を呈しており、やや外傾する。口縁部の下には三角突帯が1条巡り、この下には縦方向のハケ目が残る。口縁部の復元径は32.8cm。

17と18は鉢である。

17は外面に横方向のミガキを施しており、内面はナデ仕上げを行う。口縁部の復元径は18.6cm。

18は口縁端部から内面にかけて丹塗りが残っており、外面は剥離のため確認できない。口縁部の復元径は17cm。



第37図 III-E区 大溝 C区下層 出土遺物実測図3 (1/2、1/3)

19～24 は高坏である。

19 は口縁が T 字形で、若干外傾し、内外面には丹塗りが施される。口縁部の復元径は 22cm。

20 は内外面共に部分的に丹塗りが残る。

21 は内外面共に丹塗りを施す。口縁部の復元径は 24.4cm。

22 は内外面共に器壁が剥落しており、調整や丹塗りなどは観察できなかったが、胎土が精良で、作りが丁寧であるため、本来は丹塗であった可能性がある。口縁部の復元径は 26cm。

23 は外面に縦方向のミガキが施され、この上に丹塗りが行われる。底部の復元径は 15cm。

24 は脚部から裾部にかけての外面に縦方向のミガキが施される。内面の下半部はナデ仕上げが行われており、上半部には成形時にできた縦方向の皺が残される。底部の復元径は 16.8cm。

25 は筒形器台の脚部で、左右の透かし部分がヘラ切りによって面取りされる。表面はミガキおよび丹塗りの可能性があるが、状態が悪く不明。内面にはナデの痕跡がみられる。幅 5.4cm。

26 は蓋で、摘み部分の付け根に指頭痕が残され、下位には縦ハケが残る。摘み部の径は 5cm。

27～33 は甕または壺の底部である。

27 は外面に縦ハケを施し、部分的にナデ消す。内面はナデ仕上げを行い、底部付近には指頭痕が残される。底部の復元径は 7.4cm。

28 は外面に縦ハケを施し、内面はナデ仕上げを行う。底面は上げ底となる。底部径は 7cm。

29 は外面に縦ハケを施し、内面はナデを行う。底面はやや上げ底となる。底部の復元径は 6.5cm。

30 は外面に縦ハケを施す。底部径は 7.8cm。

31 は外面に縦ハケを施し、内面はナデ仕上げを行う。底面はやや上げ底となる。底部径は 8.1cm。

32 は底部付近で屈曲する。外面は縦ハケで、内面にはナデを行っており、指頭痕が残される。上げ底で、底部径は 5.7cm。

33 は底部が若干上げ底となる。底部径は 10cm。

34～37 は器台である。

34 は中空な筒形を呈する。器壁は分厚く、外面には指頭痕が残る。底部の復元径は 8.2cm。

35 は中空な筒形を呈する。外面はハケで、底部付近は横方向のナデによって消される。また、底部の内面には指頭痕が残される。底部径は 9.6cm。

36 は裾部があまり広がらず、中空な筒形を呈する。外面にはハケ目が施され、底部付近は横方向のナデ消しがされる。底部径は 9.3cm。

37 は裾部が広がる。外面に縦ハケ、内面の下位に横ハケが施されており、口縁部付近はいずれも横方向のナデによって消される。底部径は 12.4cm。

38 は石庖丁で、全体的に風化による表面剥離が進んでおり、穿孔は 2 つ残るものの、1 つは約 1/4 を残して欠損する。頁岩製。長さ 3.1cm、幅 3.7cm、厚さ 3mm、重量 4.95g。

39 はスクレイパーと考えられる。サヌカイト製。長さ 3.7cm、幅 5.1cm、厚さ 1.6cm、重量 34.33g。

40 は石斧で、基部が失われる。表裏面共に縦または斜め方向の研磨が施され、刃部には使用時の剥離がみられる。凝灰岩製。長さ 5.3cm、幅 3.6cm、厚さ 2.35cm、重量 146.45g。

大溝 D 区上層出土遺物 (第 38、39 図、図版 18、19)

1、2 は壺である。

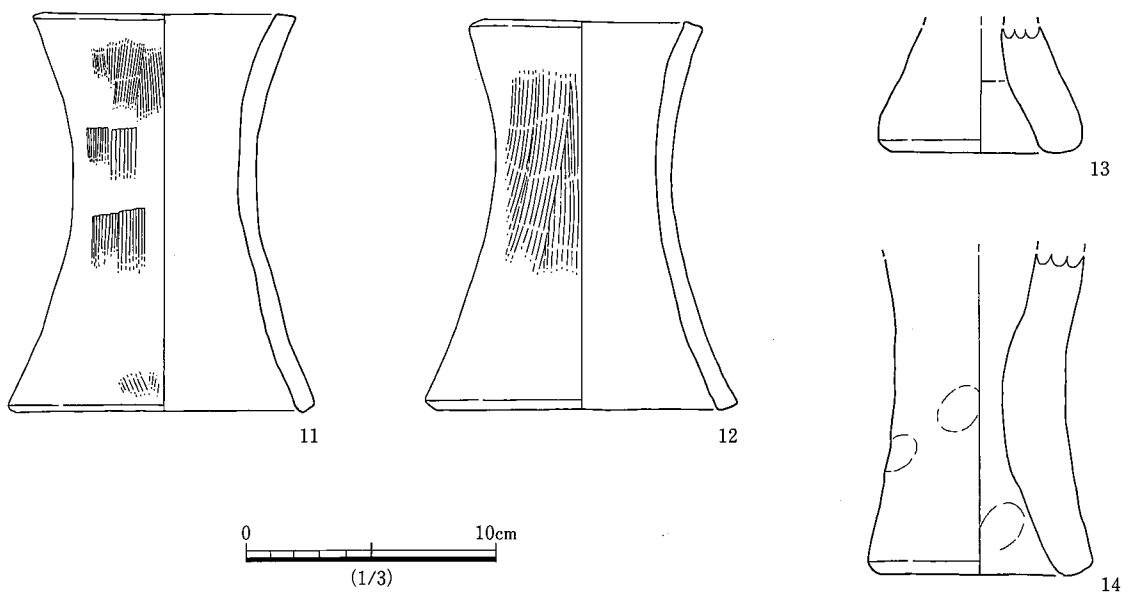
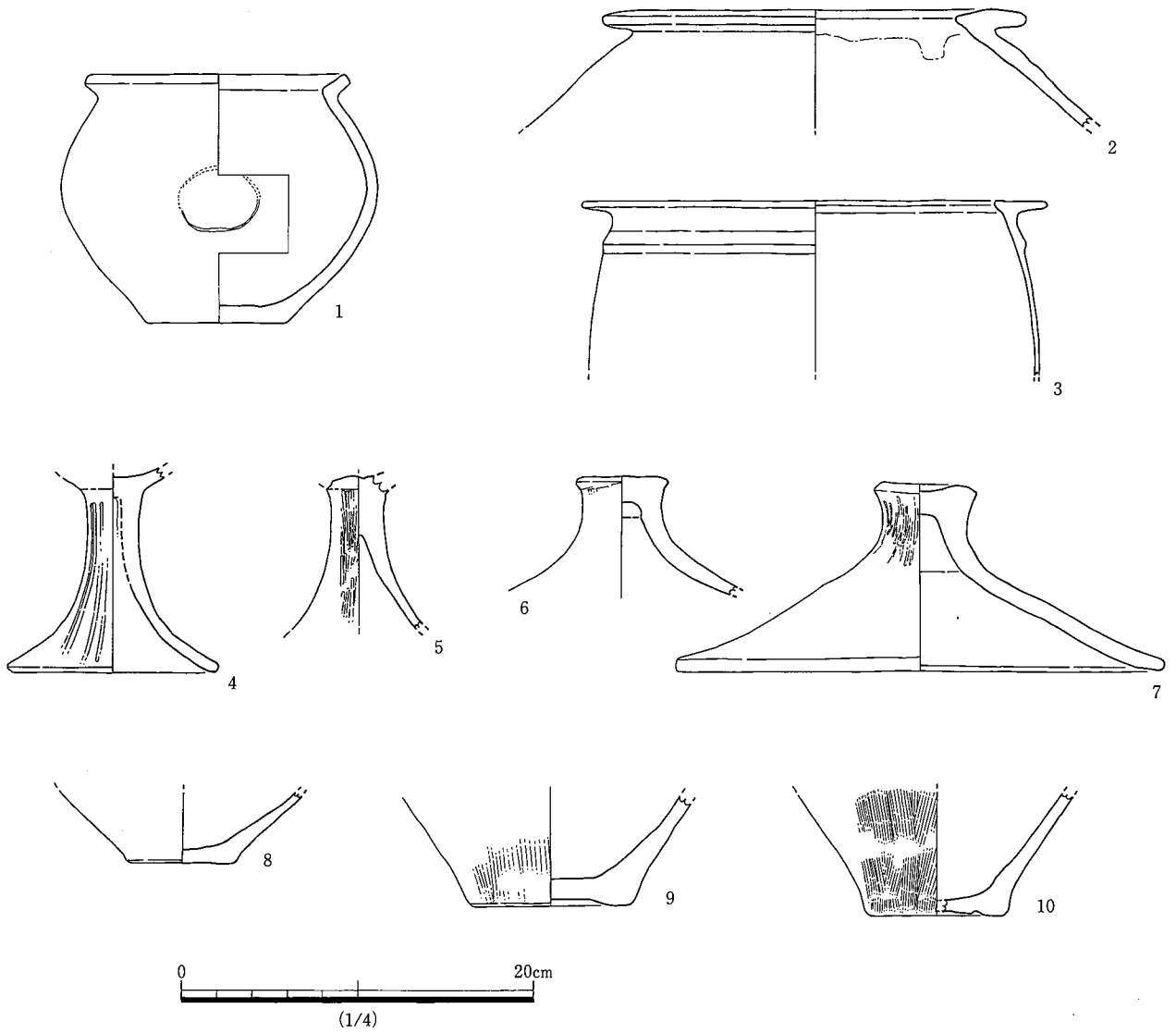
1 は窓開きの壺である。胴部の中央付近を焼成後に打ち欠いており、上半部は欠失しているが、かつては楕円形に近い形の窓があったと思われる。口縁部は逆 L 字形で、内傾しており、復元径は 15cm。底部径は 8cm、器高は 14.2cm。

2 は外面から口縁部の内側にかけて丹塗りを施す。口縁部は逆 L 字形で、復元径は 24.2cm。

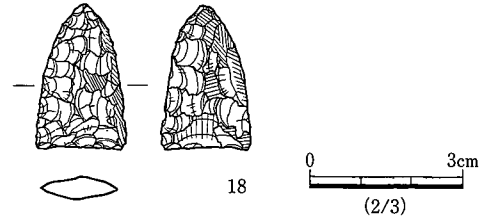
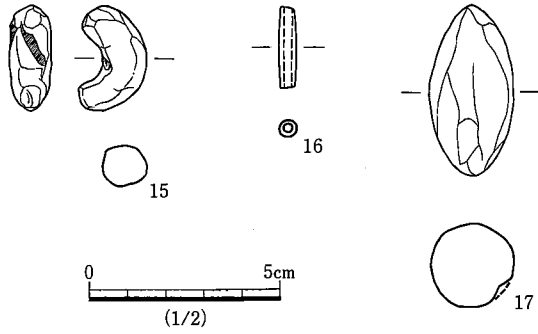
3 は甕である。外面の口縁部の下に低く、なだらかな三角突帯を 1 条巡らせる。口縁の復元径は 26.5cm。

4 と 5 は高坏である。

4 は脚部の外面から坏部の内側にかけて丹塗りを



第38図 Ⅲ-E区 大溝 D区上層 出土遺物実測図1 (1/3、1/4)



施す。脚部の裾は外側へ広がり、外面には縦方向のミガキを行う。底部の復元径は 12cm。

5 は外面に縦ミガキを施したのち、丹塗りを行う。6 と 7 は蓋である。

6 は外面の摘みの上側面付近に、ハケの原体を押し付けた痕が残り、摘みの内側には押さえた痕がみられる。摘み部の径は 5.2cm。

7 は完形である。外面の摘みの側面に若干、縦方向のハケ目の痕跡が残るものの、全体的にナデ消している。また、内面についても成形時に付いた皺の痕などを横方向にナデ消しており、作りが丁寧である。径 27.6cm。

8 ~ 10 は壺または甕の底部である。

8 は底部側面から上方にかけてと、内面に丹塗りを施す。底部径 6cm。

9 は外側面に縦方向のハケ目が残る。底部は上げ底で、径は 9.1cm。

10 は底部側面から上方にかけて縦方向のハケ目が残る。底部はやや上げ底で、復元径は 8cm。

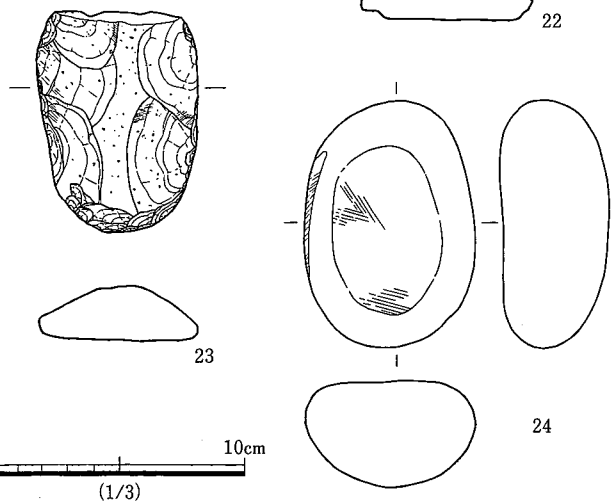
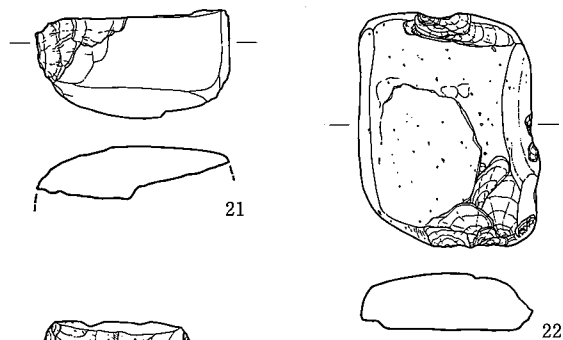
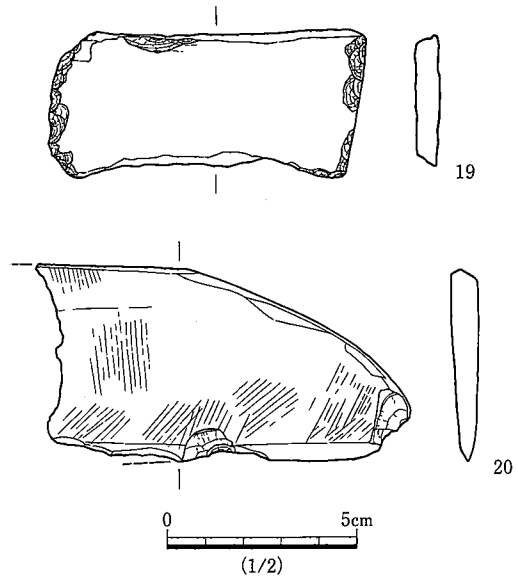
11 と 12 は器台で、いずれも完形である。

11 は口縁部と裾部が広がりを持ち、中空である。外面に縦方向のハケ目残り、口縁部および底部付近で横方向にナデ消す。口縁部径 10.2cm、底部径 12.3cm、器高 15.9cm。

12 は裾部が口縁部に比べて大きく広がり、胴部の中位あたりに縦方向のハケ目残り。口縁部径 9.2cm、底部径 12.4cm、器高 15.5cm。

13 と 14 は支脚である。胎土はいずれも、長石や石英、雲母などの粒子を多く含んでおり粗い。

13 は裾が内湾しながら広がる。底部径 8cm。



第 39 図 Ⅲ-E 区 大溝 D 区上層 出土遺物実測図 2 (2/3、1/2、1/3)

14は裾部が若干広がった筒形を呈する。手捏ねによって成形されているため、内外面に指頭痕がみられるが、大部分は風化により観察できない。底部の復元径9cm。

15は土製の勾玉で、手捏ねによって成形されており、頭部は時計回りにひねって作られる。頭部の両側には穿孔を表現した窪みがあり、貫通はしない。長さ2.8cm、幅1.8cm、厚さ1.1cm、重量3.93g。

16はガラス製の管玉で、両端部に比べて中央付近がやや太くなる。表面の気泡を肉眼で観察してみると、長軸方向に動くものが確認できた。したがって、引き伸ばしによって成形されている可能性が考えられる。表面は風化しているため、やや白っぽくなっており、現状では淡緑色となっている。長さ2.2cm、直径5mm、孔径2mm、重量0.94g。

17は投弾形の土製品である。上下両端は尖っており、中央部は丸い。全体的にナデ仕上げを行う。胎土は微小な粒子を含むものの精製されており、焼成も良好なため、堅緻な印象を受ける。長さ4.1cm、幅2.2cm、厚さ2.2cm、重量19.16g。

18は平基式の石鏃で、表裏両面に2次調整の剥離を加える。サヌカイト製。長さ2.9cm、幅1.8cm、厚さ5mm、重量2.18g。

19は石庖丁の未成品の可能性ある。上下両側面が折損しており、左側面に刃部を成形するための調整剥離がみられる。安山岩製。長さ3.5cm、幅8.2cm、厚さ6.5mm、重さ37.05g。

20は石庖丁である。全面に研磨が施され、片刃が付く。砂岩製。長さ5.1cm、幅9.4cm、厚さ7mm、重量54.38g。

21は砥石と考えられる。表面と下側面の2面が残っており、他は剥落する。2面とも丸みを帯びており、擦痕もほとんどみられないので、使用頻度は高くないように思われる。砂岩製。長さ4.3cm、幅7.6cm、厚さ2.1cm、重量104.67g。

22は石錘と考えられる。長方形の礫の上下両側面中央部に比較的深い打ち欠きを入れ、左右に浅い

打ち欠きを施す。凝灰岩製。長さ9cm、幅6.8cm、厚さ2.2cm、重量266.89g。

23は石斧と考えられ、刃部が丸く、基部を失っている。横断面は一方に稜をもち、片方が平坦な三角形を呈している。凝灰岩製。長さ8.7cm、幅6.3cm、厚さ2.2cm、重量191.58g。

24は磨石で、一方の表面が若干窪んでいる。片岩系。長さ9.8cm、幅6.8cm、厚さ4.3cm、重量483.81g。

大溝D区中層出土遺物(第40、41図)(図版20)

1は口縁部から下がった位置に三角突帯を1条巡らせる。突帯の下位は縦ハケののちナデ消しを行っているが、消しきれっていないハケ目が部分的に残る。全面にススが薄っすらと付着しており、2次焼成を受けた可能性がある。口縁部の復元径は26.1cm。

2は壺の頸部から胴部にかけてで、外面および肩部の内面に丹塗りが施される。調整は肩部から胴部にかけての外面と、頸部から肩部にかけての内面に横方向のミガキが施され、頸部には縦方向の暗文がみられる。また、頸部の付け根には横方向に1条の沈線が施され、胴部の中央付近にはM字突帯が1条巡る。

3は甕の口縁部で、口縁上端に10～15本程度を1単位とした沈線が引かれている。口縁部の径は外側の端部が失われているため、正確な数値は出ないが、復元でおよそ60cm程度と思われる。

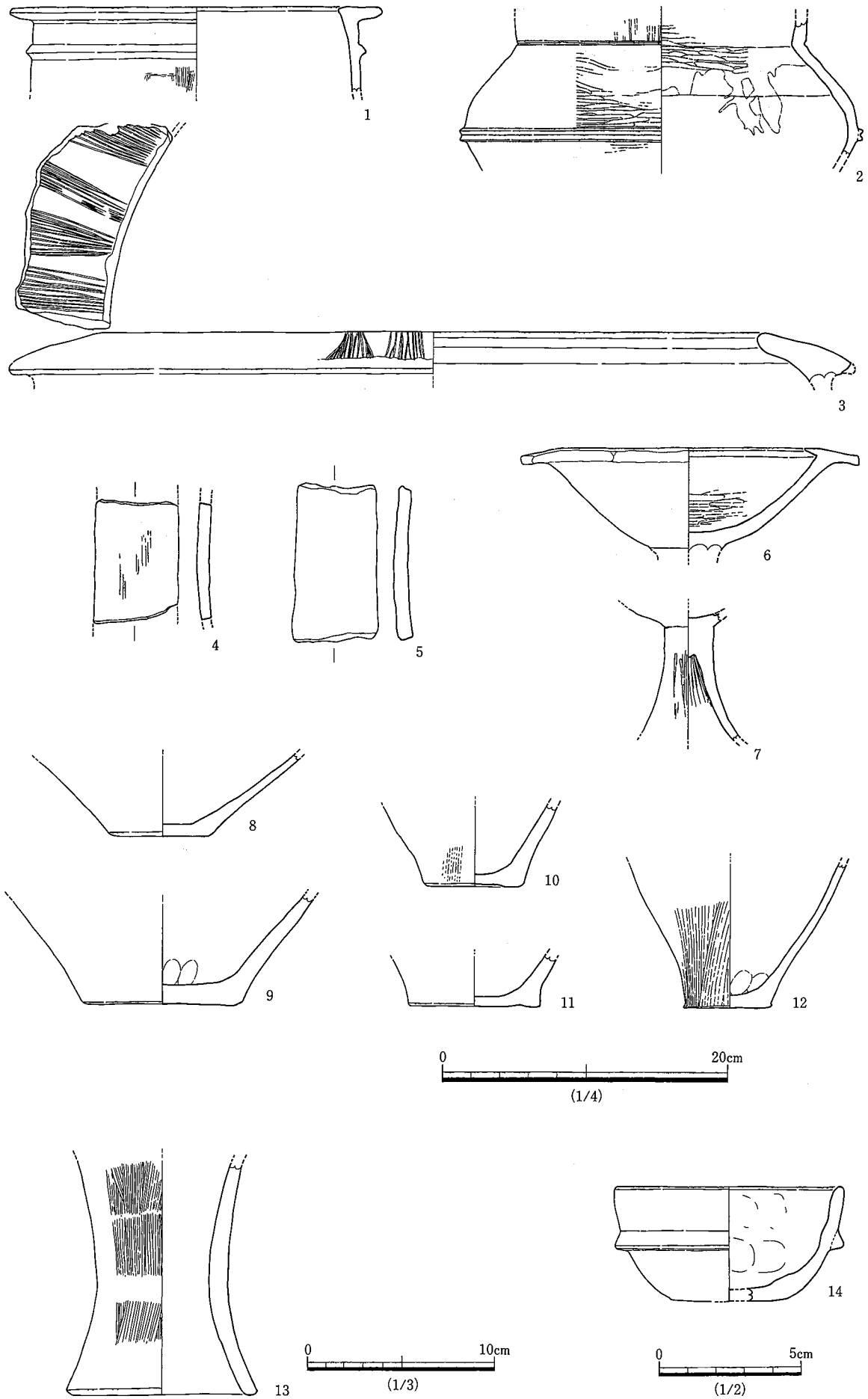
4と5は筒形器台の脚部と考えられる。

4は左右側面の透かし部分をヘラ切りにより面取りしており、外面には薄っすらと縦方向のミガキと丹塗りの痕跡が残る。幅5.9cm。

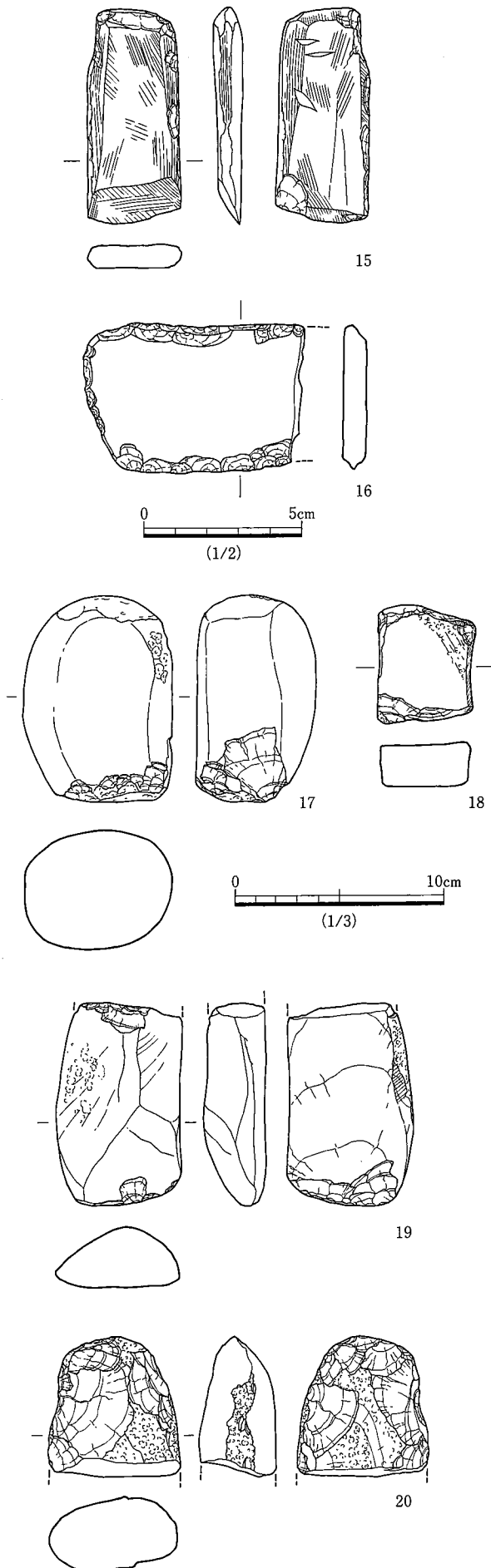
5は4と同じく左右側面をヘラ切りによって面取りする。表面の残りが悪く、調整および丹塗りの痕跡はみられない。幅5.8cm。

6と7は高坏である。

6は口縁部に打ち欠きの可能性がある。内面に丹塗りがみられ、下半部には横方向のミガキが残る。



第40図 III-E区 大溝 D区中層 出土遺物実測図1 (1/2、1/3、1/4)



口縁上端から外面にかけては器面の状態が悪かったため確認はできなかったが、かつては丹塗りが施されていた可能性がある。口縁部の復元径は 23.8cm。

7 は脚部の外面と坏部の内側に丹塗りが残っている。また、坏部の付け根には、脚部との接合痕がみられ、脚部の外面には部分的にミガキが、内面には成形時の皺が残る。

8～12 は壺または甕の底部である。

8 は風化により調整は不明。底部径 6.6cm。

9 は内面の底部側面に指頭痕が残る。底部の復元径は 11cm。

10 は外面付近に薄っすらと縦方向のハケ目が残る。底部はやや上げ底で、径は 6.8cm。

11 は内外面共ナデ調整を行う。底部径 9.3cm。

12 は外面に縦方向のハケ目が施され、内面の底部付近に指頭痕が残る。底部径 6.2cm。

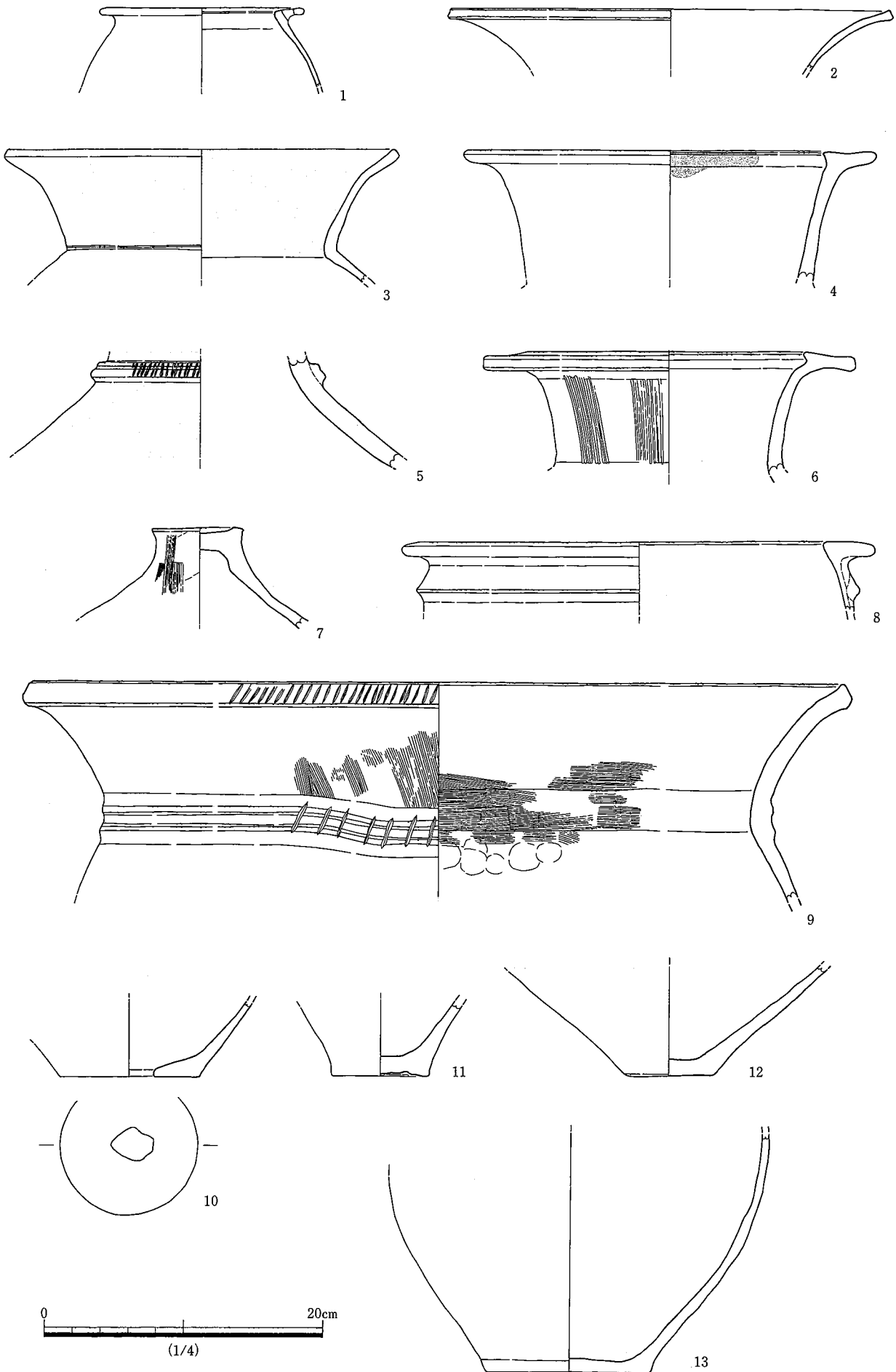
13 は器台で、やや裾部が広がる。外面中央部付近に縦方向のハケ目残り、底部付近はナデ消す。底部径 10.2cm。

14 はミニチュアの鉢で、中央部付近に三角突帯を 1 条巡らせる。全体的にナデによって仕上げられており、内面には指頭痕が薄っすらと残る。口縁部の復元径は 8.1cm。

15 は扁平片刃石斧で、刃部の一部に欠損がみられるもののほぼ完形。裏の側面に一部、調整剥離痕が残るほかは全面、研磨される。硬質砂岩製。長さ 6.9cm、幅 3cm、厚さ 9mm。重量 33.21g。

16 は石庖丁で、上、下、左の 3 側面に調整剥離が施される。表裏面が若干研磨されている可能性があるが、刃部はまだ剥離の段階であるため、未成品の可能性もある。安山岩製。長さ 4.7cm、幅 6.9cm、厚さ 7.5mm、重量 57.26g。

17 は自然の円礫を利用した敲石である。上下両小口と、側面の合わせて 3ヶ所に敲打の痕跡がみられる。使用頻度は下側小口部が最も高く、続いて上小口、側面の順となる。凝灰岩製。長さ 9.8cm、幅 7.6cm、厚さ 5.8cm、重量 693.36g。



第 42 図 Ⅲ-E 区 大溝 E 区上層 出土遺物実測図 1 (1/4)

18は小型の荒砥石である。上下両小口部の表面が剥落しているが、他の面については比較的良好に残る。表面および左右の3面は基本的に長軸に対して縦方向または斜め方向の研磨痕がみられ、表面も反っているため比較的使用頻度が高いと思われる。一方、裏面は研磨痕がみられるものの平坦で、使用頻度はそれほど高くないと思われる。砂岩製。長さ5.7cm、幅4.7cm、厚さ2.1cm、重量101.05g。

19は石斧と考えられ、基部が失われており、刃部は丸みをもつ。断面は表面に稜をもち、裏面が平坦な三角形を呈する。玄武岩製。長さ9.7cm、幅6cm、厚さ3cm、重量268.98g。

20は石斧の基部と考えられる。下端面の折損部分以外では全面に成形時の剥離痕が残されており、部分的な研磨もみられる。玄武岩製。長さ6.8cm、幅6.3cm、厚さ3.6cm、重量218.60g。

元径は14.8cm。

2は口縁部が大きく外側へ広がり、端部は押さえによって面取りする。口縁部の復元径は32.4cm。

3は外面から頸部内面にかけて丹塗りが施される。頸部の付け根には沈線が1条巡っている。口縁部の復元径は28.5cm。

4は口縁部上端から内側にかけて黒色の顔料らしきものがみられる。外面は器面が剥落しているため確認はできなかったが、かつては黒塗りであった可能性がある。口縁部の復元径は30cm。

5は頸部の付け根に斜め方向のキザミ目を施したM字突帯を巡らせ、外面に丹塗りを施す。

6は口縁部下から頸部にかけて、縦方向の暗文状のミガキを施す。口縁部の復元径は27cm。

7は蓋で、摘み付近に縦ハケが残る。摘み部の径は6.6cm。

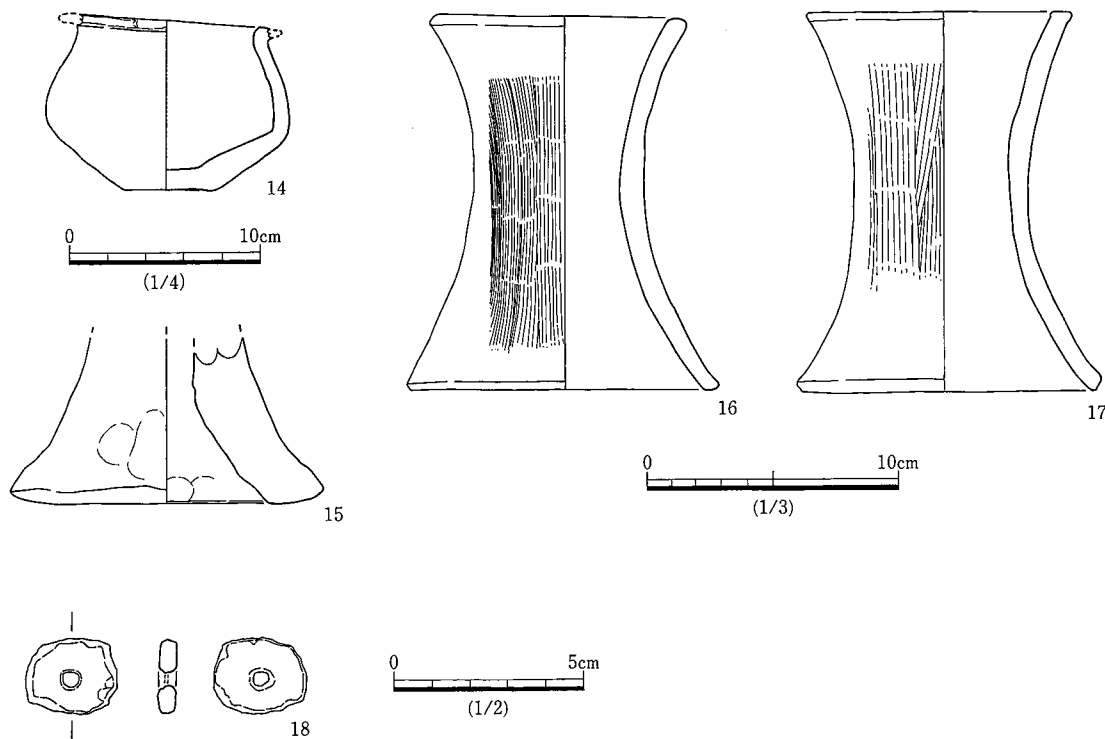
8は口縁部の下に幅広の三角突帯を1条巡らせる。口縁部の復元径は34.6cm。

9は中型の甕棺と考えられる。頸部の付け根付に低く平坦な突帯を2条巡らせ、これと口縁端部に斜め方向のキザミ目を施す。また、頸部の外面には縦

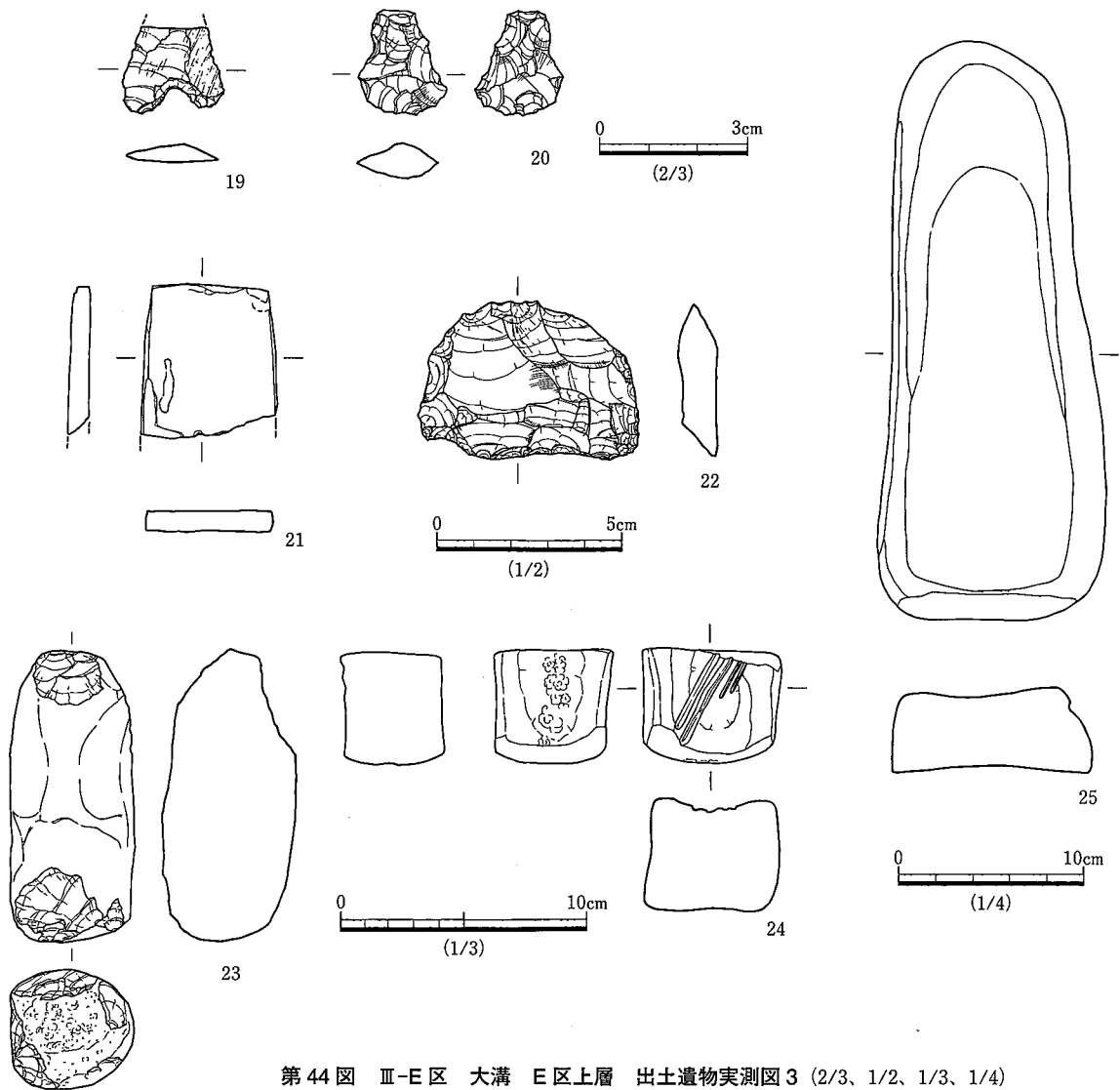
大溝 E 区上層出土遺物 (第 42 ~ 44 図、図版 21)

1 ~ 6 は壺である。

1 は逆 L 字形の口縁部を呈しており、内傾する。口縁上端から下端に向けて穿孔を施す。口縁部の復



第 43 図 III-E 区 大溝 E 区上層 出土遺物実測図 2 (1/2、1/3、1/4)



第44図 Ⅲ-E区 大溝 E区上層 出土遺物実測図3 (2/3、1/2、1/3、1/4)

ハケ、内面には横ハケを施し、肩部の内面には指頭痕が多数残る。口縁部の復元径は60cm。

10～13は壺または甕の底部である。

10は底面の中央付近に焼成後の穿孔を施す。底部径は10.2cm。

11はやや上げ底で、径は7.2cm。

12は底部の外側面から上方に向かって丹塗りを施す。底部径は6.4cm。

13は底部側面付近でくびれる。底部径は12cm。

14は口縁端部を打ち欠いている可能性があり、内外面とも丹塗りである。口縁径は打ち欠きのある状態で7.8cm、底部径3.7cm、器高6.7cm。

15は支脚で、裾部が広がる。全体的に手捏ねに

よって成形されるため内外面に指頭痕が残る。底部の復元径は12.4cm。

16と17は器台である。

16はほぼ完形で、口縁部と裾部が大きく外反する。胴部外面には縦方向のハケ目を施し、口縁部と裾部付近は横方向にナデ消す。口縁径は10.2cm、底部径は12.4cm、器高は14.8cm。

17は裾部が大きく外反する。胴部中位に縦方向のハケ目が残っており、口縁部と裾部付近はナデ消す。口縁部の復元径は10.5cm、底部の復元径は12cm、器高は15cm。

18は土製の紡錘車で、土器片を再利用したものである。周囲は摩滅しており、径は現状で2cm×

2.4cm、厚さは5mm、孔径4mm、重量2.78g。

19は凹基式の打製石鏃で、上半部分が失われる。表面の右側には原礫面が残されており、裏面には挟り部以外に調整は施されない。黒曜石製。長さ1.8cm、幅2.4cm、厚さ4mm、重量1.11g。

20は石鏃の未成品と考えられる。全面に調整剥離がおよんでいるものの刃部が付かず、先端が折れている。黒曜石製。長さ2.2cm、幅1.8cm、厚さ7mm、重量1.85g。

21は扁平片刃石斧の基部と思われる。表面には縦方向の研磨痕がみられ、側面には斜め方向の研磨痕が残る。裏面は剥落しているため、かつてはもう少し厚みがあったものと思われる。硬質砂岩製。長さ4.1cm、幅3.5cm、厚さ5.5mm、重量18.47g。

22はスクレイパーと考えられ、下面に刃部が付く。サヌカイト製。長さ4.2cm、幅6cm、厚さ9.5mm、重量34.62g。

23は敲石で、先端部と基部に敲打痕が残り、先端部は縦に半分ほど欠け、側面には浅い挟りが2ヶ所施される。玄武岩製。長さ11.9cm、幅5cm、厚さ5.4cm、重量549.68g。

24は砥石で、全面が比較的良好に残る。使用頻度をみると、表裏面と左側面が反り窪んでおり、高かったことがわかる。このうち、裏面には4本の細い筋が斜め方向に走っており、身幅の薄い物を研磨したことが推測される。また、表面と下側面の頂部には敲打痕が残る。砂岩製。長さ4.7cm、幅5.7cm、厚さ4.2cm、重量184.85g。

25は比較的大型の砥石で、表裏面および左側面に研磨痕が残っている。表面の中央部付近が最も使用されているようで、反り窪んでおり、裏面は一度剥離したのちに、再度、中央部分のみを使用している可能性がある。長さ31.4cm、幅10.8cm、厚さ4.4cm、重量3,240g。

大溝F区上層出土遺物（第45～47図、図版22、23）

1～5、8は壺である。

1は口縁部の下から頸部にかけて縦方向の暗文状のミガキを施す。口縁部の復元径は28.4cm。

2は未発達なT字形口縁を呈しており、内側に少し張り出しをもつ。口縁径は21.4cm。

3は頸部の付け根に1状の沈線を巡らせる。口縁部の復元径は28.6cm。

4は口縁部の復元径24.4cm。

5は口縁端部の一部に打ち欠きの可能性がある。器面の調整については風化がひどく、不明。口縁部の復元径は19.4cm、底部径は7.6cm、器高16.2cm。

6、7、9、10は甕である。

6は口縁部の内面を強く横方向に押さえた痕跡がみられる。口縁部の復元径は23.8cm。

7は口縁部付近から内面にかけてナデを行い、下位に縦ハケが残る。口縁部の復元径は26.6cm。

8は内外面共にナデ仕上げを施す。口縁部の復元径は30.7cm。

9は口縁部の下に比較的稜のはっきりした三角突帯を1条巡らせる。調整は内外面とも横方向のナデを行う。口縁部の復元径は26.8cm。

10は口縁部の下に三角突帯を1条巡らせ、下位に縦ハケが残り、内面には斜め方向にナデを行った痕跡がみられる。口縁部の復元径は27.9cm。

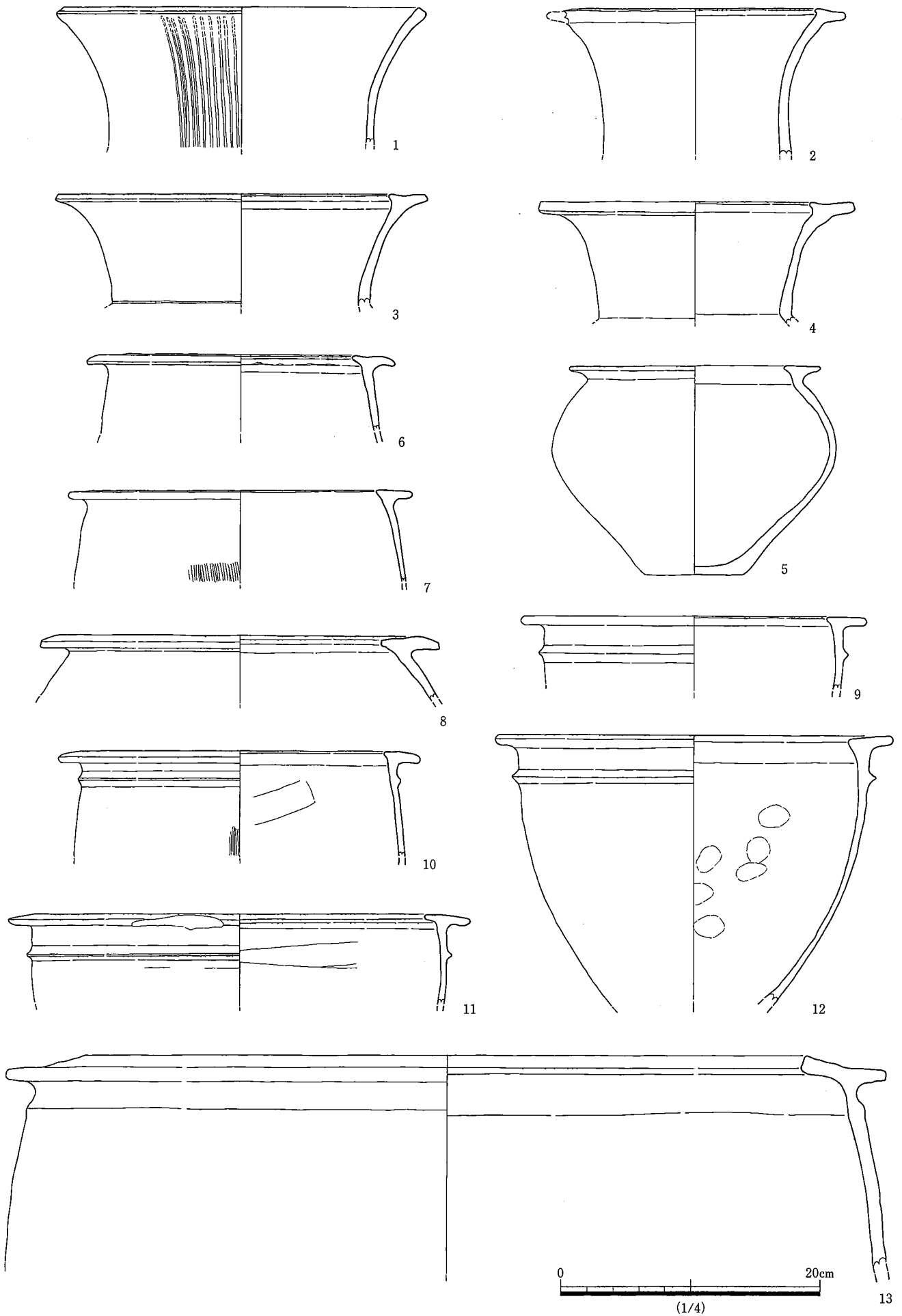
11は鉢と考えられる。口縁端部の一部を打ち欠いている可能性があり、この下には三角突帯を1条巡らせ、内面には横方向のナデの痕跡が残る。口縁部の復元径は35.6cm。

12は甕または鉢と考えられ、口縁部は内傾する逆L字形を呈し、この下には三角突帯を1条巡らせる。また、内面はナデ仕上げを施しており、指頭痕が多数みられる。口縁部の復元径は30.8cm。

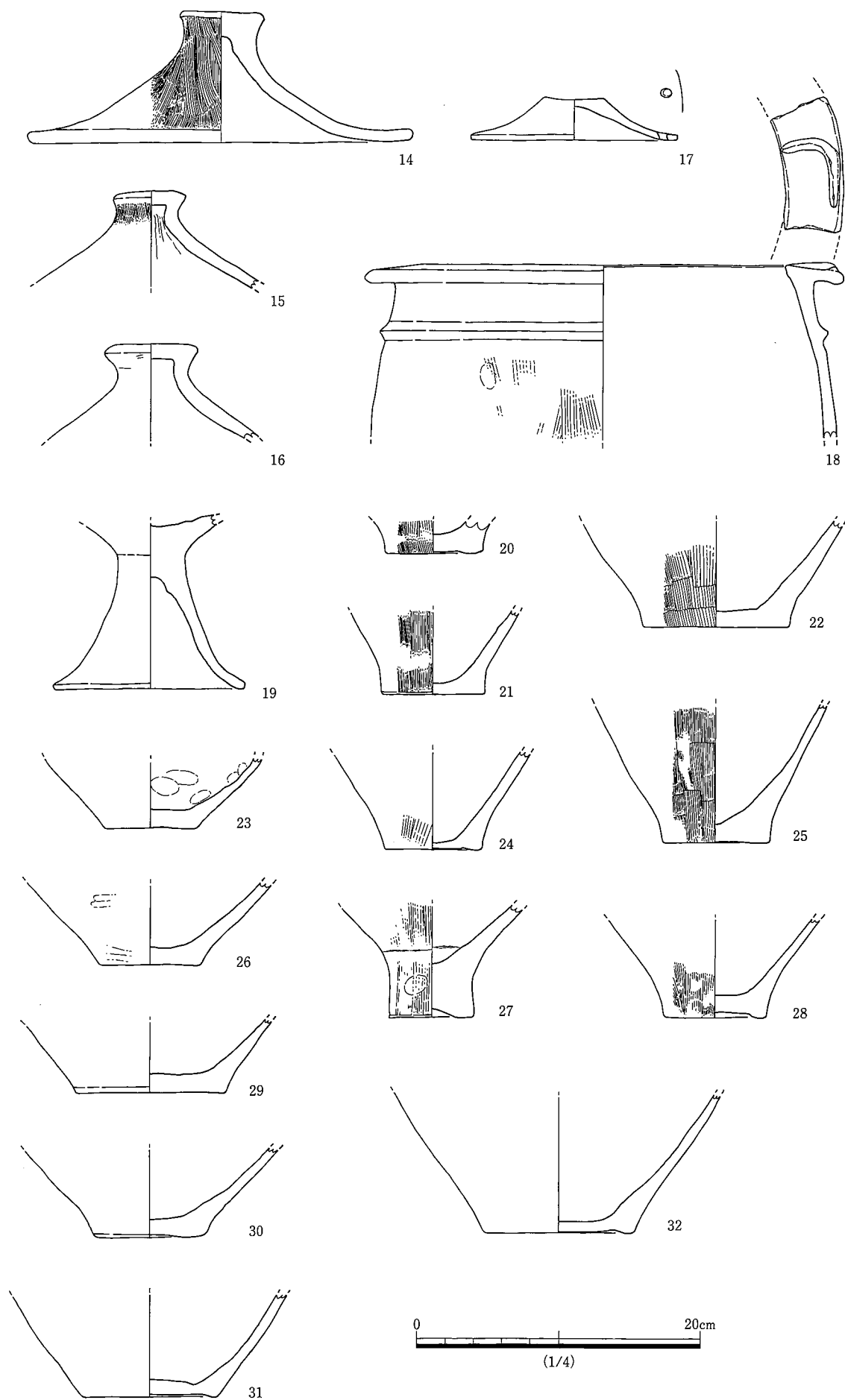
13は中型の甕棺と考えられ、T字形の口縁部が外傾する。内外面ともナデ仕上げが施されており、口縁部の復元径は68cm。

14～17は蓋である。

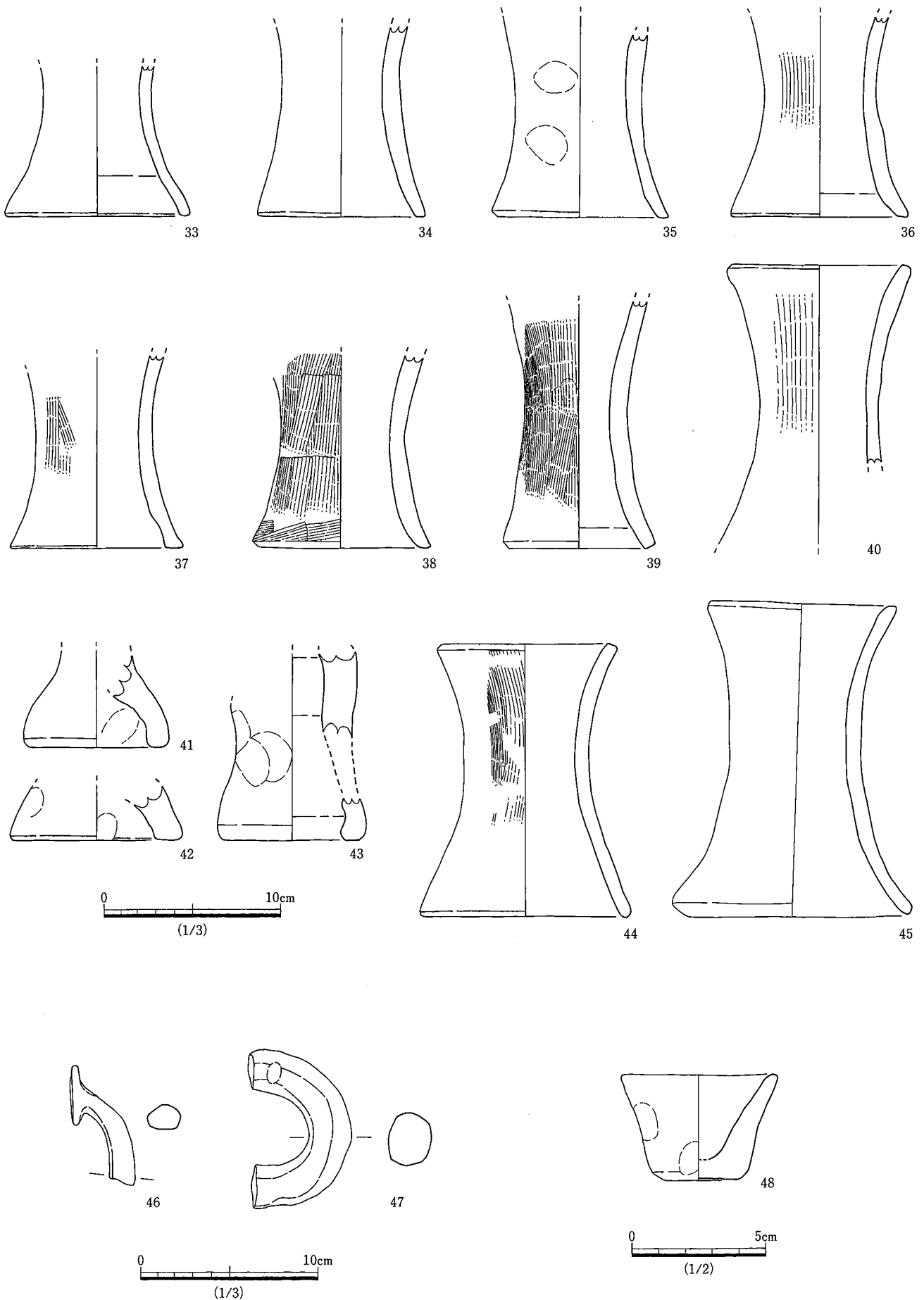
14は外面に縦および斜めのハケが施される。径27.2cm、器高9.3cm。



第45図 Ⅲ-E区 大溝 F区上層 出土遺物実測図1 (1/4)



第46図 Ⅲ-E区 大溝 F区上層 出土遺物実測図2 (1/4)



第 47 図 Ⅲ-E 区 大溝 F 区上層 出土遺物実測図 3 (1/2, 1/3)

15 は摘みの外面に縦方向のハケ目が残りに、内側に成形時についた皺がみられる。摘みの径は 5cm。

16 は摘みの外面に薄っすらとハケを押し当てた痕跡が残る。摘みの径は 6.6cm。

17 は端部の穿孔が 1ヶ所のみ残っており、器面は風化が進んでいる。径 14.6cm。

18 は甕で、口縁部の上端に鉤状の粘土紐を貼り付ける。口縁部の下には三角突帯を 1 条巡らし、胴部には縦ハケを行った後にナデ消しが施される。口縁部下の外面にはススが付着しており、2 次焼成を受けた可能性がある。口縁部の復元径は 33.9cm。

19 は高坏である。底部径 13.4cm。

20 ～ 32 は甕または壺の底部で、20 ～ 22、24、25、27、28 は底部側面に縦ハケが施される。

20 はやや上げ底で径は 6.8cm。

21 は外面にススが付着しており、2 次焼成を受けた可能性がある。底部径は 7.4cm。

22 の底部径は 10.3cm。

23 は内面に指頭痕が多く残る。底部径は 6.4cm。

24 の底部径は 7cm。

25 の底部径は 7.6cm。

26 は外面に部分的な横ミガキの痕跡が残る。底部径は 7.1cm。

27 は上げ底になっており、径は 6cm。

28 はやや上げ底で、径は 7.2cm。

29 ～ 32 は内面をナデ仕上げする。底部径は 29 が 10.6cm、30 が 7.8cm、31 が 9.6cm、32 が 10.4cm。

33 ～ 40、44、45 は器台である。

33 は裾部がやや内湾気味に広がる。底部径 10.3cm。

34 は裾部の広がりが少なく、筒形に近い。底部径 9.3cm。

35 は裾部がやや広がる。底部径 10cm。

36 は裾部が外に広がり、胴部中央付近に縦方向のハケ目が残る。底部径 10cm。

37 は裾部がやや広がり、端部が平坦で、胴部の中央付近に縦方向のハケ目が残る。底部径 9.7cm。

38 は裾部がやや広がる。外面全体にハケ目が残りに、胴部は縦ハケ、底部付近は斜め方向のハケ目が施される。底部径 10cm。

39 は細身の筒形で、胴部中央付近に縦ハケが残る。底部径 8.5cm。

40 は胴部に粗い縦ハケが残る。口縁径 10.3cm。

41 ～ 43 は支脚である。41 と 42 は裾部が内湾しながら広がり、43 は筒形を呈する。底部径は 41 が 8.1cm、42 が 9.6cm、43 が 8.3cm。

44 は口縁部と裾部の両側が広がり、胴部に縦方向のハケ目が残る。口縁径 10cm、底部の復元径 11.8cm、器高 15.4cm。

45 は裾部の一部分が欠けるが、完形に近い。口縁径 10.6cm、底部径 13.4cm、器高 17.9cm。

46 は把手で、断面が若干稜をもつ楕円形である。径は 1.3cm × 1.8cm。

47 は把手で、平面形態が半円を呈し、断面は丸みをもつ長方形である。径は 3cm × 2.4cm。山陰系の甕の把手部分と形態が似ているが、その場合は時期が下るため、流れ込みの可能性がある。

48 はミニチュアの鉢である。手捏ねによって成形されており、指頭痕が多数みられる。口縁の復元径は 5.8cm、底部径 3.1cm、器高 4cm。

大溝 G 区上層出土遺物 (第 48 ～ 53 図、図版 24、25)

1、3 ～ 5 は壺である。

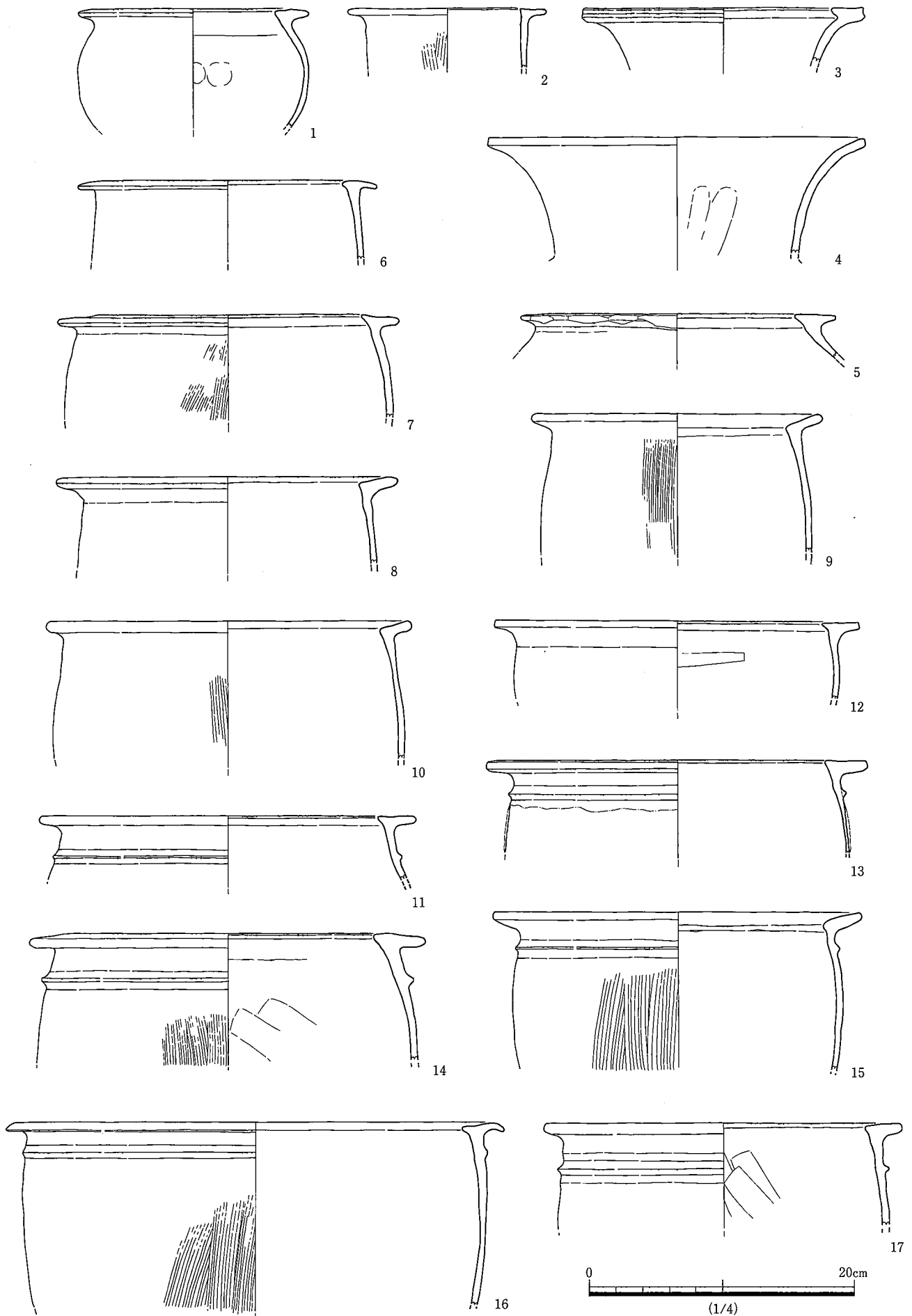
1 は胴部に丸みをもち、口縁部は逆 L 字形を呈する。内面にはナデに伴う指頭痕が残る。口縁部の復元径は 17.4cm

2 は口縁部が逆 L 字形で、胴部外面に縦ハケを施す。口縁部の復元径は 15cm。

3 は口縁部がやや未発達で、内側に張り出す。内外面共に横ナデを施す。口縁部の復元径は 21.4cm。

4 は内面にナデの痕跡が残る。口縁部の復元径は 28.6cm。

5 は口縁部を打ち欠く可能性がある。内外面とも横方向のナデを施す。口縁部の復元径は 24cm。



第 48 図 Ⅲ-E 区 大溝 G 区上層 出土遺物実測図 1 (1/4)

2、6～11、13～17は甕と考えられる。

6は口縁部が逆L字形を呈し、やや外傾する。口縁部の復元径は22.6cm。

7は胴部にやや丸みを帯び、外面に縦方向のハケ目が残る。口縁部の復元径は25.9cm。

8は口縁部が逆L字形で、内傾する。口縁部の復元径は25.9cm。

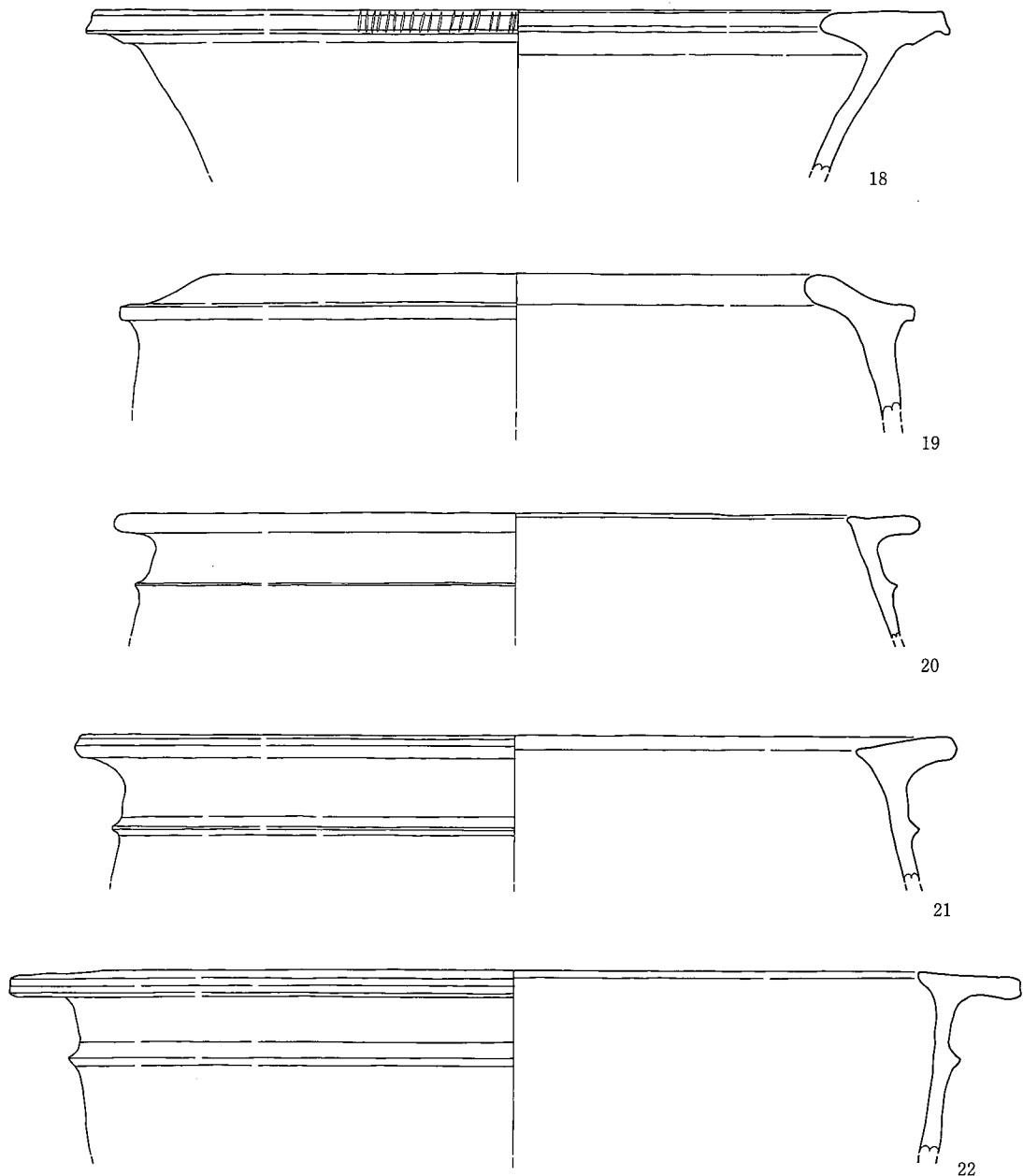
9は口縁部が逆L字形で、内傾し、外面には縦ハケを施す。口縁部の復元径は22.0cm。

10は口縁部が逆L字形で、内傾する。胴部には縦ハケが施される。口縁部の復元径は27.6cm。

11は口縁の下に低く細い三角突帯を1条巡らせ、全体にナデ調整を行う。口縁部の復元径は28.6cm。

12は鉢の可能性もある。胴部が内湾しており、内面にはナデの痕跡が残る。口縁部の復元径は27.8cm。

13は口縁部の下に低く細い三角突帯を1条巡らせる。突帯下の外面は剥落しており、2次焼成を受



0 20cm

(1/4)

第49図 Ⅲ-E区 大溝 G区上層 出土遺物実測図2 (1/4)

けた可能性がある。口縁部の復元径は 28.8cm。

14 は口縁部の下に三角突帯を 1 条巡らせる。突帯下の外面には縦方向のハケ目が施され、内面にはナデの痕跡が残る。口縁部の復元径は 30cm。

15 は口縁部が逆 L 字形で、内傾する。口縁部の下には三角突帯を 1 条巡らせ、この下の外面には縦方向のハケ目が残る。口縁部の復元径は 28.2cm。

16 は口縁部の下に低く細い三角突帯を 1 条巡らせ、この下の外面に縦方向のハケ目を施す。口縁部の復元径は 38cm。

17 は口縁の下に三角突帯を 1 条巡らせ、この上下には強くナデ付けた痕跡が残る。内面にはナデの痕跡がみられる。口縁部の復元径は 27.2cm。

18 は壺で、口縁部が T 字形で、端部には縦方向のキザミ目を施す。口縁部の復元径は 48.8cm。

19 は甕で、口縁部が内側に大きく張り出し、外傾する。口縁部の復元径は 45cm。

20 と 21 は甕で、口縁部の下に低く細い三角突帯を 1 条巡らせる。口縁部の復元径は 20 が 45.4cm、21 が 50cm。

22 は甕または鉢で、口縁部の下に低く細い三角突帯を 1 条巡らせる。口縁部の復元径は 57cm。

23 は鉢と考えられ、底部付近から口縁に向かって体部が直線状に開く。外面は縦ハケで、口縁部から内面にかけてはナデを行う。口縁部の復元径は 24.6cm。

24 ~ 28 は高坏である。

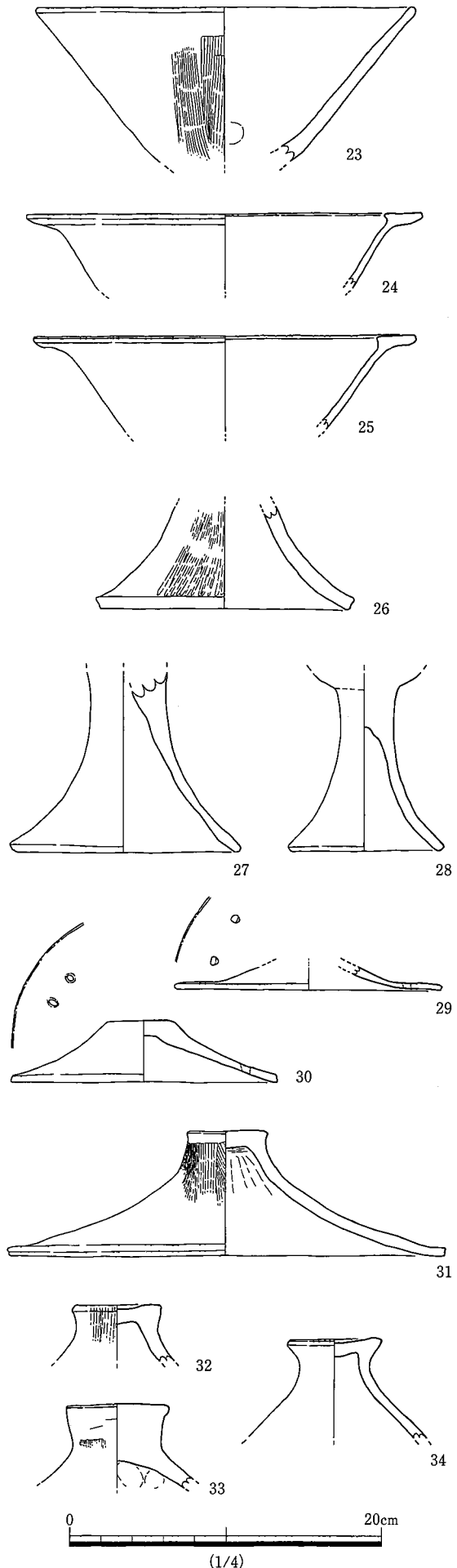
24 と 25 は器面の残りが悪く、調整は不明。口縁部の復元径は 24 が 25.6cm、25 が 24.8cm。

26 は裾部が外側に開き、外面には縦方向のミガキを施す。底部径は 16.8cm。

27、28 は器面の残りが悪く、調整は不明。27 は裾部がやや開く。底部径は 14.8cm。28 は裾部の開きが小さい。底部径は 10cm。

29 ~ 34 は蓋である。

29 はやや平坦な器形で、2 つを 1 単位とする穿孔が施される。復元径は 17.5cm。



第 50 図 III-E 区 大溝 G 区上層 出土遺物実測図 3 (1/4)

30は天井部から口縁部にかけてやや直線状に開き、2つを1単位とする穿孔が施される。径は17.2cm。

31は摘みの下の外面に縦方向のハケ目があり、内面には皺がみとめられる。復元径は28.4cm。

32と33は摘みに縦ハケがみられ、34は風化のため確認できない。33は摘み部の器壁が厚い。

35～51は壺または甕の底部である。

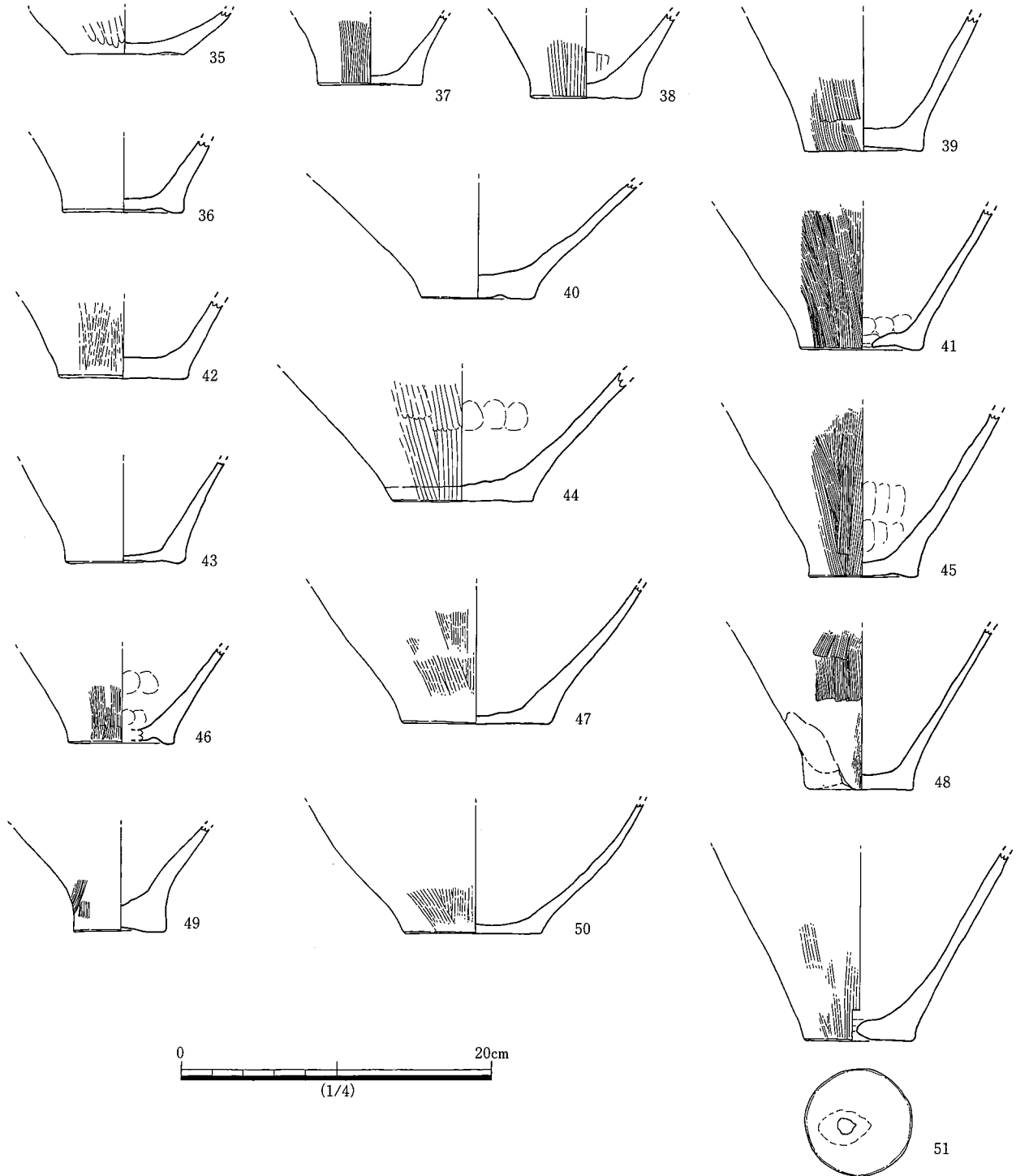
35は側面に粗いミガキが残る。底部径は7.6cm。

36は底面がやや上げ底である。径は7.9cm。

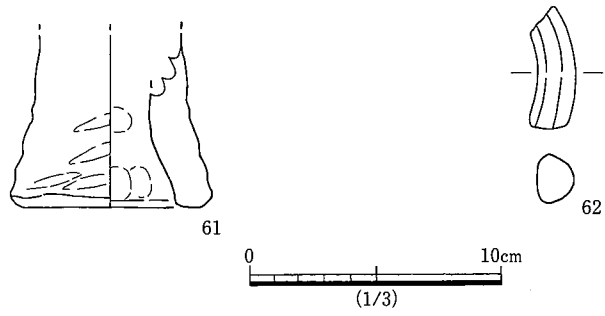
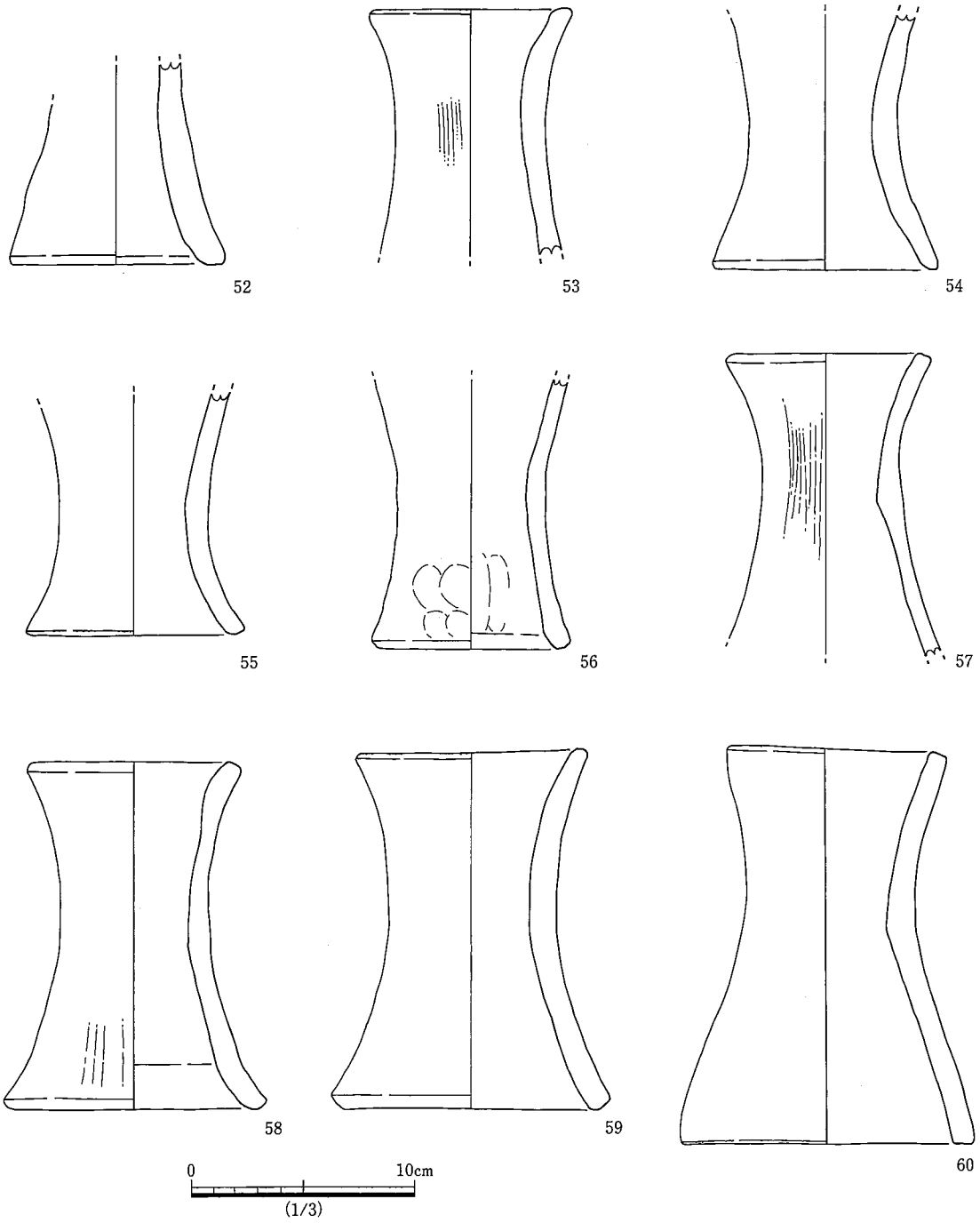
37は外面に縦方向のハケ目があり、底面の近くは押さえ、内面はナデを行う。底部径は6.8cm。

38は外面に縦ハケを施し、内面にはナデの痕跡がみられる。底部径は7.2cm。

39は底部側面に縦ハケがあり、内面はナデ調整



第51図 III-E区 大溝 G区上層 出土遺物実測図4 (1/4)



第 52 図 III-E 区 大溝 G 区上層 出土遺物実測図 5 (1/3)

である。底面はやや上げ底で、径は7.6cm。

40は底部から胴部に向かって直線状に開く。調整は風化により不明である。底部径は7.7cm。

41は底面の中央付近に焼成後の穿孔を施す。穿孔はやや小さめで径が1cm×1.2cm。外面には縦ハケが施され、内面の底部付近には指頭痕が残る。底面はやや上げ底で、径は8cm。

42は外面に縦ハケが施され、内面はナデ仕上げである。底部径は8.6cm。

43は底面がやや薄く、径は7.8cm。

44は外面に縦方向のミガキが施され、内面はナデに伴う指頭痕が残される。底部径は9.1cm。

45は外面に縦ハケが施され、内面の底部近くにはナデに伴う指頭痕が残される。底部径は7.2cm。

46は外面に縦ハケと押さえの痕跡が残り、内面に指頭痕がみられる。底面はやや上げ底で、径は7cm。

47は外面に薄っすらと縦ハケが残る。底部径は9.6cm。

48は底部側面が粘土の接合部付近で剥離する。外面には縦ハケが施され、内面はナデ仕上げである。底部径は7.2cm。

49は底部が分厚く、外面には縦ハケが残り、内面はナデを行う。底面はやや上げ底で、径は6.2cm。

50は外面に縦ハケが残る。底部径は9cm。

51は底面の中央部からやや片寄った位置に焼成後の穿孔を施す。外面は縦ハケで、内面はナデ仕上げである。底部径は7.2cm。孔径は1cm×1.2cm。

52～60は器台である。

52は裾部に反りが少なく、やや直線状に開く。底部径は9.4cm。

53は口縁部の反りがやや少なく、外面の中央付近には縦ハケが残る。口縁径は9cm。

54は裾部が外へ開く。底部径は10.2cm。

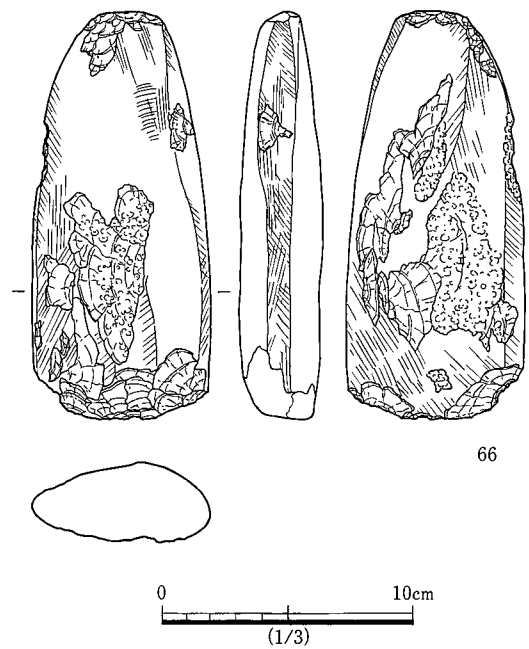
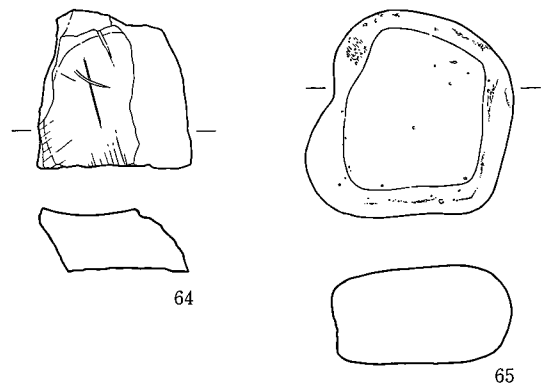
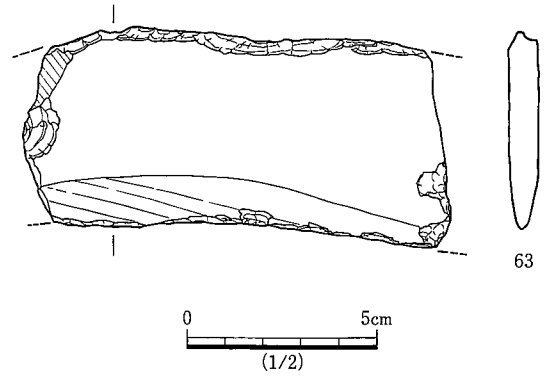
55は端部を押さえる。底部径は9.7cm。

56は裾部の広がりが少なく、内外面には指頭痕

が残る。底部径は8.8cm。

57は中央付近で屈曲し、外面には縦ハケが残り、口縁部から内面にかけてはナデを行う。口縁径は9.1cm。

58は口縁部と裾部が共に若干の反りをもちなが



第53図 Ⅲ-E区 大溝 G区上層 出土遺物実測図6 (1/2、1/3)

ら広がる。両端部は押さえて面取りをし、外面の裾部にはハケ目が一部残る。口縁径 9.4cm、底部の復元径 11.7cm、器高 15.4cm。

59 は口縁部と底部が相似形の開きをもつ。口縁径 10.3cm、底部径 12.4cm、器高 15.9cm。

60 は内面に屈曲部をもち、裾部がやや内湾気味に広がる。裾部の 2ヶ所が半円形に欠けており、打ち欠きの可能性がある。口縁径 9.7cm、底部径 13cm、器高 17.7cm。

61 は支脚で、裾部がやや内湾する。外面には成形時に指全体を押し当てたような痕がみられ、内面には指先の痕が残る。底部の復元径は 7.5cm。

62 は把手の一部と考えられ、全体に丹塗りが施されている。径は 1.8cm × 1.4cm

63 は石鎌で、刃部と表裏面には軽い研磨を加え、背は調整剥離の状態である。安山岩製。長さ 5.3cm、幅 12cm、厚さ 8mm、重量 102.63g。

64 は荒砥石であり、表面のみ残る。砂岩製。長さ 6.2cm、幅 6cm、厚さ 2.1cm、重量 114.79g。

65 は敲石と考えられ、表面および側面に敲打痕がみられる。花崗岩製。長さ 8.2cm、幅 8.1cm、厚さ 3.9cm、重量 447.49g。

66 は石斧で、刃部が折損する。全体的に研磨を施すが、部分的に敲打痕が残っており、仕上げが荒い。片岩系の石材を使用。長さ 16.2cm、幅 7.1cm、厚さ 3.3cm、重量 606.98g。

大溝 G 区中層出土遺物 (第 54 図、図版 26)

1 は肩部と頸部の外面の一部に丹塗りの痕跡が薄っすらと残っており、内面では確認できない。しかしながら、頸部内面には横方向のミガキが施されているため、丹塗りであった可能性がある。外面の頸部付け根には 1 状の沈線が巡る。口縁径は 24.6cm。

2～6 は甕または壺の底部である。

2 は底面が上げ底で、径は 7.4cm。

3 はやや上げ底で、径は 5.9cm。

4 は内面がナデ調整である。やや上げ底で、径は

7.6cm。

5 は外面の底部側面付近に縦ハケが残り、内面はナデ仕上げを行う。底部の径は 7.2cm。

6 は底面のやや片寄った位置に焼成後の穿孔が施される。外面は縦ハケで、内面にはナデに伴う指頭痕が残される。底部径は 7.8cm で、孔径は 2cm。

7 は器台で、裾部があまり広がらず、筒形に近い。胴部の外面に縦ハケが施され、底部付近ではナデ消される。底部径は 13.2cm。

8 は支脚で、裾部が L 字形に折れ曲がり、外へ張り出す。手捏ねによって成形されているため、指頭痕が多く付く。底部径は 14.2cm。

大溝 G 区下層出土遺物 (第 54 図、図版 26)

9 は甕の底部で、外面に縦ハケが施され、内面はナデに伴う指頭痕が残される。底部径は 7.8cm。

10 は甕で、胴部が広がらず、細長い。口縁部は逆 L 字形を呈し、ほぼ水平で、端部は軽く押さえる。外面には縦ハケを施し、口縁部の付け根付近から内面にかけてはナデを行う。口縁径 18.7cm、底部径 6.4cm、器高 26.5cm。

11 は器台で、上下両端が共に大きく外反する。口縁径 9.9cm、底部径 11.9cm、器高 15.8cm。

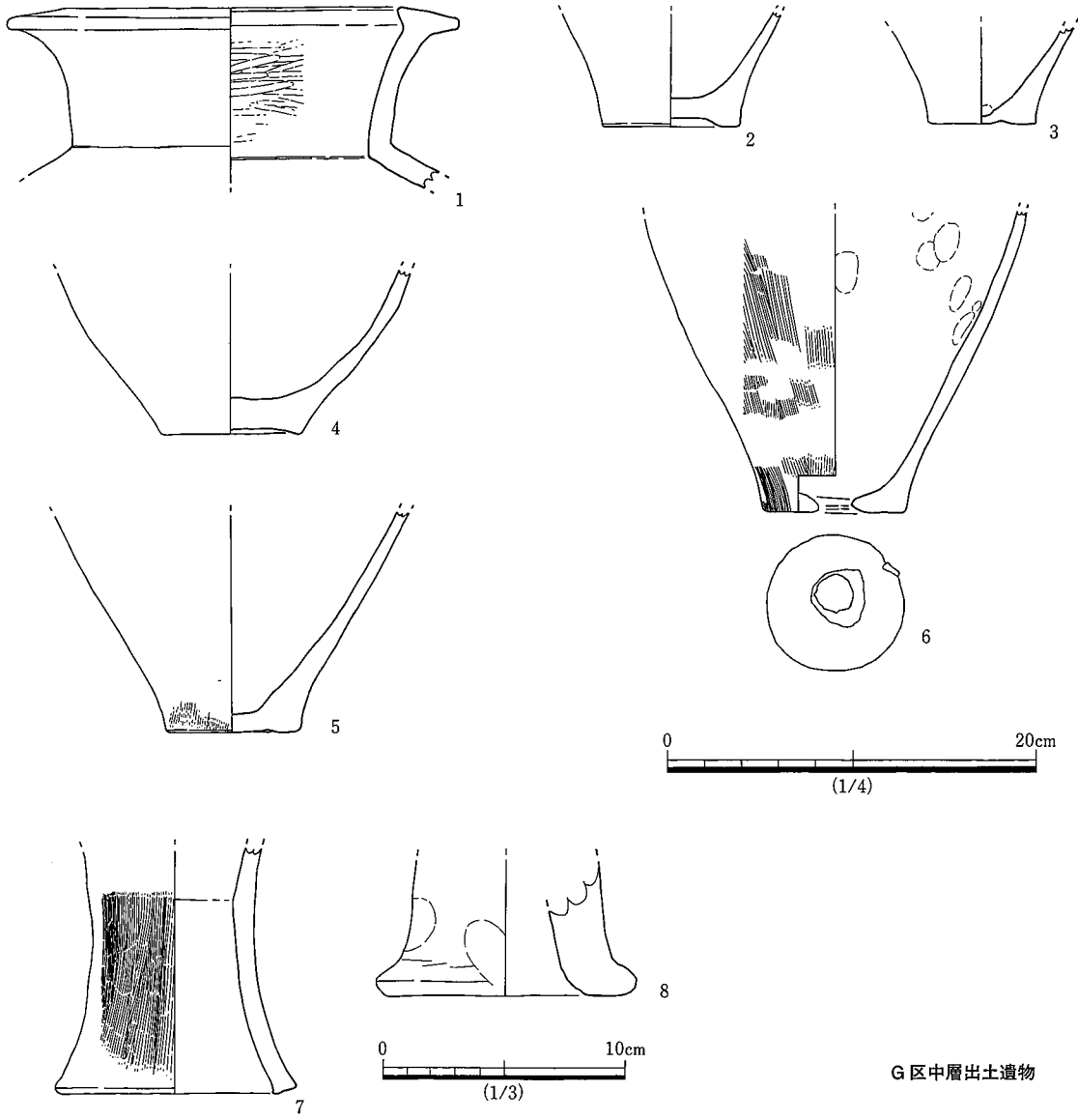
大溝 I 区上層出土遺物 (第 55～61 図、図版 27～29)

1～11 は壺である。

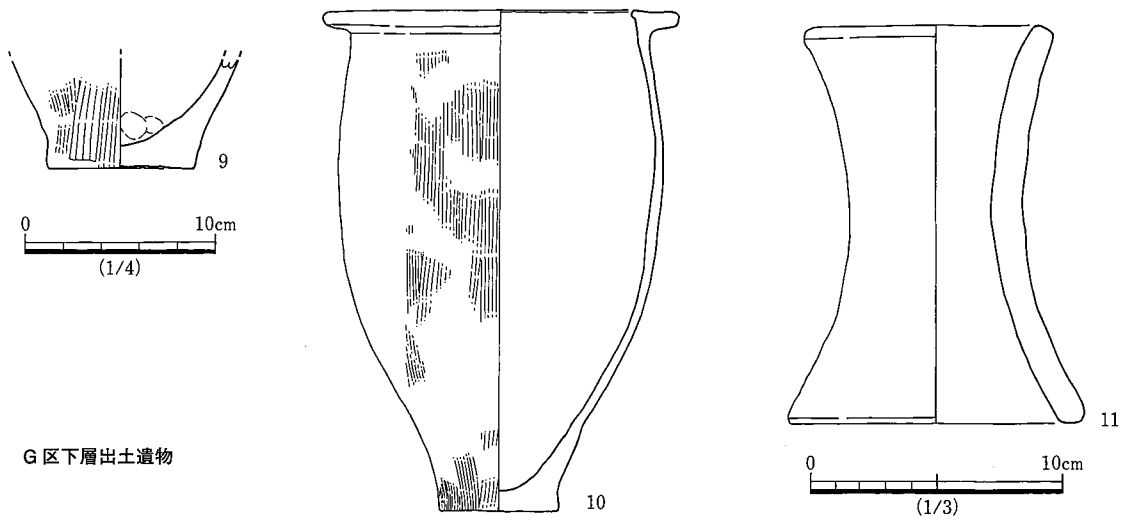
1 は口縁上端から下端にかけて 2 つを 1 単位とする穿孔が施され、このうちの 1 つには穿孔を途中で中断し、位置をずらして開け直した痕跡がみられる。口縁部の復元径は 14cm。

2 は口縁が逆 L 字形で、口縁上端から下端にかけて 2 つを 1 単位とする穿孔が施され、1 と同様に開け直しを行う。口縁部の復元径は 18cm。

3 は口縁が逆 L 字形で、内傾し、口縁上端から下端にかけて 2 つを 1 単位とする穿孔が施される。外面から口縁上端にかけてと内面の下半部分が黒変しているため、2 次焼成を受けた可能性がある。口縁

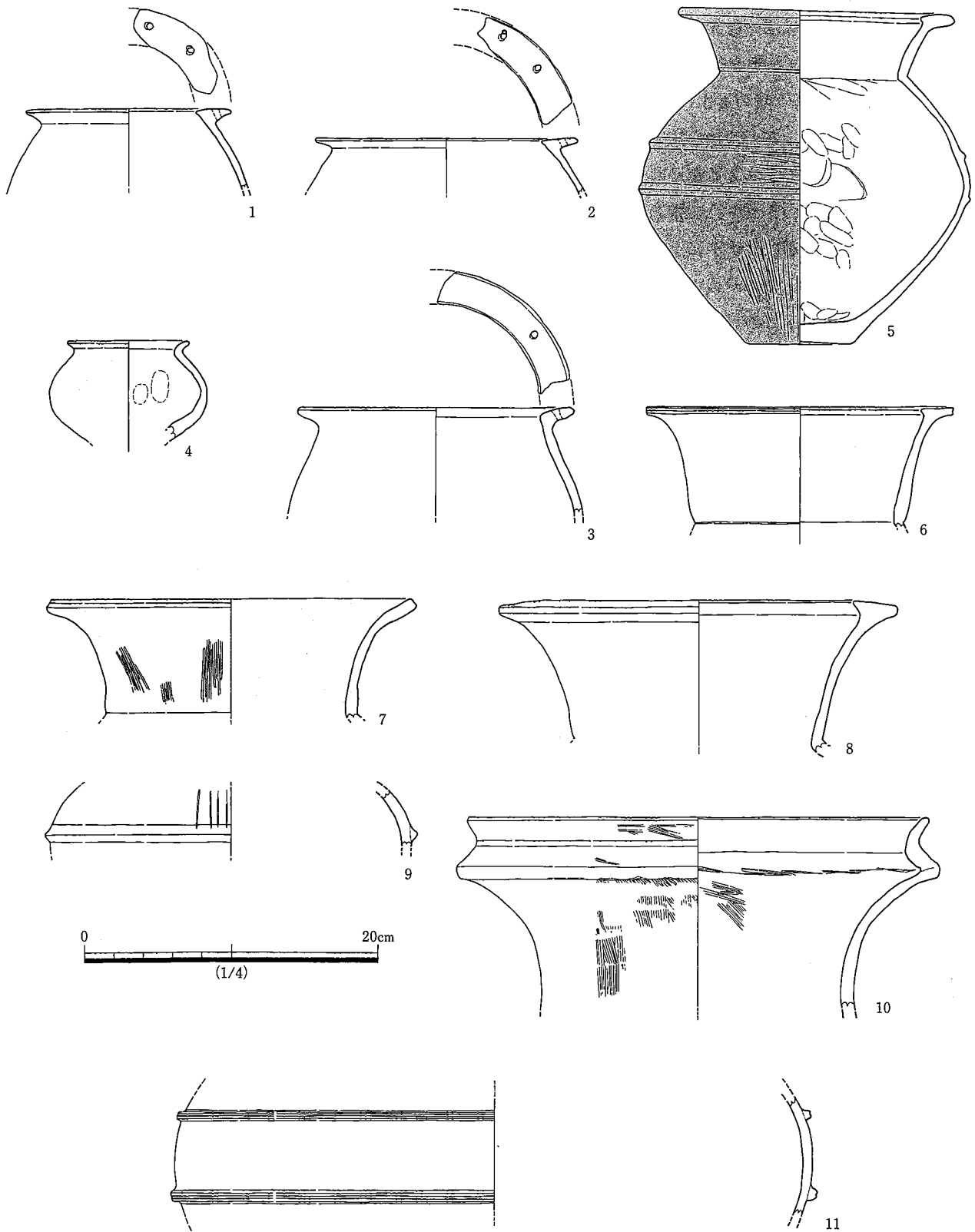


G区中層出土遺物



G区下層出土遺物

第54図 III-E区 大溝 G区中層・下層 出土遺物実測図 (1/3、1/4)



第 55 図 Ⅲ-E 区 大溝 I 区上層 出土遺物実測図 1 (1/4)

部の復元径は 19cm。

4 は外面に丹塗りが施され、内面にはナデに伴う指頭痕が残る。口縁部の復元径は 8.2cm。

5 は口縁が半分ほど失われているがほぼ完形である。胴部に 2 本の低く稜のあまい三角突帯を巡らせ、頸部の付け根には 1 条の沈線を施す。内外面とも風化が進んでおり調整がみえる箇所は少ないが、外面の下位には縦方向のミガキ、突帯間には横方向のミガキが施され、内面にはナデによる指頭痕が多く残る。また、外面のミガキが残っている部分は暗灰色を呈しており、黒塗りの可能性がある。口縁部の復

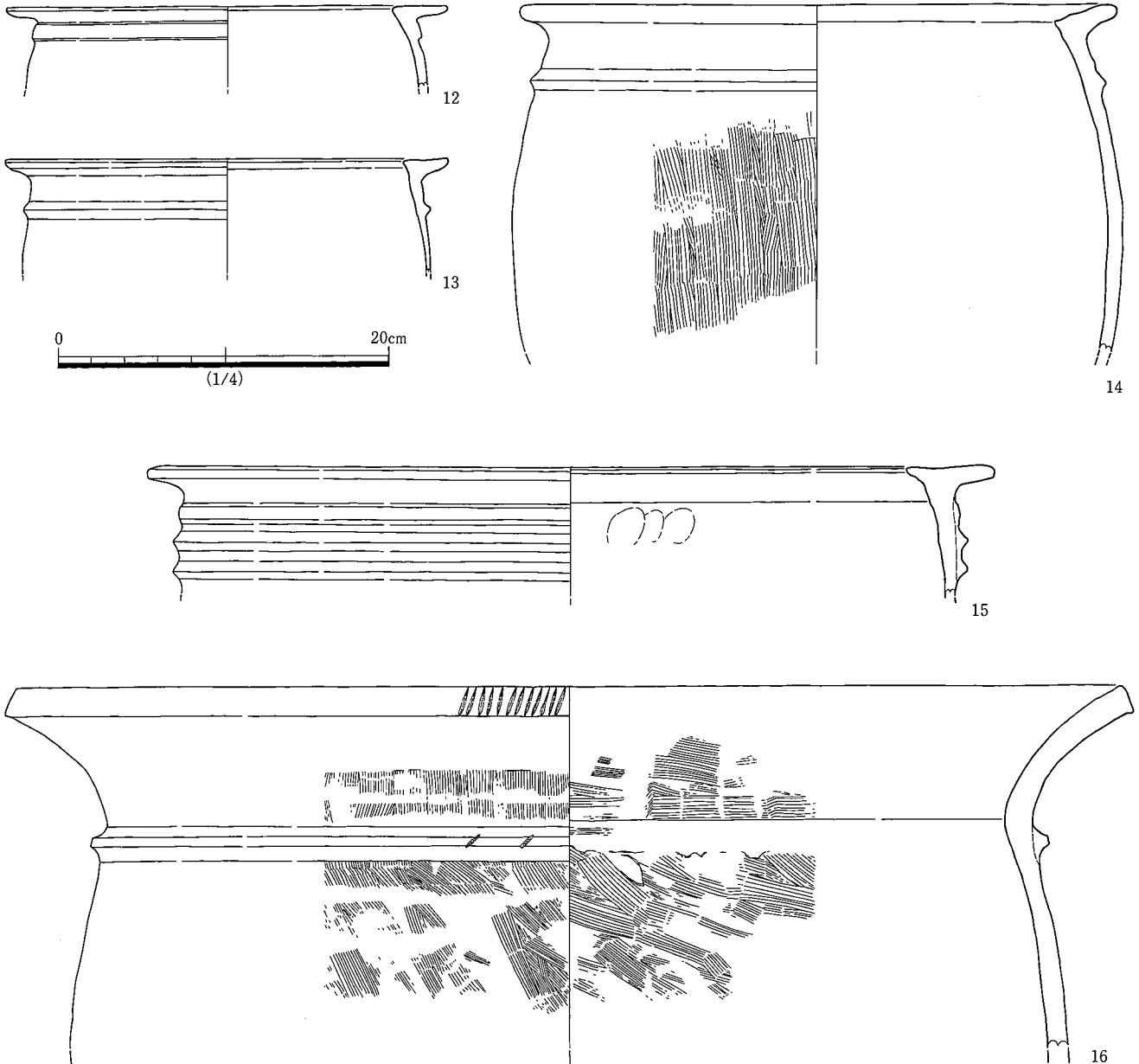
元径は 19cm、底部径 7.2cm、器高 23cm。

6 は頸部の付け根に沈線を 1 条巡らせており、内面には成形時にできた縦の皺が消しきれずに薄っすらと残る。口縁部の復元径は 21.2cm。

7 は頸部の上位付近で屈曲し、外側へ広がる。内外面とも丹塗りが施され、外面には縦方向のミガキが部分的に残る。口縁部の復元径は 25.3cm。

8 は外面に縦ミガキ、内面に横ミガキが施されているようだが、風化のため薄っすらとしかみえない。口縁部の復元径は 27.4cm。

9 は胴の中位に 1 条の三角突帯を巡らせ、肩部に



第 56 図 Ⅲ-E 区 大溝 Ⅰ区上層 出土遺物実測図 2 (1/4)

4 条の沈線を引く。胴部の復元径は 25.4cm。

10 は袋状口縁が変化したものと考えられる。頸部外面には縦方向のハケが施され、口縁部は横ハケ、頸部内面には斜め方向のハケがみられ、口縁の屈曲部の内側には粘土の接合痕が残る。口縁の復元径は 31.8cm。弥生時代終末期に属するものと思われ、大溝から出土する大部分の土器と比べて時期が下がるため、他の遺構からの混入品と思われる。

11 は胴部に丸みをもち、2 条の M 字突帯を巡らせる。胴部の復元径は 43.7cm。

12 は口縁部の付け根に低く平坦で幅広の突帯を 1 条巡らせる。口縁部の復元径は 26.8cm。

13 は口縁部の下に三角突帯を 1 条巡らせる。口縁部の復元径は 26.8cm。

14 は口縁の下に三角突帯を 1 条巡らせる。突帯下の外面には縦ハケが施され、突帯から内面にかけてはナデ調整を行う。口縁下の外面にはススが付着しており、2 次焼成を受けた可能性がある。口縁部の復元径は 36.4cm。

15 は口縁部の下に 3 重の突帯を巡らせ、内外面共にナデ調整を行う。口縁部の復元径は 51.7cm。

16 は中型の甕棺と思われる。口縁部は外反し、端部は押さえてやや斜め方向のキザミ目を施す。また、口縁部の付け根には台形状の突帯を巡らせ、この頂部にもハケの原体を押し当てたキザミ目を施す。突帯の上位は縦ハケ、下位は縦ハケの後、粗いナデ消しを行い、口縁部の内外面上位はナデ仕上げ、これより下位は横ナデを行い、体部の内面は斜めまたは横方向のハケを施す。口縁部の復元径は 68.6cm。時期が下がるため、混入品の可能性がある。

17～20 は蓋である。

17 は摘みの上面が窪んでおり、内外面ともナデ仕上げを施す。摘みの径は 5.1cm。

18 は摘みの上面がやや窪む。摘みから下の体部は内湾しながら広がるが、口縁部付近で L 字形に外へ折れ曲がる。摘みの外面から体部にかけては縦ハケが施され、口縁部付近と内面の下部は横ハケ

で、内面の天井部にはナデに伴う指頭痕が残される。口縁径は 25.4cm、器高は 10.9cm。

19 は完形で、口縁に向かって直線状に広がり、台形となる。2 つを 1 単位とする穿孔が対角線上に配置される。口縁径は 17.5cm、器高は 5.8cm。

20 はほぼ完形で、天井部の外面がやや窪み、体部が若干外反しながら広がる。19 と同様に 2 つを 1 単位とする穿孔が対角線上に配置される。口縁径は 17.5cm、器高は 3.4cm。

21 は鉢で、口縁部はやや小さめの逆 L 字形を呈し、口縁の下には三角突帯を 1 条巡らせる。口縁部の復元径は 35.8cm。

22～25 は高坏である。

22 は内外面共に丹塗りが施される。外面の一部には横方向のミガキが残り、内面には横および斜め方向のミガキがみられる。口縁径は 25.7cm。

23 は外面に丹塗りが施される。外面にはミガキの痕跡がみられ、底部から脚部内面にかけてはナデを施しており、上部には皺が残る。底部径は 11cm。

24 は裾部があまり広がらない。底部径は 10.4cm。

25 は脚部の付け根に縦方向のミガキが残り、脚部の内面には皺がみられる。

26 は脚台付甕と考えられる。甕の外面は横方向のタタキをナデ消しており、脚の接合部付近にはヘラなどの工具を使用した縦方向のナデの痕がみられる。脚部径は 9.6cm。

27 は内外面ともナデ仕上げを行う。底部径 8cm。

28～32 は底面に焼成後の穿孔をもつ。

28 は底面のやや片寄った位置に焼成後の穿孔を施す。底部の側面は縦ハケで、内面はナデ調整を施す。底部径は 7.4cm、孔径は 1.6cm × 1.4cm。

29 は底面の中央付近に外面から内面へ向かって焼成後の穿孔が行われる。外面の底部側面の上方と内面にススが付着しており、2 次焼成を受けた可能性がある。底部径は 6.9cm、孔径は 1.5cm × 1.3cm。

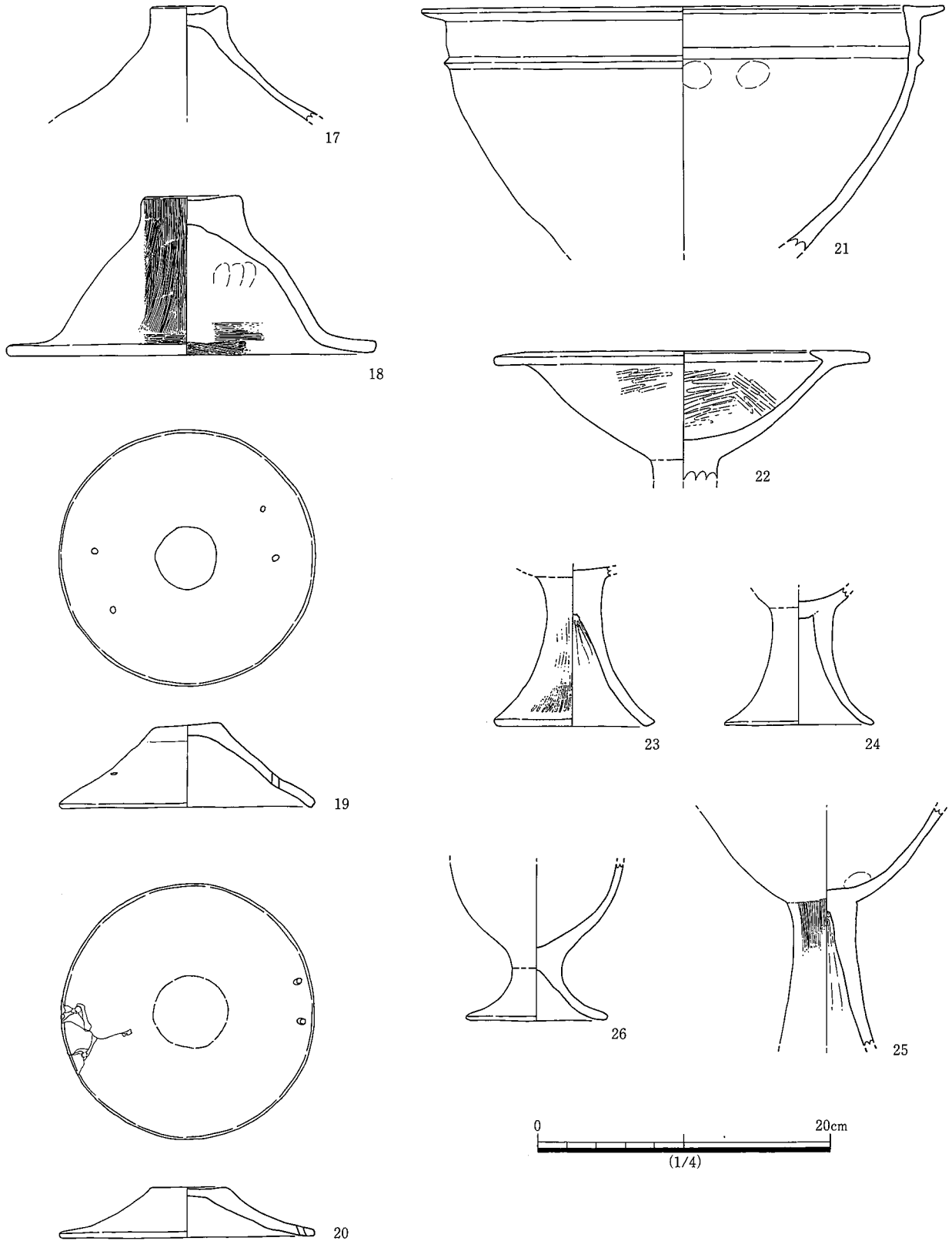
30 は底面のやや片寄った位置に外面から内面に向かって焼成後の穿孔が行われる。底部径は

9.1cm、孔径は1.9cm × 1.6cm。

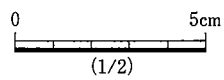
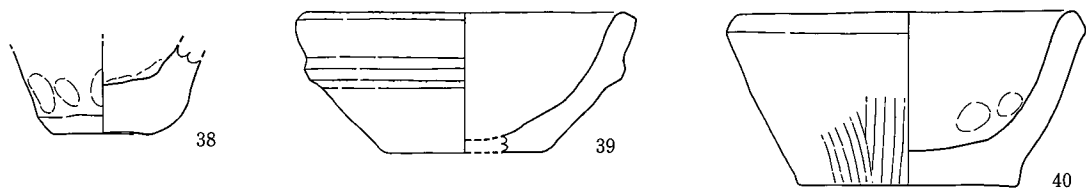
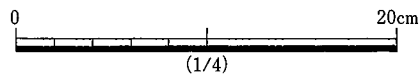
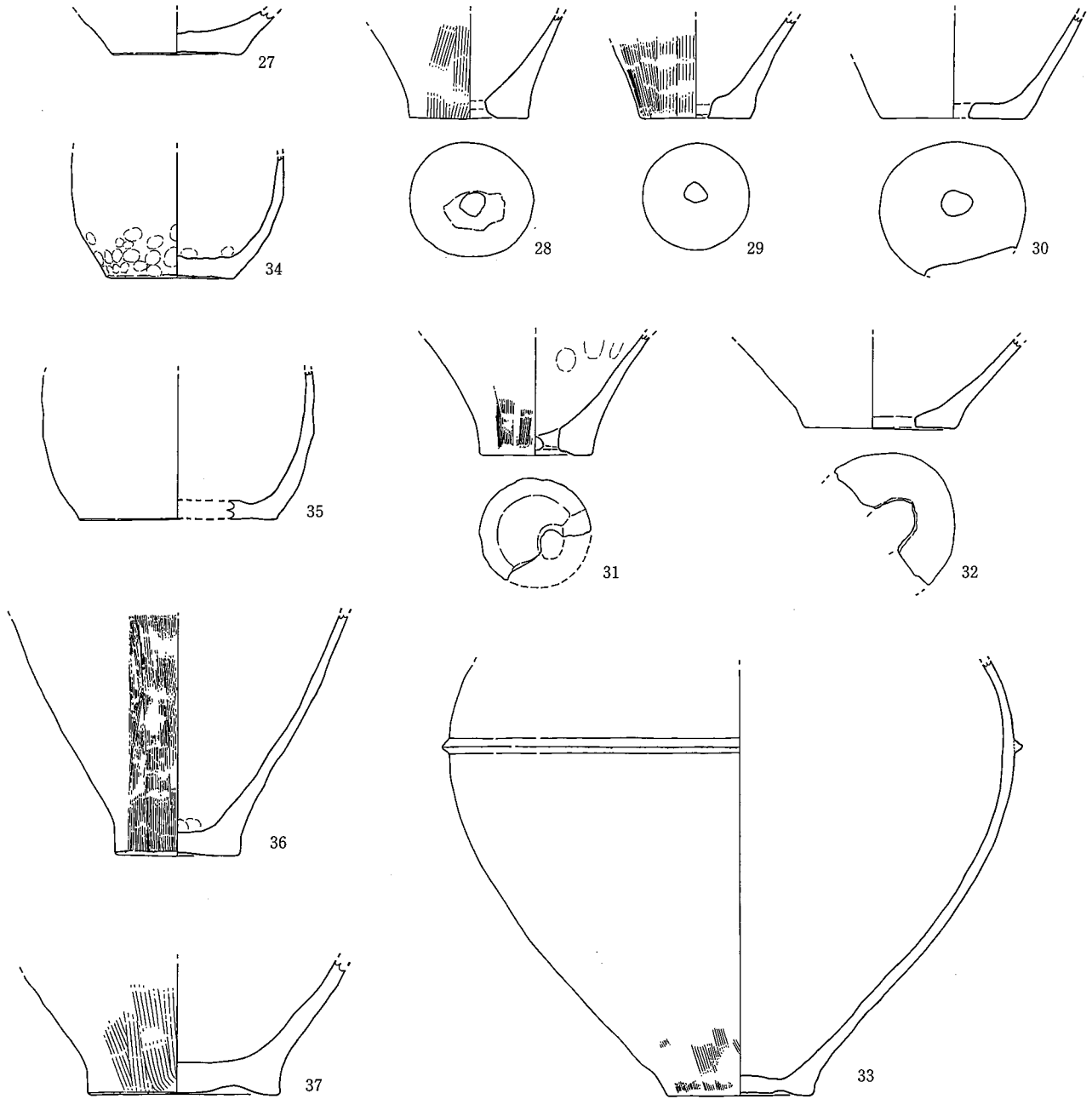
31は底部の片寄った位置に焼成後の穿孔が行われており、現状では孔の半分以上が欠ける。外面に

は縦ハケ、内面にはナデに伴う指頭痕が残る。底部径は6.8cm、孔径は1.6cm。

32は底面の中央付近に大きめの焼成後穿孔が施



第57図 Ⅲ-E区 大溝 1区上層 出土遺物実測図3 (1/4)



第 58 図 Ⅲ-E 区 大溝 I 区上層 出土遺物実測図 4 (1/2、1/4)

されており、孔の半分近くが欠ける。底部の復元径は9.3cm、孔径は2.8cm。

33は壺の胴部から底部にかけてで、胴の中央部に細めの三角突帯を1条巡らせる。底部付近には縦方向のハケ目が残っており、底面はやや上げ底となる。底部径は9cm。

34と35は鉢の胴部から底部にかけてである。34は内外面共ナデ調整が行われており、底部側面や、内面には指頭痕が多く残る。底部径は7.8cm。35の底部の復元径は12.2cm。

36は外面に縦ハケを施し、部分的に粗いナデ消しを施す。内面はナデ仕上げで、底部付近に指頭痕が残る。底部径は7.6cm。

37はやや上げ底で、外面は縦ハケ、内面はナデが施される。底部径は11.8cm。

38は内外面に指頭痕が多数みられる。底部径3.7cm。

39と40はミニチュアの鉢である。

39は全体的にナデ調整で、口縁端部を押さえによって面取りし、外面には低い突帯を1条巡らせる。口縁部の復元径は8.9cm、底部の復元径は4.2cm、器高は3.7cm。

40は全体的にナデ仕上げを施しており、内面には指頭痕が残る。また、外面の底部側面付近には縦方向のハケ目が残される。口縁径9.4cm、底部径5.8cm、器高4.5cm。

41～44、46～56は器台である。

41は口縁部があまり広がらず筒形を呈し、胴部の内面中央付近で屈曲する。外面は縦ハケを施し、口縁端部は押さえる。口縁径は7.6cm。

42は口縁部が外側へやや広がる。外面は縦ハケを施し、口縁部付近から内面にかけてはナデを施す。口縁径は8.4cm。

43は口縁部が外反する。胴部中位には縦ハケが施され、口縁部付近は横ナデ、内面はナデ調整を行う。口縁径は8.8cm。

44は胴部に縦ハケが残り、口縁端部は押さえる。

口縁部の復元径は9.8cm。

45は脚台と考えられる。外面は縦方向のハケ目が施され、底部付近から内面にかけては横方向にナデを行う。外面は丹塗りであった可能性がある。底部径は9.1cm。

46は底部の復元径が8.6cm。

47は底部が大きく外反しており、胴の中央部には縦ハケと共に成形時に付いた指頭痕が残る。また、内面には皺が残っており、仕上げが粗い。底部径は9.2cm。

48は外面に縦ハケが残る。底部径は8.8cm。

49と50は底部がほぼ直線状に開く。いずれも縦方向の粗いハケを外面に施す。底部径は49が10.1cm。50が9.8cm。

51は底部が外反する。底部径は10.2cm。

52は口縁部が大きく外反する。口縁径は9.7cm。

53は胴部が太めで、底部がやや外反気味に開く。底部の復元径は11cm。

54は口縁と底部があまり広がらず、器壁が厚い。口縁径7.3cm、底部径8.3cm、器高12.5cm。

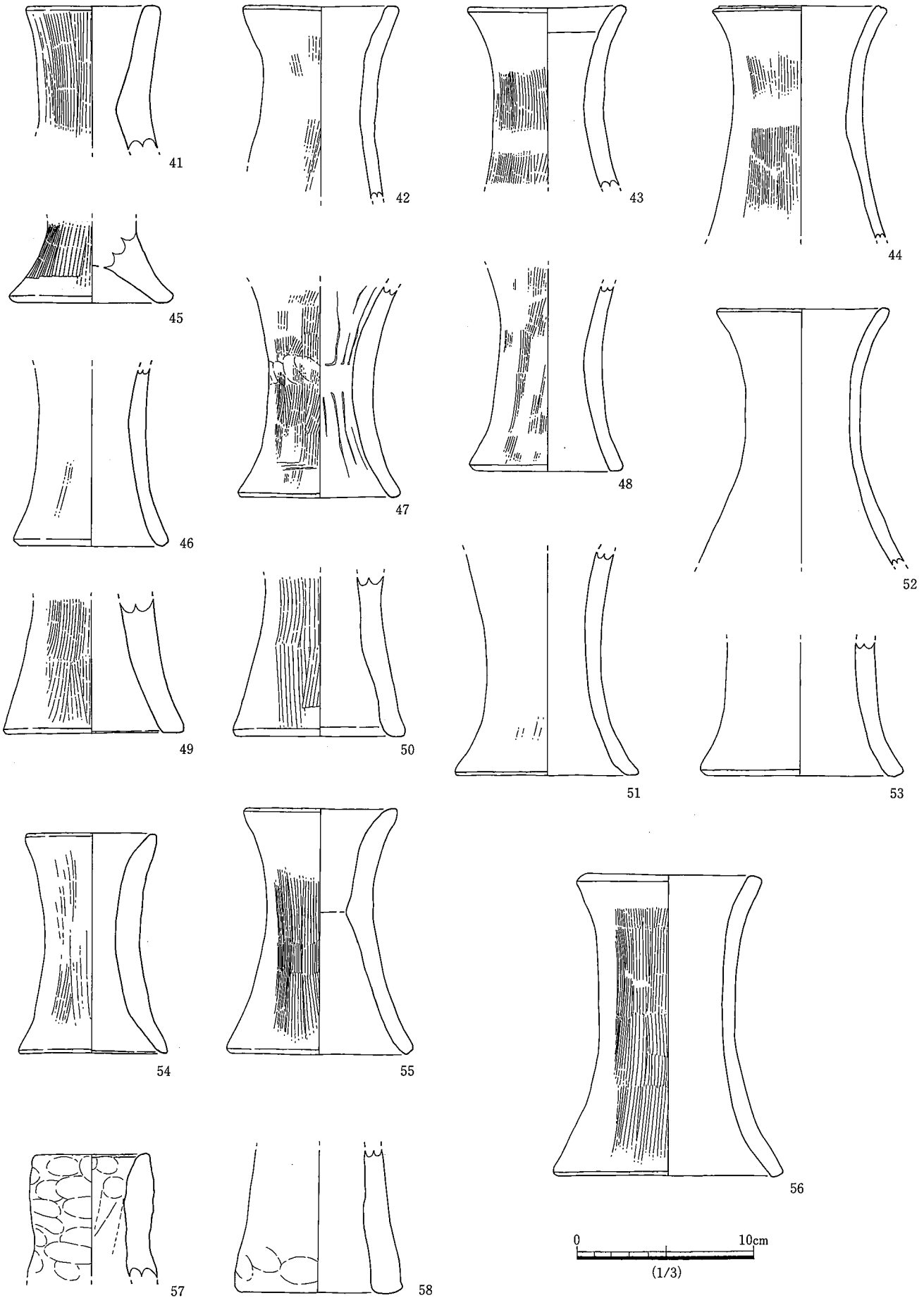
55は胴部内面の中央に屈曲部をもち、両端が大きく外反する。口縁径8.2cm、底部径10.4cm、器高13.8cm。

56は完形で、口縁部の反りがやや小さい。口縁径10.5cm、底部径12.9cm、器高16.9cm。

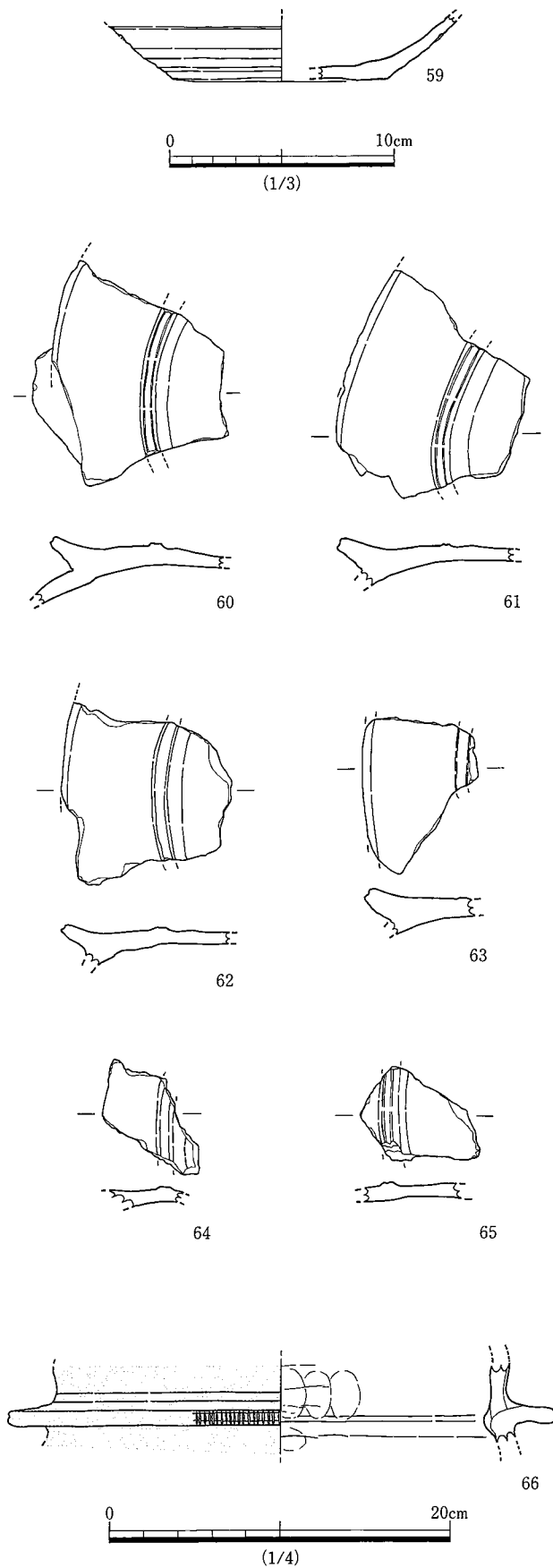
57と58は器台である。いずれも手捏ねによって成形されており、指頭痕が多く残る。57の口縁径は6.6cm、58の底部径は9.4cm。

59は楽浪土器の鉢と考えられる。やや軟質で、外面は淡灰茶色、内面は淡灰色である。胎土は精良で、ほとんど粒子を含まず、微小な雲母片や長石片が少量混入する。内外面ともナデ調整が施されており、外面には横ナデによってできた凹凸がみられ、内面はほぼ平坦である。底部の復元径は9.5cm。

60～65は不明土製品で、同一個体と考えられる。いずれも扁平な器形で、平面形態は弧を描き、体部に低平で頂部がやや窪む突帯を1条貼付して



第59図 Ⅲ-E区 大溝 I区上層 出土遺物実測図5 (1/3)



第60図 Ⅲ-E区 大溝 I区上層 出土遺物実測図6 (1/3、1/4)

いる。断面側からみると、途中で鐔状の突起物と体部とに枝分かれすることがわかる。この鐔状の部分は若干の反りを持ち、やや器壁が厚く、端部を押さえている。また、付け根付近をみると、右側の体部と鐔状の部分は一体に成形しており、後に枝分かれした部分を接合していることがわかる。内外面にはススが付着しているように見え、風化も進んでいるため、2次焼成を受けている可能性がある。鐔の部分の径は比較的残りの良い60と61とをみると、60は22.6cm、61は22.1cmである。器形については小片のため全体が分からず不明であるが、現状では移動式竈の底部の可能性を視野に入りたい。

66は瓢形土器のくびれ部付近の破片と考えられる。表面が黒色を呈しており、黒の顔料を塗布している可能性がある。くびれ部と肩部との粘土の接合方法を断面観察すると、まず、逆L字形に成形した突帯部分を作り、この上に肩部を乗せるように接合している。したがって、甕の口縁部に壺の肩部を乗せる古い様相を呈していることがわかる。また突帯の頂部には縦方向のキザミ目が施され、内外面共にナデ調整が行われる。くびれ部の復元径は32.4cm。

67は石庖丁である。ほぼ完形で、背の一部に調整剥離が残るものの全面に研磨が施される。硬質砂岩系の石材と考えられる。長さ4.1cm、幅11.8cm、厚さ4.5mm、重量32.51g。

68は石庖丁で、穿孔部分で割れる。刃部は研ぎ出されるが、表裏面は研磨が粗い。砂岩製。長さ4.6cm、幅6.2cm、厚さ4.5mm、重量24.88g。

69は石庖丁で、下の刃部と右側が欠ける。表面は剥落しているため研磨の痕跡がみられず、裏面と背の部分には若干残る。また、左側の刃部には調整剥離がみられ、研磨は一部施される。砂岩製。長さ3.05cm、幅6.7cm、厚さ2.5mm、重量14.58g。

70は石鎌と考えられる。全体的に粗い研磨を施しており、裏面は剥落する。刃部と背の部分には研磨で消されていない調整剥離痕が残る。砂岩製。長さ4.1cm、幅9.8cm、厚さ6mm、重量65.06g。



第61図 Ⅲ-E区 大溝 I区上層 出土遺物実測図7 (1/2、1/3)

71 は石庖丁と考えられる。刃部と背に丁寧な研磨痕がみられ、表裏面は剥落する。安山岩製。長さ 4.9cm、幅 6cm、厚さ 3.5mm、重量 26.05g。

72 は石斧の基部で、裏面が上部からの衝撃により失われる。他の面には研磨が施されるが、敲打痕が消しきれずに残る。安山岩系の石材である。長さ 6.5cm、幅 4.7cm、厚さ 2.7cm、重量 109.36g。

73 は砥石と考えられる。表面と裏面の一部に研磨痕が残る。砂岩製。長さ 5.3cm、幅 7.1cm、厚さ 3.1cm、重量 111.21g。

74 は石斧で、刃部から基部にかけて大きく欠損する。全体的に研磨が施されるが、研磨痕の下には敲打痕が薄すらすらと残り、頂部には敲打痕のほかに剥離痕も残る。玄武岩製。長さ 11.8cm、幅 7.1cm、厚さ 4.8cm、重量 638.51g。

75 は柱状片刃石斧で、先端部が欠ける。左右側面と上端面は丁寧な研磨が施されるが、他の部分は軽い研磨で終わっており、敲打痕や剥離痕が残る。玄武岩製。長さ 12.2cm、幅 4.1cm、厚さ 3.2cm、重量 252.64g。

76 は敲石で表裏両面の中央部が敲打によって窪み、側面全体にも敲打痕が多数残る。表面が黒色または赤色に変色しているため、熱を受けた可能性がある。凝灰岩製。長さ 11.7cm、幅 10.7cm、厚さ 4.6cm、重量 1,004.62g。

77 は敲石と考えられ、裏面が大きく剥落し、下端部と側面の一部に敲打痕が残る。凝灰岩製。長さ 13.1cm、幅 7.5cm、厚さ 4.3cm、重量 647.43g。

78 は石斧の基部である。全体に丁寧な研磨が施されているが、頂部と側面の一部に敲打痕が残される。片岩系の石材である。長さ 9.3cm、幅 5.3cm、厚さ 3.5cm、重量 287.53g。

79 は石斧の基部である。粗い研磨は施されるものの全体的に剥離痕や敲打痕が消されずに残る。玄武岩製。長さ 7.4cm、幅 5.2cm、厚さ 2.8cm、重量 178.14g。

80 は砥石である。左上側面のみ欠損するものの、

他は研磨面が残る。このうち表裏面には研磨痕のみならず敲打痕もみられ、多様な使われ方をした可能性がある。砂岩製。長さ 12.2cm、幅 12.6cm、厚さ 7.5cm、重量 1,608.45g。

81 は砥石で、平面は細長く、断面はやや扁平である。下端部が折損する他はほぼ完形である。全体的に風化を受けており、研磨痕などはほとんど確認できず、表面のみ節理方向に沿った筋が残る。砂岩製。長さ 14.2cm、幅 5cm、厚さ 2.5cm、重量 402.57g。

82 は石斧で、先端の刃部が折損する。表裏面のやや平坦に近い部分は軽い研磨を施すが、側面や頂部にはほとんど行われておらず、敲打痕や剥離痕が観察できる。玄武岩製。長さ 12.6cm、幅 7.5cm、厚さ 3.7cm、重量 511.5g。

大溝Ⅰ区下層出土遺物 (第 62 図、図版 28)

1 と 2 は器台である。

1 は口縁の一部が欠けるほかは完形である。外面は縦ハケを施したのちにナデ消しを行い、口縁部付近は横ナデ、内面は成形時にできた皺をナデ消す。口縁径 9.3cm、底部径 11.1cm、器高 13.9cm。

2 は口縁部付近を失う。内面はナデ調整である。底部径 9.6cm。

3 は甕の底部で、外面に縦ハケが施される。内外面共にススが付着しており、2次焼成を受けた可能性がある。底部は上げ底になっており、径は 6cm。

大溝上部包含層出土遺物 (第63図、図版28)

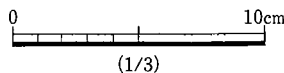
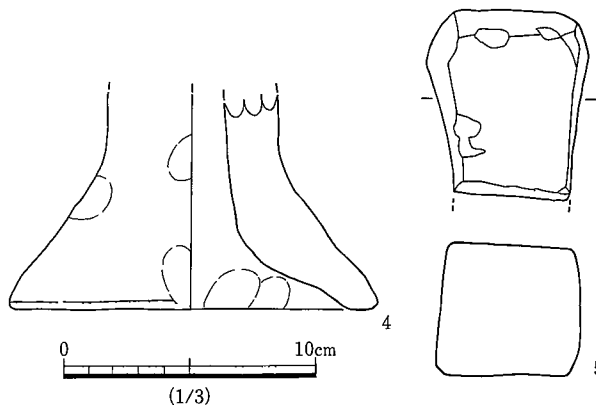
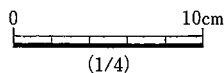
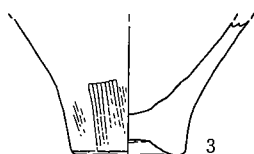
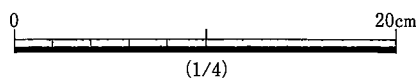
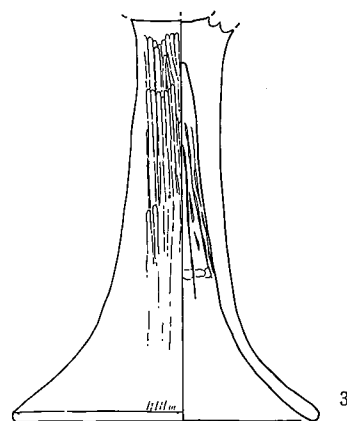
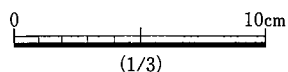
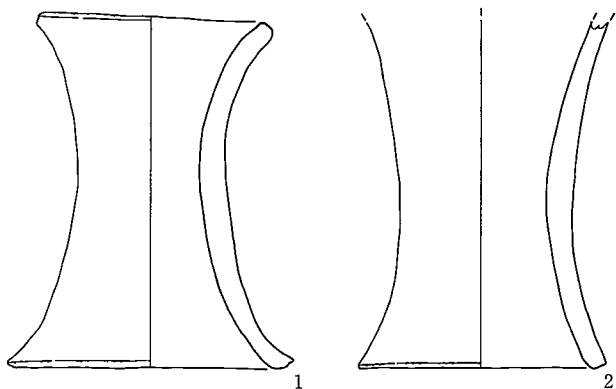
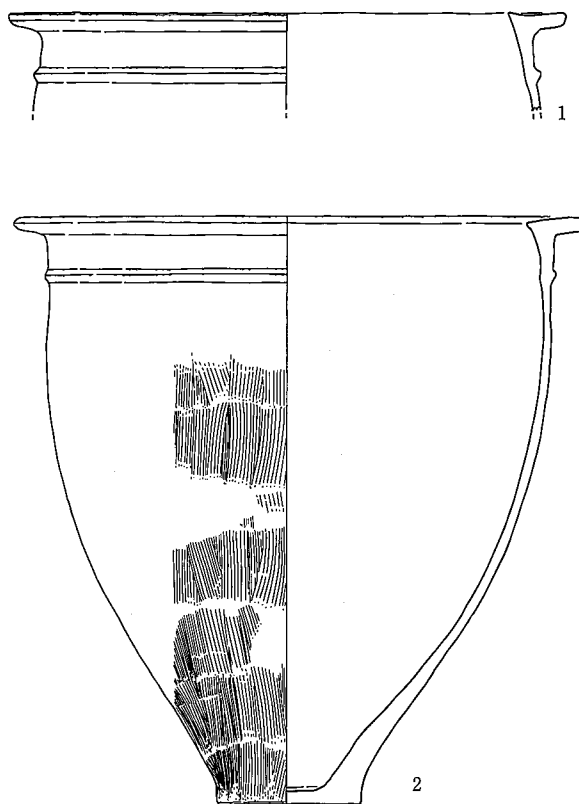
1は口縁部の下に低く細い三角突帯を1条巡らせる。口縁部の復元径は29.4cm。

2は口縁部が逆L字形を呈し、やや内傾する。口縁部の下には低く細い三角突帯を1条巡らせる。突帯の下には縦ハケを施し、所々軽く横方向にナデ消すが、大部分のハケ目は消されずに残る。突帯付近から内面にかけてはナデ調整を行う。外面の上位約2/3と内面にはススが付着しており、2次焼成を受けた可能性がある。口縁の復元径30.4cm、底部径7.5cm、器高31.3cm。

3は高杯の脚部で、裾部の広がり小さい。外面には縦方向のミガキが施され、裾部の内外面は横ナデで、内面上部には成形時の皺が消されずに残る。底部径は16.2cm。

4は支脚である。裾部が大きく外へ広がる。手捏ねによって成形されており、指頭痕が多数残る。底部の復元径は14.4cm。

5は砥石で、下端部が失われる。頭部に2本の研磨痕がみられる。砂岩製。長さ7.4cm、幅5.7cm、厚さ5.1cm、重量419.42g。



第62図 Ⅲ-E区 大溝 I区下層 出土遺物実測図 (1/3、1/4) 第63図 Ⅲ-E区 大溝 上部包含層 出土遺物実測図 (1/3、1/4)

b. 掘立柱建物

概要

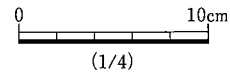
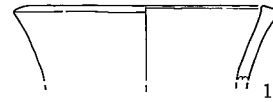
掘立柱建物は合計5棟が確認されている。このうち、1、2号は中央に掘削されている大溝よりも南に位置し、3～5号は北に位置する。規模は1間四方のものから、3間×4間のものまであり、中には平屋建物の可能性があるものも含まれる。

1号掘立柱建物 (第65図、図版4)

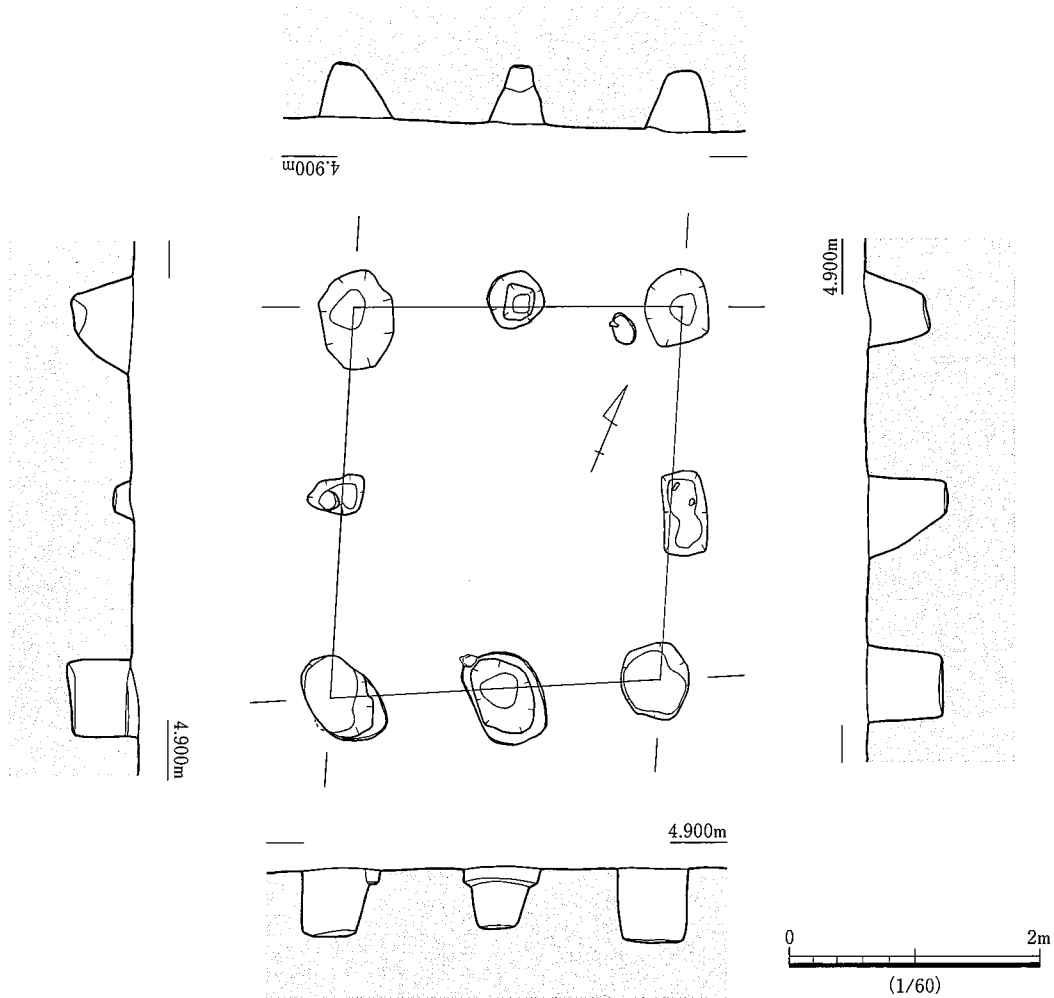
大溝の南側に位置し、2号掘立柱建物と北側の隅のピットが切り合う。2間四方で、柱間距離は芯芯間で桁間が1.5m、梁間が1.3mである。建物の規模は桁行約3m、梁行約2.6m。隅が直角とならずにやや歪んでおり、平行四辺形となる。

出土遺物 (第64図、図版30) 出土遺物が少ない上、小片が多く、かろうじて図化できたのは1点のみであった。器台の口縁部または底部と考えられ、端部を押さえて面取りし、内面には成形時に付いた縦方向の皺が薄っすらと残る。器壁が風化しているため確認が困難だが、内外面ともナデ調整と思われる。口縁または底部の復元径は14cm。

この他の小片には甕または壺の底部や体部の破片があり、この器台とほぼ同時期といえる。



第64図 Ⅲ-E区 1号掘立柱建物 出土遺物実測図(1/4)



第65図 Ⅲ-E区 1号掘立柱建物実測図 (1/60)

2号掘立柱建物 (第66図、図版4)

大溝の南側に位置し、1号掘立柱建物と南側のピットが重複し、1号溝と東隅のピットが重複する。切り合い関係から、本建物が1号掘立柱建物および1号溝のいずれからも先行することが分かる。

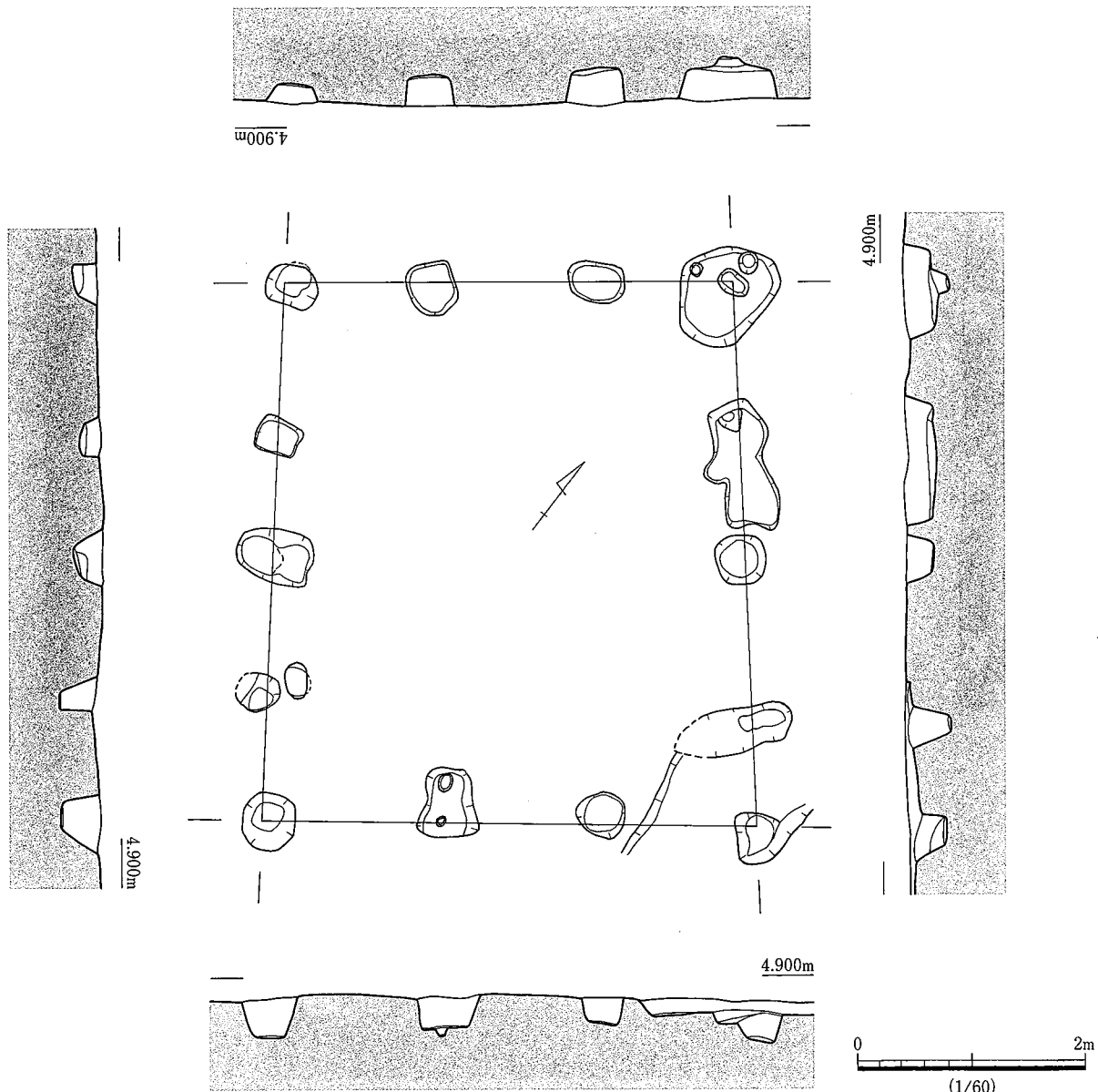
構造は4間×3間で、柱間距離は芯芯間で1～1.5mである。規模は桁行約4.6m、梁行約4mで、平面形は南東側が少し広がった台形となる。

出土遺物 遺物はピット内から土器の小片が2点のみ出土している。いずれも、器種および時期等は不明である。

3号掘立柱建物 (第68図)

大溝の北側に位置し、4号掘立柱建物と重複する。

基本は2間×2間の建物で、これに補助柱を各側面に2本ずつ配置したと考えられる。上屋構造は側柱の径が細く、柱間が不揃いなことから、高床建築には不適當な形状といえる。したがって、平屋建物の可能性が考えられ、この場合、北東隅の柱の間隔が広がっている部分を出入り口としていたのかもしれない。また、屋内に配置された2本の柱は棟持柱と考えられ、棟持柱が妻側から出ているため、屋内棟持柱建物といえる。補助柱をのぞいた柱間距離は芯芯間で、1.5m～2.2mである。建物の規



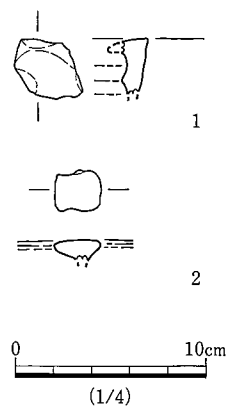
第66図 III-E区 2号掘立柱建物実測図 (1/60)

横は桁行約 4.1m、梁行約 3m。

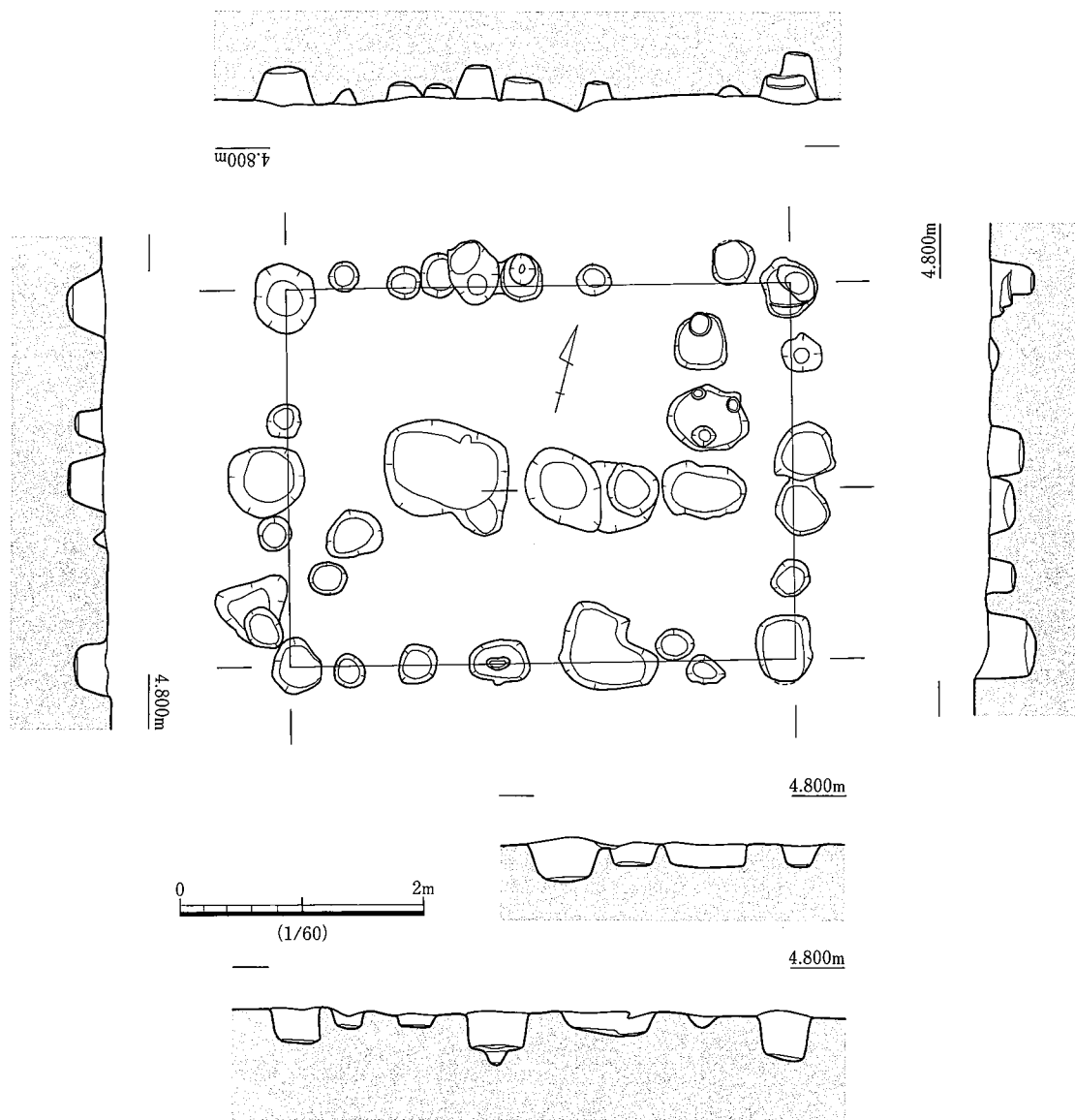
出土遺物（第 67 図、図版 30） 出土遺物が少なく、小片が多い。このうち、図化できたのは 2 点である。

1 は甕の口縁部と考えられる。口縁部下には低くならかな突帯を貼り付けており、全体的にナデ調整を施す。口縁端部が失われているので径などは不明であるが、逆 L 字形口縁と考えられる。

2 は甕か壺の口縁部である。未発達な T 字形で、付け根から下が失われる。小片であるため、径などは不明。



第 67 図 Ⅲ-E 区 3 号掘立柱建物 出土遺物実測図 (1/4)



第 68 図 Ⅲ-E 区 3 号掘立柱建物実測図 (1/60)

4号掘立柱建物 (第70図)

大溝の北側に位置する。3号掘立柱建物と重複するが、遺構自体の切り合いは無いので、前後関係は不明。1間四方の建物で、他の掘立柱建物と比べて面積は小さいものの、柱穴の規模は大きい。柱穴の径は75～99cmで、深さは48～57cm。建物の規模は約2.9m×2.5m。

柱穴の規模や配置状況から高床構造の建物であった可能性が考えられる。

出土遺物 (第69図、図版30) 出土遺物が少なく、小片が多い。このうち、図化できたのは2点である。

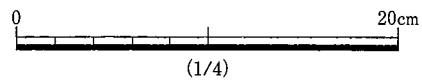
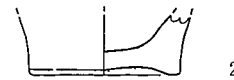
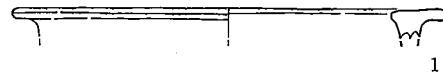
1は甕の口縁部と考えられ、逆L字形を呈する。内外面ともナデ調整で、復元径は23cm。

2は甕の底部と考えられ、側面の一部にハケの痕跡が薄っすらと残る。やや上げ底で、径は8cm。

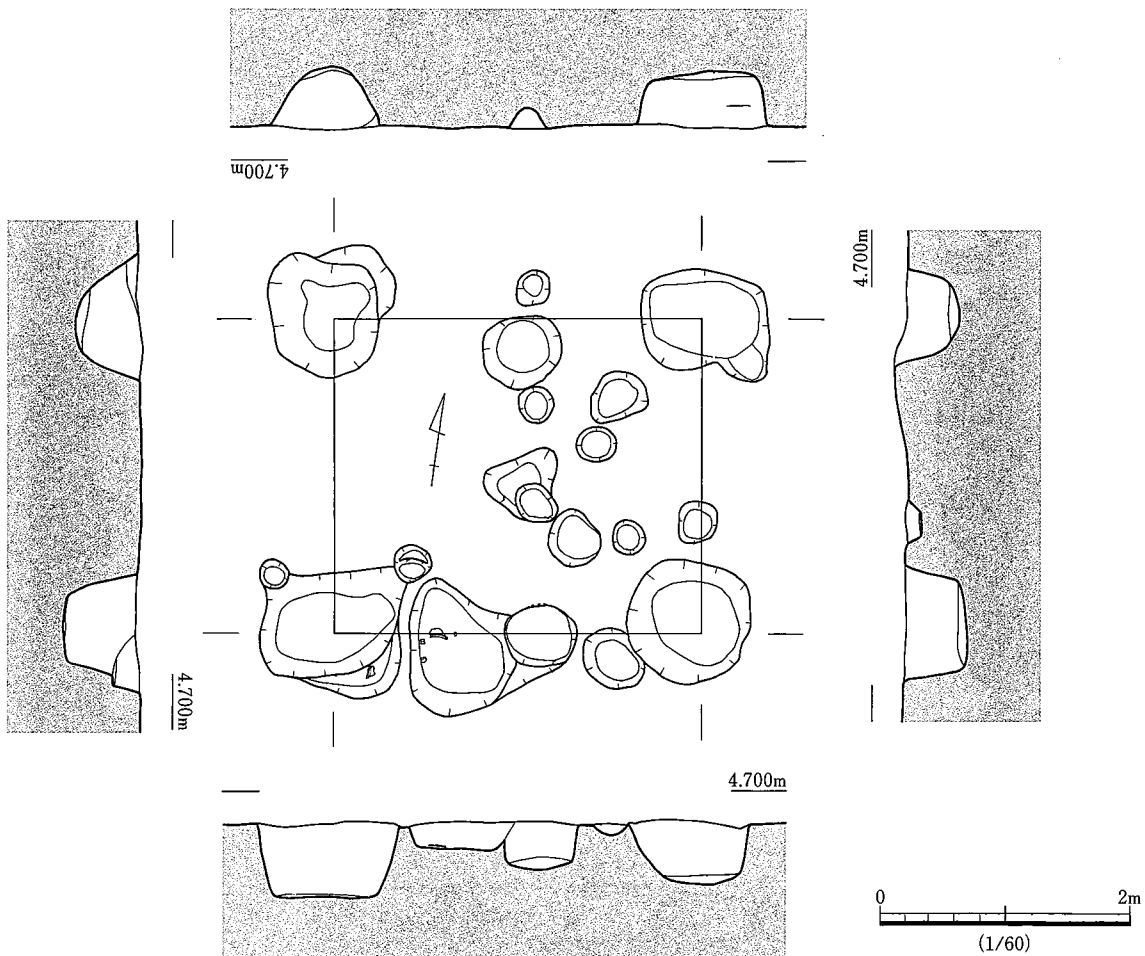
5号掘立柱建物 (第72図、図版4)

大溝の北側に位置する。付近はもっともピットや溝などの遺構が密集する地域である。

2間四方の総柱建物と考えられ、柱穴のうち、西の側壁の1本は軸から外側へ離れているため、近接した棟持柱である可能性がある。柱間の距離は芯芯間で1.3～1.9m、規模は約2.8m×3.5m。



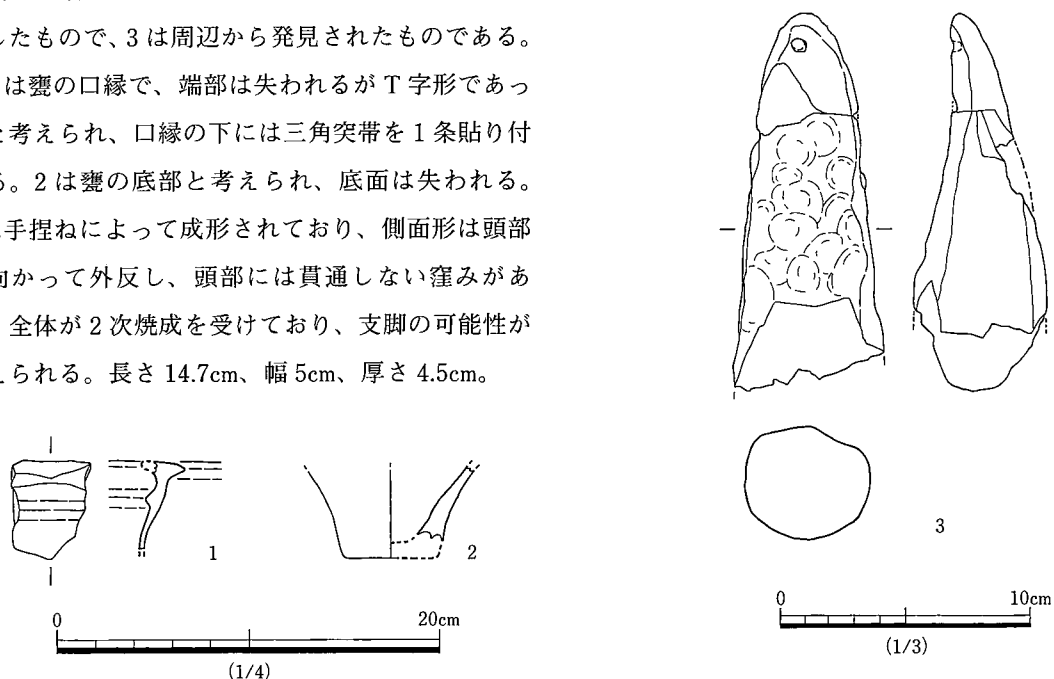
第69図 Ⅲ-E区 4号掘立柱建物 出土遺物実測図(1/4)



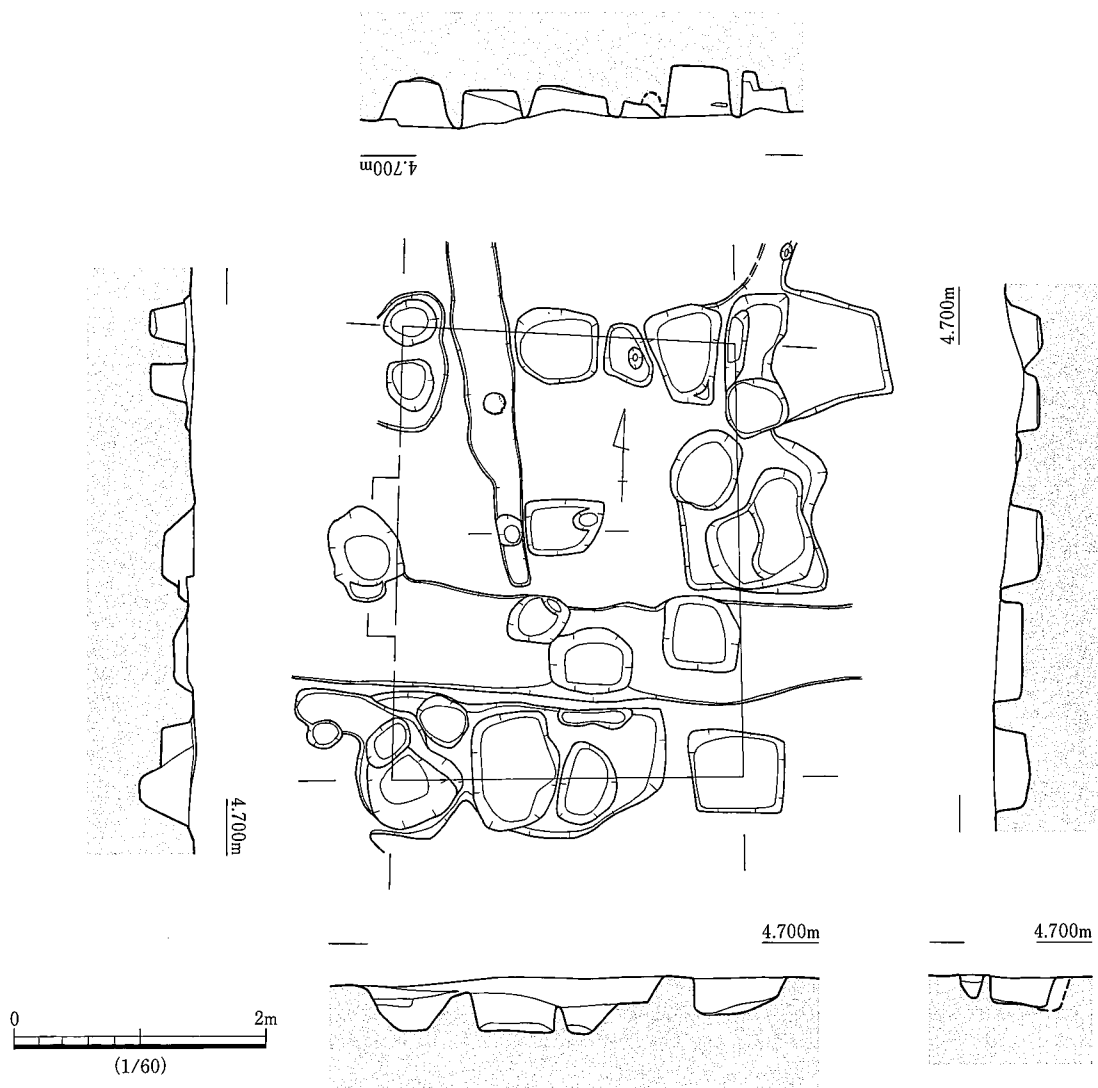
第70図 Ⅲ-E区 4号掘立柱建物実測図(1/60)

出土遺物（第71図、図版30）1、2は柱穴から出土したもので、3は周辺から発見されたものである。

1は甕の口縁で、端部は失われるがT字形であったと考えられ、口縁の下には三角突帯を1条貼り付ける。2は甕の底部と考えられ、底面は失われる。3は手捏ねによって成形されており、側面形は頭部に向かって外反し、頭部には貫通しない窪みがある。全体が2次焼成を受けており、支脚の可能性が考えられる。長さ14.7cm、幅5cm、厚さ4.5cm。



第71図 Ⅲ-E区 5号掘立柱建物 出土遺物実測図 (1/3、1/4)



第72図 Ⅲ-E区 5号掘立柱建物実測図 (1/60)

c. 甕棺墓

概要

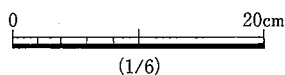
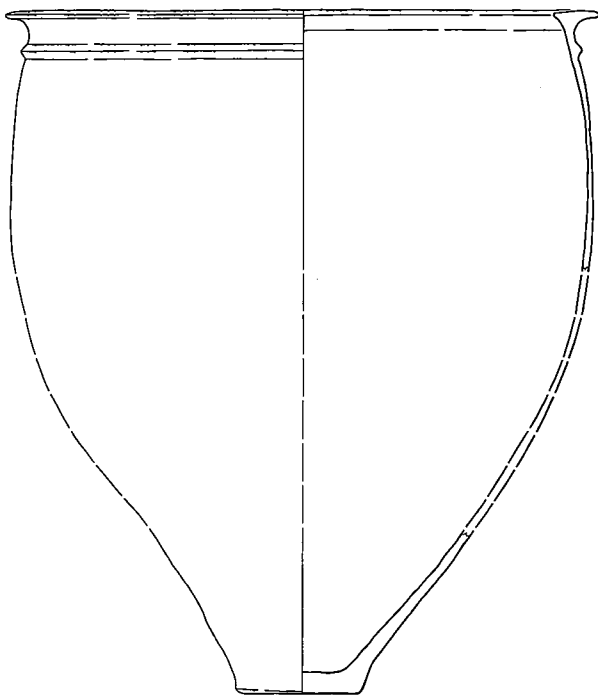
甕棺墓は大溝の北側に位置し、合計3基が確認されている。周辺は遺構の密度が比較的低い場所で、いずれも上部を削平された状態で出土した。3基とも小児用と考えられ、副葬品はもたない。

1号甕棺墓 (第73図、図版5)

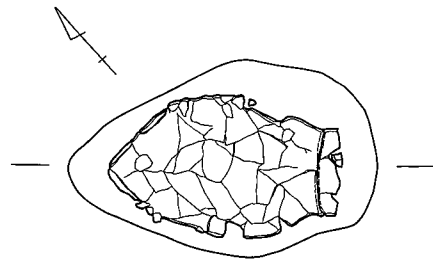
下甕は底部付近まで残るが、上甕は口縁部付近のみしか残存しておらず、若干の傾斜をもって埋納されていた可能性がある。方位は他のものと主軸方向が大きく異なり、N-133°-Eである。

上甕 (第74図、図版31) 口縁部は逆L字形で、やや外傾し、口縁の下には三角突帯を1条巡らせる。内外面とも風化が著しく調整は観察できない。口縁部の復元径は38.4cm。

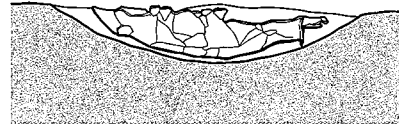
下甕 (第74図、図版31) 口縁部は逆L字形で、やや内傾し、口縁の下には三角突帯を1条巡らせる。



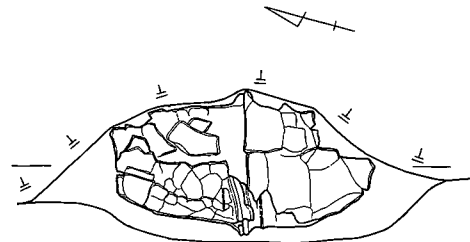
第74図 Ⅲ-E区 1号甕棺実測図 (1/6)



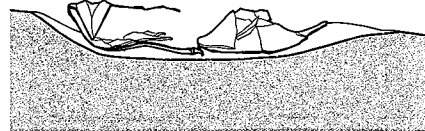
4.800m



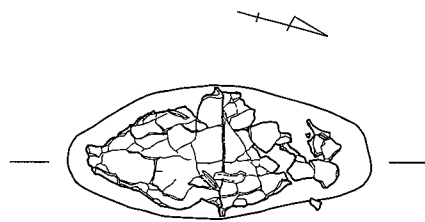
1号甕棺墓



4.800m



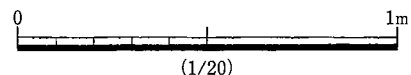
2号甕棺墓



4.800m



3号甕棺墓



第73図 Ⅲ-E区 1~3号甕棺墓実測図 (1/20)

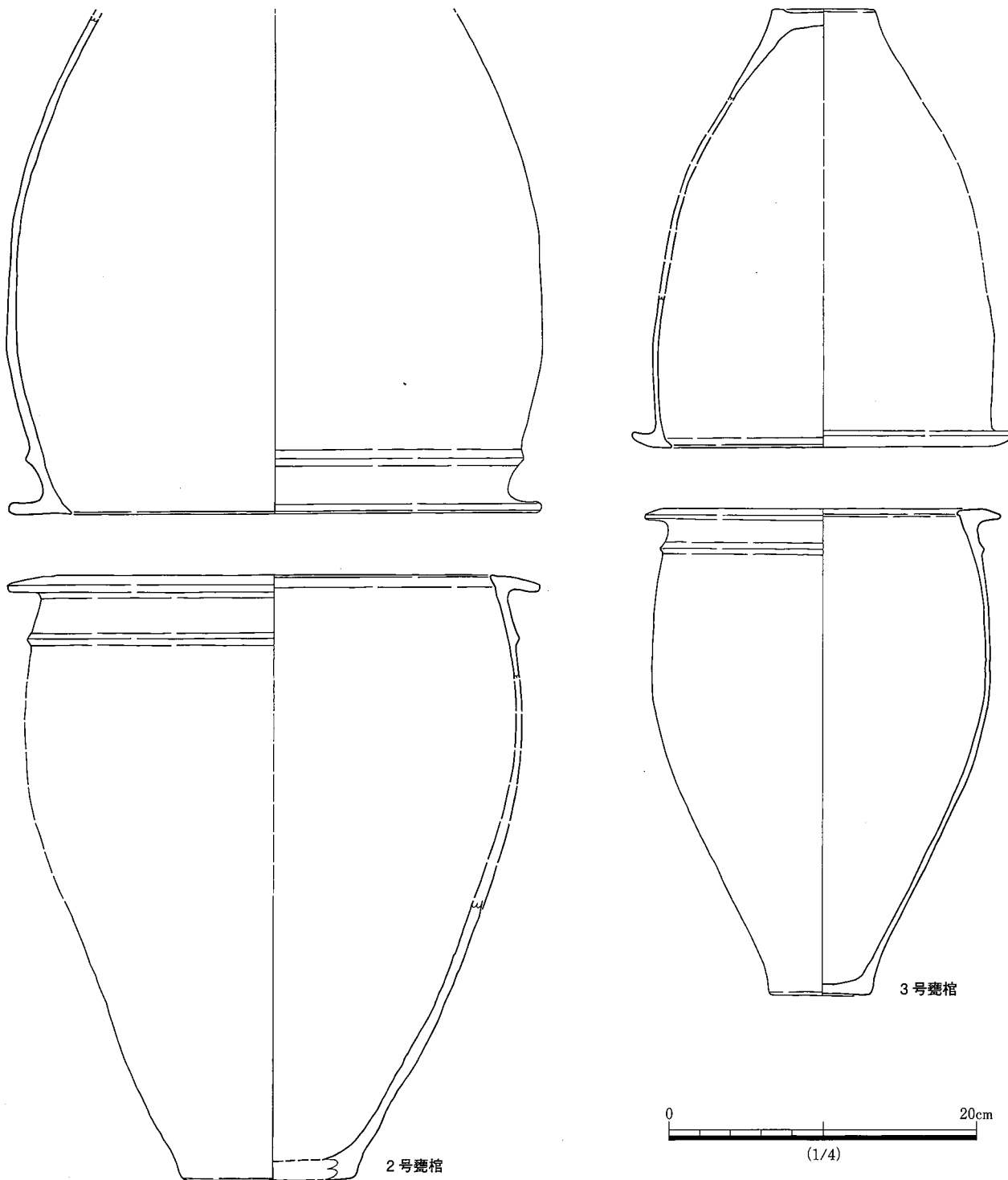
胴部はやや太めで、最大径は上位 1/3 程度の位置にあり、底部付近のくびれは緩やかである。内外面とも風化が著しく調整は観察できない。口縁部の復元径は 47.4cm、底部の復元径は 9.6cm、器高 54cm。

2号甕棺墓 (第73図、図版5)

2号甕棺墓は東側を1号溝によって削平されてお

り、上甕の胴部から底部が失われる。残存状況から上甕が若干高く埋納されていた可能性がある。方位は N - 13° - W である。

上甕 (第75図、図版31) 口縁部は逆L字形で、口縁の下に低平な三角突帯を1条巡らせる。胴部が大きく張っており、最大径が上位にくる。突帯から口縁部にかけては横ナデを施しており、他の箇所には



第75図 Ⅲ-E区 2、3号甕棺実測図 (1/4)

については風化が激しく不明。口縁部の復元径は 34.9cm。

下甕 (第 75 図、図版 31) 口縁部は逆 L 字形で外傾し、口縁の下には低く細い三角突帯を 1 条巡らせる。底部付近のくびれが小さく、底面の径はやや大きい。風化のため調整は不明。口縁部の復元径は 35cm、底部径は 11.5cm、器高は 39.8cm。

3 号甕棺墓 (第 73 図、図版 5)

3 号甕棺墓は上甕の残りが悪く、かつては若干の傾斜をもって埋納されていたと考えられる。方位は 2 号甕棺墓とほぼ並行の N - 24° - W である。

上甕 (第 75 図、図版 31) 口縁部は逆 L 字形でやや外傾し、若干厚手である。胴部にはほとんど張りが無く、底部付近で若干のくびれをもつ。口縁部の復元径は 25.2cm、底部の復元径は 6.8cm、器高は 28.9cm。

下甕 (第 75 図、図版 31) 口縁部は逆 L 字形で、やや厚い。口縁部の下には低く細い三角突帯を 1 条巡らせ、胴部はあまり張りがなく、細形である。口縁部の復元径は 23.4cm、底部はやや上げ底で、径は 6.6cm、器高は 32.2cm。

d. 土 坑

土坑は調査区全体で多数発見されているが、ここでは主なもの 6 基を取り上げる。

1 号土坑 (第 76 図)

大溝の南側に位置し、調査区の南東の隅に掘削される。平面形は不正楕円形で、断面形は底が平らな長方形を呈する。この付近は微高地の尾根筋にあたり、大きく削平を受けている場所と思われるため、かつてはもう少し深さがあったものと考えられる。規模は長さ 61cm、幅 1.33m、深さ 15cm。

出土遺物 (第 78 図、図版 32) 遺物はほとんどなく、

形が確認できるのは中央付近の底面から出土した 1 点のみである。1 は三韓式土器と考えられる。外面には縄蓆文が施され、内面はタタキの痕跡をナデ消しており、凹凸が残る。破片の端で文様が交錯しており、断面もこの付近で屈曲することから底部に近い破片と考えられる。胎土は堅緻で、粒子をほとんど含まず、硬質な焼き上がりである。色調は内外面とも赤茶褐色である。

2 号土坑 (第 76 図)

大溝の南側に位置し、1 号土坑の北側にある。2 段堀で、1 段目が不正楕円形、2 段目が不正円形となる。規模は 1 段目が 1.3m × 1.7m、2 段目が 0.94m × 1m で、深さは現状で 37cm であり、1 号土坑と同様かつてはもう少し深かったと考えられる。

出土遺物 ほとんどが小片であり、図化は不可能であった。このうち、2 段目から出土した比較的形のわかる破片は、壺の肩部にあたりと考えられ、器壁の薄さなどから弥生時代終末期以降のもの可能性がある。

3 号土坑 (第 76 図)

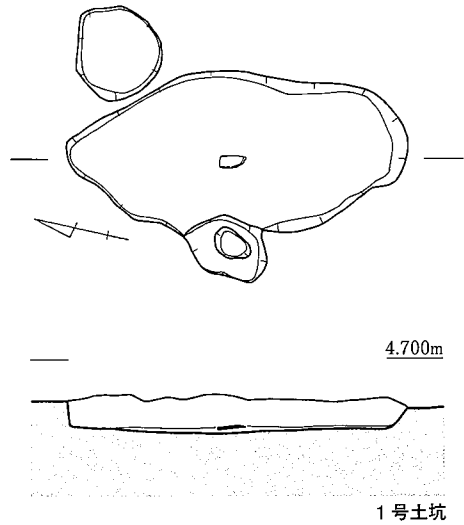
大溝の南側に位置し、周囲は遺構の希薄な空白地帯となっている。平面形は隅円方形で、断面は壁面が急で、底面が平坦な逆台形であり、西側は 2 段に掘られる。土坑内からは土器の他に扁平な石が出土しており、底面に置かれた状態のものがあつたが、性格は不明である。規模は上端で 1m × 1m、底面で 64cm × 69cm、深さ 34cm。

出土遺物 (第 78 図、図版 32) 出土遺物のうち、図化が可能であったのは 1 点である。広口壺の口縁部と考えられ、口縁の上端は平坦で、やや内側へ張り出す。口縁端部は押さえた後、縦方向のキザミ目を施す。また口縁上端から下端にかけては斜め方向の穿孔を施す。口縁部の復元径は 28.8cm。

4号土坑 (第76図)

大溝の南側に位置し、調査区の最南端にある。平面形は不正円形で、断面は2段掘りとなっており、底面は平坦である。1号土坑と同様、かつてはもう少し深さがあったものと考えられる。長さ1.6m、幅1.7m、深さ30cm。

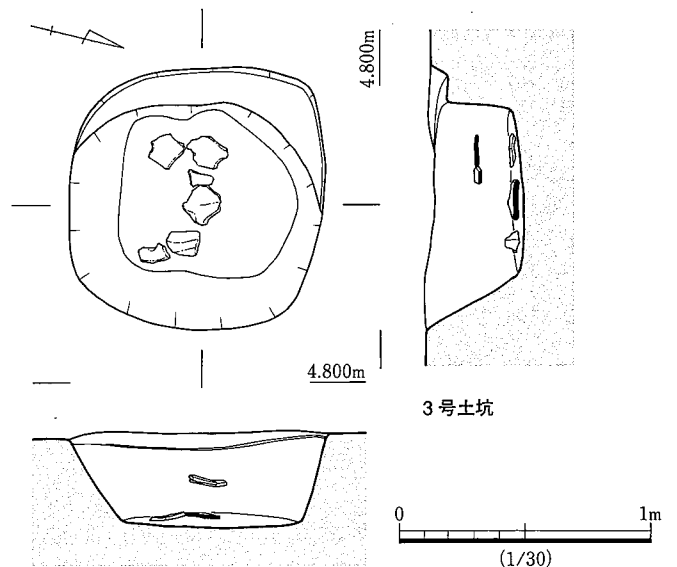
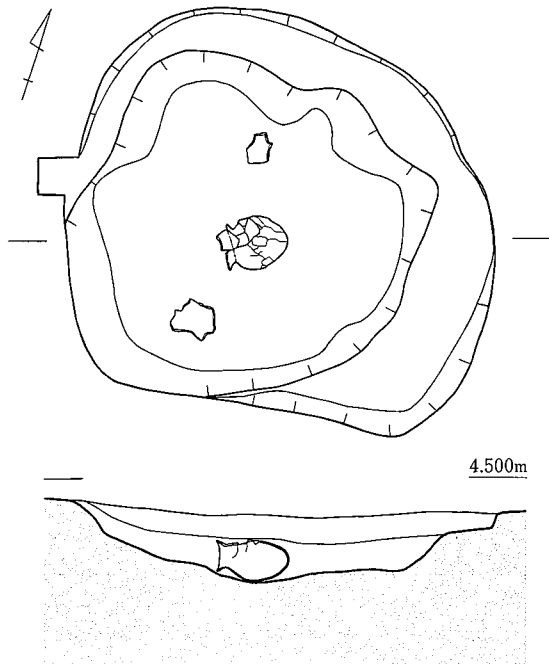
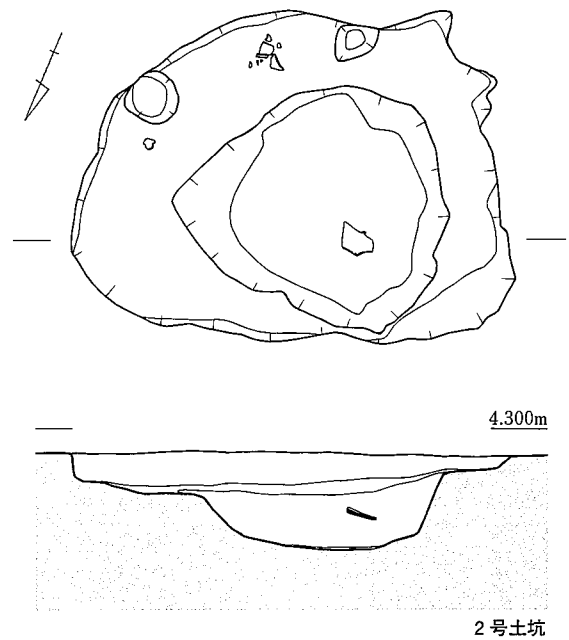
出土遺物 (第78図、図版32) 土坑の中央部から出土し、所々が失われているもののほぼ完形に復元できる。口縁はやや外反しながら開き、端部は軽く押さえる。胴部の最大径は中位よりやや上にあり、底部付近は尖底状の丸底となる。外面はタタキを施した後、肩部付近は粗いナデを行い、下部は縦方向のケズリを施す。口縁付近から内面の上位にかけてはナデ調整で、下部は縦方向の粗いケズリを行う。口縁径は16.2cm、器高は24cm。



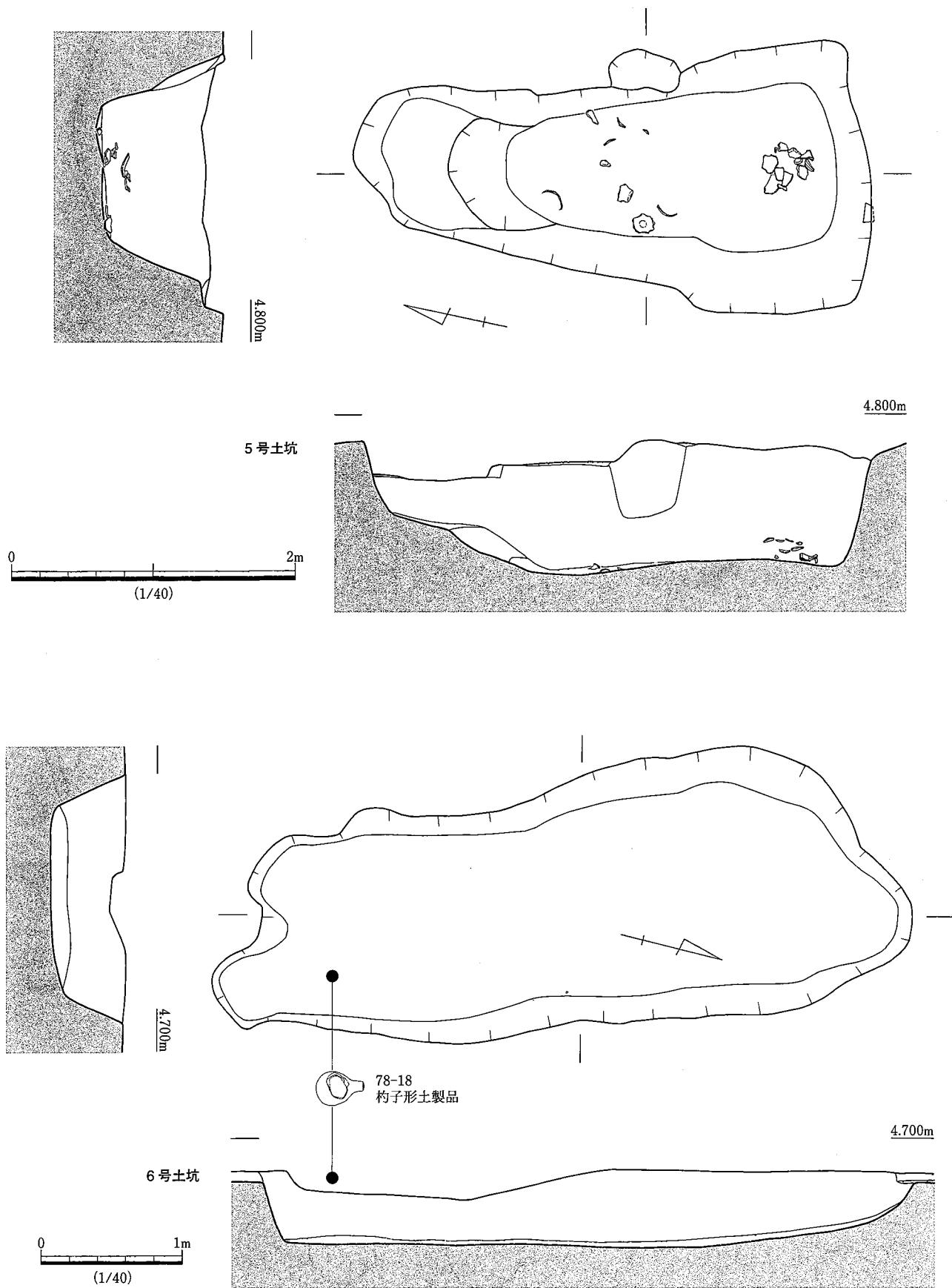
5号土坑 (第77図)

大溝の北側に位置する。付近はかつての微高地の尾根筋に当たると考えられる。平面形は北側がやや狭い不正隅円長形で、断面は北側が2段で、他の壁面は急傾斜となっており、底面は平坦である。他の土坑と比較して深いという特徴があるが、性格については不明である。規模は長さ3.7m、幅1.8m、深さ88cm。

出土遺物 (第78図、図版32) 土坑の埋土および

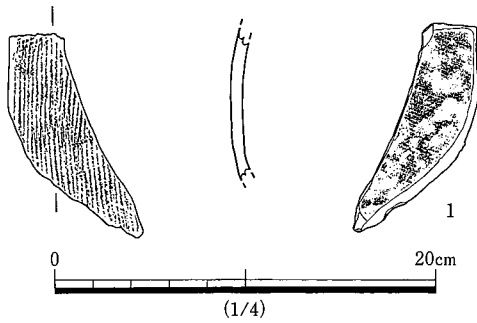


第76図 Ⅲ-E区 1~4号土坑実測図 (1/30)

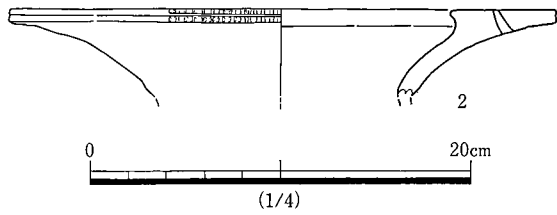


第77図 Ⅲ-E区 5、6号土坑実測図 (1/40)

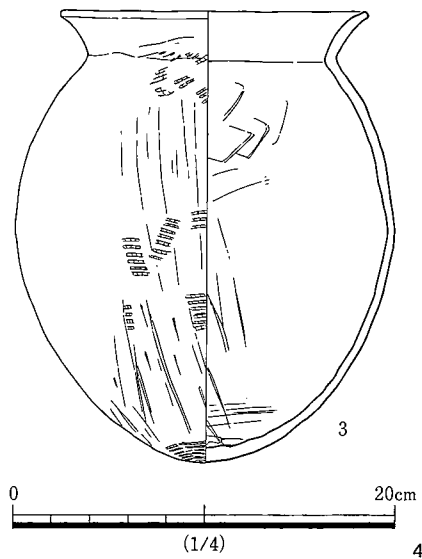
調査の記録



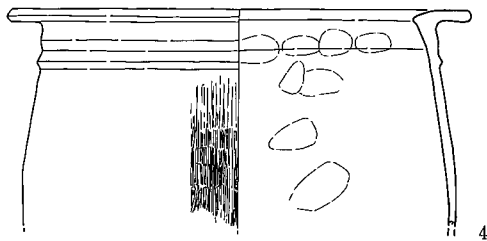
1号土坑



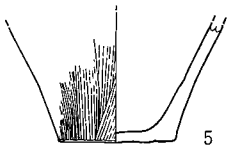
3号土坑



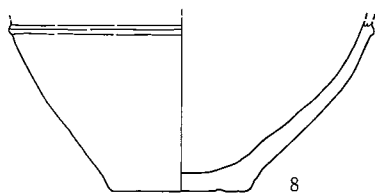
4号土坑



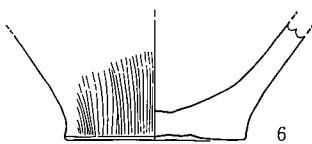
5号土坑



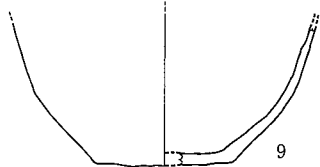
5



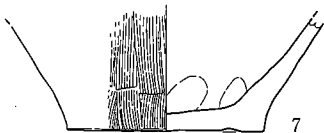
8



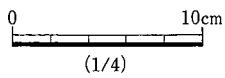
6



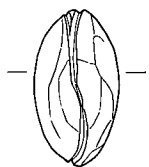
9



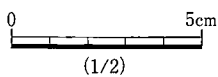
7



(1/4)



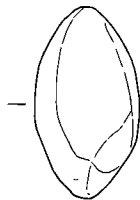
10



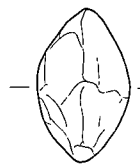
(1/2)



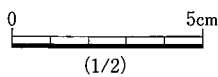
15



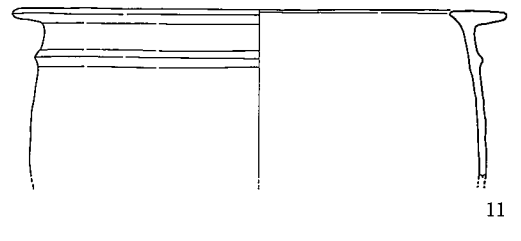
16



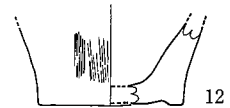
17



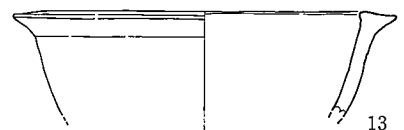
(1/2)



11



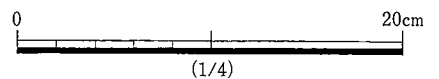
12



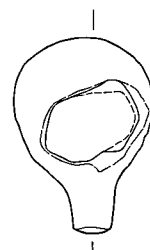
13



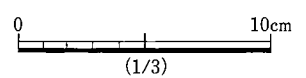
14



(1/4)



18



(1/3)

6号土坑

第78图 III-E区 土坑 出土遺物実測图 (1/2、1/3、1/4)

床面近くから遺物が出土しており、南側の床面にまとまりがみられる。

4 は甕の口縁部から胴部上半にかけてである。口縁部は逆L字形でやや内傾し、口縁端部は軽く押さえる。口縁部の下には低平な三角突帯を1条巡らせ、この下には縦方向のハケ目を施す。突帯周辺から口縁にかけては横ナデで、内面はナデ調整を施し、指頭痕が多数みられる。外面の胴部下半と口縁部周辺および内面にススが付着しており、2次焼成を受けた可能性が考えられる。口縁部の復元径は24.4cm。

5～7 は甕の底部と考えられる。

5 は外面に縦ハケを施し、内面はナデ調整である。底部の復元径は6.1cm

6 は外面に縦ハケを施し、内面はナデ調整である。底部はやや上げ底で、径は9.4cm。

7 は外面に縦ハケを施し、内面の底部付近には押さえに伴う指頭痕が残る。底部の復元径は10.5cm。

8 は壺の下半部で、胴部に低く細い三角突帯を1条巡らせる。底部径は7.2cm。

9 は壺の底部と考えられ、外面に丹塗りが施される。底部の復元径は7.2cm。

10 は石錘である。全面に研磨を施し、長軸方向に1条の沈線を刻む。滑石製。長さ4.2cm、幅2.3cm、厚さ1.7cm、重量23.73g。

6号土坑 (第77図、図版4)

大溝の北側に位置する。平面形は北側がやや広がる不正隅円方形で、南側は2つのピットと重複する。断面形は北側の壁は緩やかで、南側は急斜面となっており、底面は平坦である。深さは浅いが、全体的な雰囲気は5号土坑に似ており、使用方法についての類似性があると思われる。規模は長さ4.6m、幅1.7m、深さ54cm。

出土遺物 (第78図、図版32) 遺物の多くは埋土中から出土しており、18の杓子状土製品は南側の上層で発見された。

11 は甕の口縁部から胴部にかけてで、口縁部は逆L字形を呈し、端部は軽く押さえる。口縁部の下には低く細い三角突帯を1条巡らせ、これから口縁部にかけては横ナデ、内面はナデ調整を施す。なお、外面の突帯から下の部分については風化のため確認できない。全面にススが付着しており、2次焼成を受けた可能性がある。口縁部の復元径は26cm。

12 は甕の底部と考えられ、外面に縦ハケが残りに、内面の底部付近には押さえの痕跡がみられる。底部の復元径は7.8cm。

13 と14 は高坏と考えられる。

13 は口縁部が未発達で、端部および内側を押さえる。口縁部の復元径は20.3cm。

14 は口縁部がT字形で大きく外へ張り出し、やや外傾する。口縁部の下端に丹塗りの痕跡が残っており、かつては全面に施されていた可能性がある。口縁部の復元径は25.4cm。

15 は土錘である。手捏ねによって成形した後、ナデ調整を行う。両端の穿孔部分には意図的な挟りがみられる。長さ8cm、幅2.2cm、厚さ2.3cm、重量30.6g。

16 と17 は投弾形土製品である。手捏ねの後、ナデ調整を行っており、両端部は尖り、胎土は堅緻である。16 は長さ5.1cm、幅2.8cm、厚さ2.8cm、重量35.29g。17 は長さ4.1cm、幅2.4cm、厚さ2.4cm、重量18.67g

18 は杓子形土製品である。掬い部が球形を呈しており、直柄がやや斜め方向に付き、途中で折損する。掬い部と柄の接続は、掬い部に柄を差し込んで固定する方法が取られており、内面に渦巻き状の接合痕が残る。全体の長さ7.8cm、掬い部の幅5.5cm、厚さ5.6cm。掬い部に開けられた孔は隅円長方形で、長さ2.7cm、幅3.6cm、柄の断面はほぼ円形で、径は1.5cm×1.4cm。全体的にナデ調整と考えられるが、風化が激しく痕跡は残らない。なお、掬い部の頭部はやや平坦になっており、成形時に下になっていたと考えられる。

e. 井戸

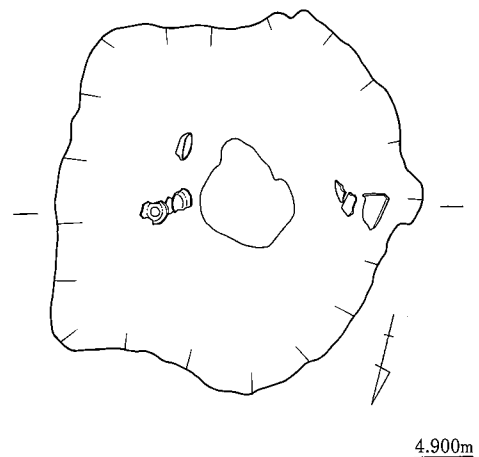
概要

井戸は2基検出されている。それぞれ大溝の南北に分かれて分布する。

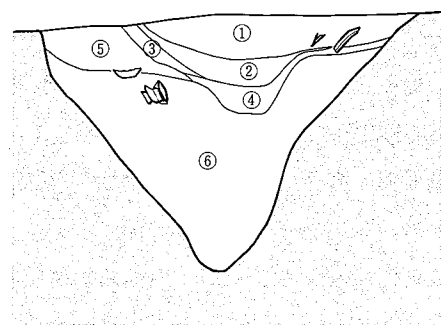
1号井戸 (第79図)

平面形態が不正方形で、断面はすり鉢状に掘られる。上端で長さ1.46m、幅1.42mを測り、深さは1.02mである。途中と最下層に暗灰褐色粘質土に地山ブロックが混入した層が観察されたことや、最大で長さ30cm、幅14cm程度の大型の石などが混入していることから、人為的に埋めたと考えられる。

出土遺物 (第80図、図版34) 1と2は土師器の坏である。1は完形で、回転ナデによって成形し、底部はヘラ切り、底部内面には板状工具による弱いナデを施す。口縁径は10.8cm、底部径は6.8cm、器高は3cm。2は1と同様、回転ナデによって成形し、底部はヘラ切りを行う。口縁径は11.6cm、底部径は7cm、器高3.4cm。3は土師器の埴である。体部がやや内湾気味に立ち上がり、口縁部付近は直線となる。口縁部の復元径は15.8cm、高台径8.4cm、器高7cm。4は土師器の甕で、外面には縦方向のタタキを施し、内面には横方向の粗いハケ目が残る。内面に分厚くススが附着しており、2次焼成を受けた可能性がある。口縁の復元径40cm。



4.900m

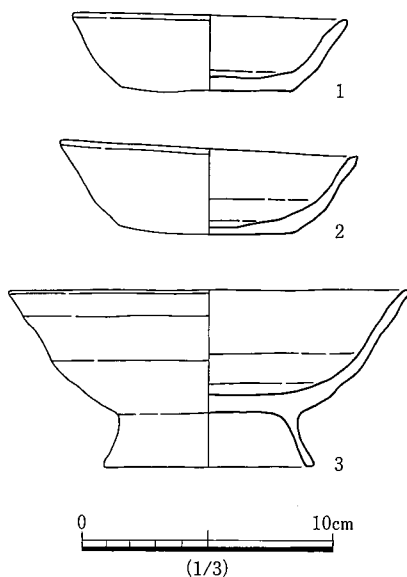


- ① 灰褐色粘質土 (酸化鉄含む)
- ② 灰褐色粘質土
- ③ 灰褐色粘質土 (土師皿、碗等含む)
- ④ 暗灰褐色粘質土 (炭化物をまばらに含む)
- ⑤ 灰褐色粘質土
- ⑥ 炭化物層

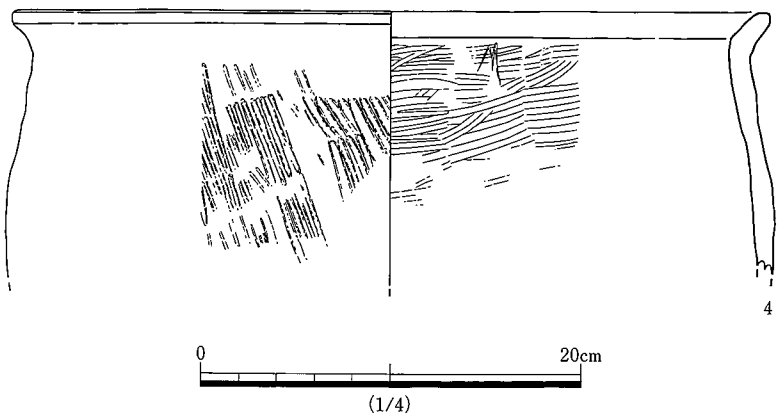


(1/30)

第79図 III-E区 1号井戸実測図 (1/30)



(1/3)



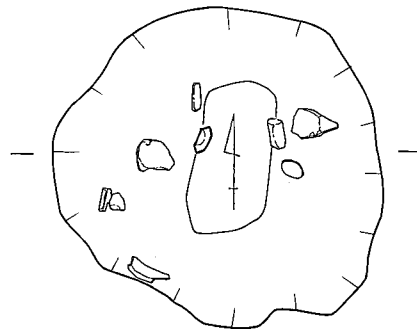
(1/4)

第80図 III-E区 1号井戸 出土遺物実測図 (1/3、1/4)

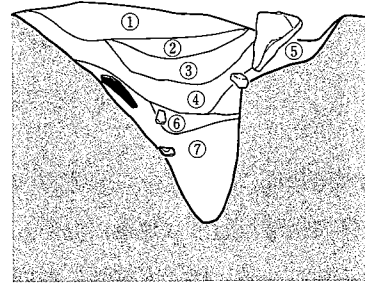
2号井戸 (第81図、図版4)

平面は不正円形で、断面は逆三角形であり、東側にテラスをもつ。規模は径1.3m、深さ0.89m。中には土器と共に大型の石が投棄されており、1号井戸と同様、人為的に埋め戻されたと考えられる。

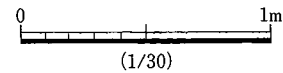
出土遺物 (第82図、図版34) 5~7は土師器の坏である。5は全体を回転ナデで仕上げ、底部はヘラ切りを行う。口縁の復元径12.4cm、底部の復元径6cm、器高3.6cm。6は5と同様の調整で、端部を若干丸く収める。口縁の復元径13.6cm、底部の復元径7.2cm、器高3.6cm。7はほぼ完形に復元でき、調整は5と同様である。口縁径13.1cm、底部径6.9cm、器高3.9cm。8は黒色土器の碗の底部付近で、内面のみ燻すA類である。高台径8.1cm。9は黒色土器の坏である。内面のみ燻すA類で、口縁の復元径17.8cm。10~12は土師器の甕で、ススが付着しており、2次焼成を受けたと考えられる。10は口縁内外をナデ調整し、体部外面には斜め方向のタタキがみられる。口縁の復元径26cm。11と12は口縁が短く外反し、端部が若干下へ垂れ下がる。11は外面がタタキで、口縁の復元径26cm。12は外面が縦ハケで、口縁の復元径28cm。



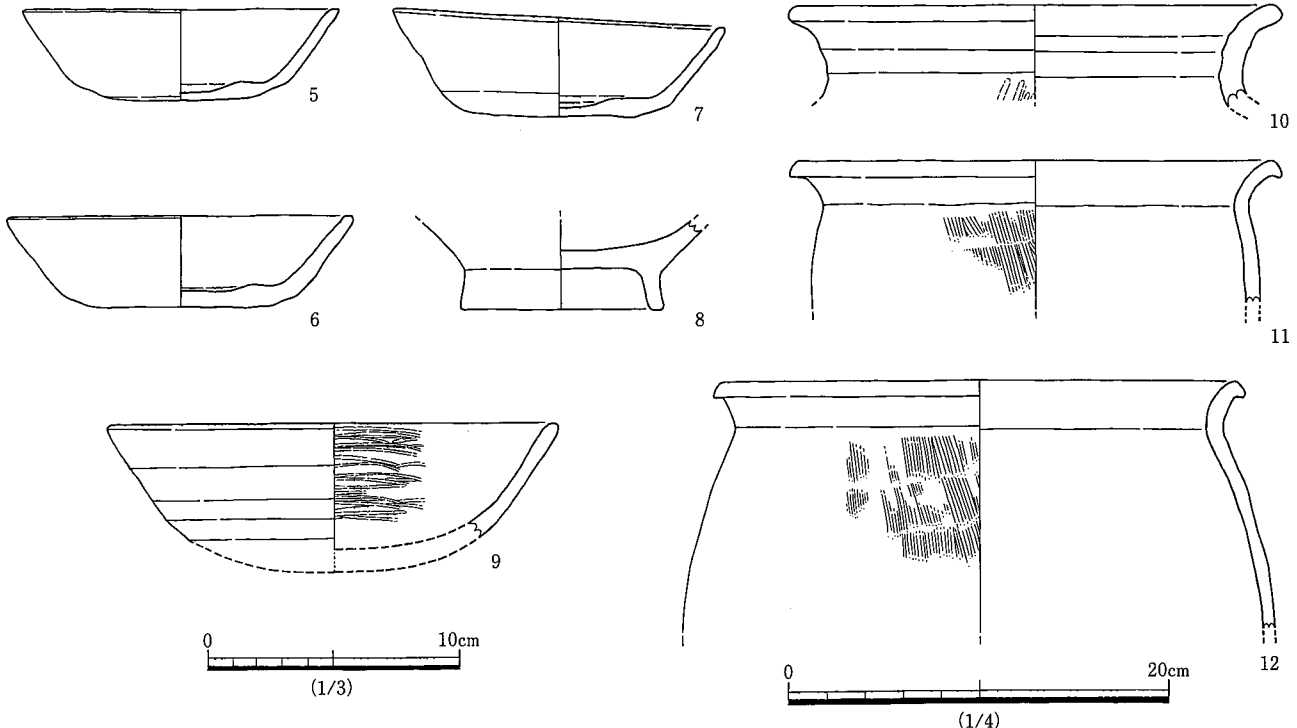
4.800m



- ① 暗灰褐色粘質土
- ② 暗灰褐色粘質土と炭化物との混合土
- ③ 炭化物
- ④ 暗灰褐色粘質土に地山
ブロックがまばらに混入
- ⑤ 暗灰褐色粘質土に地山
ブロック混入(④より多い)
- ⑥ 暗灰褐色粘質土
- ⑦ 炭化物



第81図 III-E区 2号井戸実測図 (1/30)



第82図 III-E区 2号井戸 出土遺物実測図 (1/3、1/4)

f. 溝

概要

溝は調査区内に多数掘削されるが、ここでは主なものについて取り上げる。

溝の中で目に付くのは南北方向に掘削された3本で、東から順に1～3号の名称を付ける。このうち、1・2号溝は中央の大溝と直交しており、切り合い関係から後出すると思われる。また、1号溝は北側で自然消滅するものの、2・3号溝は北東方向へ流路を曲げ、北側の他の遺構と重複する。

1号溝

微高地の尾根筋に沿うように南北方向に掘削される。調査区の南端付近では数条に分かれるが、途中で1条の流れになり、ほぼ直線状に掘削される。なお、部分的に溝が途切れるが、これは微高地の最高部付近に位置するため、後世に削平を受けたものと考えられる。

出土遺物 (第84図、図版33) 1と2は壺の口縁部と底部である。1は頸部の外面に縦方向の暗文状のミガキを施す。口縁径は26.6cm。2は外面に横または斜め方向のミガキがみられる。底部径は7.2cm。3は土師器の壺で、頸部がややしまり、胴部外面にはタタキを施す。口縁径は23cm。4は敲石である。表裏と側面に敲打の痕跡がみられる。砂岩製。長さ12cm、幅9.1cm、厚さ3.7cm、重量266.89g。5は土製の勾玉である。頭部の両面に穿孔を模した窪みがあるが、貫通はしていない。長さ3.2cm、幅1.5cm、厚さ1.3cm。6と7は土錘である。6は長さ5.4cm、径2cm×1.4cm、孔径3mm、重量14.95g。7は長さ4.9cm、径2cm、孔径8mm、重量15.08g。

2号溝 (第83図)

1号溝の西側に位置し、ほぼ同一方向へ向かって掘削される。調査区の南端付近では数条に分かれるが、途中で1条となり、大溝の北側付近で大きく

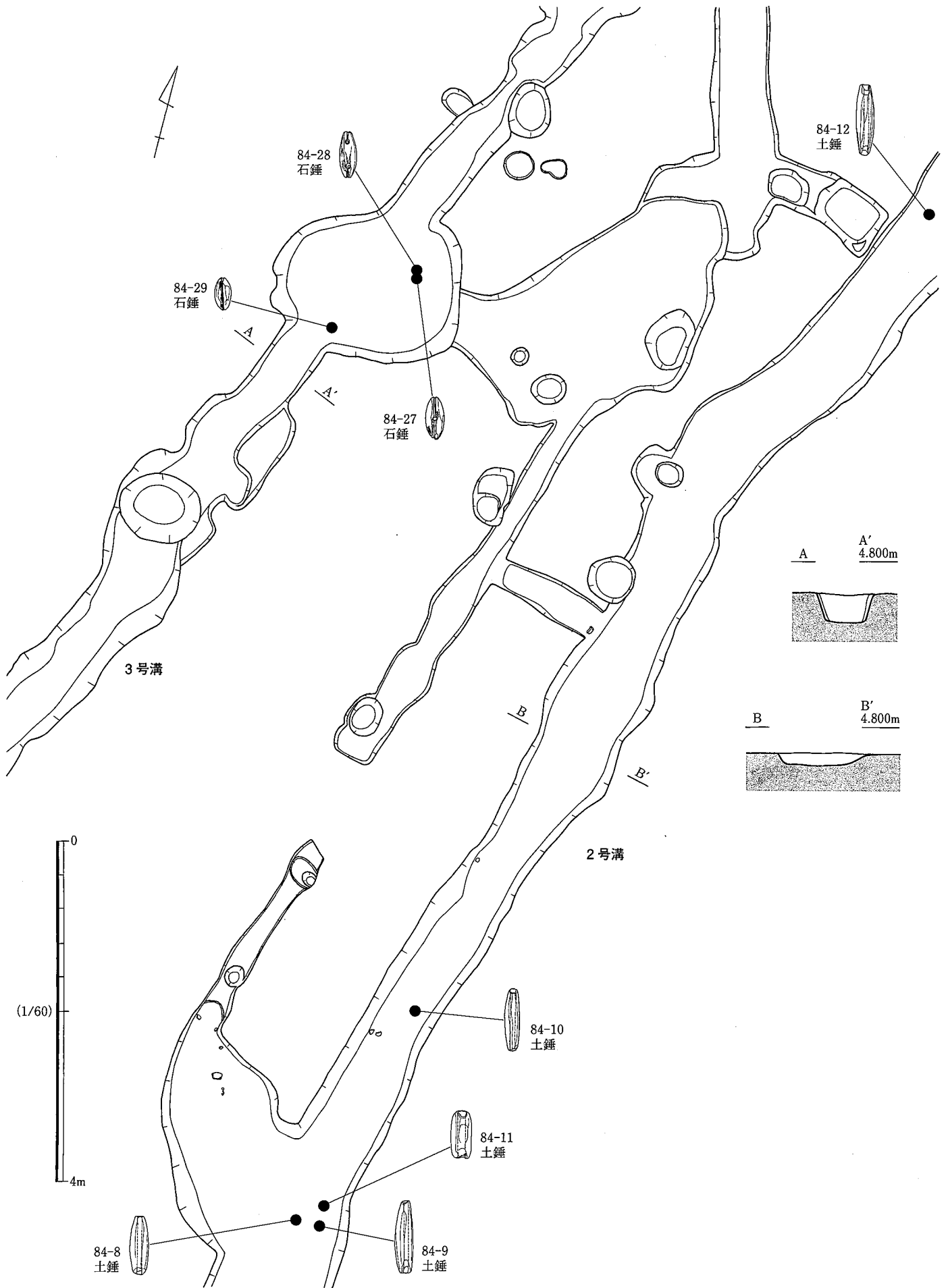
流れを北東方向へ屈曲させる。数箇所の枝分かれがみられ、北側では北行きと北東行きの二股に分かれる。断面は大部分が浅い皿状を呈しており、北へ進むにつれて削平が少ないためか深くなる。

出土遺物 (第84図、図版33) 8～13は土錘で、このうち8～12は溝の北側から出土した。8は長さ6.9cm、幅2.2cm、厚さ2.1cm、孔径5mm、重量25.78g。9は長さ8.5cm、幅2.2cm、厚さ1.9cm、孔径5.5mm、重量30.93g。10は長さ7.3cm、幅1.8cm、厚さ1.8cm、孔径5.5mm、重量19.14g。11は長さ5.7cm、幅2.4cm、厚さ2.5cm、孔径9mm、重量32.02g。12は長さ8.4cm、幅2.1cm、厚さ2.3cm、孔径5mm、重量35.45g。13は長さ6.7cm、幅2cm、厚さ1.8cm、孔径6mm、重量22.91g。14は石杵と考えられる。挟りの少ないL字形で底面には擦痕がみられるものの、断面が丸く、使用頻度は少ないと考えられる。硬質砂岩製。長さ14.6cm、幅8cm、厚さ4cm、重量592.88g。15は手捏ね土器で、一方に把手状の突起を摘み出す。口縁径1.5cm、器高2.9cm。16は敲石と考えられる。表裏面と側面に敲打痕がみられる。花崗岩製。長さ12.2cm、幅8.4cm、厚さ7cm、重量1,246.82g。17は両刃石斧と考えられ、基部が失われる。砂岩製。長さ6.5cm、幅7.7cm、厚さ1.7cm、重量117.14g。18～24は須恵器の蓋と坏身である。このうち坏身は蓋受け部が低く、内傾する。18は口縁径10.4cm、器高3.5cm。19は口縁径10.8cm、器高3.4cm。20は口縁径12cm、器高3.1cm。21は口縁径10.2cm、器高3.2cm。22は口縁径9.8cm、器高3.2cm。23は口縁径9.8cm、器高3.7cm。24は扁平な擬宝珠状の摘みを貼付し、かえりは口縁より若干下方へ突出する。口縁径15.6cm、器高3.2cm。

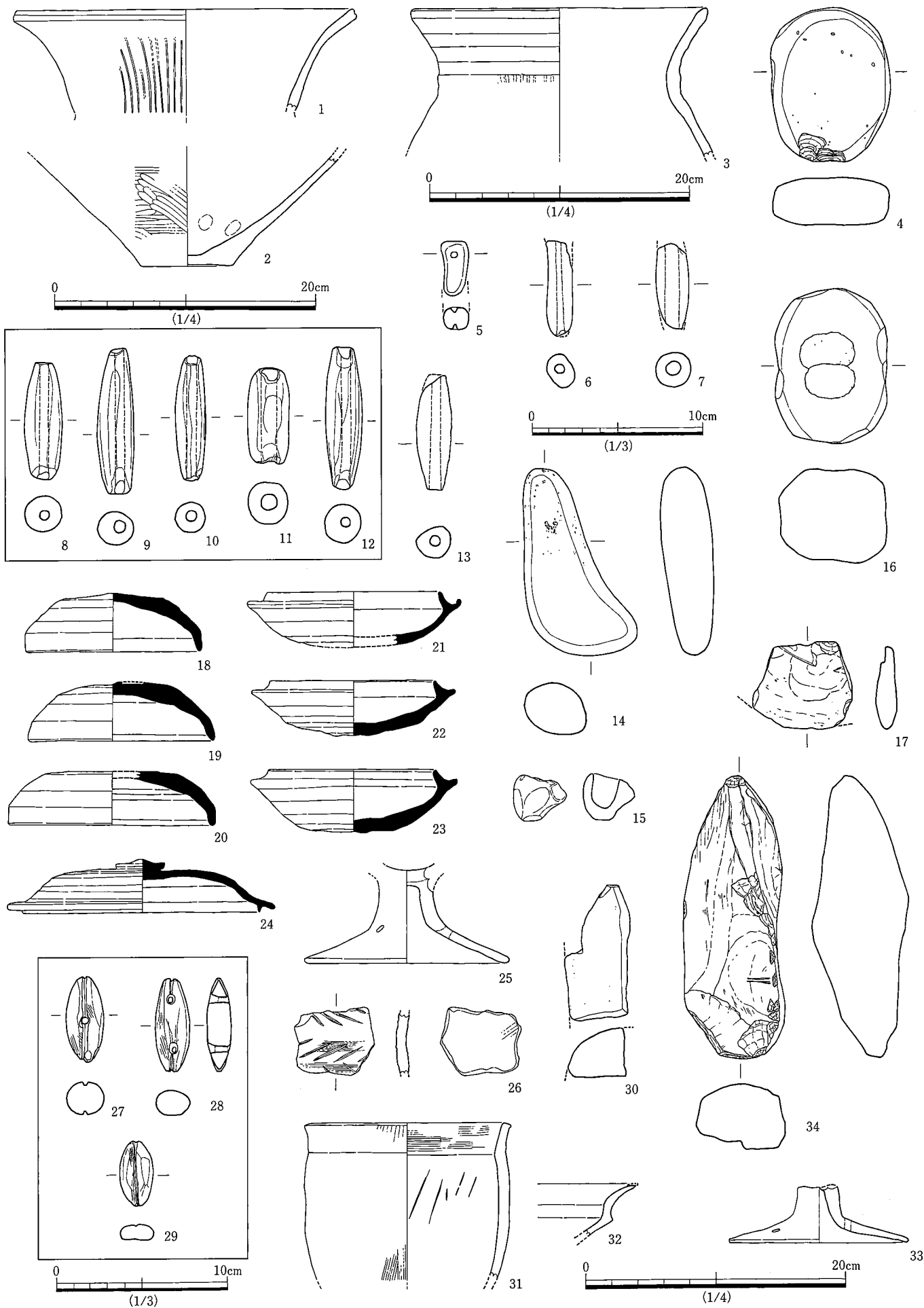
2-1号溝

2号溝は北側で二股に分岐するが、このうち北進するものを2-1号溝とした。

出土遺物 (第84図) 30は石斧の側面の一部と考



第83図 Ⅲ-E区 2、3号溝実測図 (1/60)



第84図 III-E区 1~3号溝 出土遺物実測図 (1/3、1/4)

えられ、刃部および基部を失う。玄武岩製。長さ 10.3cm、幅 4.5cm、厚さ 3.8cm、重量 289.89g。

2-3号溝

2-1号溝から途中で東方向へ分岐したものを2-3号溝とした。

出土遺物 (第84図、図版33) 31は土師器の甕で、外面はハケ目を施し、口縁内面は横ハケ、胴部内面は縦方向のケズリを行う。内外面にススが付着しており、2次焼成を受けたものと思われる。口縁の復元径は16.1cm。32は複合口縁壺の口縁部である。口縁部は外反し、端部は摘み上げる。33は高坏の脚部で、裾に円形の透かしが施される。底部径14cm。34は石斧である。全面に粗い研磨を施すが、側面などに調整剥離痕や敲打痕が消されずに残る。玄武岩製。長さ22cm、幅7.3cm、厚さ7cm、重量1,800g。

3号溝 (第83図)

2号溝の西側に位置し、途中までこれと並行するように掘削され、北側でなだらかなS字状に屈曲する。断面形は逆台形で、他の溝よりも比較的深い。掘削方向が2号溝と同一のため、2本の溝は時期および性格の面で関係が深いと思われる。

出土遺物 (第84図、図版33) 25は高坏の脚部で、裾部に円形の透かしを施す。底部の復元径は16cm。26は弥生土器の破片で、外面に綾杉状の文様が施される。器種は不明。27～29は石錘である。27は長軸方向に1条の沈線を巡らせ、中央部に穿孔を行う。滑石製。長さ5cm、幅2.2cm、厚さ1.9cm、重量28.19g。28は2ヶ所に穿孔を行い、それぞれの孔から上下の端部に向かって沈線を彫る。下部の孔の裏面には軸がずれたためか、孔を開け直した痕跡が残る。砂岩製。長さ5.4cm、幅2cm、厚さ1.4cm、重量18.27g。29は小型の石錘で、長軸方向に1条の沈線を巡らせる。滑石製。長さ3.8cm、幅2cm、厚さ7mm、重量11.3g。

(3) 玉作関連の遺構と遺物

a. 工房および屋外周溝

概要

本調査区の北側には玉作に関連する建物が分布している。竪穴住居状の遺構で、平面は方形または隅円長方形で、周囲に円形の屋外周溝を巡らせるものが多い。本調査区内で合わせて4棟ほどが確認されており、この他の1棟は道路を挟んで隣接する他の調査区にまで跨っている。

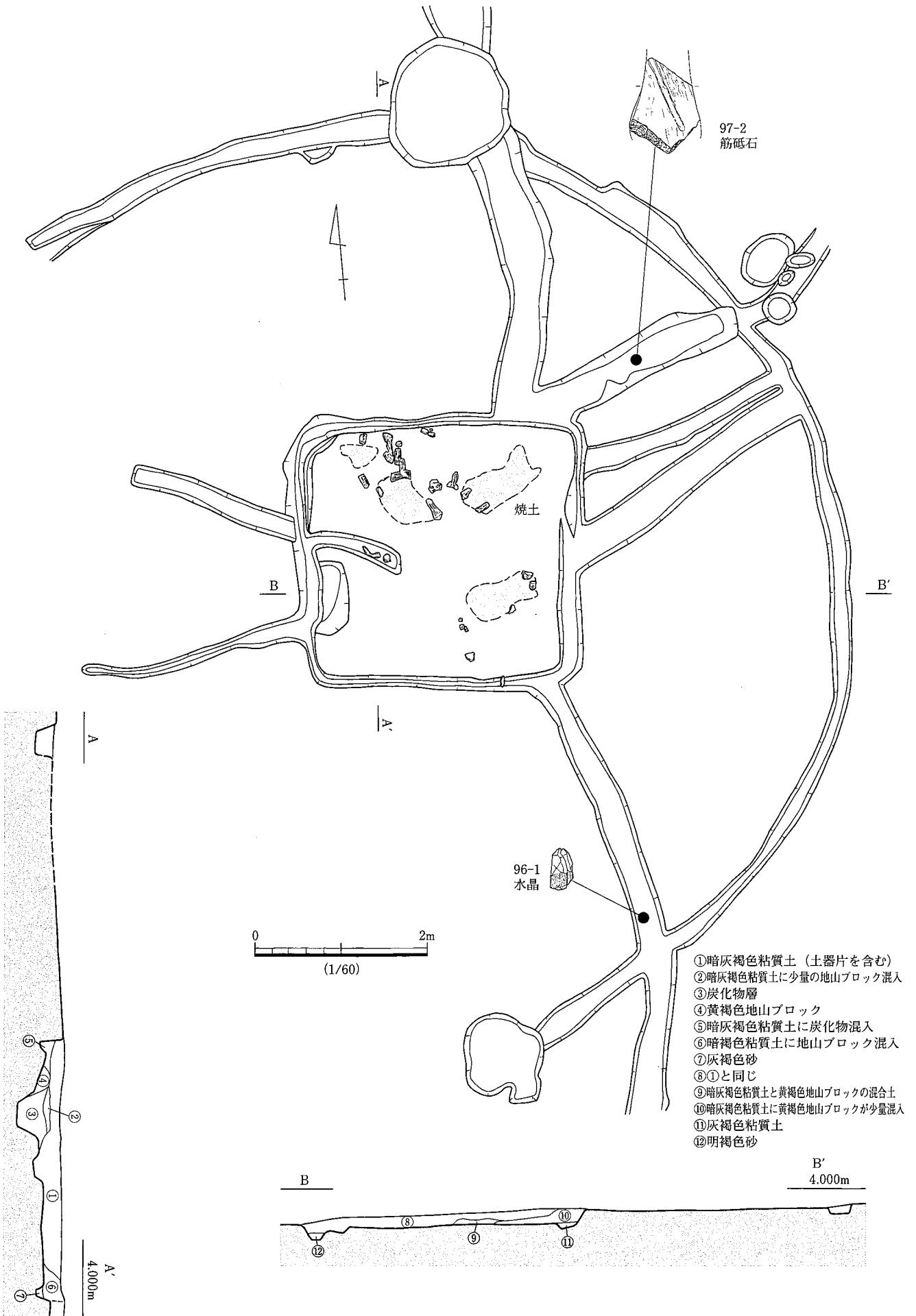
本報告書では、工房の可能性のある建物の名称については竪穴住居の形態を採ることから、これを用いることとする。また、遺物の報告は大きく2つに分けて行い、まず、各遺構の時期決定などに必要な土器やその他の生活用具類を遺構と共に挙げ、つづいて玉作に関係する遺物をまとめたい。

1号竪穴住居 (第85図、図版6、7)

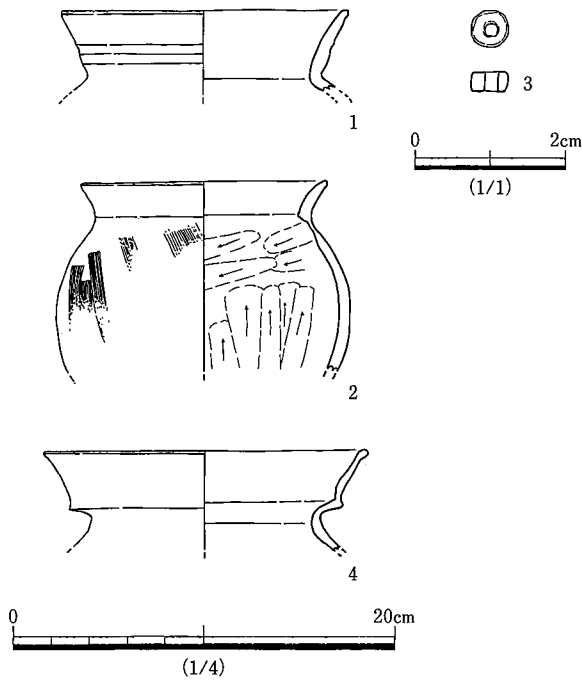
本調査区の北西側に位置する。付近は微高地の西側の緩斜面にあたる。

住居の平面形態は隅円方形を呈し、これを中心として丘陵の上位に半円形の屋外周溝を巡らせる。この屋外周溝と住居の床面に掘られた壁溝は3本の溝によって接続し、反対側に掘られた2本の屋外排水溝によって斜面下位へ向かう。なお、住居には他に2本の排水溝が接するが、これは別の遺構が重複している可能性がある。

つづいて、住居の構造についてみる。住居の床面の4箇所には焼土と炭化物がみられ、これらの場所で火を使用した可能性がある。しかしながら、床面は平坦なままであり、掘り窪めて炉のような施設を作っていないため、火の焚き方については検討が必要である。西側の壁際からは1条の溝が中央へ向かって伸び、南西側の壁際には土坑状の浅い窪みがある。上屋を支える柱については床面から検出され



第 85 図 III-E 区 1 号竪穴住居および屋外周溝実測図 (1/60)



第86図 Ⅲ-E区 1号竪穴住居および屋外周溝出土遺物実測図
(1/1, 1/4)

ていないことから、住居の周囲に配置した可能性があり、この痕跡は削平によって失われたと考えられる。平面の規模は3.2m × 3.1mで、深さは18cm ~ 12cm。屋外周溝の径は11m。

出土遺物（第86図、図版34） 1~4は住居の床面から出土したものである。

1と2は甕である。1は口縁部がやや厚く、直線状に開く。内外面は横ナデで、外面には強いナデによる痕跡が凹線状に残る。口縁部の復元径は15cm。

2は口縁部がやや外反しながら開き、端部は軽く押さえて丸く収める。胴部外面には縦ハケが部分的に残り、口縁の内外面には横ナデ、胴部の内面上位は強い横ケズリ、中位以下には縦ケズリがみられる。口縁部の復元径は12.8cm。

3は滑石製の白玉である。径5mm、厚さ3mm、孔径1.5mm、重量0.1g。

4は複合口縁の壺である。口縁部はやや外反しながら開き、口縁端部は軽く押さえる。口縁部の復元径は17cm。

2号竪穴住居（第87図、図版6）

調査区の北東側に位置する。付近は微高地の最高所である屋根筋にあたり、削平を大きく受けていると考えられるため、遺構の残りが悪い。

住居の平面形態は不正長方形で、南東側の隅が角張らず、なだらかな円弧となる。住居内には数本のピットがみられるが、いずれも住居に伴うものではなく、柱穴はない。したがって、1号住居と同様、外側に配置されていた可能性がある。なお、住居の床面には焼土や壁溝などの施設はみられない。

屋外周溝は住居を中心として半円形に巡り、住居と1本の溝で接続する。住居の規模は2.7m × 3.6mで、深さは残りが悪く、6cm。屋外周溝の径は約8.5m。

出土遺物については小片が多く、時期を判断できる資料はない。

3号竪穴住居（第89図、図版6）

調査区の北端に位置する。

住居の平面形態は不正長方形で、南側の側壁の形が崩れる。床面や壁際にピットが数本みられるが、当住居に伴うものではなく、柱穴は存在しない。また、他の焼土や壁溝などの施設もみられない。住居の東と北西には2本の溝が北の調査区外へ向かって走る。これらはそれぞれ内側へ弧を描いて調査区外でつながり、住居の屋外周溝になると考えられる。

住居は小型で、規模は1.5m × 2.4m。深さは21cm。屋外周溝と考えられる溝の間隔は4.5m。

出土遺物（第88図、図版34） 図化できたのは2点で、1は東側の屋外周溝から、2は北西側の屋外周溝から出土した。1は小型丸底壺で、全体的にやや扁平な器形を呈する。口縁部は若干内湾気味に摘み上げ、内面には横方向のハケ目がみられる。他の箇所については風化のため調整は不明。口縁部の復元径は12.4cm。

2は甕で、口縁端部を押さえて面取りする。外面にはハケ目が施されるが、風化のため残りが悪い。



第87図 III-E区 2号竪穴住居および屋外周溝実測図 (1/60)

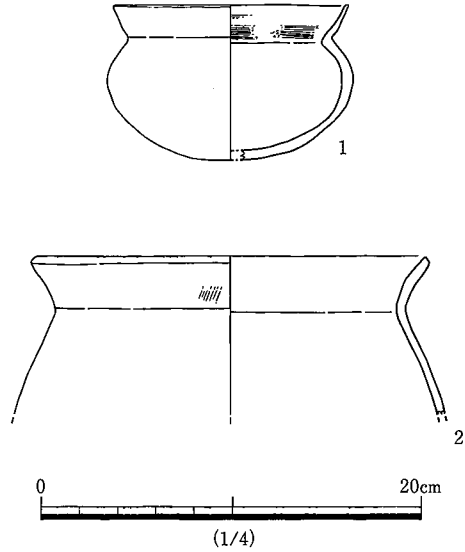
口縁部の復元径は 21cm。

4号竪穴住居 (第90図、図版6)

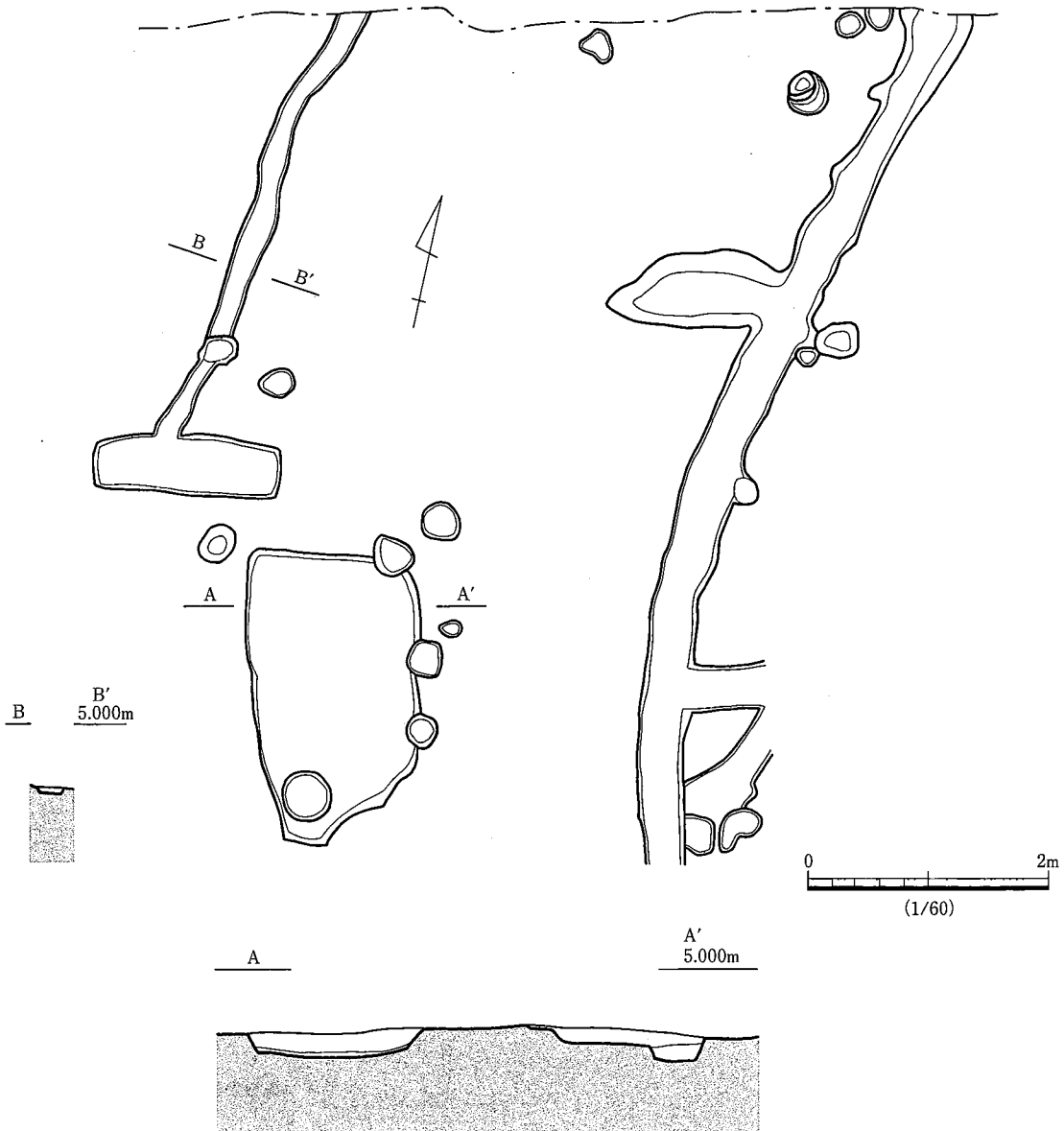
調査区の北西側に位置する。付近は微高地の西側の緩斜面で、1号住居と屋外周溝が重複する。

住居は遺存状態が悪く、南側の壁面と床面が残る。もとは、長方形または方形に近い形態であったと考えられる。床面には他の住居と同様に柱穴は検出されず、土坑などの施設や焼土もみられない。

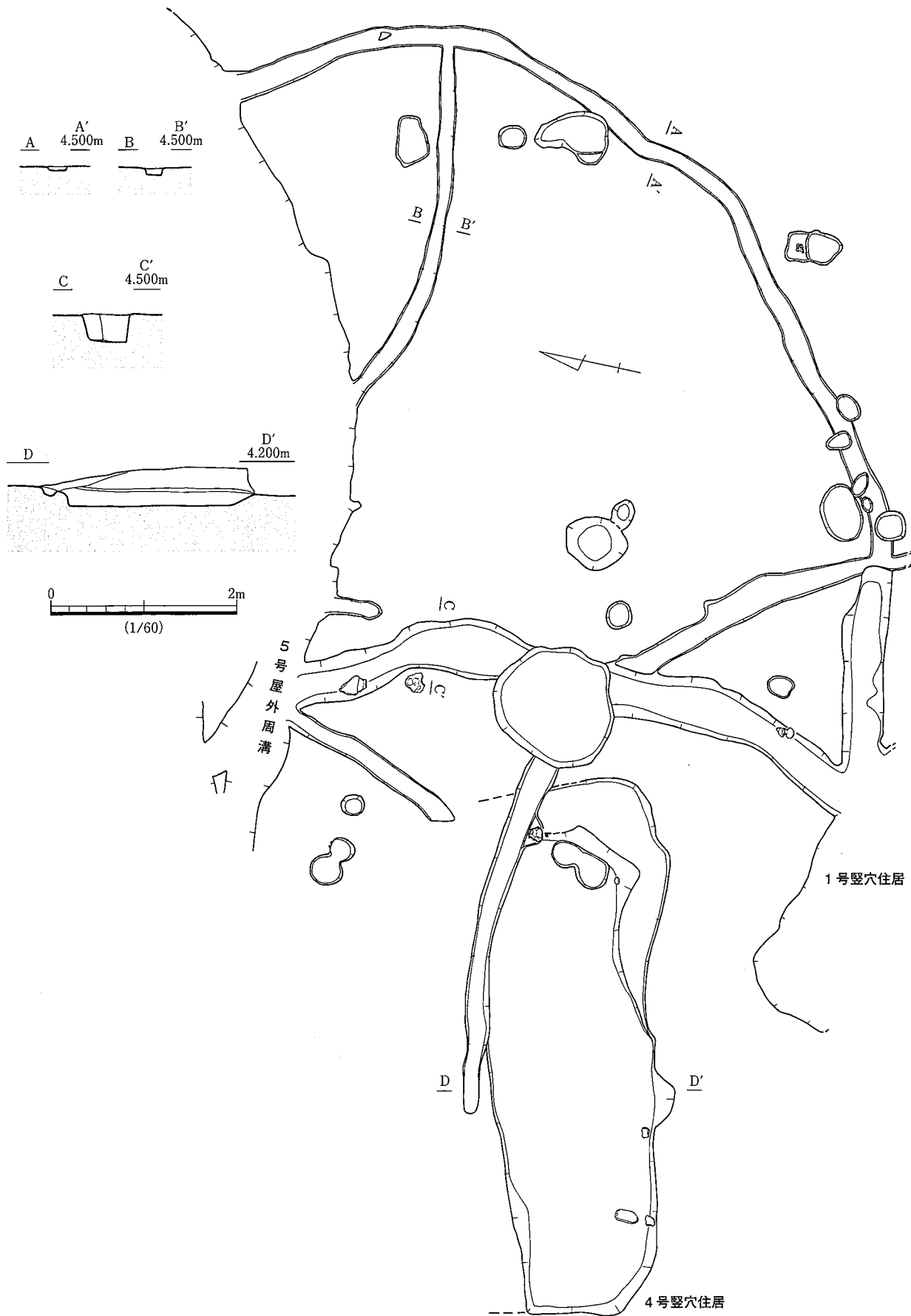
屋外周溝は住居の斜面上位にあたる東側に巡り、南側は1号住居と北側は5号屋外周溝と重複する。この切り合い関係から、本住居は1号住居と5号屋



第88図 Ⅲ-E区 3号竪穴住居および屋外周溝出土遺物実測図 (1/4)



第89図 Ⅲ-E区 3号竪穴住居および屋外周溝実測図 (1/60)



第90図 III-E区 4号竪穴住居および6号屋外周溝実測図 (1/60)

外周溝のいずれよりも古いと考えられる。住居の規模は壁面の残る東西幅で5.6m、深さ18cmである。

出土遺物（第91図、図版35） 遺物のうち1と2は住居から、3～8は屋外周溝から出土した。

1、3、4は埴形土器と考えられる。

1は扁平な器形で、口縁部がやや内湾しながら立ち上がり、口縁端部は摘み上げる。内外面ともナデ調整で、復元径は15cm。

2は口縁部が直線状に広がり、胴部最大径を上回る。口縁部付近は内外面とも横ナデを施す。口縁部の復元径は17.6cm。

3は口縁付近で大きく屈曲する。内外面ともナデ調整で、復元径は16cm。

4はやや内湾しながら立ち上がり、口縁端部が肥厚し丸く仕上がる。内外面ともナデ調整で、復元径は16cm。

5は内面が丹塗りで、口縁の内側に粘土帯を貼付し、端部には斜め方向のキザミ目を施す。

6は鉢の底部と考えられる。外面はナデ調整で、底部側面に押さえによる指頭痕が残され、内面にはハケ目が残る。底面はややふくらみをもつ平底で、径は4.4cm。

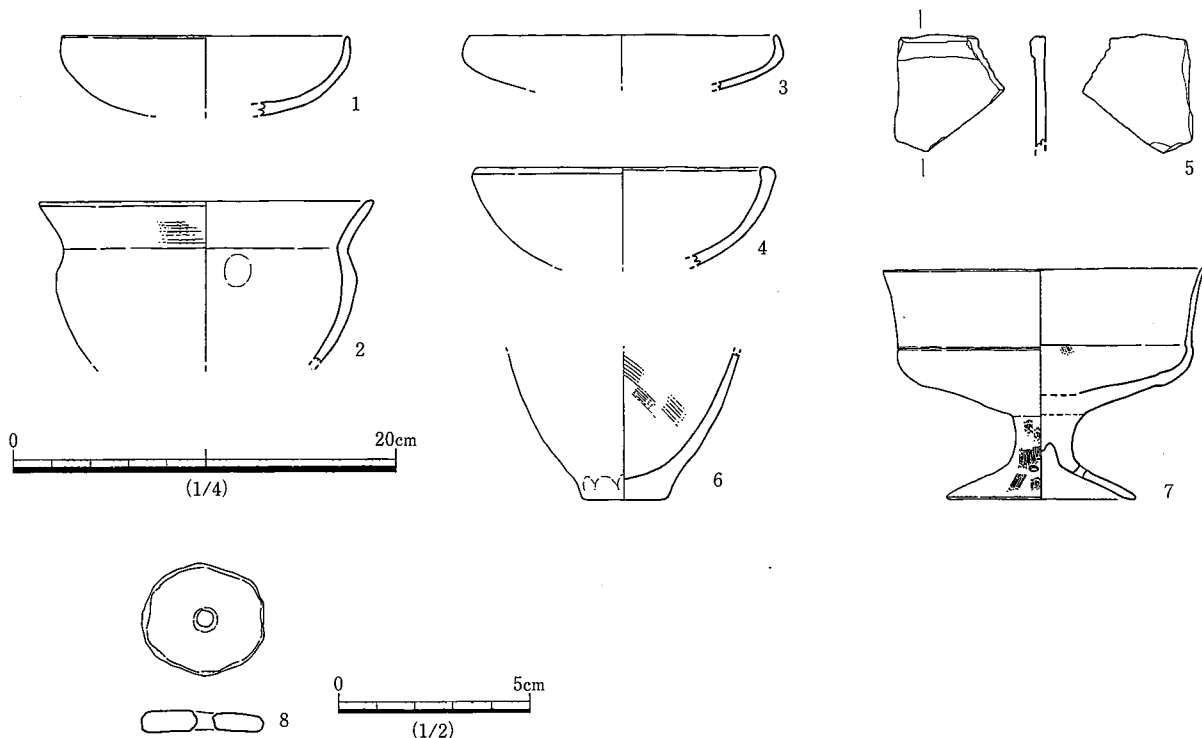
7は外来系の高坏と考えられる。脚部の内外面に丹塗りが残っており、かつては全面に丹塗りが施されていた可能性がある。脚部の外面には縦方向のハケが残り、坏部の外面はナデ仕上げ、内面は横方向のハケを施した後にナデ調整を行う。坏部は器壁が薄く、端部は摘み上げ、脚部の裾には3ヶ所に円形の透かしが入る。口縁径17cm、底部径10cm、器高12.2cm。

8は土器片を再生した紡錘車である。長さ3cm、幅3.2cm、厚さ6mm、重量6.01g。

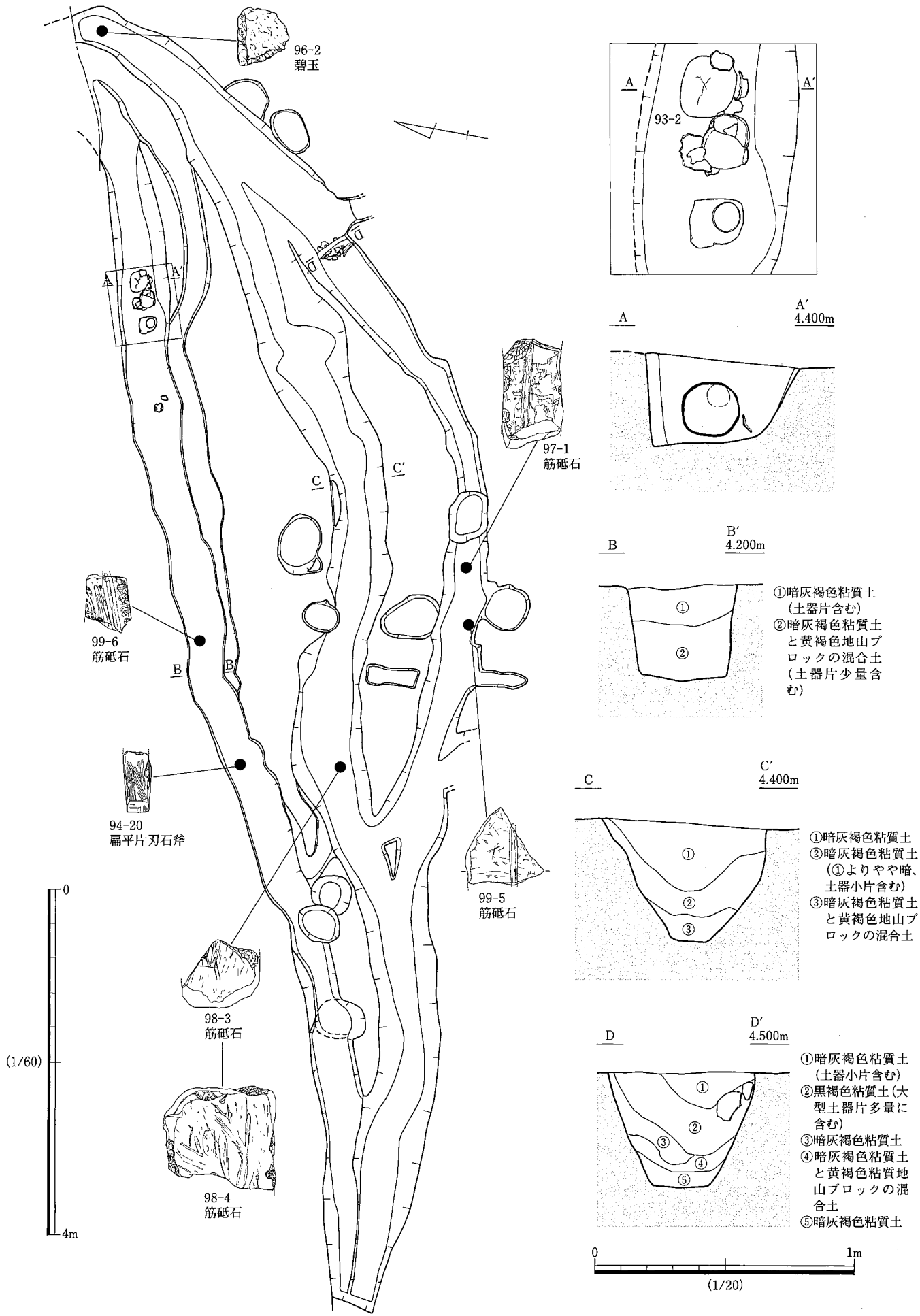
5号屋外周溝（第92図、図版6）

調査区の北西端に位置し、付近は微高地の落ち際にあたる。この屋外周溝の中心部に来る竪穴住居は調査区外に存在すると考えられるため、ここでは屋外周溝を取り上げ、工房の内容を知るための手掛りとして。

屋外周溝は北に向かって弧を描くように掘削される。溝の先端部である西側から順にみると、先端付近では2条の溝が接して掘削されており、途中で二股に分かれる。このうち、北側の溝は直線状に掘られ、南側の溝は大きく弧を描きながら迂回し、さら



第91図 III-E区 4号竪穴住居および屋外周溝 出土遺物実測図 (1/4)



第92図 Ⅲ-E区 5号屋外周溝実測図 (1/20、1/60)

に二股に分岐して、北側の溝と接する付近で合流する。したがって、屋外周溝は主に 2 重の溝で構成されており、部分的に 3 重となることがわかる。

溝の断面は他の屋外周溝と比べて深く、残りの良いことが分かる。溝の断面はやや床面の狭いコの字状または逆台形状に掘削されており、深さは 30cm ~ 45cm 程度である。

出土遺物 (第 93 ~ 95 図、図版 35 ~ 37) 溝の中からは土器・石器などの他に、玉作に関連する資料が数多く出土した。このうち、玉作関連の資料は後で述べることとし、ここでは他の資料についてみて行く。

1 ~ 3 は壺で、1 は完形、2 は口縁の一部を欠くもののほぼ完形である。

1 は胴部がやや肩の張った扁球形を呈し、底部には若干の平坦面を残す。頸部はほぼ直線上に立ち上がり、付け根付近のくびれは弱く、口縁端部は摘み上げる。調整は器面の風化によりはっきりしないが、最終的にナデを行った可能性がある。口縁径は 4.7cm、器高は 11cm。

2 は長胴で、頸部の付け根はしまり、口縁部に向かって直立気味に立ち上がり、端部は摘む。底部は凸レンズ状であり、胴部の最大径は中位よりも上方にくる。体部の外面はハケ目を施した後に部分的に粗いケズリを行っており、肩部付近は斜め方向に、胴部は主に縦方向にケズリを施す。口縁部の内外面については横ナデ、体部内面には粗雑な縦方向のケズリを施す。底部の側面付近には花卉状の器壁の剥落がみられ、焼成時に破損した可能性がある。口縁部の復元径は 11.4cm、器高は 27.7cm。

3 は頸部が外反しながら立ち上がり、口縁部がくの字状に屈曲する。

4 ~ 6、29 は複合口縁の甕で、口縁部が外反しながら立ち上がり、端部は押さえずに摘み上げる。それぞれの口縁部の復元径は 4 が 16.8cm、5 が 19.2cm、6 が 20cm、29 が 19cm。

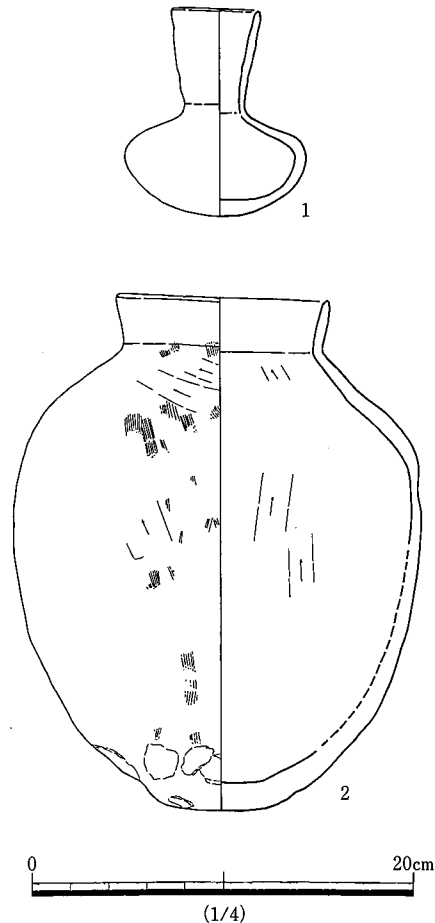
7 は外来系の高坏である。坏部の下位と脚部の外面には縦方向のハケ目が部分的に残り、口縁部付近

の外面は横ナデ、端部は押さえて面取りし、坏部内面の底付近には放射状のミガキが施される。口縁径は 18.3cm。

8 と 12 は手捏ね土器である。8 は尖底状の底部であり、12 はやや平坦で全面に指頭痕が残る。口縁は波状にうねり、径は 3.9cm、器高は 4.1cm。

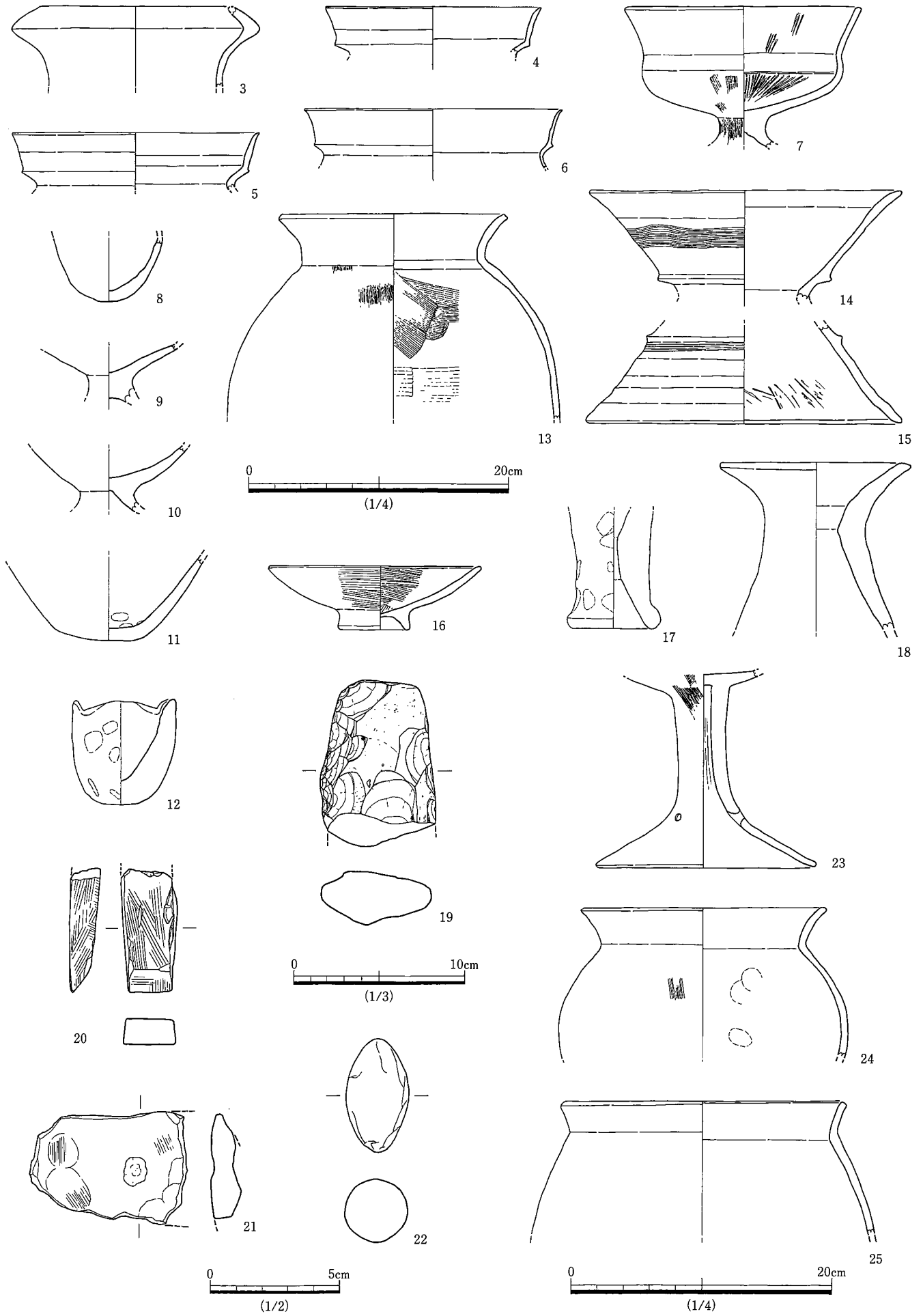
9、10、16 は低脚坏と考えられる。このうち 16 は残りがよく、体部はやや内湾気味に大きく広がり、内外面には横方向のハケ目を施し、脚部の内外面はナデ調整を行う。口縁径は 12.3cm、底部径 4.1cm、器高 3.6cm。

13、24、27、30、35、37 は甕形土器で、11 は壺または甕の底部と考えられる。13 と 24、27 は口縁部が外反しながら開き、端部は押さえ、体部の外面には縦ハケを施し、部分的にナデ消す。13 と 30 の内面には斜めまたは横ハケを施し、部分的にナデ消し、24 はナデ調整を行う。35 は口縁部が外反しながら開き、端部を摘む。外面には縦ハケを施し、内面

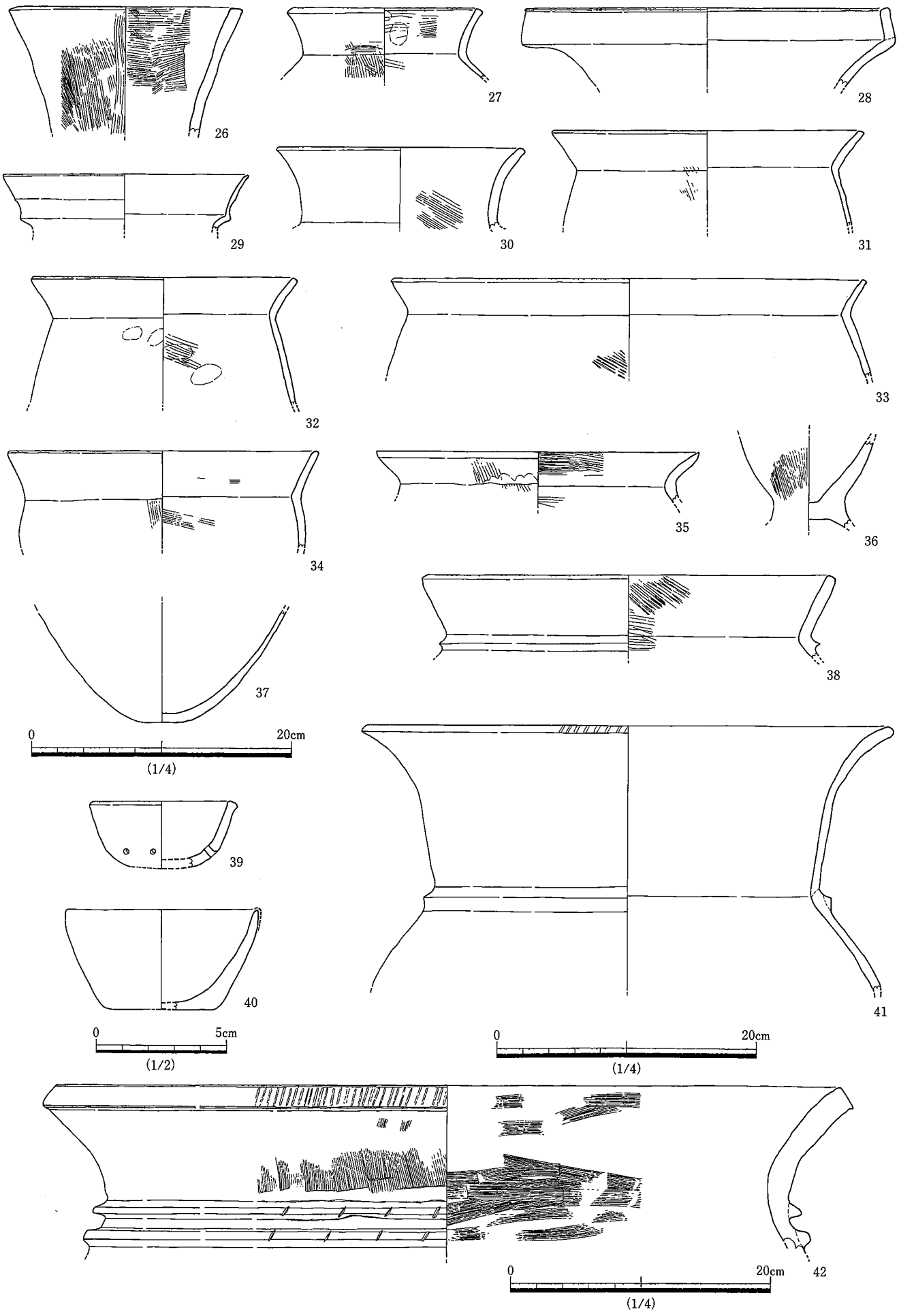


第 93 図 Ⅲ-E 区 5 号屋外周溝 出土遺物実測図 1 (1/4)

調査の記録



第94図 Ⅲ-E区 5号屋外周溝 出土遺物実測図2 (1/2, 1/3, 1/4)



第95図 Ⅲ-E区 5号屋外周溝 出土遺物実測図3 (1/2, 1/4)

には粗い横ハケが残る。11と37は凸レンズ状の底部である。それぞれの口縁径は13が17.5cm、24が19cm、27が15cm、30が19.2cm、35が25cm。

14と15は鼓形器台である。14は外面の中位にやや波状となる櫛描文を巡らせ、15は突帯の下位に櫛描並行線文を巡らせ、内面はヘラ削りの痕跡が残る。それぞれの口縁部と底部の復元径は14が24.2cm、15が24.4cm。

17は支脚、18は器台、23は高坏の脚部である。17は筒形で全体に指頭痕が残り、23は外面の一部にハケ目残り、裾部に3箇所透かしが施される。それぞれの底部または口縁径は、17が7.2cm、18が14.8cm、23が17cm。

19は石斧の基部で研磨が施されるものの、調整剥離痕が残る。玄武岩製。長さ9.7cm、幅6.4cm、厚さ3.1cm、重量272.59g。

20は片刃石斧で、全面に研磨が施され、基部は失われる。粘板岩製。長さ4.8cm、幅2.2cm、厚さ1.2cm、重量21.22g。

21は石庖丁と考えられ、片面に穿孔途中の窪みがみられることから未成品の可能性ある。砂岩製。長さ4.1cm、幅6.1cm、厚さ1.2cm、重量36g。

25、31、32、33は甕と考えられる。いずれも口縁端部は押さえて面取りする。口縁径は25が22cm、31が24.2cm、32が20.4cm、33が37cm。

26は壺の口縁部で、直線状に広がる。端部は押さえて面取りし、外面は縦および斜め方向のハケ、内面は横ハケを施す。口縁部の復元径は18cm。

28は壺で、口縁部が短く屈曲し、直線状に立ち上がる。口縁径は28.4cm。

34は壺で、口縁部が直線状に広がり、胴部最大径を上回る。外面には縦ハケ、内面には横ハケが部分的に残る。口縁部の復元径は24cm。

36は脚台付の甕と考えられる。外面には縦ハケが残り、内面はナデ調整である。

38は口縁部が直線的に立ち上がり、端部は押さえる。口縁部の付け根には三角突帯を1条巡らせ、

内面はハケ調整を行う。口縁部の復元径は32cm。

39と40はミニチュア土器で、39は全面ナデ仕上げが施され、体部下位に2つを1単位とする穿孔が施される。口縁部の復元径は5.6cm。40の口縁部の復元径は7.4cm。

41は広口壺で、口縁端部に斜め方向のキザミ目を施し、頸部の付け根には三角突帯を1条巡らせる。口縁部の復元径は41.4cm。

42は甕棺である。口縁端部には斜め方向のキザミ目を施し、頸部の付け根には2条のコの字状突帯を巡らせ、頂部に斜め方向のキザミ目を施す。頸部外面は縦ハケ、内面は横ハケで、それぞれを粗くナデ消す。口縁部の復元径は60.8cm。

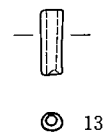
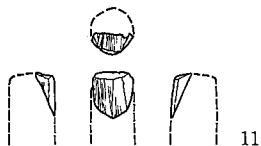
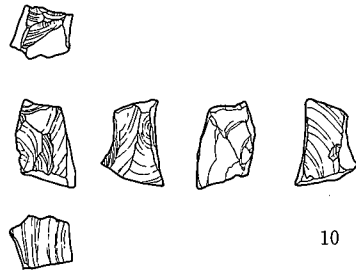
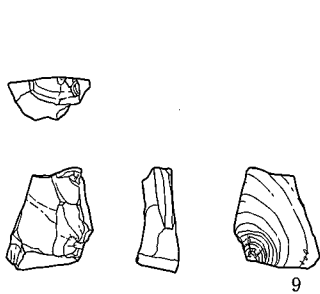
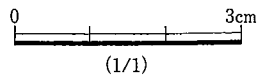
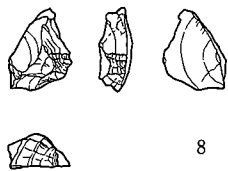
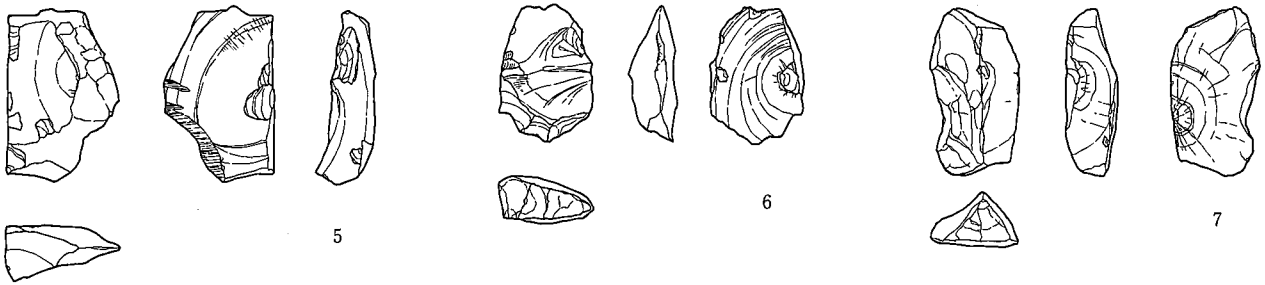
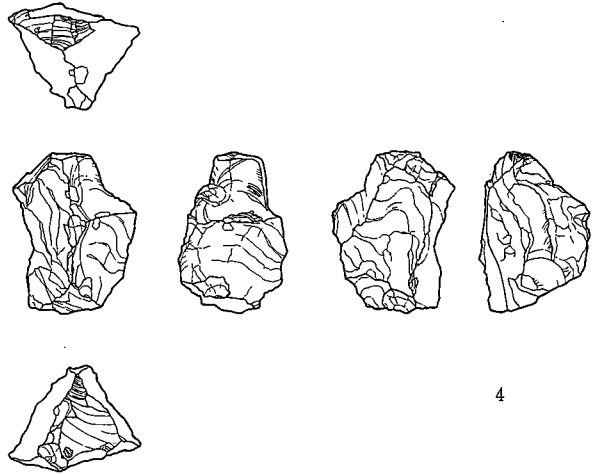
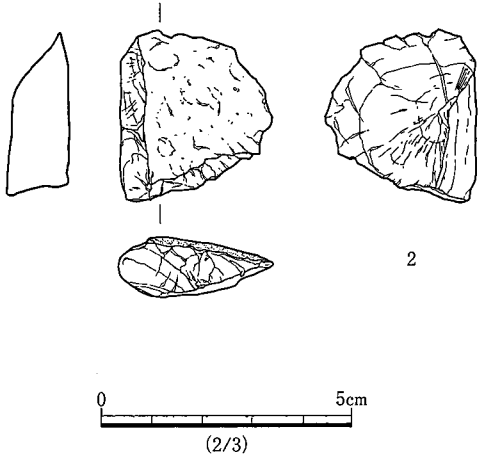
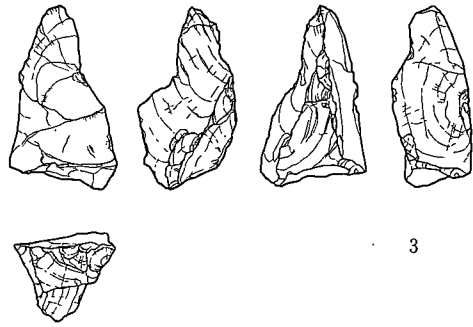
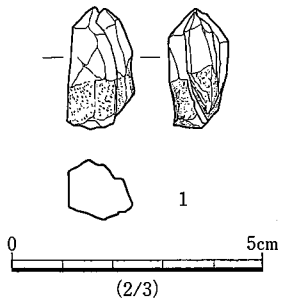
b. 玉類

概要

玉類の製作関連資料は調査区の北側から出土している。出土地点は工房と考えられる竪穴住居と屋外周溝、大溝および表採とがあり、大溝出土のものについては流れ込みの可能性ある。内容は水晶の原石1点と碧玉の剥片101点で、重量は水晶が1点で4.99g、碧玉が合計で61.6gである。このうち、遺構別に出土量をみると、最も多いのが5号屋外周溝で、碧玉が35点出土し、合わせて44.7gである。この他については、1号住居と南側で重複する溝から水晶1点、3号住居の屋外周溝から1点で5g、大溝から16点で合計2.41gである。

水晶製玉類製作資料（第96図、巻頭図版3）

1は水晶の原石で、1号住居の南側に接する溝から出土した。本調査区で唯一の水晶である。色調は透明で、表面にはガラス光沢がある。長さ2.41cm、幅1.24cm、厚さ1.21cm、重量4.99g。



第 96 図 Ⅲ-E 区 玉類製作資料実測図 (1/1、2/3)

管玉製作資料 (第96図、巻頭図版3)

2～8、10～12は5号屋外周溝、9は大溝A区上層、13は表採で、2～6、8～12は碧玉で、7と13は緑色凝灰岩と考えられる。

2は荒割段階のものと考えられる。表面には原礫面が残っているため、未成品ではなく、立方体の石核を作り出すために除去された剥片の可能性もある。長さ3.18cm、幅3cm、厚さ1.25cm、重量11.78g。

3～10は形割段階の未成品で、横長の剥片が多い。

3は平面が三角形で、一方の小口が切除されない段階のものである。横断面は三角形の頂部を斜め下方向から加撃して剥離し、一部を長方形とする。長さ3.65cm、幅2.15cm、厚さ1.8cm、重量8.82g。

4は小口部が切除され、平面形が長方形に一步近づいた段階のものである。断面形は上部に狭い平坦面をもった台形状を呈し、四角柱を意識しているものの途中で放棄されている。長さ3.21cm、幅2.15cm、厚さ2.15cm、重量12.72g。

5の平面形は側面的一方が張り出すものの長方形に近く、断面は扁平な三角形となる。長さ2.31cm、幅1.51cm、厚さ7mm、重量2.12g。

6の平面は一方の小口部がやや狭い長方形で、断面は5と同じく扁平な三角形を呈する。長さ1.85cm、幅1.25cm、厚さ6.5mm、重量1.64g。

7は平面が長方形に近く、断面は三角形である。側面の1ヶ所に調整剥離を加える。長さ2.2cm、幅1.18cm、厚さ7.5mm、重量1.45g。

8は小片で、平面形は三角形で、断面は台形となる。切除された小口部の可能性が考えられる。長さ1.1cm、幅8mm、厚さ4.5mm、重量0.28g。

9は両側の小口を切除し、平面形は一方の狭い台形状となり、断面は扁平な長方形になる。長さ1.35cm、幅1.09cm、厚さ5.9mm、重量0.9g。

10は四角柱に近い形状のものである。長さ1.15cm、幅7mm、厚さ7mm、重量0.77g。

11、12は研磨段階の未成品である。

11は端部と側面のそれぞれに研磨痕がみられるが、未だ稜が残る。穿孔の痕跡はない。長さ6mm、幅5.8mm、重量0.08g。

12は表面と側面に研磨の痕跡がみられるが、側面には未だ稜が残り、断面が六角形状を呈する。裏面には切断時の剥離痕が残る。長さ6.8mm、幅6.8mm、厚さ3.2mm、重量0.29g。

13は管玉で、端部の一部が少し欠けるが、いつの時点のものか判断できない。長さ8.1mm、径3mm、孔径1.1mm、重量0.08g。

c. 玉作関連の工具類

概要

本調査区で出土した玉類の製作関連工具は砥石や敲石、台石などの石製品である。出土位置は未成品と同じで大溝よりも北側からで、遺構のなかでは5号屋外周溝からの出土量をもっとも多い。

筋砥石 (第97～99図、巻頭図版3)

1、3～7が5号屋外周溝、2が1号住居と接続する溝から出土した。6が粘板岩製であるほかは砂岩製である。

1は直方体に近い形状で、表面の中央にやや斜め方向の筋が1条走る。砥面として確認できるのは表と左右側面の合わせて3面で、上部の小口は折損し、下部の小口は風化、裏面は剥落する。研ぎ減りが最も激しいのは筋のある表面で、続くのは左側面であり、この左側面には長軸方向への著しい研磨痕がみられる。石の目はやや粗い。中央の筋の断面形は浅いU字形を呈し、幅は0.9～1.2cm、深さは3mm。砥石全体の法量は長さ19.3cm、幅10.7cm、厚さ9.2cm、重量2,860g。

2は両小口が折損および風化しているが、元の形は両側面が研ぎ減りによってくびれる長方形であったと考えられる。砥面として残るのは表裏と左右

の4面で、右下の側面は風化した後に再利用した痕跡がみられる。筋は表面と裏面、左側面にあり、もっとも使用頻度の高いのは表面のものである。

それぞれの筋は断面が浅いU字形を呈しており、表面の筋は幅1.1cm、深さ2mm、裏面の筋は

幅6.9mm、深さ1mm、左側面の筋は幅1.2cm、深さ1mmである。砥石全体の法量は長さ16.7cm、幅12.2cm、厚さ4.4cm、重量1,225gで、石の目は粗い。

3は4と同一地点から出土しており、4の上に重なった状態で検出された。扁平な塊状を呈し、砥面

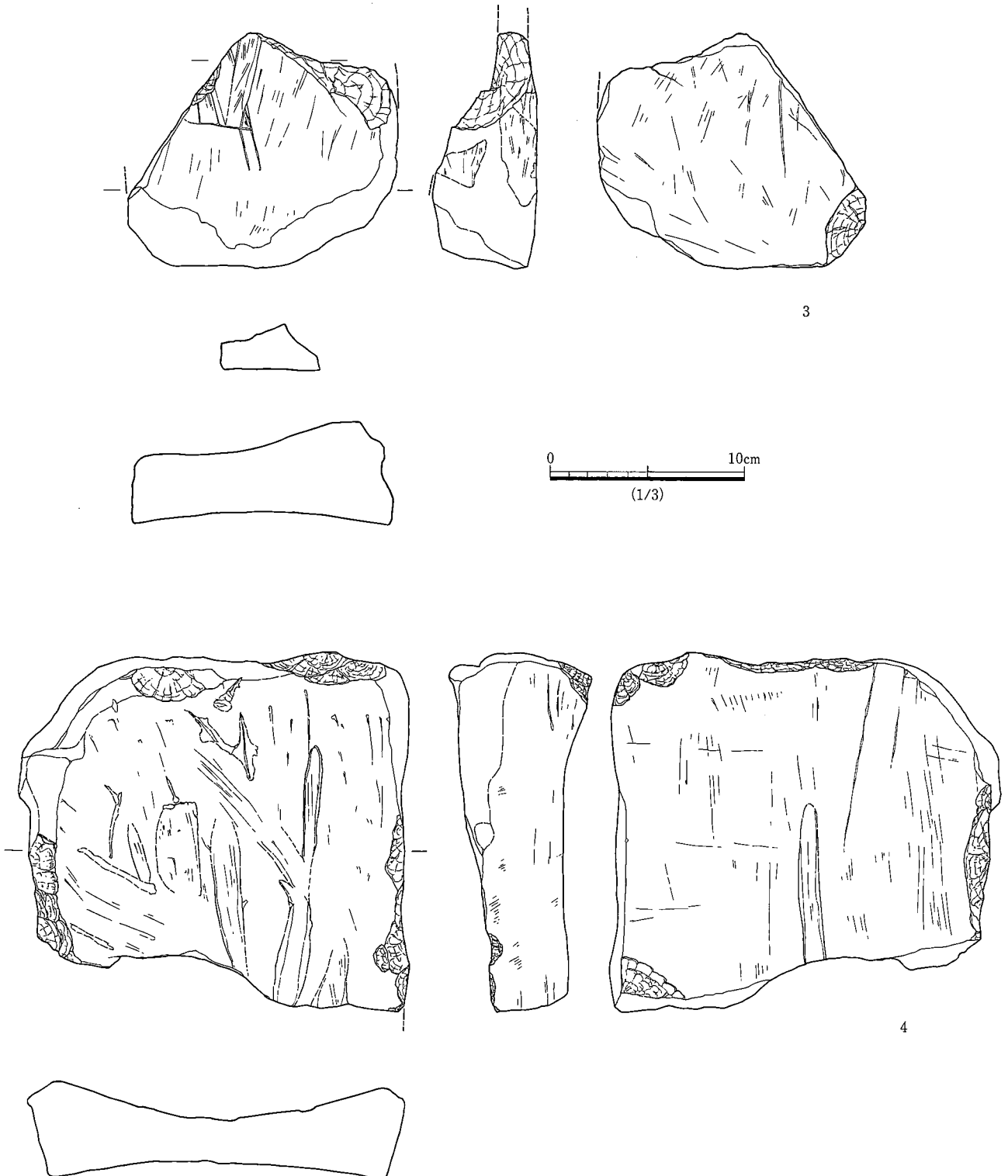


第97図 Ⅲ-E区 工具類1 (筋砥石) (1/3)

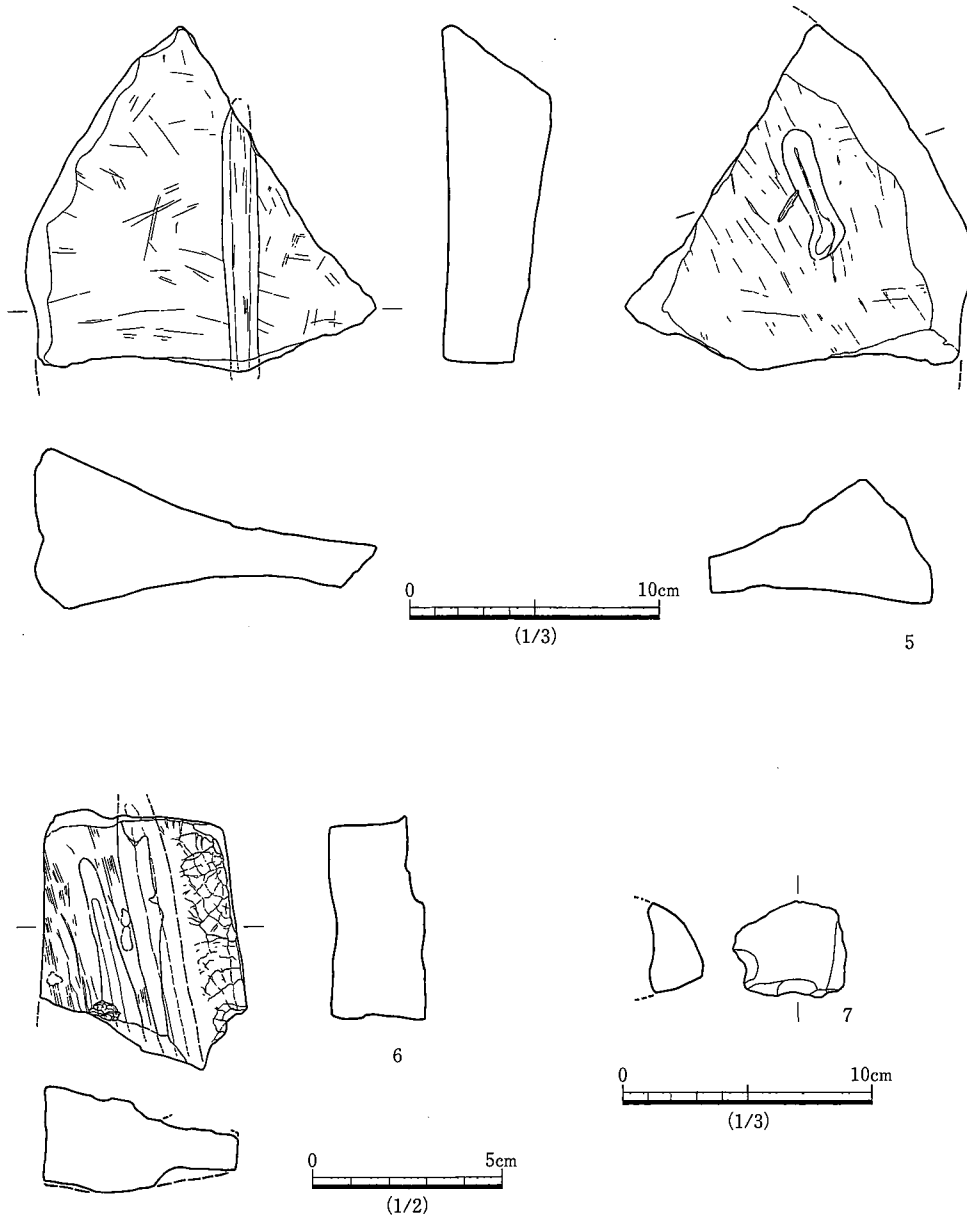
としては表と裏面が残っており、側面はすべて折損および風化する。筋は表面に浅いものが3条ほど刻まれており、このうちの2条は重複する。筋は幅広で底が平坦に近いU字状を呈し、最も残りの良いもので、幅1.32cm、深さ1mmである。砥石全体の法量は長さ12cm、幅13cm、厚さ5.2cm、重量

728.5gで、石の目は粗い。

4は断面が扁平で、平面は方形となる。砥面は表と裏面および右側面が残っており、下の小口面は折損し、他は風化する。表面に4条の筋があり、裏面には1条が残る。それぞれの筋の断面は浅いU字形を呈しており、まず表面のものを右から順にみると、



第98図 Ⅲ-E区 工具類2 (筋砥石) (1/3)



第99図 Ⅲ-E区 工具類3 (筋砥石) (1/2、1/3)

幅 1.29cm × 深さ 2mm、幅 1.43cm × 深さ 1.6mm、幅 1.5cm × 深さ 1mm、幅 5mm × 深さ 0.8mm で、右端の筋がもっとも深い。また、裏面の筋は幅 9mm、深さ 0.8mm である。砥石全体の法量は長さ 18.1cm、幅 19.7cm、厚さ 7.4cm、重量 2,360g で、石の目は粗い。

5 は 3 と同様、扁平な塊状を呈する。表と裏面が砥面として残るが、側面はすべて折損および風化する。筋は表面と裏面に各 1 条ずつ刻まれており、いずれも断面は U 字形で、裏面のものは長さが短い。表面の筋は幅 1.18cm、深さ 1mm、裏面は幅 1.2cm、深さ 2mm で、長さは 5.3cm である。砥石全体の法量は長さ 13.4cm、幅 13.3cm、厚さ 4.3cm、重量

729.32g で、石の目は粗い。

6 は扁平な四角柱状を呈する。砥面は表の左半分と左右側面、上端の小口の一部が残っており、表面の右半分を含むほかの部分については折損および剥落する。筋は表面に並行する 2 条が確認され、いずれも砥石の長軸に対して斜め方向に刻まれる。この筋のうち中央のものは半分が表面剥離によって失われるが、いずれも断面が U 字形を呈していたものと考えられる。中央のものは復元で幅 1.2cm、深さ 3.5mm、左のものは幅 4mm ~ 8.2mm、深さ 1.5mm である。砥石全体の法量は長さ 7cm、幅 5.5cm、厚さ 2.8cm、重量 105.2g で、石の目は細かい。

7は塊状の砥石の破片で、表面と左および下側面が砥面として残る。側面のそれぞれには筋が残っており、筋の断面はU字形になる。筋の幅は1.1cm、深さ2.5mmである。また、砥石全体は長さ3.6cm、幅4.4cm、厚さ2cm、重量41.33g。目のやや粗い砂岩製である。

砥石とその他の工具類(第100～102図、図版38、39)

1～4は3号竪穴住居の屋外周溝から出土した。

1は砥石で、表と裏面、右側面に砥面が残る。砂岩製でやや目が粗い。長さ5.6cm、幅6.8cm、厚さ2.5cm、重量108.42g。

2は砥石で、表面と左側面が砥面として残る。赤変しているため、火を受けた可能性がある。玄武岩製で目がやや細かい。長さ5.1cm、幅8.1cm、重量226.71g。

3は砥石で、表面と左側面が砥面として残る。左上の角が直角に近いので、元は長方形であった可能性がある。研ぎ減りは少なく、目は粗い。砂岩製。長さ6.2cm、幅7.5cm、厚さ3.6cm、重量169.55g。

4は敲石と考えられ、先端部に敲打痕が残り、裏面には擦痕がみられる。片岩系の石材である。長さ4.8cm、幅6.05cm、厚さ4.2cm、重量188.21g。

5は4号竪穴住居の屋外周溝からの出土である。砥石で、表面と左側面が砥面として残り、表面に3条の筋が入る。筋はいずれも細く、断面はV字状になる。筋の幅は1.1mm、深さは0.5mm。砥石は長さ8.2cm、幅9cm、厚さ2.2cm、重量263.65g。若干目の粗い砂岩製。

6～9は4号竪穴住居からの出土である。

6は砥石で、表と裏面が砥面として残る。元は扁平な四角柱状であったと考えられ、研ぎ減りは少ない。砂岩製。長さ9.7cm、幅4.5cm、厚さ2.5cm、重量171.88g。

7は砥石で表面と、右および下側面が砥面として残る。表面の中央付近がやや研ぎ減りして窪む。砂岩製で目が粗い。長さ9.4cm、幅9cm、厚さ4.6cm、

重量585.91g。

8は薄い板状の砥石で、表と裏面が砥面として残る。砂岩製で目が粗く、研ぎ減りは少ない。長さ8.6cm、幅6.6cm、厚さ1.55cm、重量144.8g。

9は扁平な砥石で、表面と左側面および、右側面の一部が砥面として残る。砂岩製で目が粗い。長さ6.9cm、幅4.8cm、厚さ1.3cm、重量139.51g。

10～17は5号屋外周溝からの出土である。

10は多角柱状の砥石で、一方の小口と3側面が砥面として残る。目の粗い砂岩製で、長さ5cm、幅5.5cm、厚さ4cm、重量120.84g。

11は断面が角の円い蒲鉾状になる砥石である。表と裏面および左側面が砥面として残り、表面には筋状の研磨痕が2ヶ所にみられる。目の粗い砂岩製。長さ5.2cm、幅5.6cm、厚さ3.2cm、重量105g。

12は砥石の破片で、表面の一部に砥面が残る。目の粗い砂岩製で、長さ5cm、幅6cm、厚さ1.6cm、重量48.76g。

13は直方体状の砥石であったと考えられる。表面と左および下側面に砥面が残る。研ぎ減りは少なく、砂岩製で目は粗い。長さ5.5cm、幅5.9cm、厚さ3.6cm、重量159.4g。

14は扁平な塊状の砥石で、表面と側面の一部が砥面として残る。研ぎ減りは少なく、砂岩製で目は粗い。長さ6.2cm、幅6.1cm、厚さ2.5cm、重量117.13g。

15は形態が扁平な柱状であり、砥石の可能性はある。ほぼ全面が砥面として使用されている。玄武岩製で目はやや細かい。長さ11.6cm、幅5.4cm、厚さ2.6cm、重量282g。

16は大型の砥石で、部分的に火を受けたようで黒く変色する。砥面として残るのは左右の側面のみで、上方の小口は折損し、表裏面は火を受けた際の熱によって剥落する。砂岩製で目は粗く、左側面は研ぎ減りしてくびれる。長さ22.8cm、幅19.3cm、厚さ11.3cm、重量7,236g。

17は表採されたもので、扁平な砥石である。上



第100図 Ⅲ-E区 工具類4 (砥石、その他) (1/3、1/4)

部側面が折損しているほかは砥面として残っており、このうち表裏面および下側面は研ぎ減りしており、表面の中央はやや窪む。若干目の粗い砂岩製で、長さ 5.9cm、幅 8.8cm、厚さ 3.6cm、重量 232.96g。

18 は 2 号竪穴住居から出土した砥石で、棒状である。砥面は左側面が残っており、他は風化する。頁岩製で、目がやや粗い。長さ 7.6cm、幅 2.65cm、厚さ 1.7cm、重量 49.52g。

19 は大溝の D 区上層から出土した。塊状で、表裏面と上部側面が砥面として残り、表面には研ぎ減りによる窪みがみられる。砂岩製で目は非常に粗い。長さ 8.1cm、幅 5.8cm、厚さ 3.7cm、重量 218.68g。

20 は 2 - 1 号溝から出土した大型の砥石である。扁平な柱状を呈し、表面は風化が激しく、研磨痕などは観察できない。砂岩製。長さ 30.7cm、幅 11.5cm、厚さ 5.5cm、重量 2,840g。

21 ~ 37 は 5 号屋外周溝から出土している。

21 は玉髓の原石と考えられる。長さ 3.2cm、幅 3.1cm、厚さ 2.1cm、重量 30.31g。

22 は小型の扁平な砥石である。上下の両小口が折損しているものの、他は砥面が残っている。元は扁平な四角柱状であった可能性がある。砂岩製で、目はやや粗く、研ぎ減りは少ない。長さ 4cm、幅 3.3cm、厚さ 1.8cm、重量 48.33g。

23 は砥石で、下部側面が折損するほかは砥面として 5 面が残る。研磨痕以外に表面の中央には敲打痕がみられ、左側面には敲打痕と共に断面が V 字状を呈する筋が付けられ、上部側面にも同様の筋が 3 条ほど残る。砂岩製で目はやや粗い。長さ 5.5cm、幅 6.3cm、厚さ 5.7cm、重量 289.17g。

24 は砥石で、表面と右側面および上部側面が砥面として残り、元は柱状であった可能性がある。研ぎ減りは少なく、砂岩製で目はやや粗い。長さ 7.4cm、幅 3.6cm、厚さ 3.3cm、重量 98.31g。

25 は塊状の砥石で、ほぼ全面に砥面が残る。目のやや粗い砂岩製で、長さ 5.2cm、幅 5.5cm、厚さ 3.1cm、重量 123g。

26 は砥石で、表面と左側面が砥面として残り、元は柱状であった可能性がある。研ぎ減りは少なく、若干目の粗い砂岩製である。長さ 6.8cm、幅 3.7cm、厚さ 2.1cm、重量 57.89g。

27 は塊状の砥石で、表面と左側面に砥面が残る。目の粗い砂岩製で、長さは 5.7cm、幅 5.2cm、厚さ 4.7cm、重量 182.73g。

28 は砥石で、表面と左側面に砥面が残る。このうち左側面には筋状の窪みが 2 条残っており、断面が U 字形を呈する。筋の幅は 9mm 程度で、深さは 1mm である。材質は目のやや粗い砂岩製で、長さ 6.8cm、幅 4.9cm、厚さ 2cm、重量 67g。

29 は砥石で、表面にのみ砥面が残る。目の粗い砂岩製で、長さ 4.6cm、幅 4.2cm、厚さ 3.1cm、重量 47.85g。

30 は四角錐状の砥石で、裏面は折損した痕跡がある。砂岩製で目はやや粗い。長さ 4.8cm、幅 4.4cm、厚さ 2.4cm、重量 50.05g。

31 は塊状の砥石と考えられ、自然の転石を加工せず、そのまま利用している。周囲には研磨時に付いたと思われる断面 V 字状の細く鋭い筋が刻まれる。軽石製で目はやや粗い。長さ 3.9cm、幅 5.2cm、厚さ 3.2cm、重量 23.44g。

32 は砥石で、表面の一部が砥面として残る。目のやや粗い砂岩製で、長さ 7.8cm、幅 6.7cm、厚さ 1.8cm、重量 137.57g。

33 は塊状の砥石の一部と考えられる。砥面は表面および下部側面が残り、断面は丸みを帯びており、研ぎ減りはほとんどない。目の若干粗い砂岩製で、長さ 10cm、幅 13.5cm、厚さ 5cm、重量 821.84g。

34 は砥石で、表面の一部と左右側面が砥面として残り、表面は若干研ぎ減りする。元は扁平な四角柱または多角柱状であったと考えられる。目のやや粗い砂岩製で、長さ 11cm、幅 8cm、厚さ 2.9cm、重量 274.69g。

35 は砥石で、表面と裏面が砥面として残る。表

面には研磨痕のほかに敲打痕が残されており、裏面には断面がV字状の細く鋭い筋が付けられる。やや目の粗い砂岩製で、長さ8.5cm、幅6.3cm、厚さ3.9cm、重量327.16g。

36は砥石と考えられ、表面と左側面および下部側面が砥面として残り、表面には長軸方向に著しい研磨痕がみられる。断面の形状から、元は多角柱状であった可能性がある。頁岩製で、目は細かい。長さ8.1cm、幅5.6cm、厚さ3cm、重量112.8g。

37は四角柱状の砥石で、ほぼ完形である。表裏面は大きく研ぎ減りし、くびれる。やや目の粗い砂岩製で、長さ10.8cm、幅6.6cm、厚さ4.8cm、重量

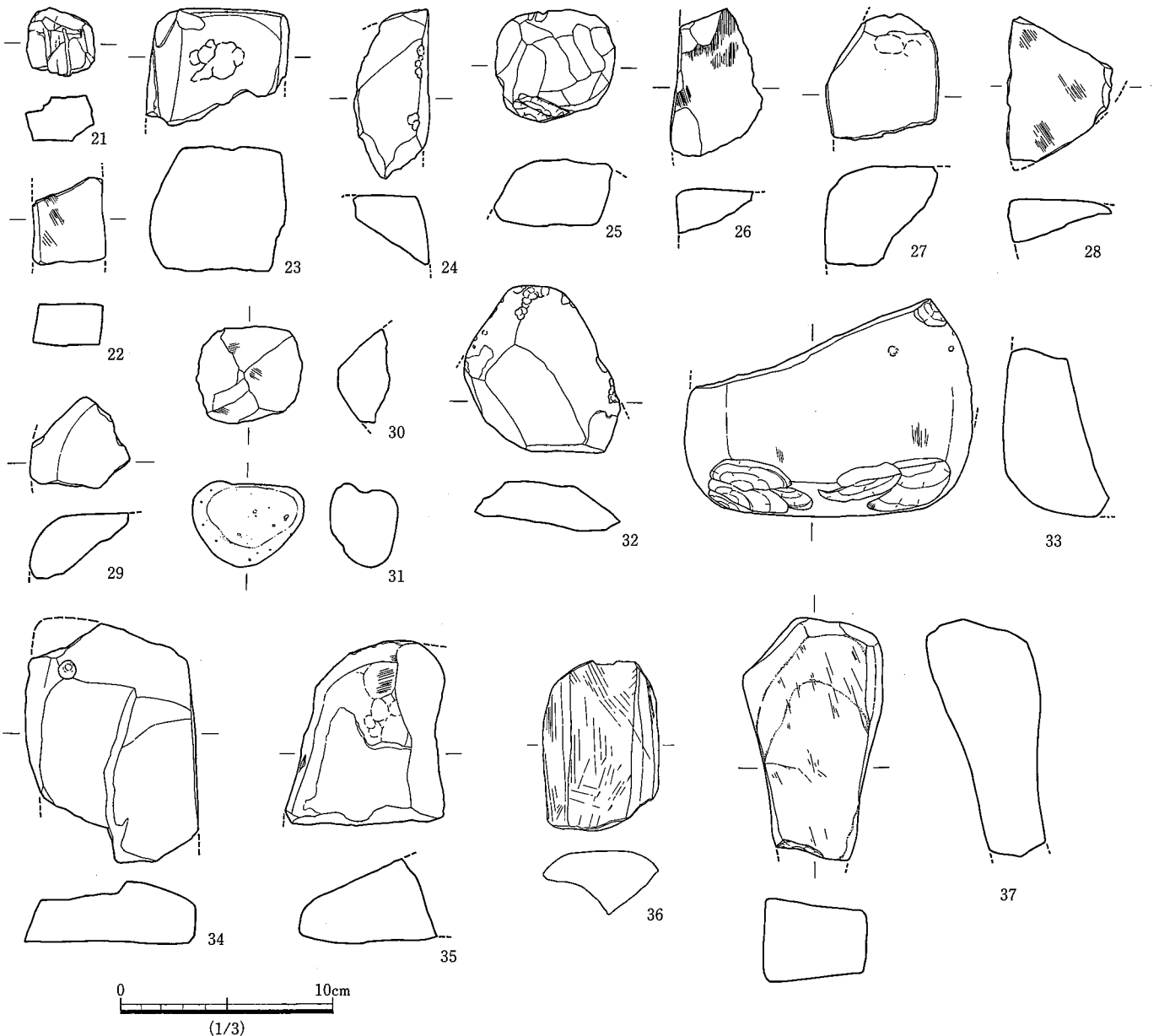
501.87g。

38～41は5号屋外周溝から出土しており、42は3号竪穴住居の屋外周溝からの出土である。

38は周辺が大きく剥離しているため、元の形は想像できないが、表面に研磨痕がみられるため砥石の可能性があると考えられる。頁岩製で目は細かい。長さ10.8cm、幅5.7cm、厚さ1.9cm、重量190.39g。

39は敲打石と考えられる。表裏の両面中央部には窪みがみられ、周辺には研磨痕が残る。また、下側面には著しい敲打痕が残されている。玄武岩製。長さ9.7cm、幅8cm、厚さ4.8cm、重量565.19g。

40は台石と考えられる。平面は隅円長方形で、



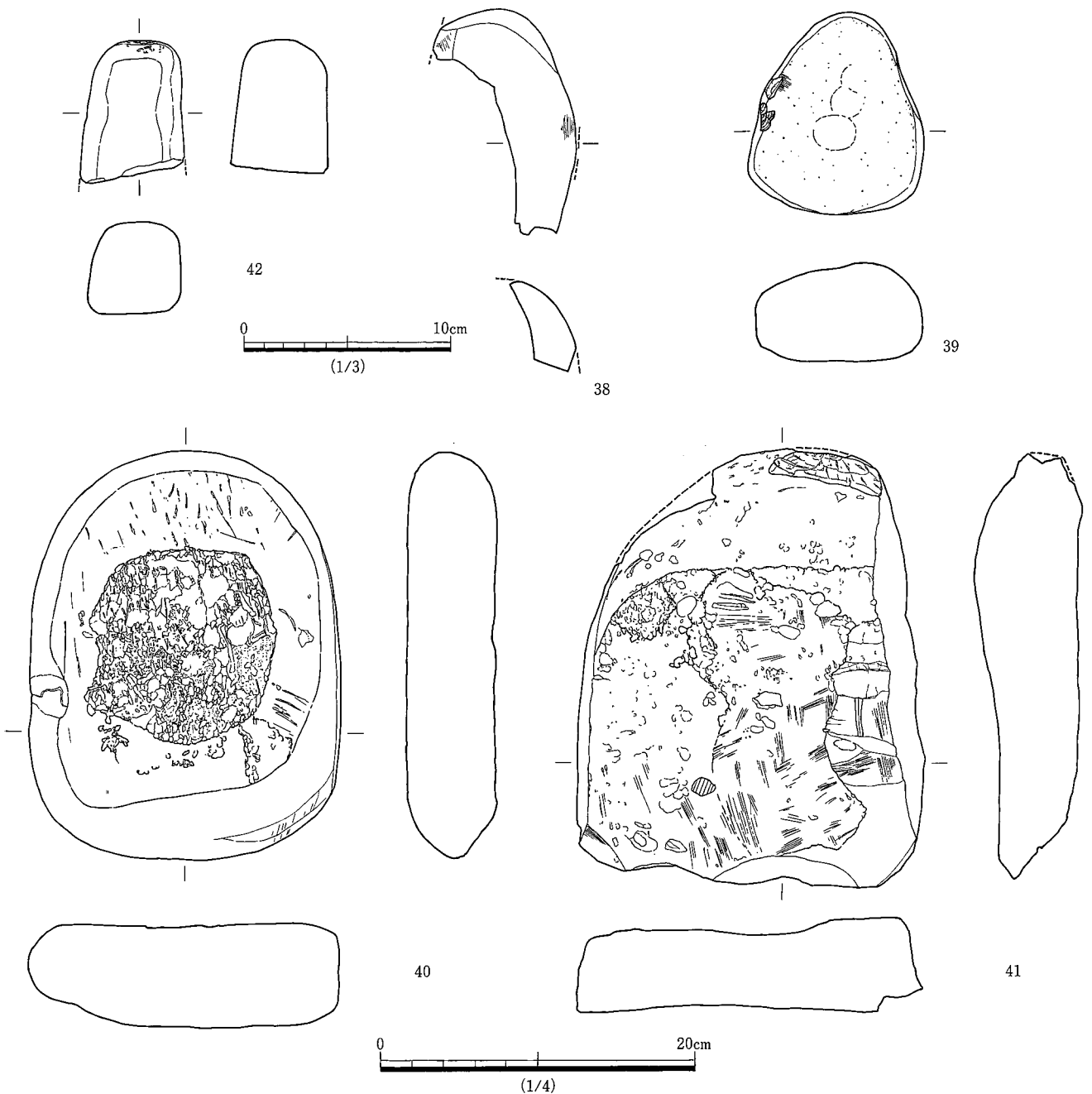
第101図 Ⅲ-E区 工具類5(砥石、その他)(1/3)

断面は扁平である。敲打作業と研磨作業の両方に使用されたようで、全面に敲打痕と研磨痕がみられる。とくに敲打痕は表面の中央付近に集中しており、この周辺は砥面としても使われる。砂岩製と考えられ、長さ26.2cm、幅19.8cm、厚さ5.7cm、重量5,800g。

41は40と同様台石と考えられ、敲打作業と研磨作業の両方に使用される。平面は台形状で、断面は扁平であり、表面の中央付近が窪む。玄武岩製で、

長さ28cm、幅22.2cm、厚さ5.1cm、重量6,320g。

42は敲石と考えられる。四角柱状となっており、先端部が折損する。頭頂部には敲打痕がみられ、左右の側面には浅い窪みがつく。硬質砂岩製。長さ6.8cm、幅5cm、厚さ4.7cm、重量265.82g。



第102図 III-E区 工具類6(その他) (1/3、1/4)

(4) その他の出土遺物

表採遺物 (第 103 図)

本調査区内では表土剥ぎや遺構検出中にも多数の遺物の出土があった。ここでは主なものについて取り上げる。

1 は石剣で、切先と基部を失う。砂岩製で長さ 9.1cm、幅 3.6cm、厚さ 1.1cm、重量 42.84g。

2～4 は土錘で、2 は両端部、3 と 4 は一方の端部を失う。2 は長さ 4.1cm、径 2.3cm、重量 18.18g。

3 は長さ 6.1cm、径 2cm、重量 19.06g。4 は長さ 6.2cm、径 1.8cm、重量 11.47g。

5 は小型の石錘で、十字に交わる沈線を巡らせる。輝緑凝灰岩製。長さ 3.6cm、幅 1.7cm、厚さ 1.4cm、重量 10.72g。

6～9 は滑石製の白玉である。6 は断面が非常に薄く、剥離されたものの可能性がある。径は 5.2mm、孔径 1.4mm、厚さ 0.7mm～1.1mm、重量 0.04g。

7 は径 5.2mm、孔径 1.1mm～1.3mm、厚さ 1.5mm～2mm、重量 0.08g。

8 は径 5.4mm、孔径 1.2mm～1.4mm、厚さ 2mm～2.7mm、重量 0.12g。

9 は径 5.3mm～5.5mm、孔径 1.4mm、厚さ 1.8mm、重量 0.09g。

10～12 はガラス製小玉である。色調は 10 が緑色がかかったコバルトブルーで、11 と 12 はコバルトブルーである。

10 は径 4.1mm、孔径 1.3mm、厚さ 2.2mm～2.5mm、重量 0.05g。

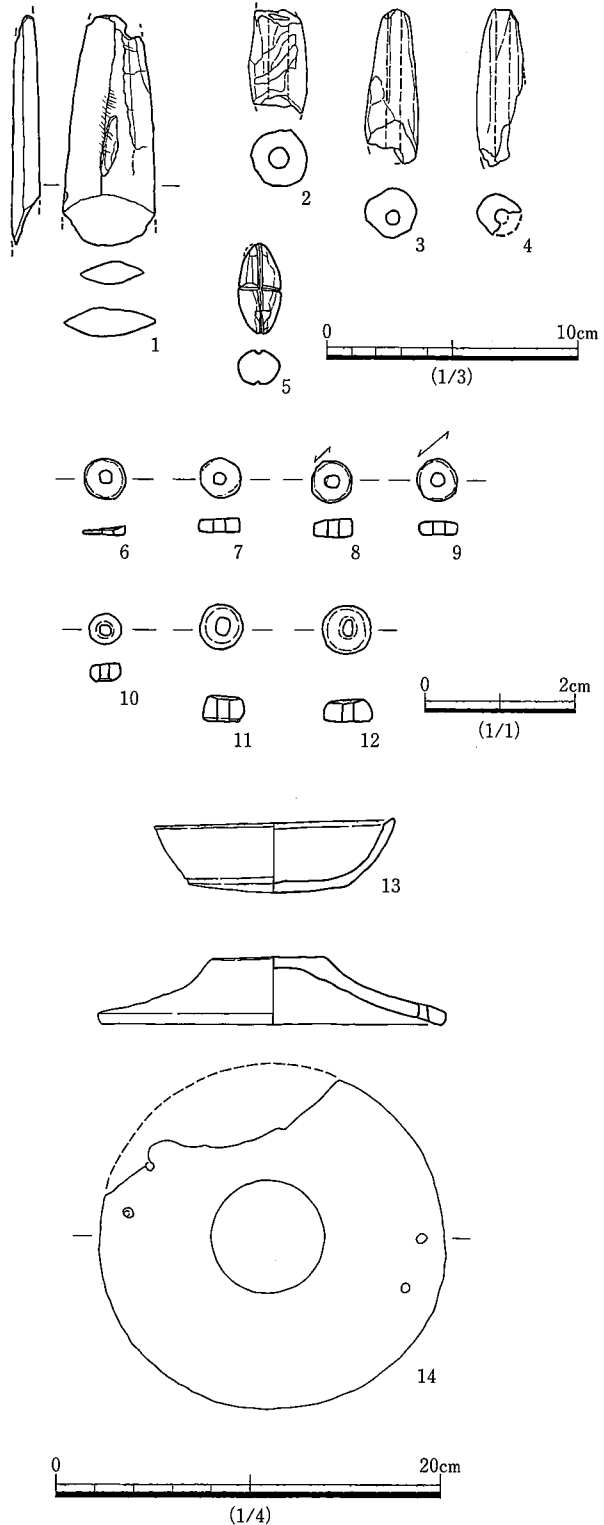
11 は径 5.7～5.8mm、孔径 1.6mm～1.9mm、厚さ 3.4mm～3.9mm、重量 0.17g。

12 は径 6mm～6.4mm、孔径 1.1～1.4mm、厚さ 2.7mm～3mm、重量 0.18g。

13 は土師器の坏である。底部はヘラケズリで、

体部はやや内湾気味に立ち上がる。口縁径 12.6cm、底部径 8.6cm、器高 3.7cm。

14 は弥生土器の蓋である。口縁部近くに 2 個を 1 単位とする穿孔を施し、対角線上の 2 ヶ所に配置する。口縁径 18.4cm、器高 3.6cm。



第 103 図 III-E 区 遺構検出中 出土遺物実測図 (1/1、1/3、1/4)

3. III-W 区の調査

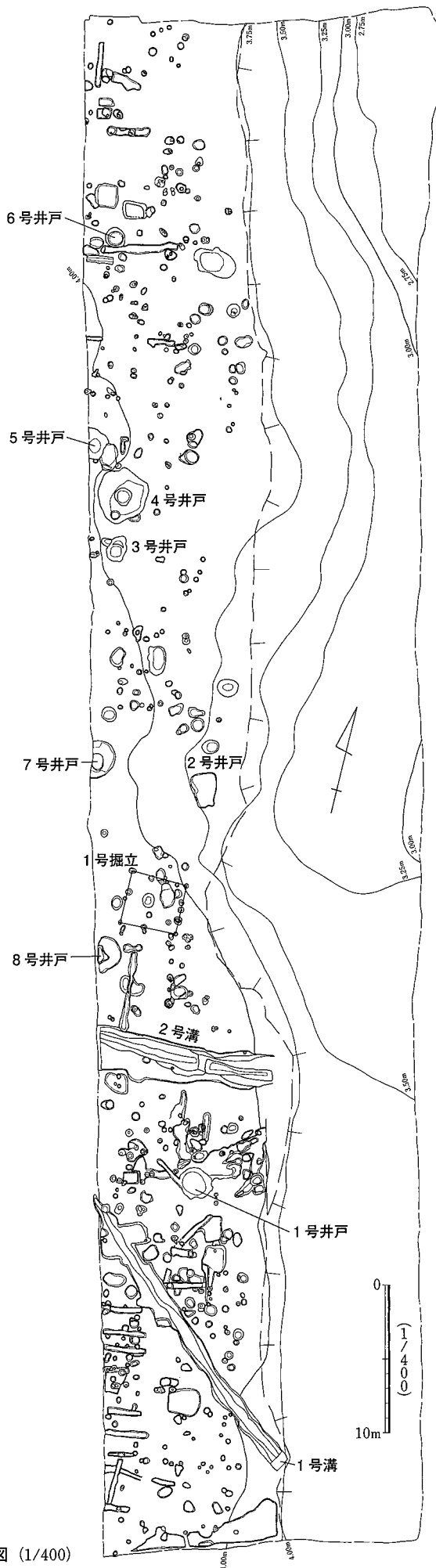
(1) 概要

潤地頭給遺跡の旧地形は南から北に向かって緩やかに傾斜する2本の微高地と、これらを隔てる2本の谷によって構成される。このうち、この場で報告を行うのは西側の微高地上に位置する遺構と出土遺物である。III-W区は西側に隣接する潤古屋敷遺跡と同一微高地上にあり、この東側の縁辺部にあたり、標高は約4.2m～2.75mである。本調査区の地形は基本的に西側が高く、東に向かって下がり、谷部へと落ち込む。平面形は長方形であるが、中央部付近がやや内側に入り込んでおり、幅が狭くなる。地山は黄褐色粘質土であり、地下水位のおよぼ東側の標高の低い場所では還元作用によりグライ化し、青灰色粘質土に変色する。

調査区は微高地が確認された部分に限定し、範囲は約22m×105mとした(第104図)。遺構は全面で確認されているが、南側が多く、中央部のくびれている場所にはあまり無く、北側に向かうと若干増加する。

主な遺構をみていくと、南側には2本の溝とピット、掘立柱建物、井戸などがみられ、中央から北側にかけては井戸やピットがある。このうち、一番南に位置する1号溝は弥生時代に属しており、他の遺構の多くは中世や近世の遺物を包含する。したがって、当調査区の中心は中世以降にあるといえる。この結果は潤古屋敷遺跡の性格を知る上で貴重な資料といえる。

それでは、以下に主要な遺構や遺物について個々にみていきたい。なお、報告内容は時代順に分け、最初に弥生時代の遺構と遺物についての報告を行い、後に古墳時代以降について述べたい。



第104図 III-W区 主要遺構配置図 (1/400)

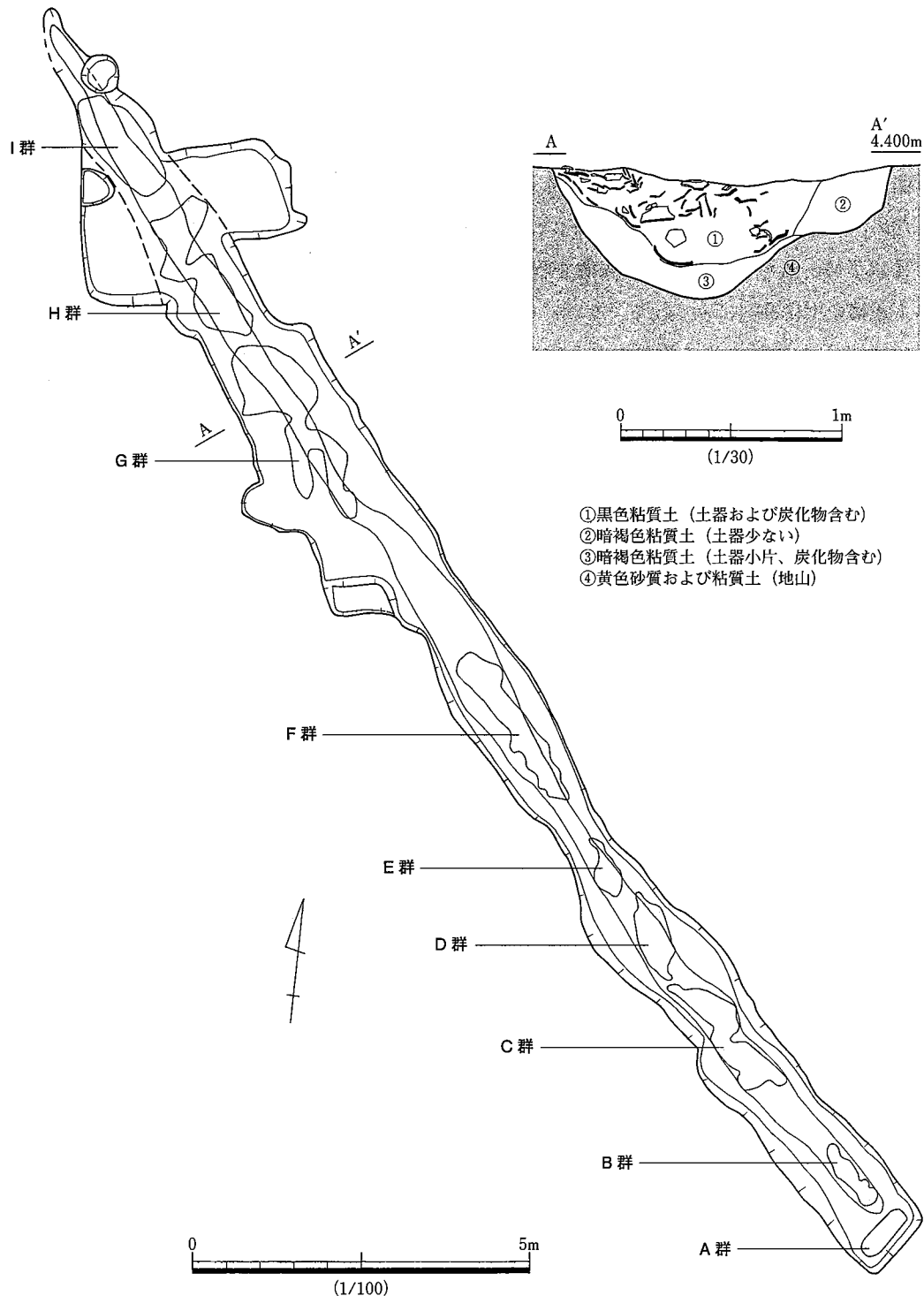
(2) 弥生時代の集落の遺構と遺物

a. 1号溝 (第105図、図版41)

1号溝は微高地上を斜め方向に横切るように掘られており、東側は谷部へ繋がり、西側は調査区外

へ続く。溝はほぼ一直線に掘られており、方位は $N - 42^\circ - W$ で、微高地の緩斜面に対しては 60° 程度の角度で登る。

溝の断面形態は逆台形または皿形である。地表面からの深さは、東端で約 25cm、中央部で約 45cm、西端で約 50cm となっており、斜面の上部に向かうにつれて深くなっていることが分かる。一方、底



第105図 Ⅲ-W 区 1号溝 平面および土層断面図 (1/30、1/100)

面の標高をみると、東端では3.77m、中央部では3.76m、西端では3.76mとなっており、ほぼ一定の高さであることが分かる。このことは、先述したⅢ-E区の大溝と同じ状態であり(P.9)、これらの溝の性格を考えるうえで貴重な判断材料となる。

つづいて、遺物の出土状況についてみて行きたい。遺物の出土状況を観察すると、溝の上部に大量の土器などが投棄された状態であり、ある程度のまとまりがあることが分かった。そこで、個々のまとまりを土器群と呼び、東から順にA～Iの名称をつけて調査を行うこととした。

調査方法は当溝付近が一部、歩道の下となる予定であったため、現地保存が困難であり、全掘とした。

それでは以下に、まず、土層断面の説明を行い、続いて出土遺物を土器群別にみて行く。なお、名称については本来A土器群やB土器群などと呼ぶべきであるが、煩雑となるため、「土器」を省いて、単にA群、B群などとする。

1号溝土層断面(第105図、図版41)

土層断面は中央部からやや西寄りにあたり、G群を切る。この付近の溝の断面プランはやや底の丸い逆台形で、北側に1段のテラスを持ち、南側はやや湾曲した急斜面となる。規模は上端幅1.51m、深さ57cmを測り、底面の標高は3.76mである。

土層の堆積状況を観察してみると、底面および側面には遺物をあまり含まない②や③の層があり、これらの上に遺物を大量に含む①層が乗っていることが分かる。このことから、②や③は溝の存続時期における自然堆積の可能性があり、溝が若干浅くな

り、幅が狭まった時点で、①における土器などの意図的な投棄があったと考えられる。

1号溝A群出土遺物(第106図、図版42)

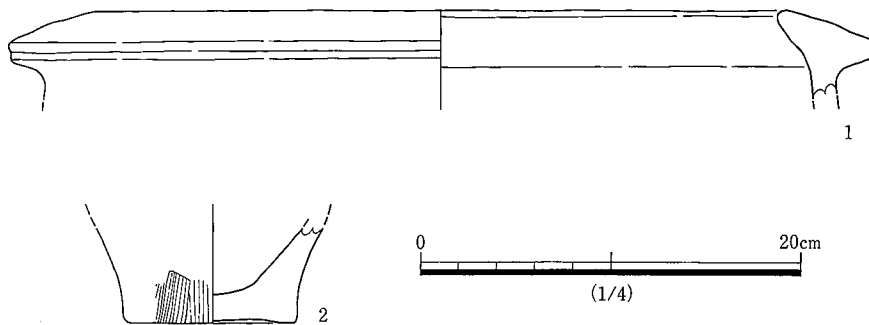
1は溝の最も東側で出土した。口縁部はT字形で外傾する。内外面共にナデ調整で、口縁の外側端部をやや強く押さえる。口縁部の復元径は45.6cm。

2は甕の底部と考えられ、側面に縦方向のハケ目が残る。やや上げ底で、径は9cm。

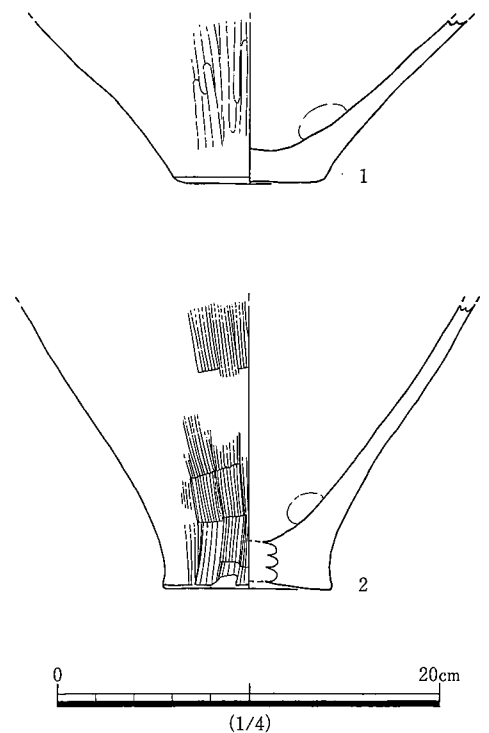
1号溝B群出土遺物(第107図、図版42)

1は壺の底部と考えられる。外面には縦ミガキを施し、底部側面から底面にかけてはナデ調整を行う。また、内面もナデ調整を行っており、底部の立ち上がり部付近には指頭痕が残る。底部径は8cm。

2は甕の底部で、約半分が残る。底部外側面の下端から上位にかけて縦方向のハケ目を施す。内面はナデ仕上げで、底部の立ち上がり部付近には押さえに伴って付いた指頭痕が残る。焼成がやや不良で、外面は白灰色を呈するものの、断面から内面にかけては黒灰色となる。底面の中央部が上げ底となっており、復元径は9cm。



第106図 Ⅲ-W区 1号溝A群 出土遺物実測図(1/4)



第107図 Ⅲ-W区 1号溝B群 出土遺物実測図(1/4)

1号溝 C 群出土遺物 (第108図、図版42)

1は高坏と考えられる。口縁部が未発達で、やや外傾する。内外面共にナデ調整と思われるが、風化により痕跡はほとんどみえない。口縁部の復元径は19.7cm。

2と3は甕の口縁部から体部にかけてである。

2は口縁部が逆L字形を呈しており、やや肥厚する。胴部外面には縦ハケを施しており、口縁部下ではこれをナデ消し、口縁部から内面にかけてはナデを施す。口縁径は29.2cm。

3は口縁部が逆L字形を呈し、端部に向かってやや肥厚し、若干内傾する。口縁部下には低く細い三角突帯を1条巡らせる。胴部には縦ハケを施し、突帯の上下は横ナデで、口縁部から内面にかけてはナデ調整を行う。口縁部の径は39.7cm。

4は甕の胴部から底部である。外面には縦ハケを施し、内面はナデ調整で、底面付近には指頭痕が残

る。底部の中央は上げ底で、径は8.8cm。

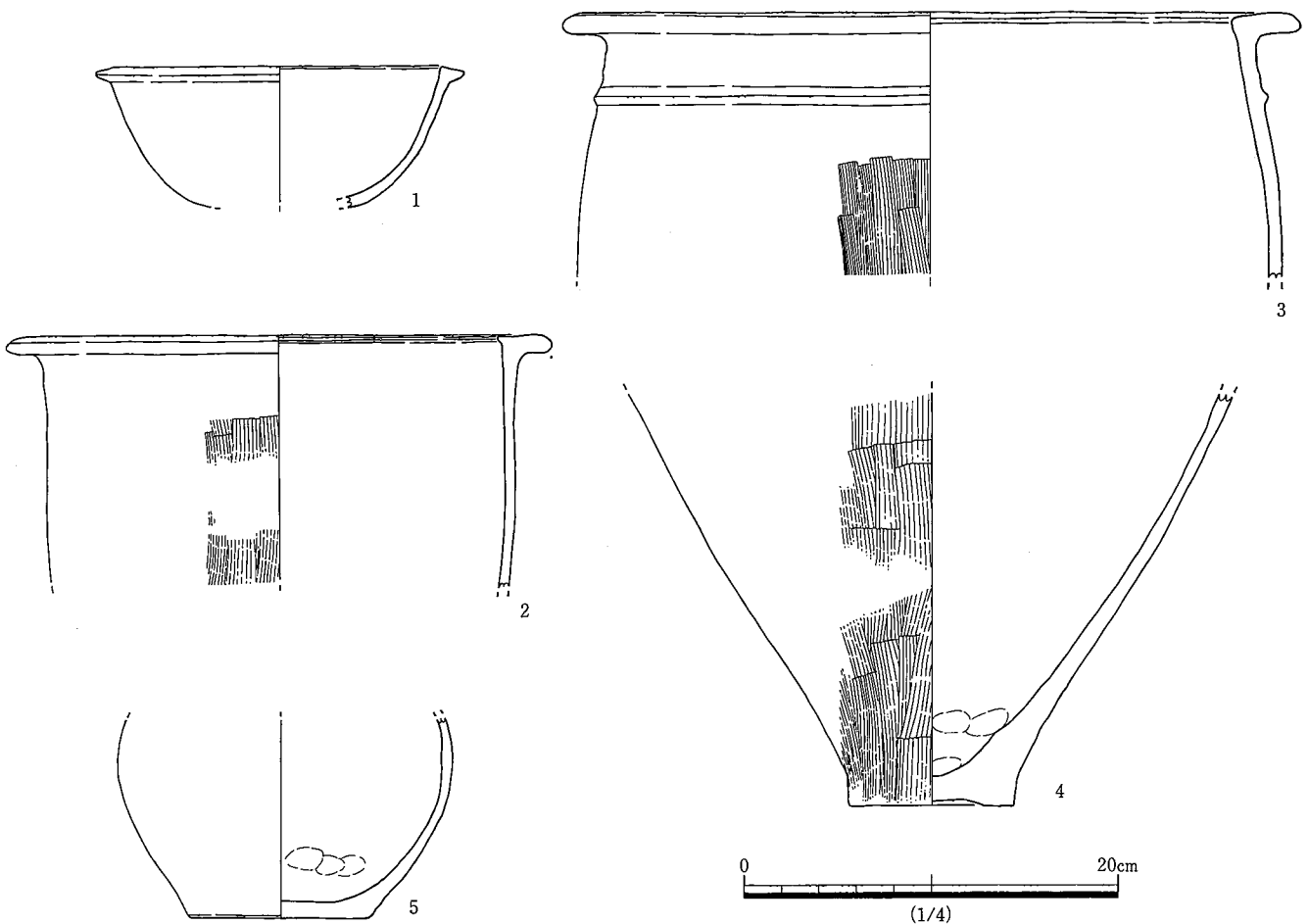
5は壺の胴部から底部と考えられ、胴部が大きく内湾する。内外面共にナデ調整と見られ、内面の底部付近には指頭痕が残る。底部径は9.6cm。

1号溝 D 群出土遺物 (第109図、図版42)

1～3は甕である。

1は口縁部が逆L字形を呈し、若干内傾する。外面の口縁部の下には1条の浅い沈線を施しており、これより下に単位の細かいハケ目を縦方向に施す。また、沈線からは横ナデを施しており、口縁部から内面にかけてはナデ調整である。口縁部の復元径は28.2cm。

2は口縁部が逆L字形を呈し、内傾しており、端部に向かってやや肥厚する。口縁部の下には細く低い三角突帯を1条巡らせ、この上下を強く押しえ付けているため窪みができる。また、これと同様に、



第108図 Ⅲ-W 区 1号溝 C 群 出土遺物実測図 (1/4)

口縁部の外面付け根付近も強く押さえるので、窪みができる。全体的にナデ調整を行うが、口縁と突帯の間にはナデによって消しきれなかった縦ハケが薄っすらとみえる。焼成は不良気味で、内外面は灰白色となる。口縁部の復元径は 34.6cm。

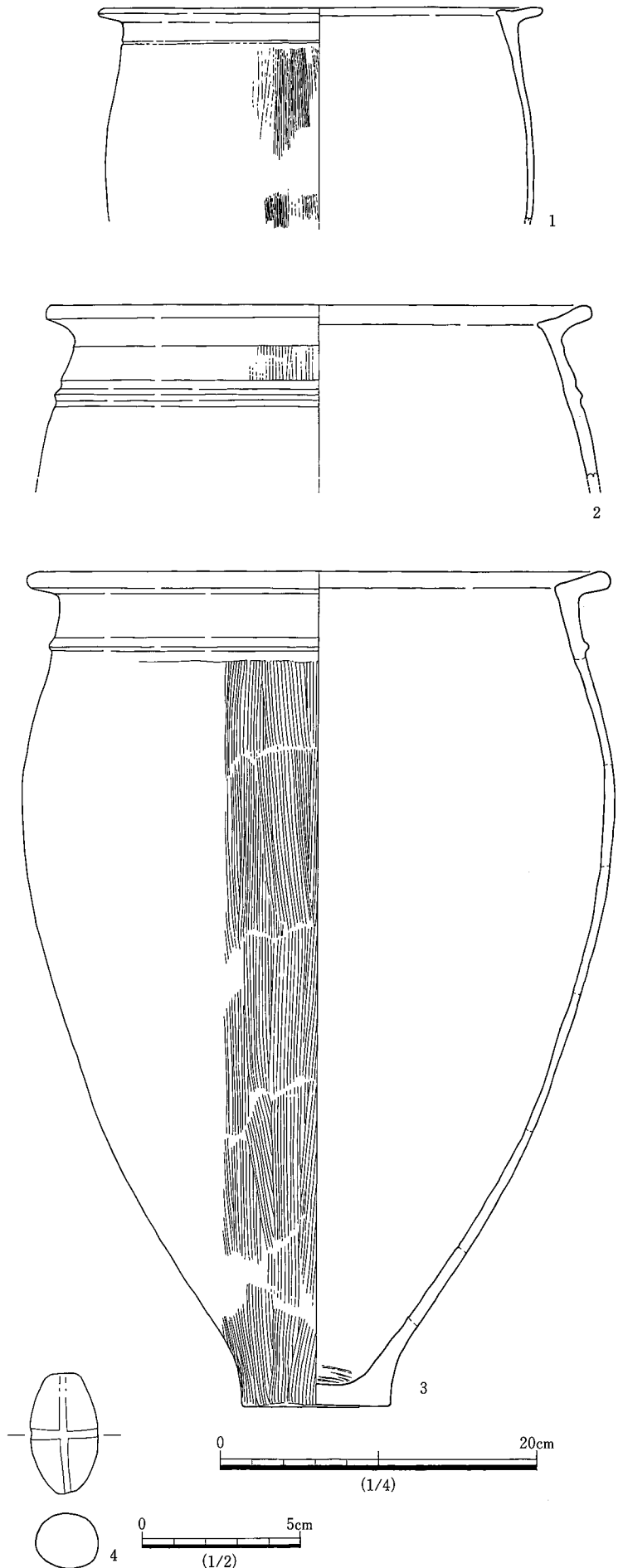
3 は口縁部や体部が部分的に失われているが、全体をうかがうことのできる資料である。口縁部は逆 L 字形で内傾しており、口縁端部は肥厚する。器形は底部付近がしまり、上部からおよそ 1/4 の付近で最も径が広がる。口縁部の下には低く細い三角突帯を 1 条巡らせ、上下を横にナデ付ける。また、この下から底部側面にかけては縦ハケを施し、部分的に横方向のナデを行うが、大部分のハケ目は消されずに残る。突帯の上から口縁部にかけては横ナデ、内面はナデ調整で、底部付近に強いナデ押さえを行った痕跡がある。底部側面の 10cm ほど上から突帯付近までの外面にススが付着しており、内面にも底面から 15cm ほど上の位置までススと炭化物状のものが付着する。このことから、甕が立った状態で 2 次焼成を受けた可能性が考えられる。口縁径 37cm。底部径 9.4cm。器高 53.2cm。

4 は土錘である。体部に直交する 2 条の沈線を刻む。全体的に風化が進んでおり、調整は不明で、沈線も薄っすらとみえる程度である。胎土は堅緻で、砂粒をあまり含まない。長さ 3.9cm、幅 2.1cm、厚さ 1.8cm。重量 12.49g。

1 号溝 E 群出土遺物 (第 110 図、図版 42)

1 は蓋で、摘み部の内側の粘土が剥がれ落ち、すり鉢状に窪む。体部はやや直線状に開き、口縁部付近で外反し、端部はやや肥厚する。摘みの側面から体部にかけては縦ハケを施し、口縁部付近は横方向のナデを行い、内面はナデ調整である。口縁部の復元径は 28.6cm、器高 9.8cm。

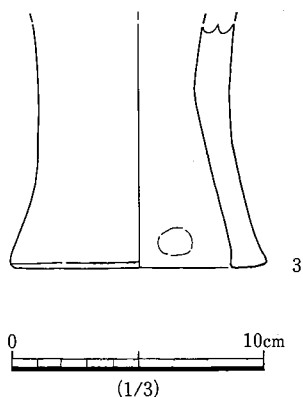
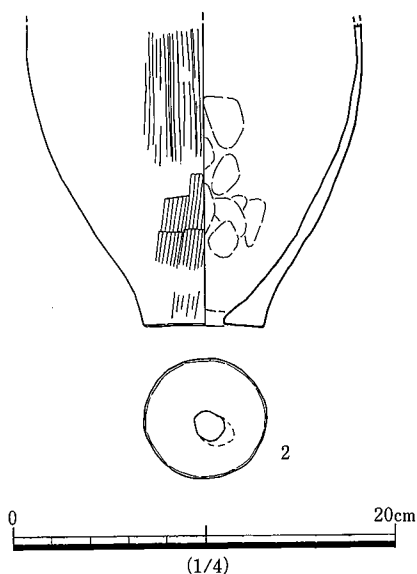
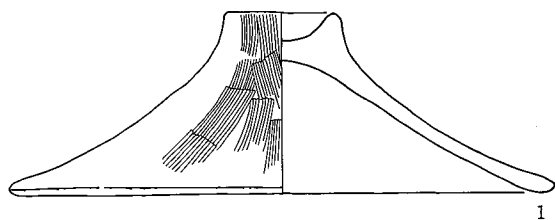
2 は甕の底部から胴部にかけてで、やや細身である。底面の中心からずれた位置に焼成後の穿孔を施す。底部側面から上の外面には縦ハケを施し、内面



第 109 図 III-W 区 1 号溝 D 群 出土遺物実測図 (1/2、1/4)

にはナデに伴う指頭痕が残る。底部径は 6.4cm。孔径は 1.6cm × 1.4cm。

3 は器台である。外面は縦ハケで、口縁付近から内面にかけてはナデ調整であるが、外面のハケ目は風化により薄っすらとしかみえない。また、内面には成形時についた縦方向の皺が消しきれずに残る。底部径 10.2cm。



1 号溝 F 群出土遺物 (第 111 図、図版 42、43)

1 は広口壺である。頸部は直線状に広がり、口縁部付近で外反する。頸部の外面には縦ハケが施され、口縁部付近は横ナデが行われ、内面はナデ調整である。口縁部の復元径は 27.6cm。

2 と 3 は甕の口縁部付近である。

2 は逆 L 字形の口縁を呈する。胴部はあまり広からず、外面に縦ハケを施し、口縁部付近はナデを行い、内面にはナデ調整に伴う指頭痕が残る。口縁部の復元径は 28.7cm。

3 は逆 L 字形の口縁を呈し、内傾する。口縁部の外面の付け根には 1 条の沈線を施し、この下には縦ハケが残り、口縁部付近から内面にかけてはナデ調整を行う。口縁部の復元径は 23.6cm。

4 ~ 9 は甕または壺の底部である。

4 は底部側面から上位に縦方向のハケ目が残り、内面にはナデ調整が施される。外面の底部側面のやや上と内面全体にススの付着がみられ、2 次焼成を受けた可能性がある。底部径 7cm。

5 は底部側面から上位に縦ハケを施し、内面にはナデ調整に伴う指頭痕がみられる。外面の底部側面から上部と内面にススの付着がみられ、2 次焼成を受けた可能性がある。底部径 6.6cm。

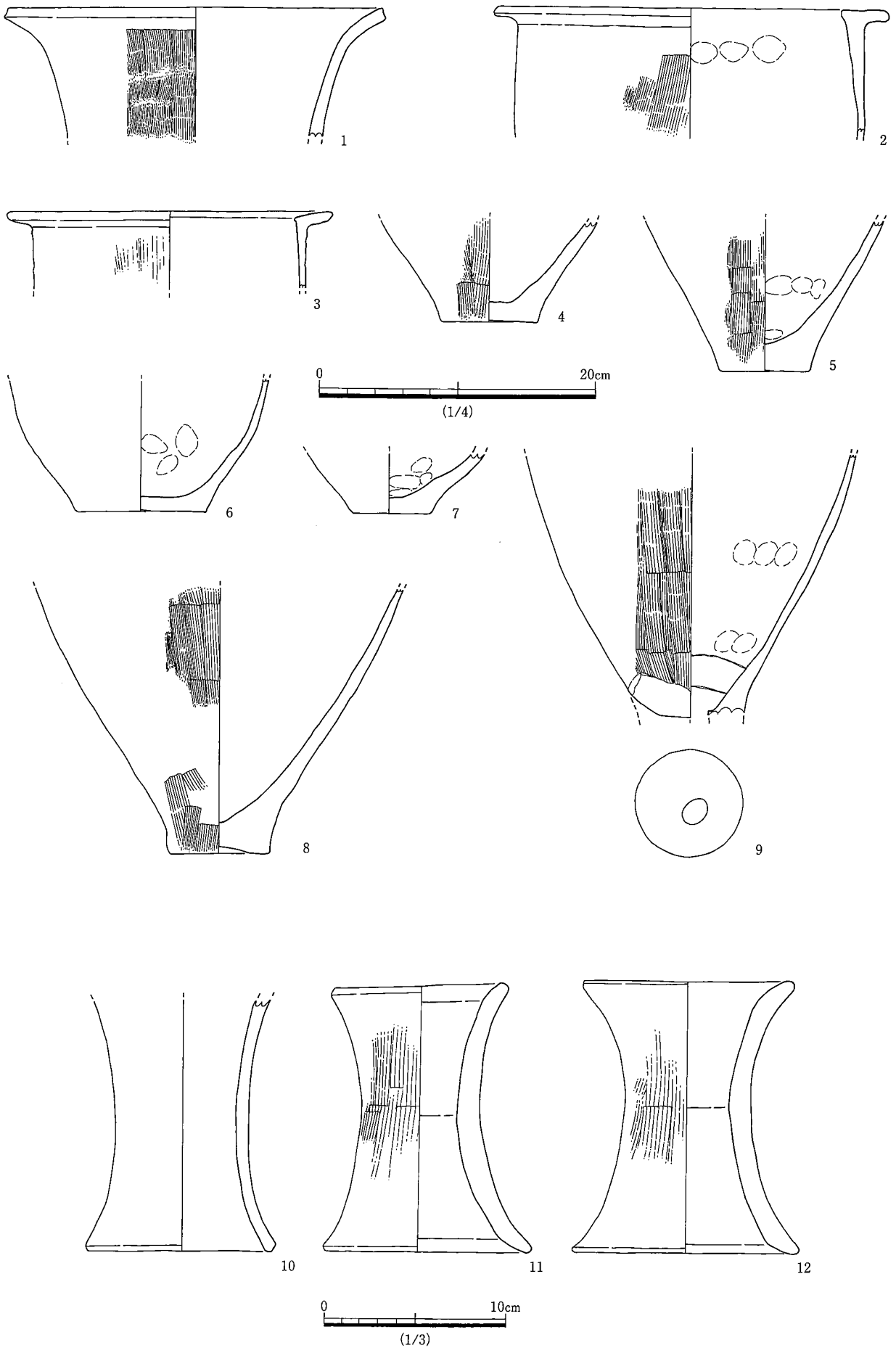
6 は内面に指頭痕が薄っすらと残る。底部径 9.5cm。

7 は内面にナデに伴う指頭痕が多数残される。底部径 5.7cm。

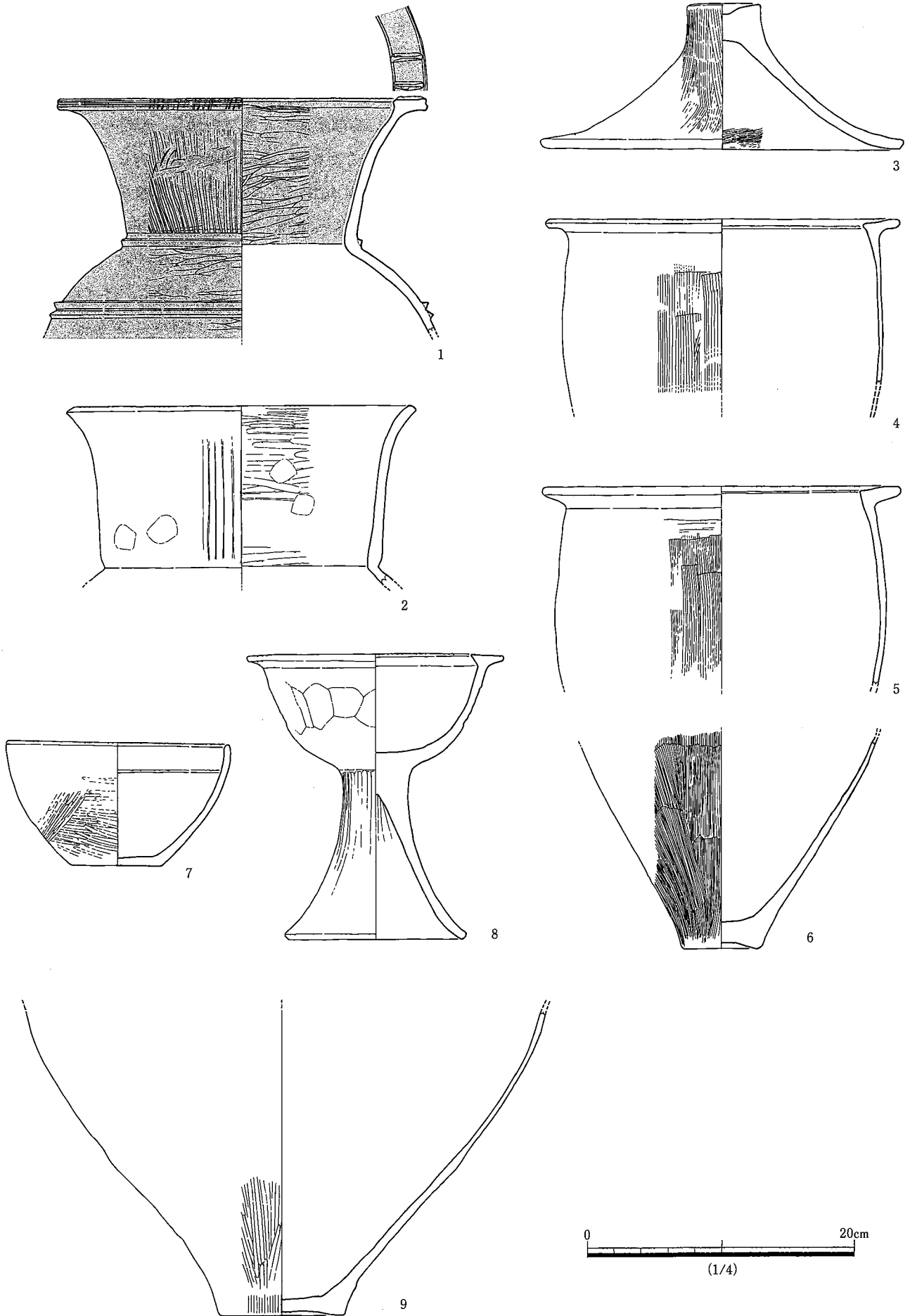
8 は外面に縦ハケを施し、部分的に軽くナデ消すが、大部分のハケ目は残る。また、内面はナデ調整を行う。外面の底部側面からやや上方と内面の底部付近にススが付着しており、2 次焼成を受けた可能性が考えられる。底面は上げ底で、径は 7cm。

9 は底部周辺が欠けており、底面に焼成後の穿孔を施す。外面には縦ハケが施され、部分的にナデ消しを行う。内面には丁寧なナデ調整が施されており、底部付近は板状の工具を円錐状に回転させながら擦り付けた痕跡が残る。孔径は 2.1cm × 1.6cm。

第 110 図 III-W 区 1 号溝 E 群 出土遺物実測図 (1/3、1/4)



第111図 Ⅲ-W区 1号溝F群 出土遺物実測図 (1/3、1/4)



第112図 Ⅲ-W 区 1号溝 G 群 出土遺物実測図1 (1/4)

10～12は器台である。

10は外面に縦ハケが薄っすらと残り、内面はナデ調整を施す。器壁が他の器台と比べて若干薄手な感じを受ける。底部径10.3cm。

11は口縁が一部欠ける他は完形である。胴部の外面中央に縦ハケを施し、口縁部および底部付近は横方向のナデを行う。また、内面には板状の工具を使って回転させながらナデを行った痕跡がみられる。口縁径9.6cm、底部径11.4cm、器高14.4cm。

12は口縁部と底部が大きく外反する。調整は11とほぼ同じだが残りは悪い。口縁部の復元径11.5cm、底部径12.3cm、器高14.8cm。

1号溝G群出土遺物(第112～113図、図版43、巻頭図版4)

1と2は壺である。

1は口縁部の上端に2条を1単位とする粘土紐を貼付する。2本の粘土紐の間と周囲は紐の方向に沿ったナデが施される。口縁の端部には斜め方向のキザミ目を施し、中央部には1条の沈線を巡らせる。頸部の付け根と肩部にはそれぞれ1条と2条の突帯を巡らせ、外面の肩部から口縁部の下にかけては縦方向の暗文状のミガキを施し、肩部には横方向のミガキがみられる。また、口縁部下から頸部の内面には横ミガキが施され、頸部の付け根から肩部にかけてはナデ調整が行われる。外面から頸部内面まで、黒色の顔料らしきものが付着しており、黒塗りの可能性がある。口縁部の復元径は27.8cm。

2は頸部があまり広がらず、口縁部付近でやや外反し、頸部の付け根には1条の沈線が巡る。頸部外面には縦方向の暗文が施され、口縁部付近は横方向のナデ調整で、内面には横方向のミガキが残る。口縁部の復元径は26cm。

3は蓋で、摘みの上端の中央部が窪む。外面には縦ハケが、内面の裾部には横または斜め方向のハケが施され、口縁部付近の内外面においてこれをナデ消す。また、内面の天井部はナデ調整を行っており、成形時にできた皺が若干残る。口縁部の復元径

は27.3cm、器高は11cm。

4～6は甕である。

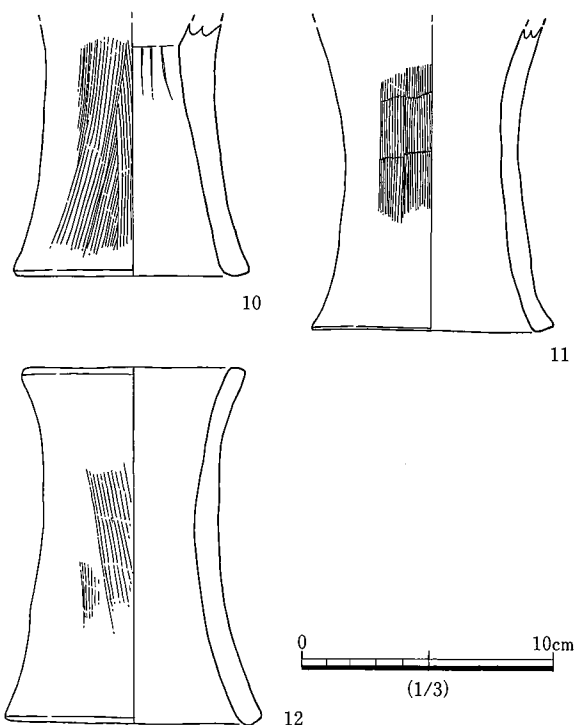
4は口縁部が逆L字形で内傾し、胴部にはあまり広がりをもたない。外面は縦ハケを施し、口縁部の下から上端は横ナデ、内面はナデ調整を行う。作りが丁寧で、器壁が薄い。口縁径は26.6cm。

5は口縁部が逆L字形でやや内傾する。外面には縦ハケが残り、口縁部下から上端にかけては横ナデ、内面はナデ調整を行う。口縁径は26.8cm。

6は外面に目の細かいハケ目が残る、内面はナデ調整を行う。底部側面から上位の外面にはススが付着しており、2次焼成を受けた可能性がある。底部は上げ底で、径は6cm。

7は鉢で、口縁の一部が欠けるほかはほぼ完形である。外面には横または斜め方向のミガキを施し、口縁部から内面にかけてはナデ調整を行い、内面の上部には浅い筋が1条巡る。胎土は精製されており、微細な粒子しか含まず、成形も丁寧な感じを受ける。口縁径16.7cm、底部径6.8cm、器高9.2cm。

8は高坏で、坏部の外面の中央部付近が剥離する。脚部の外面には縦ミガキが施され、底部の内外面は



第113図 III-W区 1号溝G群 出土遺物実測図2 (1/3)

横ナデ、脚部と坏部の内面はナデ調整が施される。
口縁部径 19.2cm、底部径 13.6cm、器高 21.4cm。

9は外面に縦方向のミガキが残り、底部側面には縦ハケが施され、内面はナデ調整である。やや上げ底で径は 9.4cm。

10～12は器台である。

10は裾部があまり広がらず、内面の中位付近に屈曲部をもつ。外面には縦ハケが残り、口縁端部から内面にかけてはナデ調整を施す。底部の復元径は 9.3cm。

11は裾部がやや外反する。外面の中央部付近に縦ハケが残り、底部から内面にかけてはナデ調整を施す。底部径は 9.6cm。

12は口縁部および裾部がやや外反する。外面中央部には縦ハケが残り、上下両端部および内面にはナデ調整を施す。口縁径 8.8cm、底部復元径 10.2cm、器高 14.1cm。

1号溝H群出土遺物 (第114図、図版44、巻頭図版4)

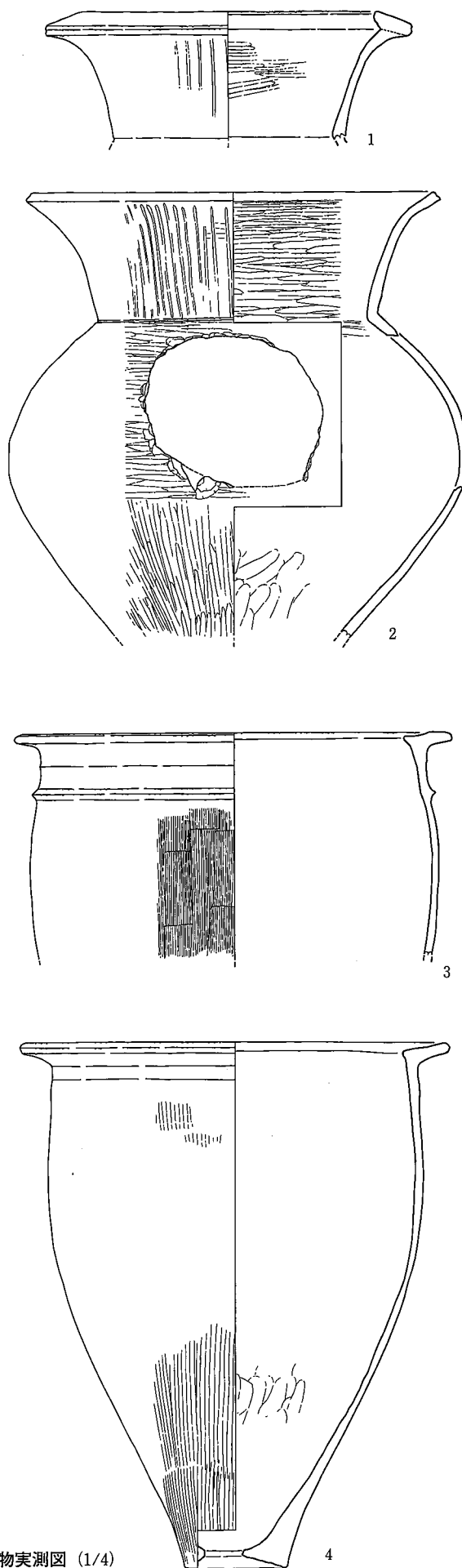
1と2は壺である。

1は口縁がやや未発達で、内面に向かって少し張り出し、頸部の付け根には1条の沈線を巡らせる。外面には縦方向のミガキ状の暗文を施し、口縁部付近はナデ調整で、頸部内面には横方向のミガキが残る。口縁部の復元径は 23.6cm。

2は窓をもち、底部と口縁部の一部を失うほかは完形に近い。肩部から胴部にかけて隅円方形の窓を焼成後に穿つ。口縁部下から頸部の外面にかけては縦方向の暗文状のミガキを施し、頸部付け根には1条の沈線を巡らせ、肩部から胴部にかけては横ミガキ、下部は縦ミガキを行う。また、口縁端部は押さえて面取りし、頸部内面は横ミガキ、胴部内面はナデ調整を行う。窓部の大きさは縦 9.8cm、横 11.4cm。口縁部の径は 26.8cm。

3と4は甕である。

3は口縁部の下に1条の低く、細い三角突帯を1条巡らせる。突帯の下には縦方向のハケ目が残る、



第114図 Ⅲ-W区 1号溝H群 出土遺物実測図 (1/4)

突帯の周囲から口縁部にかけては横方向のナデを施し、内面はナデ調整を行う。口縁径は 28.3cm。

4 は底面の中央付近に焼成後の穿孔を施す。口縁部は逆 L 字形を呈しており、内傾する。外面の下半部から底部にかけては縦ハケが部分的に残っており、口縁部から内面にかけてはナデ調整で、底部の内側には板状の工具を使って、回転ナデを行った痕跡が残る。孔は円形で、径は 2.4cm、口縁の復元径は 27.7cm、底部の復元径は 6.6cm、器高 34.3cm。

1 号溝 I 群出土遺物 (第 115 ~ 121 図、図版 44、45)

1 ~ 13 は壺である。

1 は口縁上端と肩部の一部に丹塗りの痕跡がわずかに残る。底部から突帯付近にかけて器表が花卉状に剥離しており、人為的な行為なのかは不明であるが、焼成中に破損した可能性も考えられる。口縁部はやや未発達で、内側に張り出し、頸部の付け根には 1 条の沈線を巡らせ、胴部の中央には低く細い三角突帯を 1 条巡らせ、この上下を強く押さえる。口縁の下から頸部外面にかけては縦方向の暗文状のミガキを施し、頸部から胴部にかけては横方向のミガキ、下部には縦ミガキを行う。また、口縁部は横ナデで、頸部内面は横ミガキ、体部はナデ調整である。口縁径は 15.7cm、器高 19.7cm。

2 は頸部外面に数条のミガキを束ねた縦方向の暗文をおよそ 2 ~ 3cm 間隔で配置する。また、内面は横方向のミガキ調整を行う。口縁部の復元径は 36.7cm。

3 は口縁が内側に張り出し、復元径は 33.5cm。

4 は口縁部の下から頸部にかけて縦方向の暗文状のミガキが施され、頸部の付け根には 1 条の沈線が巡る。内外面の一部には黒色の顔料らしきものが残っており、黒塗りの可能性がある。口縁部の復元径は 22.6cm。

5 は口縁部がやや未発達な T 字形で、若干外傾する。口縁部の復元径は 31.8cm。

6 は口縁部がやや内側に張り出し、外傾する。口

縁部の復元径は 24.5cm。

7 は口縁下から頸部にかけて縦方向の暗文を施し、口縁部付近はナデで、内面は横方向のミガキを行う。口縁径は 27.3cm。

8 は頸部が直線状に外へ広がり、口縁付近で外反する。頸部の付け根には 1 条の沈線が巡り、外面には縦方向のミガキを施し、口縁部付近はナデで、頸部内面は横方向のミガキを行う。口縁径は 28cm。

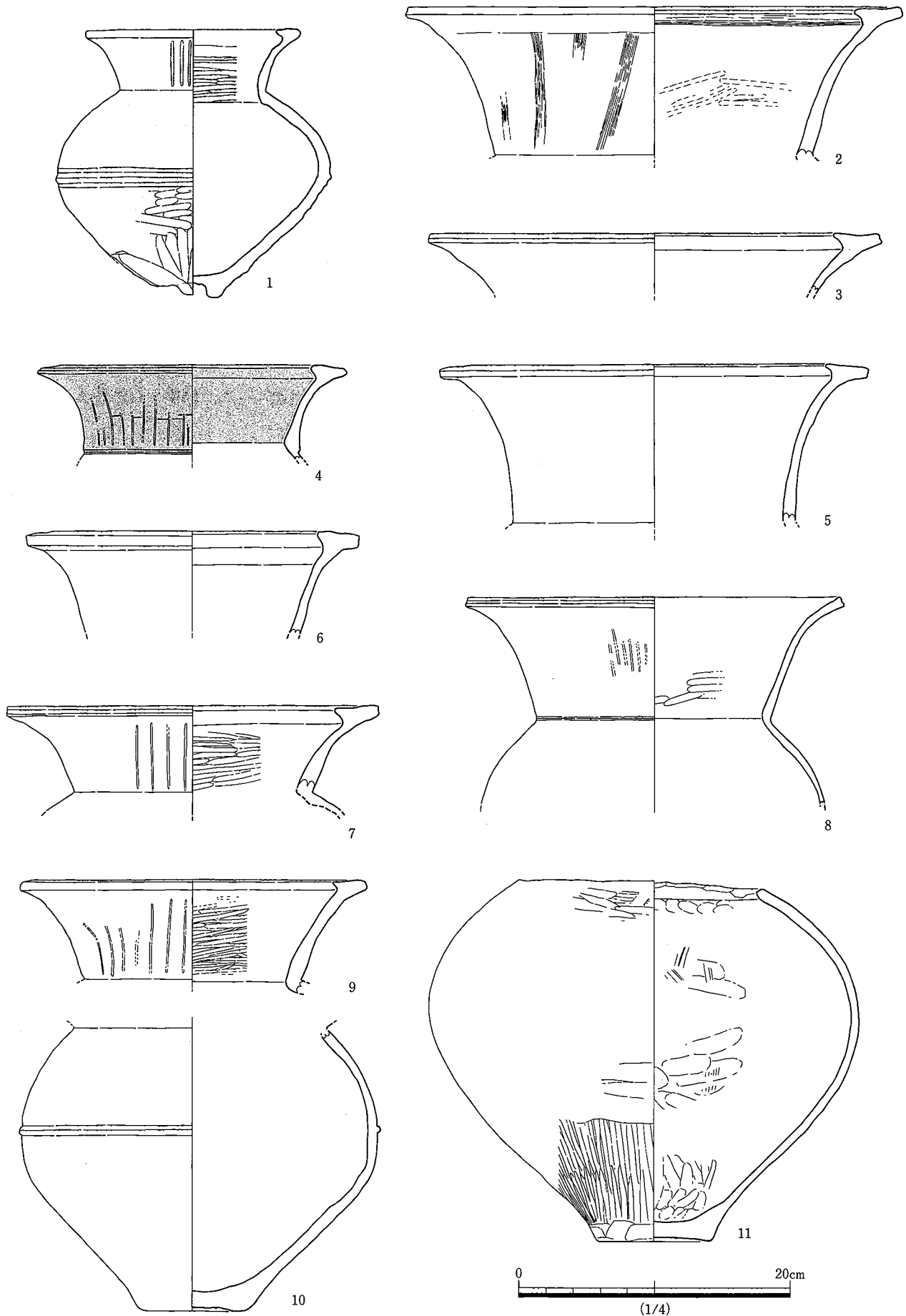
9 は頸部の付け根に 1 条の沈線を巡らせており、調整は 7 とほぼ同じだが、口縁はやや未発達である。口縁径は 25.4cm。

10 は胴の中位に低く細い三角突帯を 1 条巡らせる。器面の状態が悪く、調整がはっきりしないが、外面の突帯付近に横ミガキが薄っすらとみられ、内面にはナデ調整の痕跡が残る。底部はやや上げ底で径は 7.9cm。

11 は頸部の付け根から上部を打ち欠く可能性があり、肩部から底部にかけては完形である。外面の上位には横方向のミガキが部分的に残り、下部には縦方向のミガキ、底部側面にはナデの痕跡がみられ、内面はナデ調整である。底部はやや上げ底で、径は 8.2cm。

12 は口縁部の内面直下に強い押さえを施し、内側へ張り出させる。胴部には低く細い三角突帯を 1 条巡らせ、上下を押さえる。外面の頸部から突帯付近にかけて丹塗りの痕跡が残っており、本来は少なくとも外面から口縁にかけて施されていたものと思われる。口縁の下から頸部にかけては縦方向の暗文状のミガキを施しており、肩部から突帯の下にかけては横ミガキ、下位には縦ミガキを行う。また、口縁部付近はナデ調整で、頸部の内面には横ミガキが薄っすらと残り、体部内面はナデ調整である。口縁部の復元径は 16.5cm。

13 は口縁部が失われる。頸部の付け根に 1 条の沈線を巡らせ、胴部の中位に低く細い三角突帯を 1 条巡らせる。調整は肩部外面に横ミガキが、内面にナデ調整と指頭痕が残る。底部径は 6.6cm。



第 115 図 Ⅲ-W 区 1 号溝 I 群 出土遺物実測図 1 (1/4)

14～16は甕である。

14は口縁部が逆L字形で、やや内傾する。口縁の下には稜の鋭い三角突帯を1条巡らせ、この下と、口縁との間に縦ハケを施す。また口縁部から内面にかけてはナデ調整を行う。焼成が良好で、堅く焼きしめる。口縁部の復元径は37.2cm。

15は口縁部が逆L字形で、やや内傾する。胴部には低く細い三角突帯を1条巡らせ、突帯の下には縦ハケを施し、突帯の上位から内面にかけてはナデ調整を行う。口縁部の復元径は38.7cm。

16は口縁部が逆L字形で、内傾し、やや厚手で、端部は押さえる。口縁部の下には低い三角突帯を巡らせ、この上下を強く押さえる。全体的にナデ調整を施しており、口縁部の付け根の下には強くナデを行ったため、筋が付く。口縁部の復元径は36.3cm。

17と18は壺である。

17は頸部から上を付け根から失っており、打ち欠きの可能性がある。胴部の最大径付近に低いM字状突帯を1条巡らせ、内面はナデ調整を行う。底部径は7.2cm。

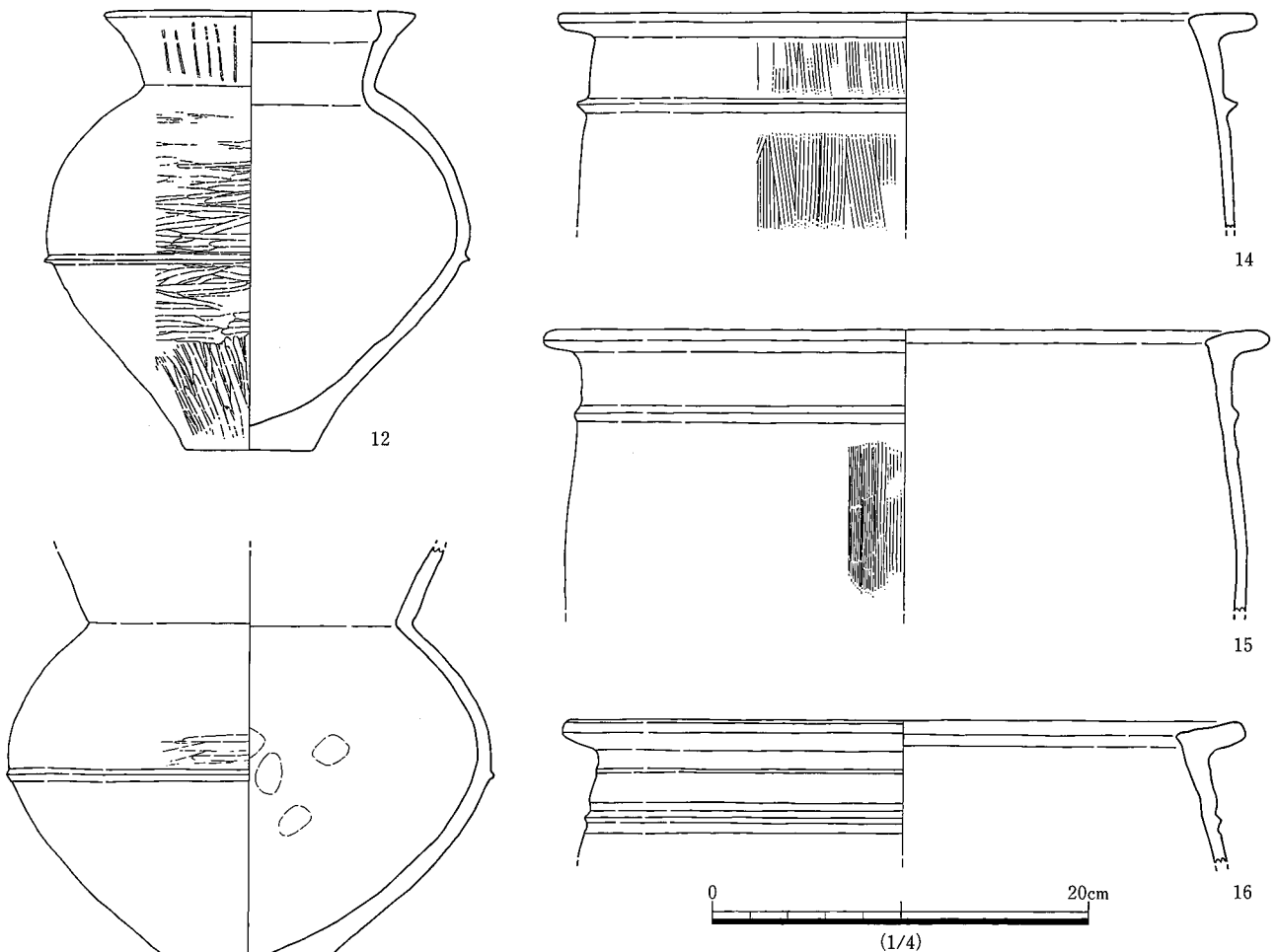
18は胴部が最大径となる部分に低く細い三角突帯を1条巡らせる。調整は突帯の上下が横ミガキで、底部から上位にかけては縦ミガキ、内面はナデ調整である。底部はやや上げ底で、径は6.6cm。

19～30は壺または甕の底部である。

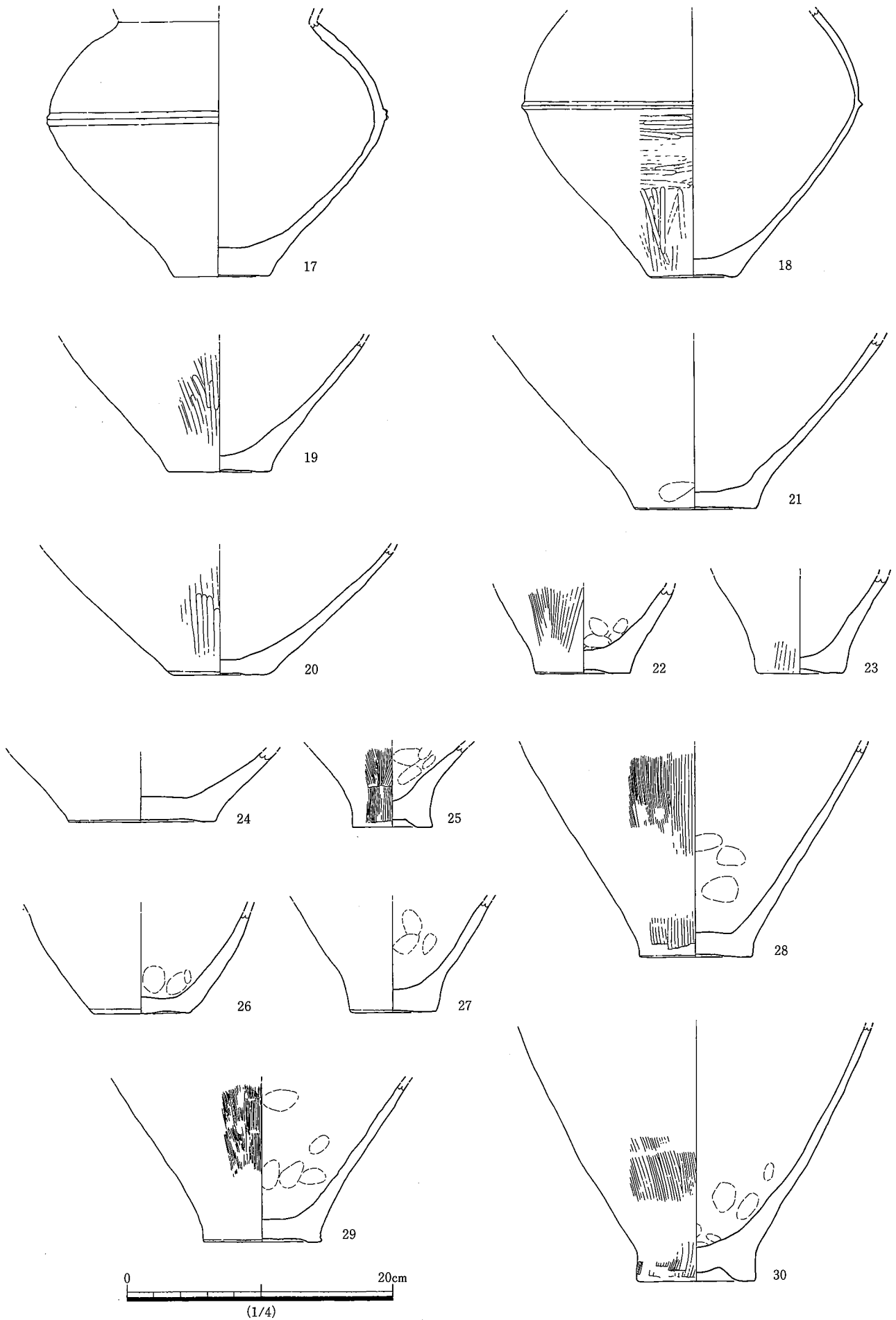
19は外面に縦ミガキが施され、底部側面から底面にかけてと、内面にはナデ調整が行われる。やや上げ底で径は7.8cm

20は19と調整がほぼ同じで、底部側面にくびれがほとんど無く、上方に向かって内湾気味に大きく開く。底部径は6.8cm

21は底部側面がややくびれ、上方に大きく開く。



第116図 III-W区 1号溝I群 出土遺物実測図2 (1/4)



第117図 Ⅲ-W区 1号溝1群 出土遺物実測図3 (1/4)

内面はナデ調整である。底部径は 9.2cm。

22 と 23 は外面に縦ハケを施し、内面はナデ調整で、22 の方は底面近くに指頭痕が残る。いずれも底面中央付近が上げ底で、径は 22 が 7.2cm、23 は復元で 6.6cm。

24 は内外面共ナデ調整で、底部径は 11cm。

25 は外面が縦ハケで、内面はナデ調整を施し、指頭痕が残る。底面は上げ底であり、径は 6.2cm。

26 は内外面ともナデ調整で、底部径は 7.2cm。

27 は外面に薄っすらとハケ目がみられ、内面にはナデを施しており、指頭痕が残る。外面が赤く変色し、内面にススが付着しているのので、2次焼成を受けた可能性が考えられる。底部径は 6.5cm。

28 は外面に縦ハケが残り、内面には指頭痕がみられる。底部はやや上げ底で、径は 8.6cm。

29 は 28 とほぼ同じ調整で、底面の中央部がやや窪む。径は 8.9cm。

30 は外面に縦ハケを施し、部分的にナデ消しを行い、内面には指頭痕が残る。底部側面はくびれをもち、底面中央は大きく窪む。底部径は 9cm。

31 ～ 42 は甕である。

31 は逆 L 字形の口縁を呈し、外傾する。全体的にナデ調整で、口縁の復元径は 23.9cm。

32 は口縁が逆 L 字形で内傾する。体部には縦ハケを施し、口縁の下から口縁の内側まで横ナデ、内面はナデ調整を施す。全体にススが付着しており、2次焼成を受けた可能性がある。口縁径 23.1cm。

33 は口縁が逆 L 字形で内傾し、上端はナデによりやや窪む。体部外面には縦ハケが施され、口縁部下付近は横方向にナデ消しており、丹念にナデのためなのか筋状の痕跡が付く。内面はナデ調整で、部分的に押さえた痕跡が残る。外面の口縁の下付近までと、内面にススが付着しており、2次焼成を受けた可能性がある。口縁径は 21.1cm。

34 は口縁がやや未発達な逆 L 字形で、内傾する。体部外面には目の粗い縦ハケを施し、口縁部下で横方向にナデ消し、内面はナデ調整である。焼成が良

好で、堅緻である。外面の中央付近と、内面の上下 2ヶ所に帯状のススの付着がみられ、2次焼成を受けた可能性がある。口縁の復元径は 24.1cm。

35 は口縁が逆 L 字形を呈し、内傾する。底部側面から上位に縦ハケを施し、部分的に軽くナデ消す。口縁部下から口縁の内側にかけては横ナデで、内面はナデ調整を行い、一部に指頭痕が残る。口縁径 25.7cm、底部径 6.8cm、器高 30.9cm。

36 は口縁が逆 L 字形で、端部に斜め方向のキザミ目を施す。外面には縦方向のハケ目が残り、口縁下から口縁内側にかけて横ナデ、内面はナデ調整を行う。口縁部の復元径は 30cm。

37 は口縁が逆 L 字形で内傾する。調整は 36 とほぼ同様に、口縁の復元径は 28.4cm。

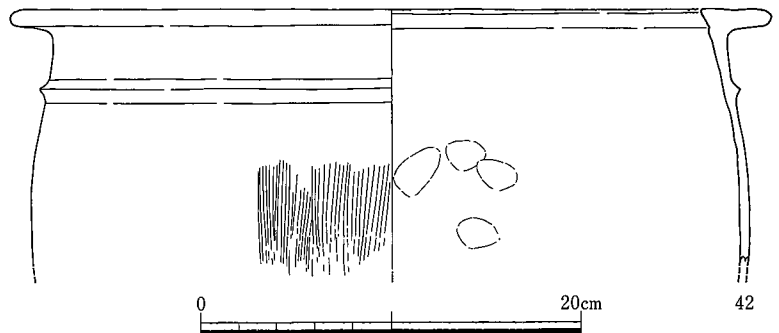
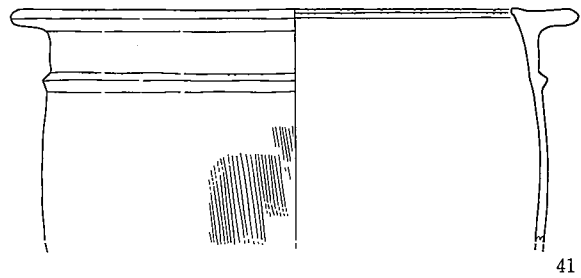
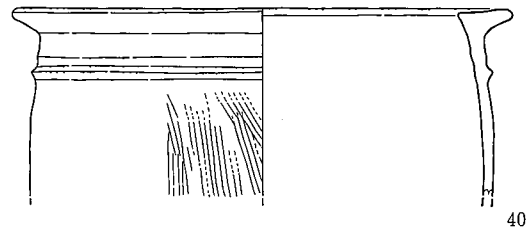
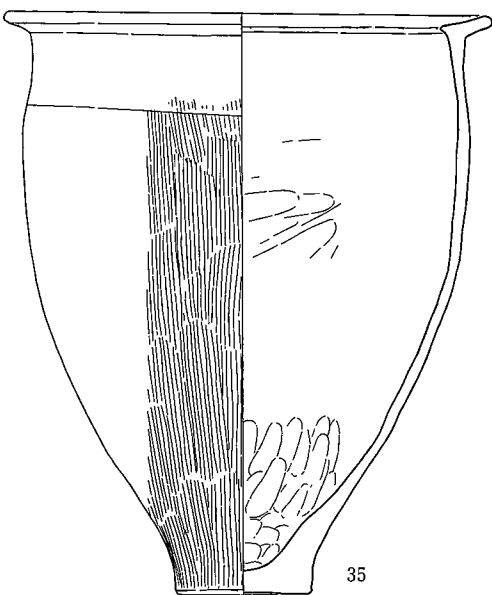
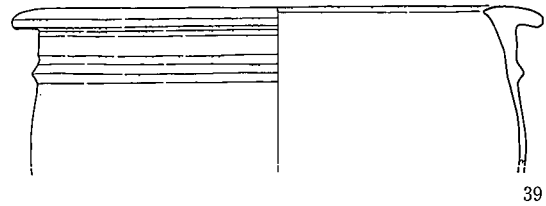
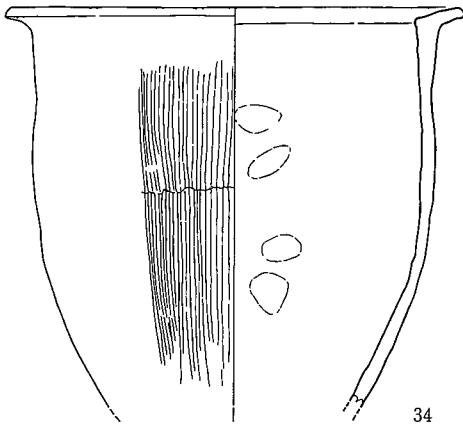
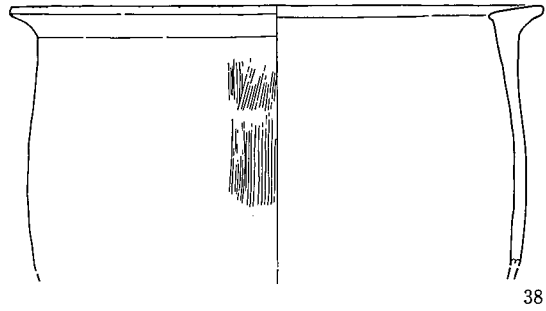
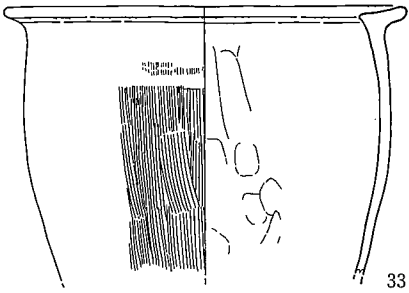
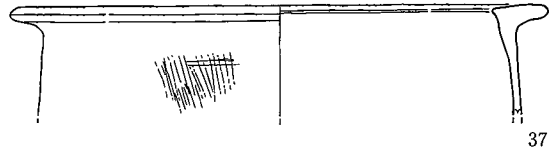
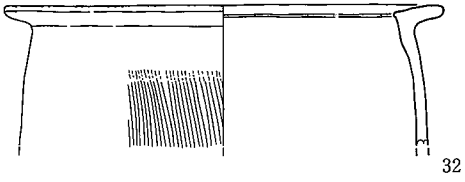
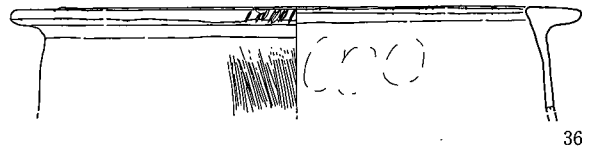
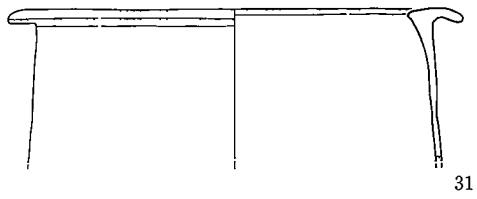
38 は口縁部が逆 L 字形で内傾する。調整は 36 とほぼ同様に、口縁の復元径は 28.2cm。

39 は口縁の下に細いがやや稜の鋭い三角突帯を 1 条巡らせる。外面の突帯下と内面の同じ高さの位置までが黒変および赤変しているのので、2次焼成を受けた可能性がある。また、そのためか、表面が剥落しており、調整は不明。口縁部の復元径は 28cm。

40 は口縁が逆 L 字形で若干内傾する。口縁の下には細く低いが稜のはっきりした三角突帯を 1 条巡らせる。突帯の下にはやや目の粗い縦ハケを施し、突帯付近から口縁部にかけては横ナデで、内面はナデ調整を行う。胴部から突帯の下端にかけてと、口縁の下端にススが付着しており、立った状態で下からの 2次焼成を受けた可能性がある。口縁部の復元径は 26.4cm。

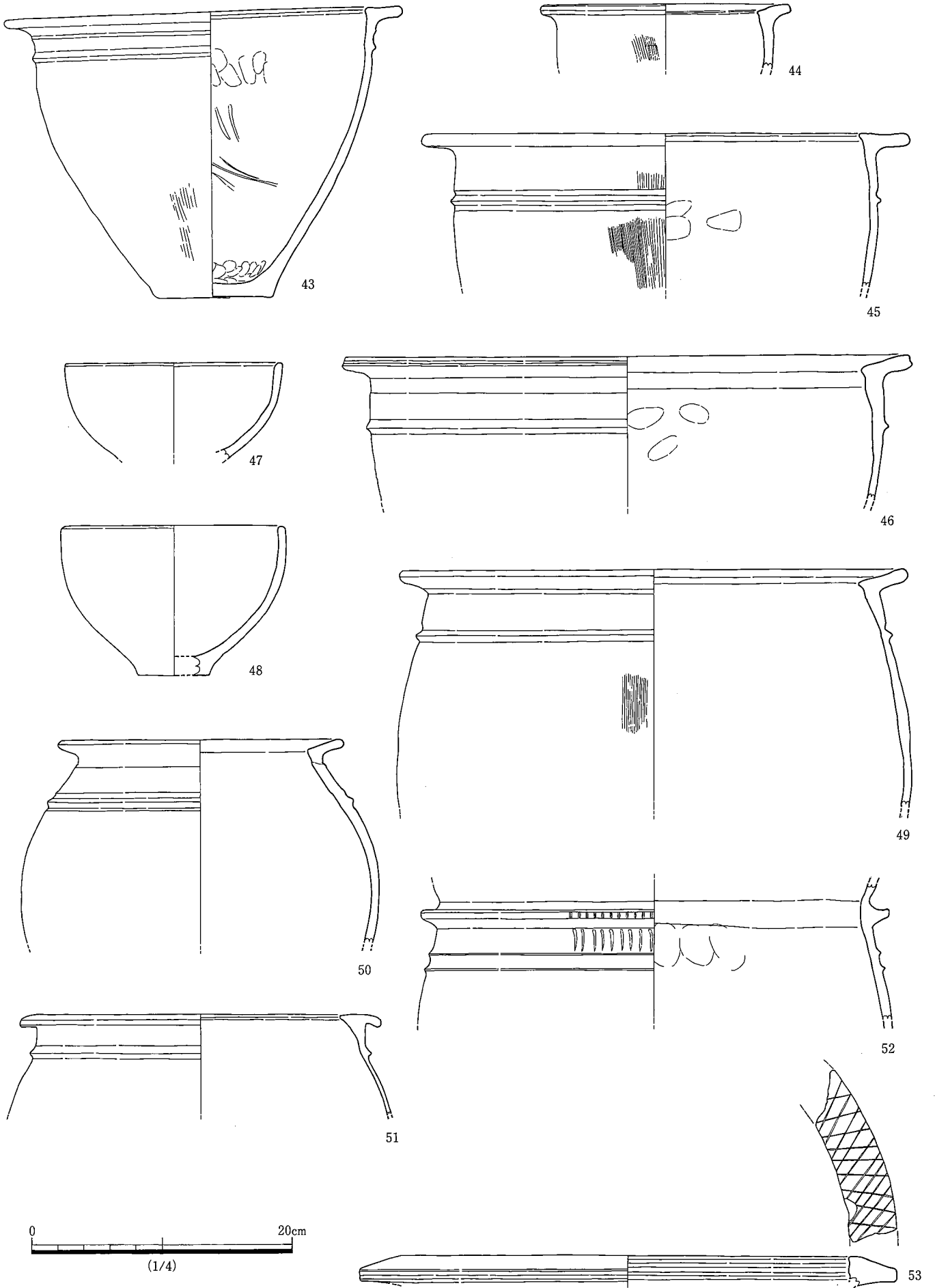
41 は口縁が逆 L 字形で、上端が横ナデによりやや窪む。口縁の下には稜のはっきりした三角突帯を 1 条巡らせる。調整については 36 とほぼ同様に、口縁部の復元径は 30cm。

42 は口縁が逆 L 字形で、胴部がやや開く。口縁の下には稜のはっきりした三角突帯を 1 条巡らせる。調整は 36 とほぼ同じで、口縁部の復元径は 40cm。

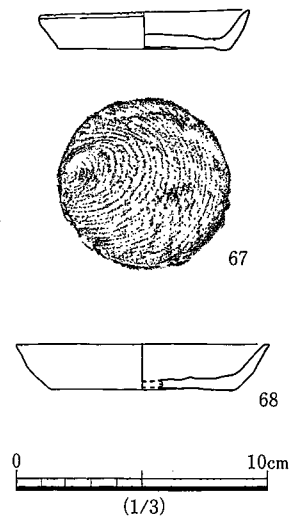
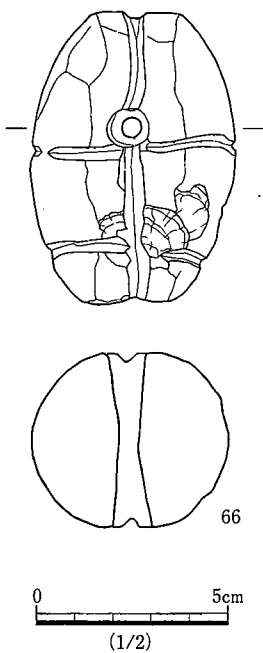
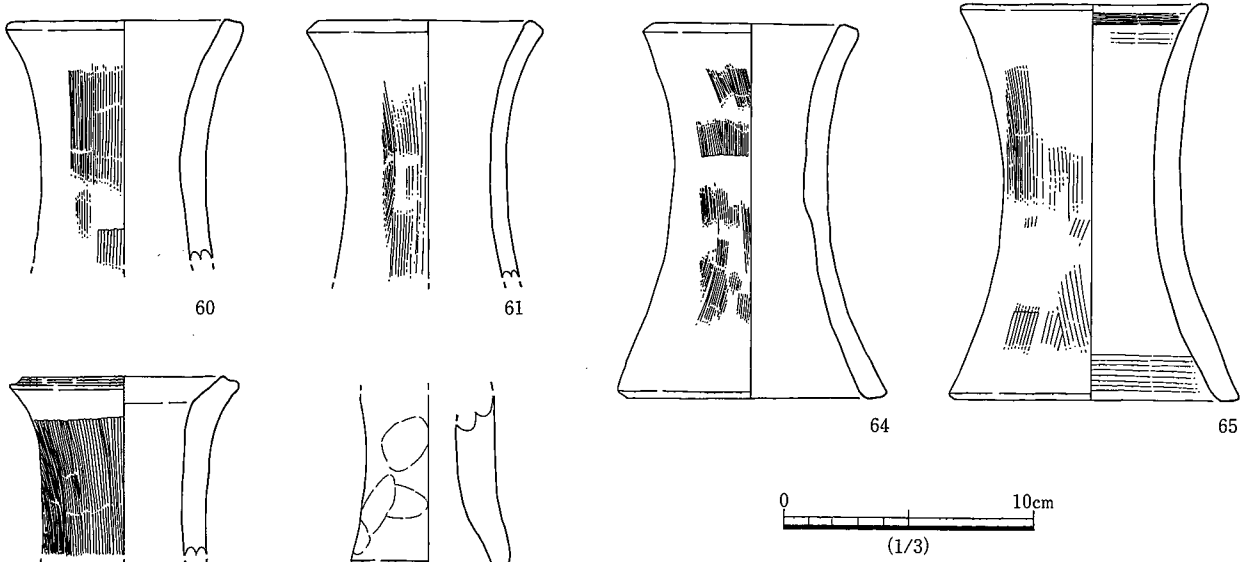
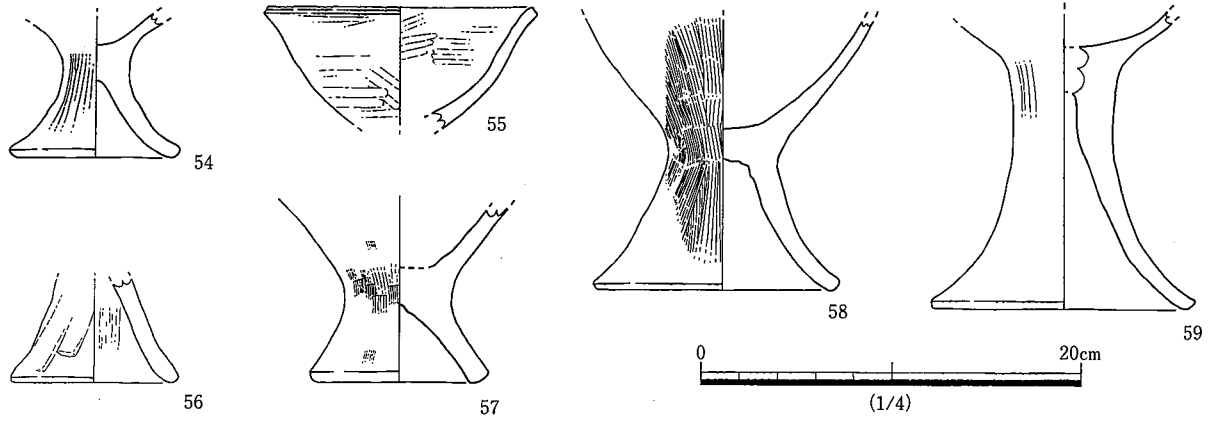


(1/4)

第118図 Ⅲ-W区 1号溝I群 出土遺物実測図4 (1/4)



第119図 Ⅲ-W区 1号溝I群 出土遺物実測図5 (1/4)



43、44、47、48 は鉢と考えられる

43 は口縁部と体部が部分的に失われるほかはほぼ完形に復元できる。口縁部が逆L字形を呈し、やや内傾する。口縁部の下には低く細い三角突帯を1条巡らせる。表面は状態が悪く、調整がほとんどみえないが、下半部にハケ目が薄っすらと残る。口縁部から内面にかけてはナデ調整を施しており、指頭痕や工具の使用痕などがみられる。口縁径30.7cm、底部径8.8cm、器高22.6cm。

44 は口縁が逆L字形で内傾する。内外面共にナデ調整を施す。口縁の復元径は19.3cm。

45、46、49 は甕で、45 は口縁が逆L字形を呈する。口縁の下には低く細い三角突帯を1条巡らせ、この上下を強く押さえ、大きく窪む。胴部の外面には縦ハケを施し、突帯付近から口縁部にかけては横ナデ、内面にはナデ調整を施す。口縁部の復元径は

第120図 III-W 区 1号溝I群 出土遺物実測図6 (1/2、1/3、1/4)

37.6cm。

46 は口縁が逆 L 字形で内傾し、口縁端部には凹線状の窪みが巡る。口縁部の下には低い稜の尖った三角突帯を 1 条巡らせ、外面から口縁の内側にかけては横ナデを施し、内面はナデ調整を行う。口縁部の復元径は 44.4cm。

47 は内外面ともナデ仕上げで、口縁端部は軽く押さえる。胎土が精製されており、微小な雲母片が目につく程度である。口縁部の復元径は 16.8cm。

48 は内外面ともナデ仕上げで、口縁付近は横ナデを施し、口縁端部は丸く仕上げる。口縁の復元径 17.4cm、底部の復元径 5.4cm、器高 11.6cm。

49 は口縁が逆 L 字形でやや肥厚し、内傾する。口縁部の下には低く細い三角突帯を 1 条巡らせ、この上下を強く押さえる。胴部には部分的に縦ハケが残り、突帯付近から口縁部までは横ナデ、内面はナデ調整を施す。口縁部の復元径は 39.2cm。

50 は口縁部が逆 L 字形で内傾する。この下には低く細い三角突帯を巡らせ、上下を強く押さえる。内外面ともナデ調整で、口縁径は 22cm。

51 は口縁が T 字形で若干内側へ張り出し、全体的に外傾する。口縁部の下には三角突帯を 1 条巡らせ、内外面ともナデ調整を施す。口縁部の復元径は 27.8cm。

52 は瓢形土器のくびれ部付近の破片と考えられる。くびれ部の突帯はコの字形で大きく張り出し、端部に縦方向のキザミ目を施す。また、突帯の下には縦方向の暗文を施し、この下に 2 条の稜のあまい三角突帯を巡らせる。外面は横ナデを行い、内面はナデ調整で、突帯の裏側付近に指頭痕が残る。突帯の接合方法は胴部への貼り付けであり、甕の口縁部に壺の胴部を接合する方法に比べて新しい様式を示す。一方、突帯の出っ張りが大きく、形状は口縁の形を残すことから、貼り付け突帯の中では古い様相に属すると思われる。なお、内外面には丹塗りなどはみられない。くびれ部の復元径は 36cm。

53 は甕の口縁部で、逆 L 字状を呈し、外傾する。

口縁の上端には格子状の沈線を施す。口縁部の復元径は 41.6cm。

54 は脚台部と考えられる。外面には縦方向のミガキを施し、薄っすらと丹塗りの痕跡が残る。底部径は 9cm。

55 は鉢または高坏と考えられる。内外面共に、横または斜め方向のミガキを施し、この上に丹塗りの痕跡が残る。口縁部の復元径は 14.4cm。

56 は器台と考えられる。外面に強く斜め方向にナデを行った痕跡が窪みとして残る。底部の復元径は 10cm。

57 は脚台付の甕と考えられる。脚台部はやや外反しながら直線状に広がり、外面の一部には縦ハケが残り、内面はナデ調整を行う。底部径は 9.4cm。

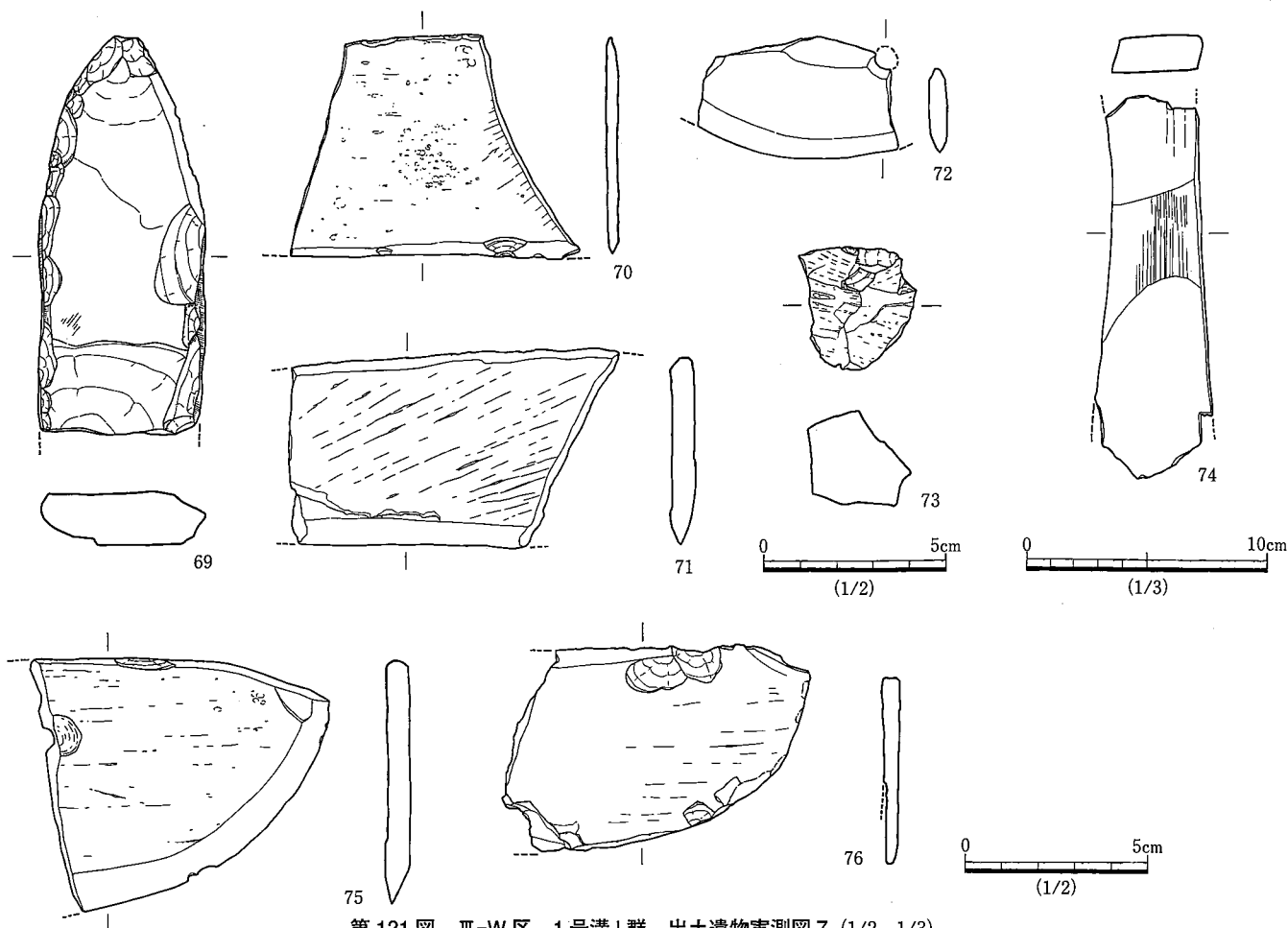
58 は脚台付の甕である。脚台部は底部に向かって直線状に広がり、端部付近でやや外反する。外面は縦ハケで、裾端部周辺は横方向にナデを行い、端部は押さえて面取りする。脚の内面には板状の工具で回転ナデを行った痕跡が残り、甕の内部はナデ調整を行う。底部の復元径は 13cm。

60～65 は器台である。63 以外は外面に縦ハケを施し、口縁の内外面は横ナデ、内面はナデ調整を行う。60 の口縁径は 9.2cm、61 の口縁の復元径は 9.3cm、62 の口縁径は 9cm。63 は小型で、指頭痕がみられ、底部径は 6.2cm。64 は完形で、口縁径 8.5cm、底部径 10.6cm、器高 14.9cm。65 は口縁と底部の内側に横ハケを施す。口縁径 9.7cm、底部径 11.5cm、器高 15.7cm。

66 は石錘である。長軸方向に 1 条と、短軸方向に 2 条の沈線を刻み、交差する箇所にも両面からの穿孔を施す。砂岩製。長さ 7.8cm、幅 5.4cm、厚さ 4.7cm、重量 255.97g。

67 は土師皿で、口縁の一部が欠けるほかはほぼ完形である。口縁部は摘み上げで、底部は糸切りを行う。口縁径 8.2cm、底部径 6.8cm、器高 1.6cm。

68 は土師皿で、底部は糸切りである。口縁の復元径 10cm、底部の復元径 7.3cm、器高 1.8cm。



第121図 Ⅲ-W区 1号溝1群 出土遺物実測図7 (1/2、1/3)

69は石剣の未成品と考えられる。全体的に調整剥離を施しているが、刃部などの研ぎ出しはせず、端部が丸のまま終わっている。砂岩製。長さ11cm、幅4.5cm、厚さ1.45cm、重量126.25g。

70は石庖丁で、左右が欠損する。刃部は研ぎ出し、表面は粗い研磨で、背は調整剥離を施す。砂岩製。長さ6.05cm、幅8cm、厚さ3mm、重量26.99g。

71は石庖丁で左右が欠損する。刃部から表面にかけて研磨がみられ、背の部分は調整剥離、裏面は剥落する。砂岩製。長さ5.4cm、幅9cm、厚さ6.5mm、重量65.86g。

72は石庖丁で、穿孔部分で欠損する。表裏面および刃部とも研磨が施されており、刃部には小さな刃こぼれがみられる。硬質砂岩製。長さ3.4cm、幅5.3cm、厚さ5mm、重量16.69g。

73は黒曜石の石核で、2面は剥離しているものの、他は原礫面を残している。石英系の不純物を多く含み、質が一定していないため、途中で放棄された可

能性がある。長さ3.4cm、幅2.9cm、厚さ2.5cm、重量27.48g。

74は砥石で、縦に細長い長方形を呈し、断面は扁平である。表面のみ研磨面が残り、長軸方向の研磨痕が観察できる。表面に赤変した箇所がみられ、火を受けた可能性がある。砂岩製で、長さ15.8cm、幅3.8cm、厚さ1.5cm、重量145.20g。

75は石庖丁で、全体に研磨を施しており、穿孔部分で欠損する。刃部には刃こぼれの痕があり、使用に伴う可能性が考えられる。表面には黒色および赤色に変化した部分がみられ、火を受けた可能性がある。砂岩製で、長さ7cm、幅7.9cm、厚さ6mm、重量56.48g。

76は石庖丁で、背の一部を研磨するものの、刃部は未だ平坦なままで、調整剥離も施されていない。よって、未成品の可能性が考えられる。砂岩製。長さ5.5cm、幅7.3cm、厚さ4mm、重量33.06g。

(3) 古代以降の集落の遺構と遺物

a. 1号掘立柱建物 (第123図)

1号掘立柱建物は調査区の中央近くに位置し、付近は微高地がくびれ、最も狭くなる場所にあたる。

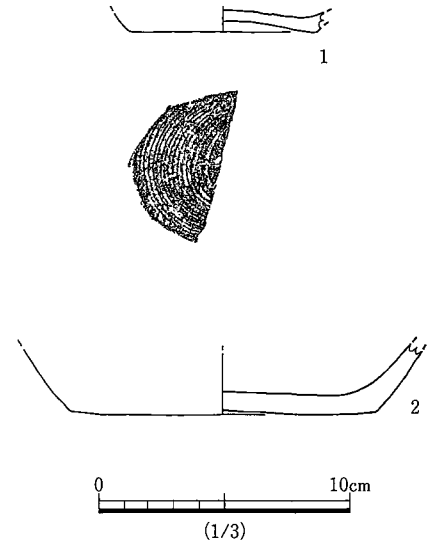
建物の規模は2間四方であり、東西は約3.8m、南北は3.5m、1間の長さは柱の芯芯間で1.6m～2.2mである。

出土遺物 (第122図、図版46)

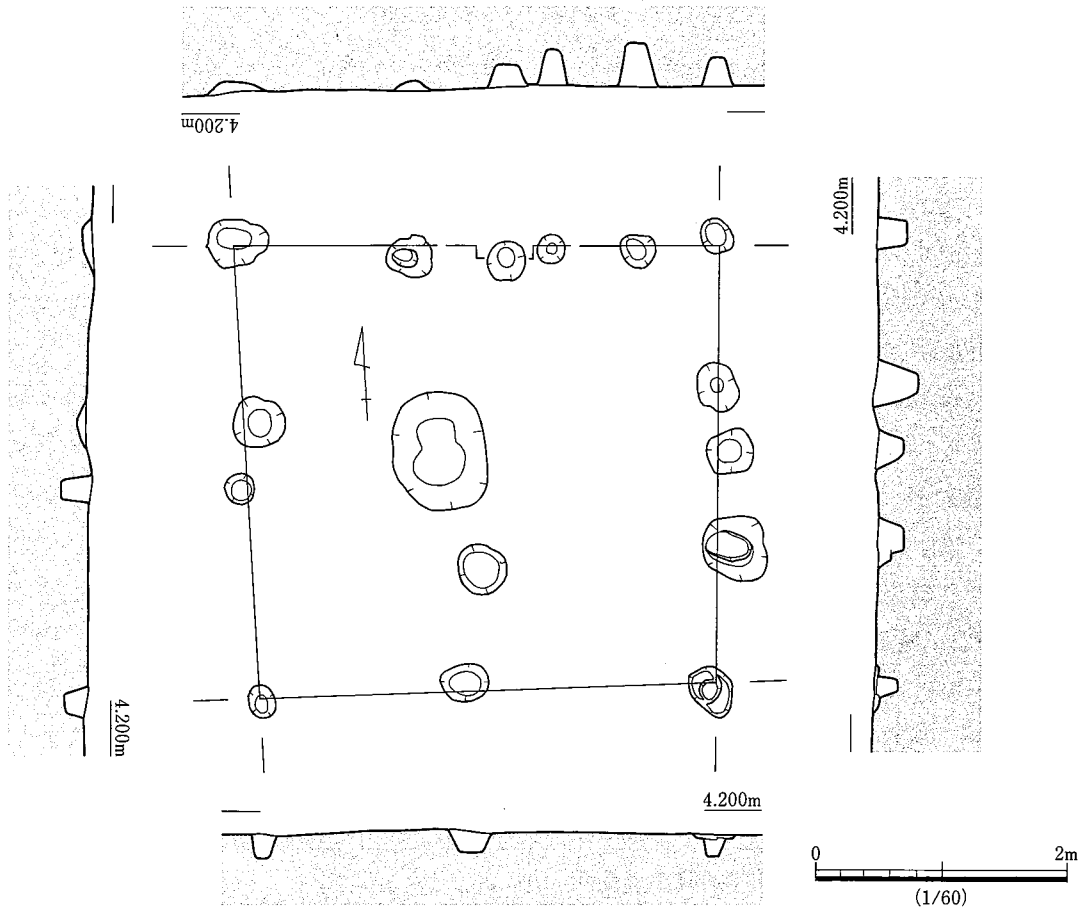
出土遺物は小片が多く、図化ができたのは2点のみであった。

1は土師皿で、底部付近のみが残る。底部は糸切りで、径は7.2cm。

2は瓦質の鉢の底部と考えられ、横方向の回転ナデがみられる。底部径は12.2cm。



第122図 III-W区 1号掘立柱建物 出土遺物実測図 (1/3)



第123図 III-W区 1号掘立柱建物実測図 (1/60)

b. 井戸 (第 124 ~ 127 図、図版 41)

井戸は微高地上の 8ヶ所に分布する。すべて素掘り、井戸枠などの痕跡の残るものはない。また、深さは約 1m ~ 1.9m に渡って掘削される。

1 号井戸

平面は円形で、断面は壁が垂直に近く、底が平坦な方形を呈する。規模は上端の径が 2.3m、下端が 1.7m × 1.4m、深さ 1.3m である。

出土遺物 土師皿や須恵器の坏が出土している。1 ~ 4 は土師皿で、いずれも底面は糸切りである。2 と 4 は器高が低く扁平なタイプで、5 は須恵器の坏の高台部分である。1 の底径 6.4cm。2 の底径 9.6cm。3 の底径 9cm。4 は口縁径 11.2cm、底径 9.8cm、器高 8mm。5 の底径 7.2cm。

2 号井戸

平面は楕円形を呈し、断面は壁が垂直で、底が平坦な長方形である。規模は上端が 1.1m × 0.9m、下端が 60cm × 63cm、深さ 1m である。なお、出土遺物はいずれも小片で、図化できるものはなかった。

3 号井戸

平面は楕円形で、北側が 2 段掘りとなる。断面は壁が垂直で、底が平坦な長方形を呈し、北側の上位にテラスをもつ。規模は上端が 1.8m × 1.2m、下端が 74cm × 80cm、深さ 1.2m である。

出土遺物 6、7 は土師器の小皿で、底面に対し、器高がやや高く、口縁に向かって内湾しながら立ち上がる。10 は底部から直立気味に立ち上がり、11 は口縁部付近でやや外反する。9 は白磁の碗で、見込に刻花唐草文を施す。6 は口縁径 8.2cm、底径 6.6cm、器高 2.7cm。7 は口縁径 10cm、底径 7.6cm、器高 2.2cm。8 は口縁径 15.4cm、底径 13.4cm、器高 2.2cm。9 は高台径 4.6cm。10 は口縁径 12.4cm、底径 11cm、器高 2.5cm。11 は口縁径 14cm、底径

9cm、器高 2.4cm。

4 号井戸 (図版 41)

2 段掘りとなっており、1 段目が大きな不正円形で、断面は皿形であり、2 段目は平面が円形で、断面は壁が垂直に近い長方形である。1 段目の上端は径が約 3.8m、2 段目の上端は径が約 1.2m、底面の径は約 80cm、深さは 1.8m である。

出土遺物 12 は石鍋で、底部付近を人為的に打ち欠く。鏝の部分をあまり削り出さず、口縁は斜めに切り落とす。全面にススが分厚く付着しており、鑿痕などは観察できない。口縁径 24.6cm。13 は播鉢で、口の部分は欠損し、全体的に扁平である。口縁径 26.3cm、底部径 11.2cm、器高 9.8cm。

5 号井戸

平面は円形と考えられ、東側は他の遺構と切り合い、西側は調査区外となる。断面は底面がやや丸みを帯びた逆台形となる。規模は上端が南北幅で 2m、下端が 96cm × 72cm、深さ 1.4m である。なお、出土遺物はいずれも小片で、図化できるものはない。

6 号井戸

平面は円形で、途中で緩傾斜から急傾斜へと変わり、断面は長方形に近い。規模は上端の径が 1.3m、下端の径が 82cm、深さ 1.3m である。

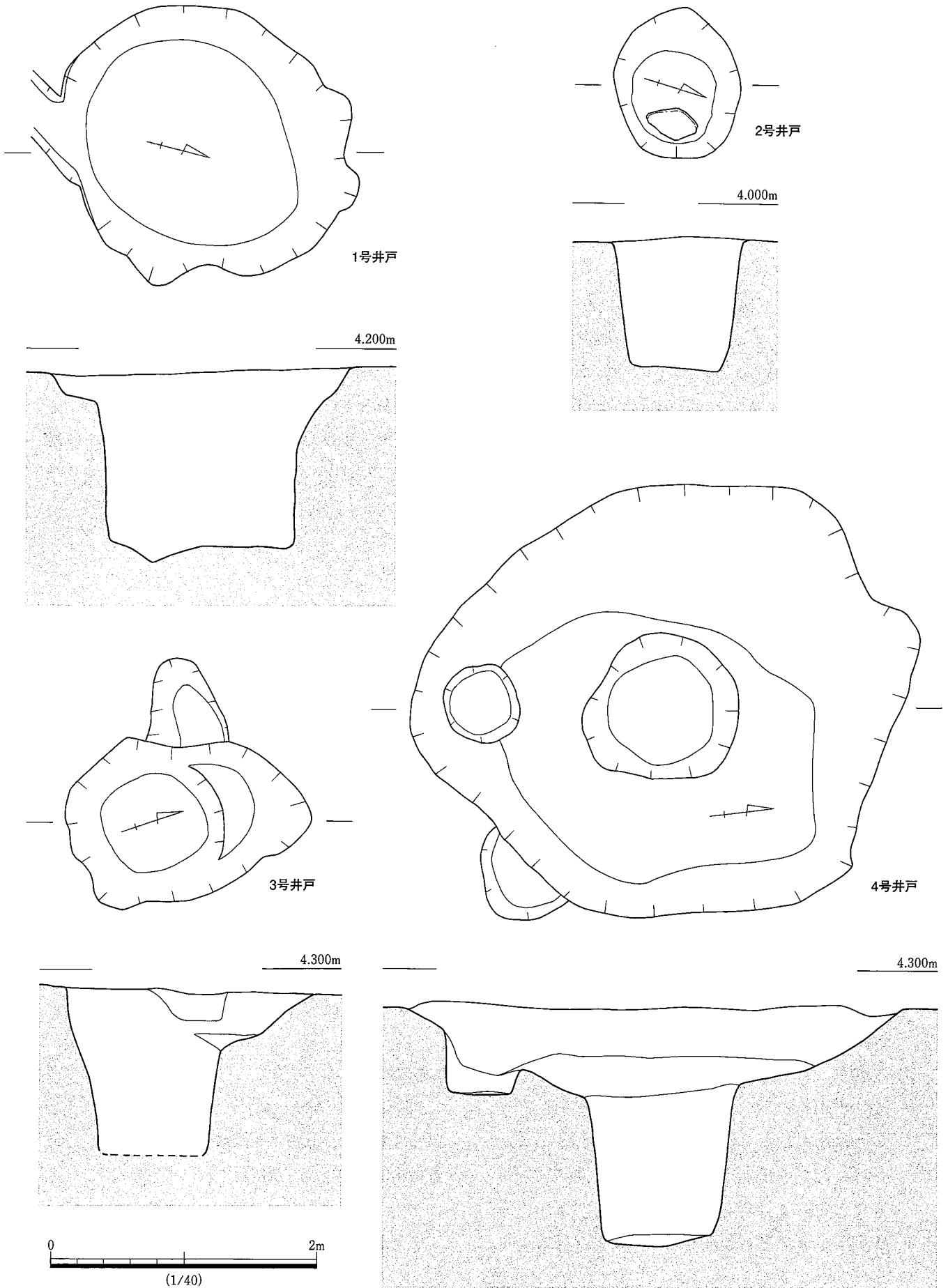
出土遺物 14 は 12 と同様、底部付近を人為的に打ち欠き、鏝の部分は小さく、口縁部は斜めに切り落とす。口縁径 26.6cm。

7 号井戸

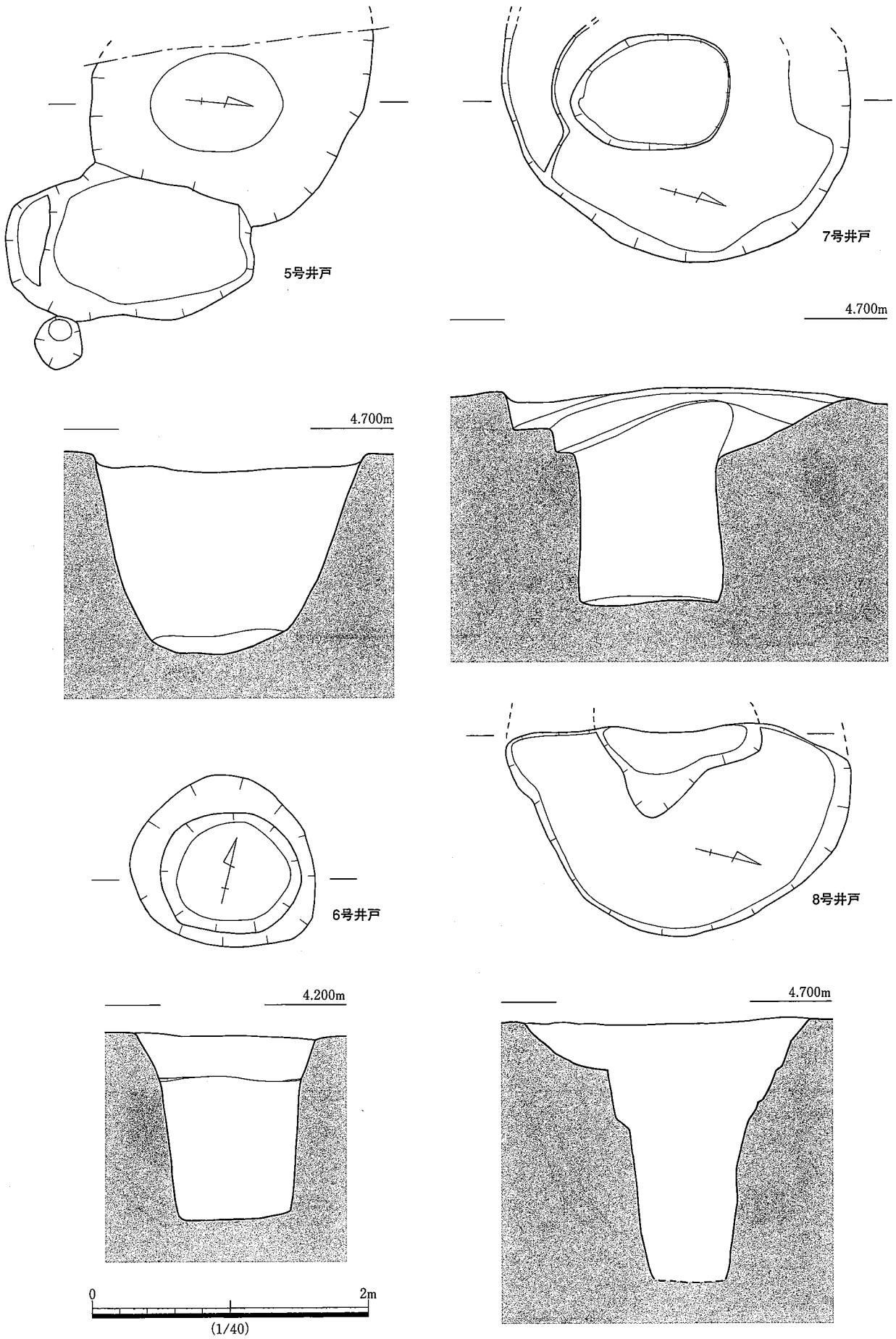
2 段掘りで、西側は調査区外となる。断面は南側が 3 段掘りで、北側が 2 段掘りとなっており、1 段目の南北幅が 2.5m、南側 3 段目と北側 2 段目の幅は 1.2m、底面は 1.1m × 0.8m、深さ 1.6m である。

出土遺物 15 は播鉢の口縁部付近である。16 ~ 21 は土師皿で、16 ~ 18、20、21 はいずれも口縁

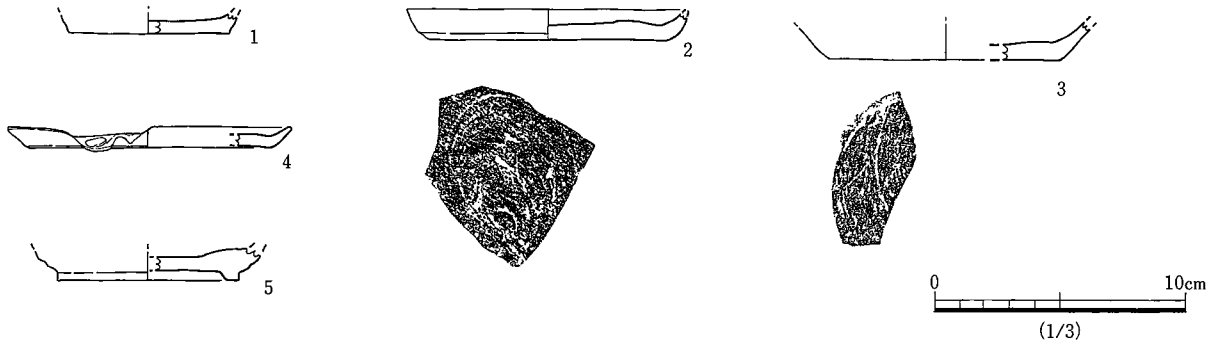
調査の記録



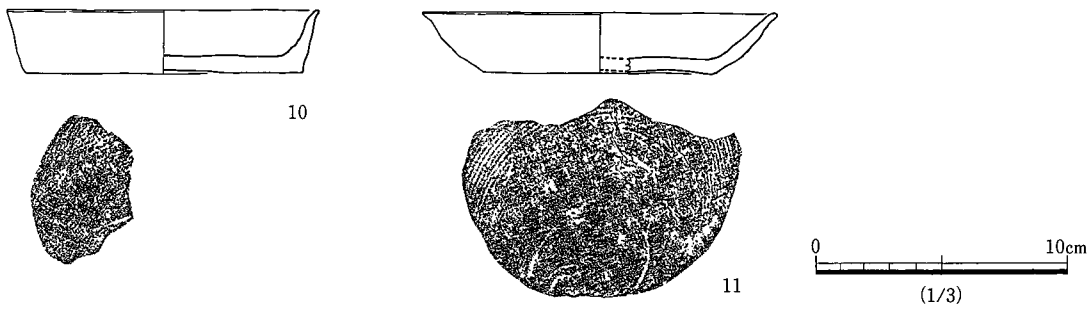
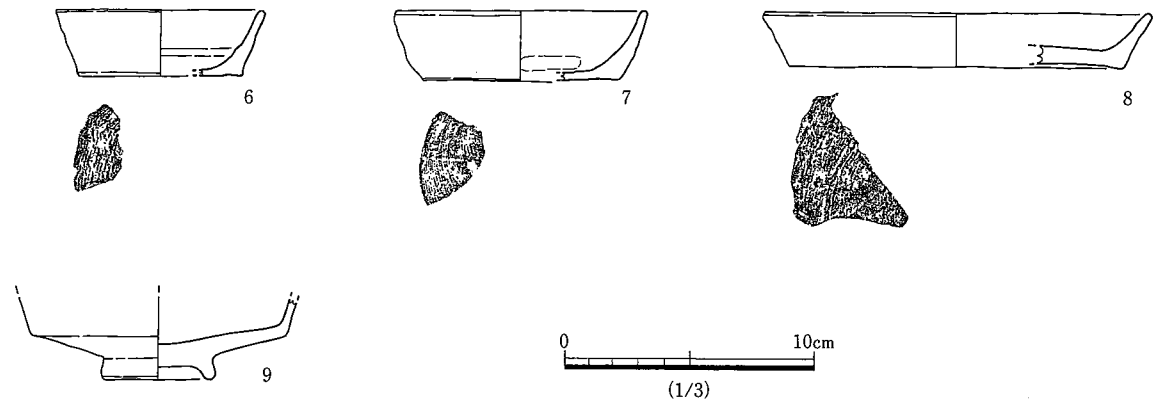
第124図 Ⅲ-W区 1～4号井戸実測図 (1/40)



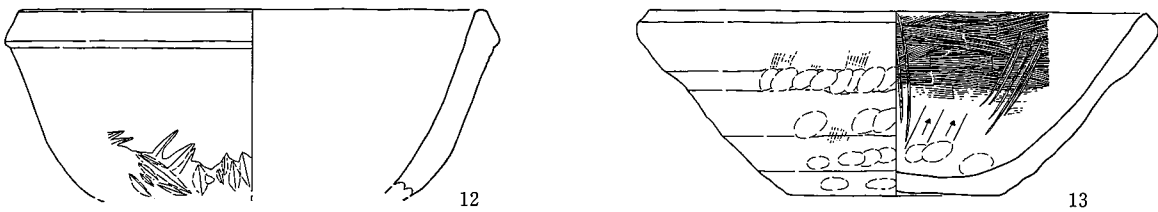
第 125 図 Ⅲ-W 区 5～8号井戸実測図 (1/40)



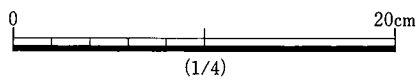
1号井戸



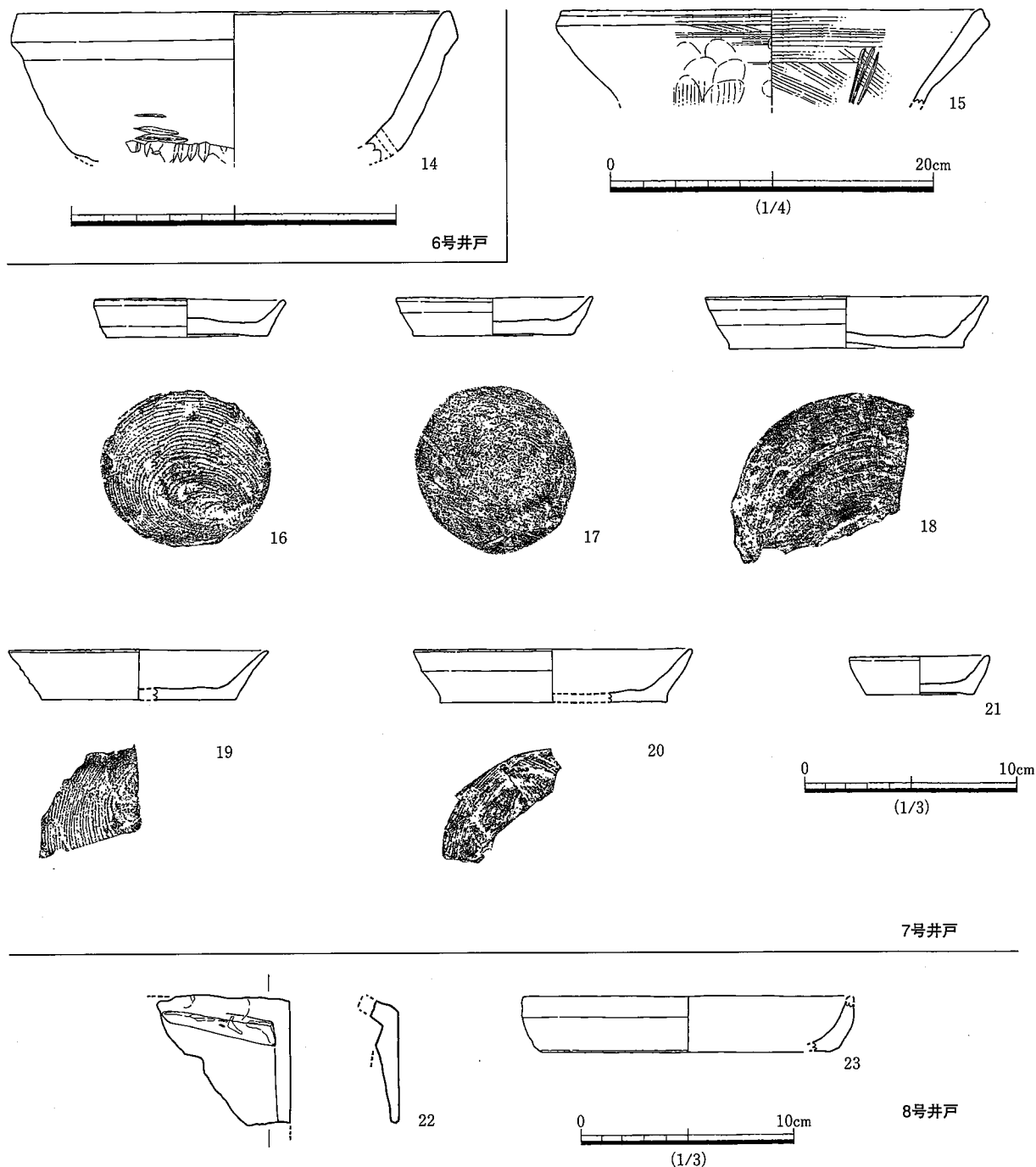
3号井戸



4号井戸



第126図 III-W区 1~4号井戸 出土遺物実測図 (1/3, 1/4)



第127図 Ⅲ-W区 6～8号井戸 出土遺物実測図 (1/3, 1/4)

が直立気味に立ち上がり、19はやや外反する。底部はいずれも糸切りで、21の内面には油煤痕がみられる。15の口縁径は26cm。16は口縁径8.8cm、底径7.4cm、器高1.8cm。17は口縁径9.1cm、底径7.4cm、器高1.8cm。18は口縁径13.2cm、底部径11cm、器高2.4cm。19は口縁径12cm、底径9cm、器高2.3cm、20は口縁径13cm、底径10.6cm、器高2.5cm、21は口縁径6.4cm、底径5cm、器高1.8cm。

8号井戸

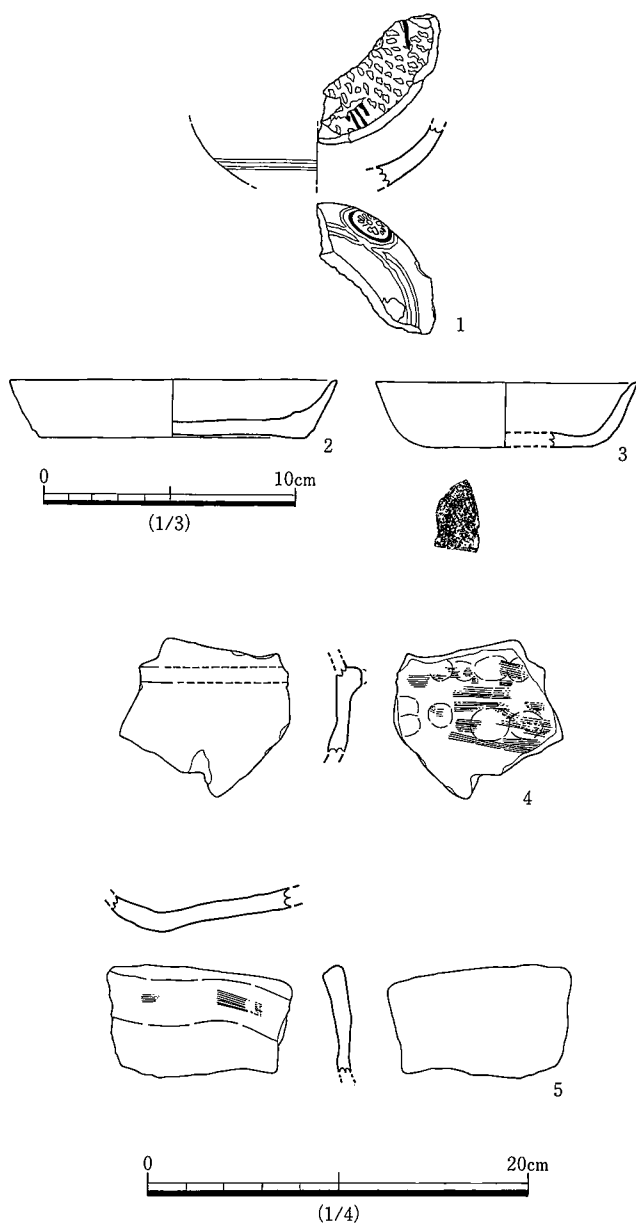
平面は円形と考えられ、西側が調査区外となる。断面は2段掘りで、1段目は浅く、2段目は壁が垂直に近い長方形となる。規模は1段目の上端で2.5m、2段目は1.2m、底面は1mである。深さは崩落により全掘が不可能であったため、1.9mまで調査した。

出土遺物 22は碗の一部で、いわゆる赤間石製である。23は土師皿で、体部がやや内湾する。

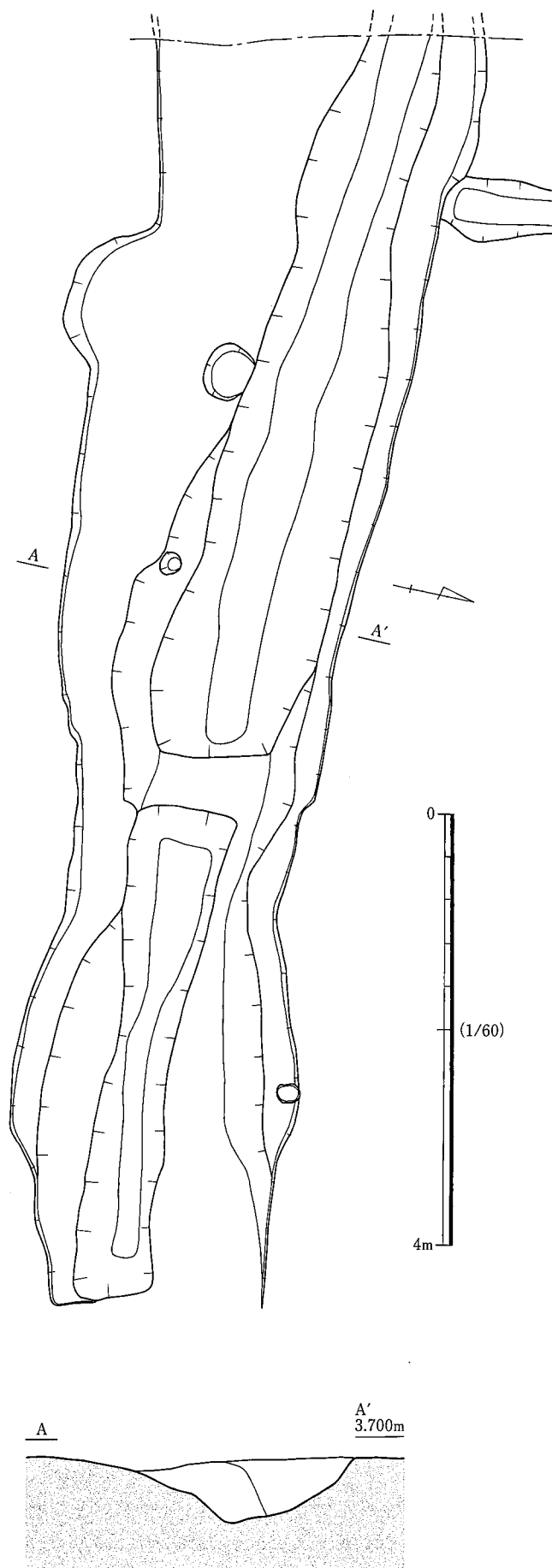
c. 2号溝 (第129図)

2号溝は微高地が最も広がった部分に位置しており、尾根をほぼ直角に断ち切るように掘削される。素掘りで、ほぼ直線状に掘られ、東側は谷部へ繋がりを、西側は調査区外へと続き、長さは12.15mが検出され、方位は磁北にほぼ直角のN-90°-Wである。

溝の断面は逆台形または底の丸い椀形である。現地表面からの深さは西端で約43cm、中央付近で49cm、東端は約54cmで、およそ10cm程度東側の低地へ向かって傾斜が付いていることが分かる。一



第128図 III-W区 2号溝 出土遺物実測図 (1/3, 1/4)



第129図 III-W区 2号溝 平面および断面実測図 (1/60)

方、底面の標高をみると、西端では 3.57m、中央部では 3.51m、東端では 3.38m となっており、東側の低地へ向かって徐々に深くなっていることが分かる。これは同一微高地上の南側に存在する 1 号溝 (P.127) とは異なる状態であり、それぞれの溝の性格や時代差を考える上で貴重な判断材料といえる。

なお、溝の中央からやや東寄りの部分に溝を跨ぐような高まりがある。平面が長方形で、断面が台形、規模は長さ 1.1m、幅 45cm、溝の底面からの高さ 26cm である。地山の削り残しで、性格等は不明である。

出土遺物 (第 128 図、図版 46)

出土遺物については小片が多く、量も少なかった。したがって、図化できたものは少ない。

1 は高麗青磁で、内外面に白色土と黒色土の 2 色による象嵌を施す。胎土は灰白色で全面に緑がかかった灰色の釉をかける。器種は鉢の可能性はある。

2 と 3 は土師皿である。2 は底部から口縁部に向かって直立気味に立ち上がり、口縁端部を摘み上げる。口縁の復元径は 13cm、底部径は 10.4cm、器高は 2.3cm。

3 は、底部から口縁に向かってやや内湾気味に立ち上がり、口縁端部を摘み上げる。口縁の復元径は 10.4cm、底部径は 6cm。器高は 2.6cm。

4 は釜の破片で、鏝が一部残る。鏝は断面がコの字形で、張り出しが少なく、内面はハケ調整である。内外面ともススが付着しており、とくに外面には分厚く付着し、風化も激しい。

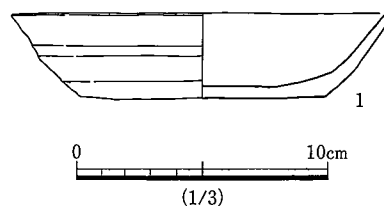
5 は片口鉢の破片である。注ぎ口は小さく、周囲はナデ調整を施す。

d. その他の出土遺物

これまでに挙げた溝や井戸、掘立柱建物のほかにも取り上げていないピットや土坑などがあり、遺物が出土している。しかしながら、いずれも小片であり、出土量は少ない。一方、東側の谷部は集落から出た廃棄物の投棄場所となっているようで、遺物の出土量は多い。ここでは谷部から出土した遺物の 1 つを取り上げてみたい。

出土遺物 (第 130 図)

1 は土師器の坏である。底部はヘラ切りで、体部は底部から口縁部に向かってやや内湾気味に開き、口縁付近で若干外反する。口縁の復元径は 15cm、底部径は 9.8cm、器高は 3.4cm。



第 130 図 III-W 区 東側谷部 出土遺物実測図 (1/3)

Ⅲ. 小 結

今回報告を行ったⅢ-E区とW区は冒頭で述べたとおり、調査区全体からみると1/4程度である。よって、遺跡全体の評価や性格を決定するには今後行われる予定である他の調査区の報告を待つ必要がある。したがって、ここではそれぞれの遺構の時期や性格などを中心に述べてまとめたい。

(1) Ⅲ-E区

集落関連の遺構と遺物

大溝 大溝の時期については弥生時代中期前半～後半で、須玖Ⅰ～Ⅱ式の範疇にほぼ収まると考えられる。なかにはこれよりもやや古めの口縁部や、底部、蓋の摘みなどがあり、新しい甕棺の口縁の破片なども散見される。しかしながら、いずれも少量であり、これらの資料をもって大溝の存続時期の範囲を広げるには至らないと考えた。溝の終焉については土器類が大量に投棄されている状況がみられたため、人為的に埋め戻されたものと考えられる。

遺構の性格については微高地を完全に断ち切って、移動を遮断すると共に、かつては今以上に深く、幅も広がったと考えられるため、集落を区画する溝で、防衛の役割も担っていた可能性がある。また、このほかに、丹塗りや黒塗り、底部穿孔を施した土器などが出土しており、祭祀的な行為が行われた可能性もあるが、これは隣接するⅣ区との関係があるため、当該区の報告が行われた後にまとめたい。

掘立柱建物 5棟ほどが確認されており、時期は2号建物のみが遺物がなく不明である。しかし、この建物は1号建物と重複しており、切り合い関係から先行していることがわかるため、弥生時代中期に含めてもよいと考えられる。したがって、いずれの

建物も弥生時代中期に収まると考えられ、大溝と同時に並存していた可能性がある。性格については、1、2号掘立柱建物と、3～5号掘立柱建物は大溝によって隔てられるため、異なると思われる。これが同一集落に属するのか、またはそれぞれが別々の集落に属するのかは今後の検討が必要である。

甕棺墓 いずれも弥生時代の中期後半に属すると考えられる。北側のⅠ区にある大規模な甕棺墓域からは遠く離れており、内容も小児用のみで構成されるため、墓域を異にすると考えられる。掲載した3基の甕棺の遺存状態をみると、大きな削平を受けており、下部がかろうじて残る状態であるため、周辺には削平され、失われたものがあると考えられる。

土坑 弥生時代中期と庄内期のものがある。このうち、ほぼ完形の甕を出土した4号土坑は調査区の南端にあり、潤中町遺跡に程近いので、この遺跡との関係を考える必要がある。

井戸 井戸は2基のいずれも9c後半ごろのものと思われ、2号井戸の方が若干古い感じがする。いずれも人為的に埋め戻された可能性がある。

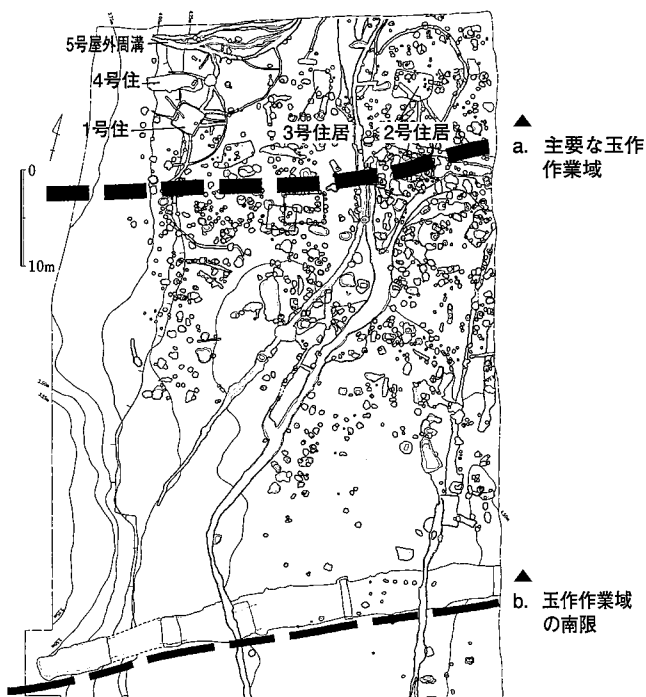
溝 溝は主に3条が南北方向に走るが、このうち時期が確定できるのは2号溝で、6c末～7c中頃のものと考えられる。他の2本は時期を決定できる良い資料に恵まれないが、掘削された状態をみると2号溝とほぼ同時期の可能性がある。溝の性格については削平によって残りが悪いことに加え、規則性もあまりみられないことから不明である。

玉作関連の遺構と遺物

玉作関連の遺構としては竪穴住居と屋外周溝やその他の排水溝がある。時期的には弥生時代終末～古墳時代初頭の範疇に入る。この遺構のうち、4号住居とこの屋外周溝は1号住居や5号屋外周溝と重複関係にあり、切り合い状況からいずれよりも古いことがわかる。これに対して、遺物の内容をみると5号屋外周溝出土遺物をもっとも古い要素を含んでおり、矛盾を生じる。これは遺物の出土量が5号屋外

周溝において著しく勝っているためと考えられ、4号住居は先行しても差し支えないと考えられる。これにより、調査区内の玉作関連遺構は少なくとも2時期にわたることがわかる。

つづいて、玉作の作業地域であるが、全域は隣接するⅠ区やⅡ区、Ⅳ区に跨り、広大な面積に展開するものと思われる。したがって、この場では全体については未だ述べることができないが、本調査区内に作業域の南限があると考えられるため、これについて述べたい。まず遺構についてみると、2号住居の屋外周溝の南端から1号住居と切り合う溝の南端を結んだ線がはっきりとした南限として確認できる(第131図-a)。しかしながら、この南側の大溝内からも流れ込みと考えられる碧玉片や工具類が出土していることから、全体としては大溝付近のラインまで広がる可能性がある(第131図-b)。一方、出土遺物の内容や量をみると碧玉や水晶などの石材や砥石などの工具類が多く出土するのは先述したaのラインよりも北であり、とくに5号屋外周溝周辺では多い。以上のことから、広範囲な作業域としては大溝の付近までが含まれ、主要な作業域としては2号住居と1号住居の付近までと考えられる。



第131図 Ⅲ-E区 玉作作業区域概略図

(2) Ⅲ-E区

1号溝 時期については弥生時代中期前半～後半で、須玖Ⅰ～Ⅱ式の範疇にほぼ収まると考えられる。なかには城ノ越式からの移行期にあたるものもあり、Ⅲ-E区の大溝よりも若干先行する可能性がある。遺構の性格は立地などの面からみると、周辺に当該期の遺構がほとんど存在しないため判断が難しい。一方、出土遺物をみると、胴部に窓を開けた壺、口縁部に打ち欠きのある壺や高坏、頸部を打ち欠く壺、底部に穿孔のある土器、丹塗りや黒塗りを施すものなど特殊な遺物が含まれており、何らかの祭祀行為があったと考えられる。祭祀の時期については多くの土器が一括して投棄された状態がみられたため、溝の廃絶時に行われた可能性がある。

2号溝 時期については土師Ⅲや鍋、鉢などが出土していることから中世にあたと考えられる。溝の性格については微高地を断ち切る方向に掘削されているため、堀切りの可能性が考えられる。この場合、主要な建物などの遺構は隣接する潤古屋敷遺跡内に存在すると考えられる。

井戸 8基ほど検出されており、いずれも中世に属すると考えられる。

(参考文献)

- 柳田康雄「高三潞式と西新町式土器」『弥生文化の研究 第4巻 弥生土器Ⅱ』(雄山閣出版株式会社、1987年)。
- 柳田康雄「土師器の編年—九州」『古墳時代の研究 第6巻 土師器と須恵器』(雄山閣出版株式会社、1991年)。
- 山本信夫「型式の設定と編年」『宮ノ本遺跡Ⅱ—竊跡編』(太宰府市教育委員会、1992年)。
- 宮本長二郎『日本原始古代の住居建築』(中央公論美術出版、1997年)。
- 常松幹雄「九州地方の土器」『考古資料大観 第2巻 弥生・古墳時代 土器Ⅱ』(小学館、2002年)。
- 武末純一「九州地方の土器」『考古資料大観 第1巻 弥生・古墳時代 土器Ⅰ』(小学館、2003年)。
- 高田知恵「瓢(ひさご)形土器について」『大城中筒井遺跡』(北野町教育委員会、2003年)。

表2 Ⅲ-E区 遺構一覧表

挿図	遺構名	時期	規模 (m)			備考	図版	ページ
大溝			(長さ)	(幅)	(深さ)			
9	大溝	弥生中期前半～後半	56	2.7～4.6	0.5～1.3		2、3	11、12
掘立柱建物			(平面)					
65	1号掘立柱建物	弥生中期前半～後半	1.5×1.3	2間×2間			4	86
66	2号掘立柱建物	—	4.6×4	4間×3間		1号に先行する	4	87
68	3号掘立柱建物	弥生中期前半～後半	4.1×3	2間×2間		補助柱を配置する	—	88
70	4号掘立柱建物	弥生中期前半～後半	2.9×2.5	1間×1間		3号と重複する	—	89
72	5号掘立柱建物	弥生中期前半～後半	3.5×2.8	2間×2間			4	90
甕棺墓								
73、74	1号甕棺墓	弥生中期後半	—				5、31	91
73、75	2号甕棺墓	弥生中期後半	—			1号溝に先行する	5、31	91、92
73、75	3号甕棺墓	弥生中期後半	—				5、31	91、92
土坑			(平面)			(深さ)		
76	1号土坑	—	0.61×1.33	0.15		三韓式土器出土	—	94
76	2号土坑	弥生中期後半	1.3×1.7	0.37			—	94
76	3号土坑	庄内併行期	1×1	0.34			—	94
76	4号土坑	弥生時代中期後半	1.6×1.7	0.3			—	94
77	5号土坑	弥生時代中期後半	3.7×1.8	0.88			—	95
77	6号土坑	弥生時代中期後半	4.6×1.7	0.54		杓子形土製品出土	4	95
井戸			(平面)			(深さ)		
79	1号井戸	9c 後半	1.46×1.42	1.02			—	98
81	2号井戸	9c 後半	1.3×1.3	0.89			4	99
溝			(長さ)			(幅)		
—	1号溝	—	—	0.5～0.8	0.15	2号溝と同時期か？	—	—
83	2号溝	6c 末～7c 中頃	—	0.84～1	0.15		—	101
83	3号溝	—	—	0.5～0.75	0.3	2号溝と同時期か？	—	101
玉作関連遺構			(平面)			(深さ)		
85	1号竪穴住居	古墳時代初頭	3.2×3.1	0.12～0.18		切り合い関係から4号住居より後出する。	6、7	104
87	2号竪穴住居	—	2.7×3.6	0.06			6	106
89	3号竪穴住居	古墳時代初頭	1.5×2.4	0.21			6	107
90	4号竪穴住居	弥生時代終末～古墳時代初頭	5.6×—	0.18		5号屋外周溝に切られるため、遺構自体は終末まで遡る可能性がある。	6	108
92	5号屋外周溝	弥生時代終末～古墳時代初頭	—	—			6	110

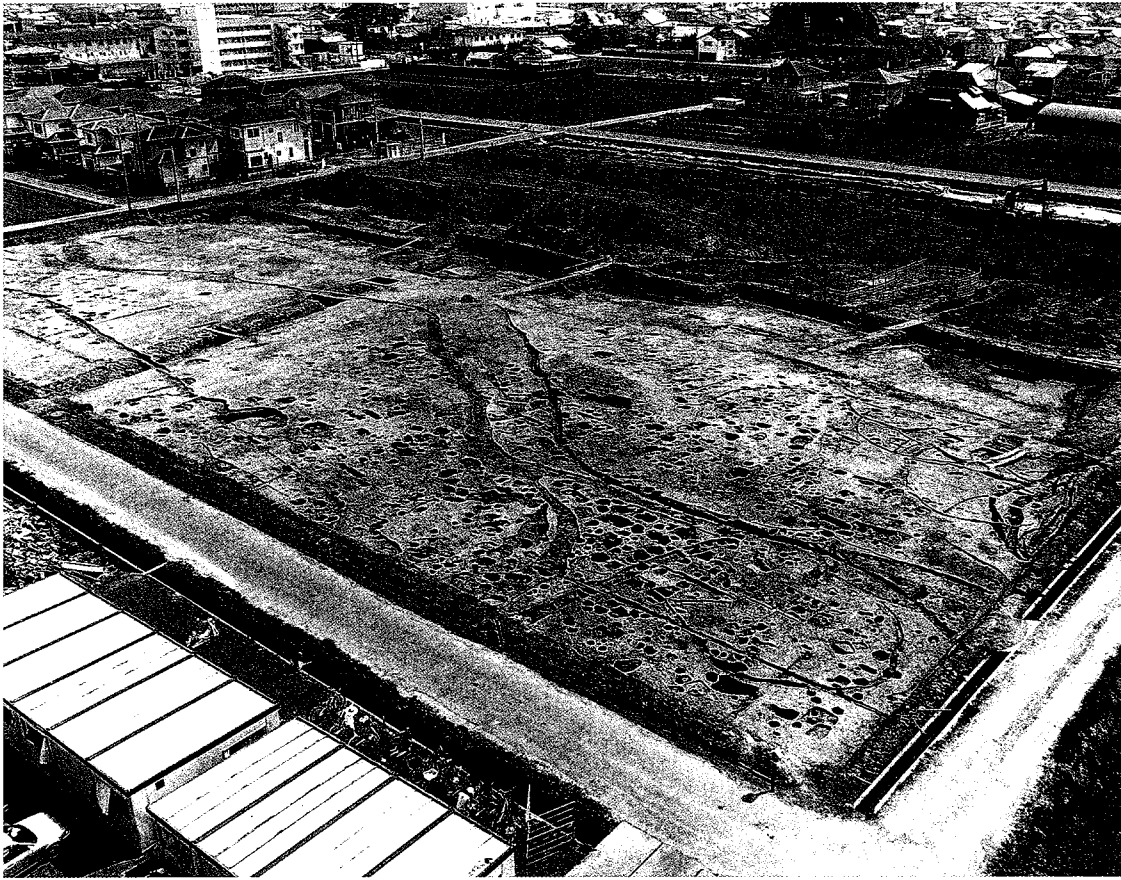
表3 Ⅲ-W区 遺構一覧表

挿図	遺構名	時期	規模 (m)			備考	図版	ページ
溝			(長さ)	(幅)	(深さ)			
105	1号溝	弥生中期前半～後半	—	0.8～1.5	0.25～0.5		41	127
129	2号溝	中世 (14～16c 頃)	—	1.3～2	0.43～0.54		—	152
掘立柱建物			(平面)					
123	1号掘立柱建物	中世 (14c 以降か?)	3.8×3.5	2間×2間		遺物による時期決定は困難	—	146
井戸			(平面)			(深さ)		
124	1号井戸	中世 (14～15c 頃)	2.3×2.3	1.3		須恵器は混入か	—	148
124	2号井戸	—	1.1×0.9	1			—	148
124	3号井戸	中世 (15～16c 頃)	1.8×1.2	1.2+α			—	148
124	4号井戸	中世 (14c 後半頃)	3.8×3.8	1.8			41	148
125	5号井戸	—	2×—	1.4			—	149
125	6号井戸	中世 (15～16c 頃)	1.3×1.3	1.3			—	149
125	7号井戸	中世 (16c 頃)	2.5×—	1.6			—	149
125	8号井戸	中世 (16c 頃)	2.5×—	1.9+α			—	149

圖 版



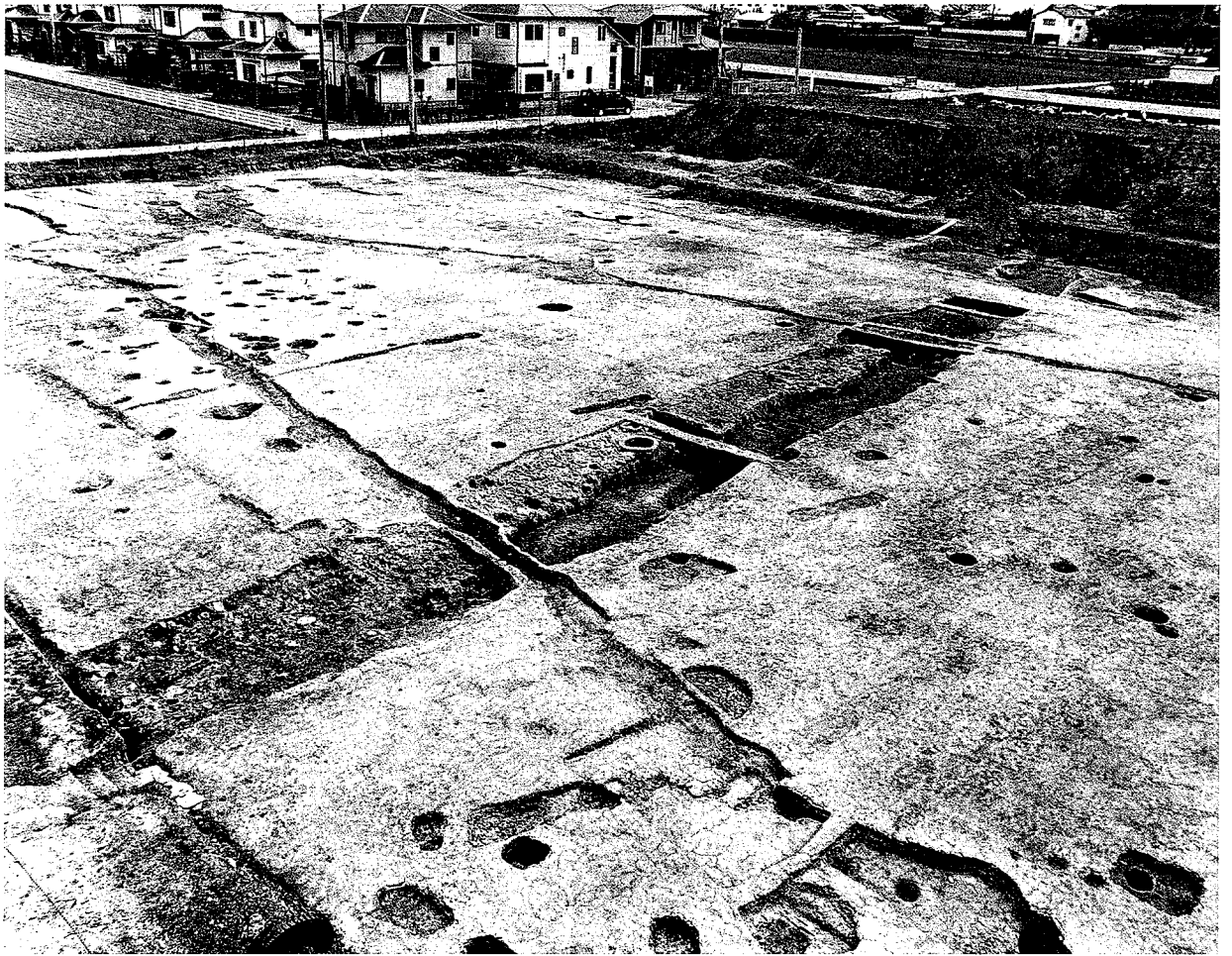
潤地頭給遺跡から南の三雲・井原遺跡方面を望む



a. 潤地頭給遺跡 Ⅲ区 全景 (北東から)



b. 潤地頭給遺跡 Ⅲ-E区 全景 (南から)



a. Ⅲ-E区 大溝検出状況（北東から）



c. Ⅲ-E区 大溝I区東側土層断面（西から）

b. Ⅲ-E区 大溝A、B区上層 遺物出土状況（東から）



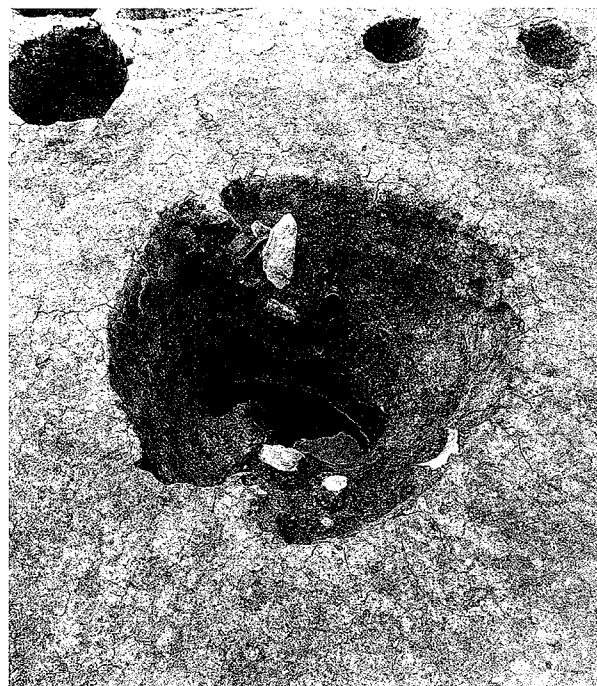
a. Ⅲ-E 区
大溝 C 区遺物出土状況 (北から)



b. Ⅲ-E 区
大溝 G 区遺物出土状況 (北から)



c. Ⅲ-E 区
大溝 E 区遺物出土状況 (北から)



b. Ⅲ-E区 2号井戸

a. Ⅲ-E区 1号および2号掘立柱建物(東から)

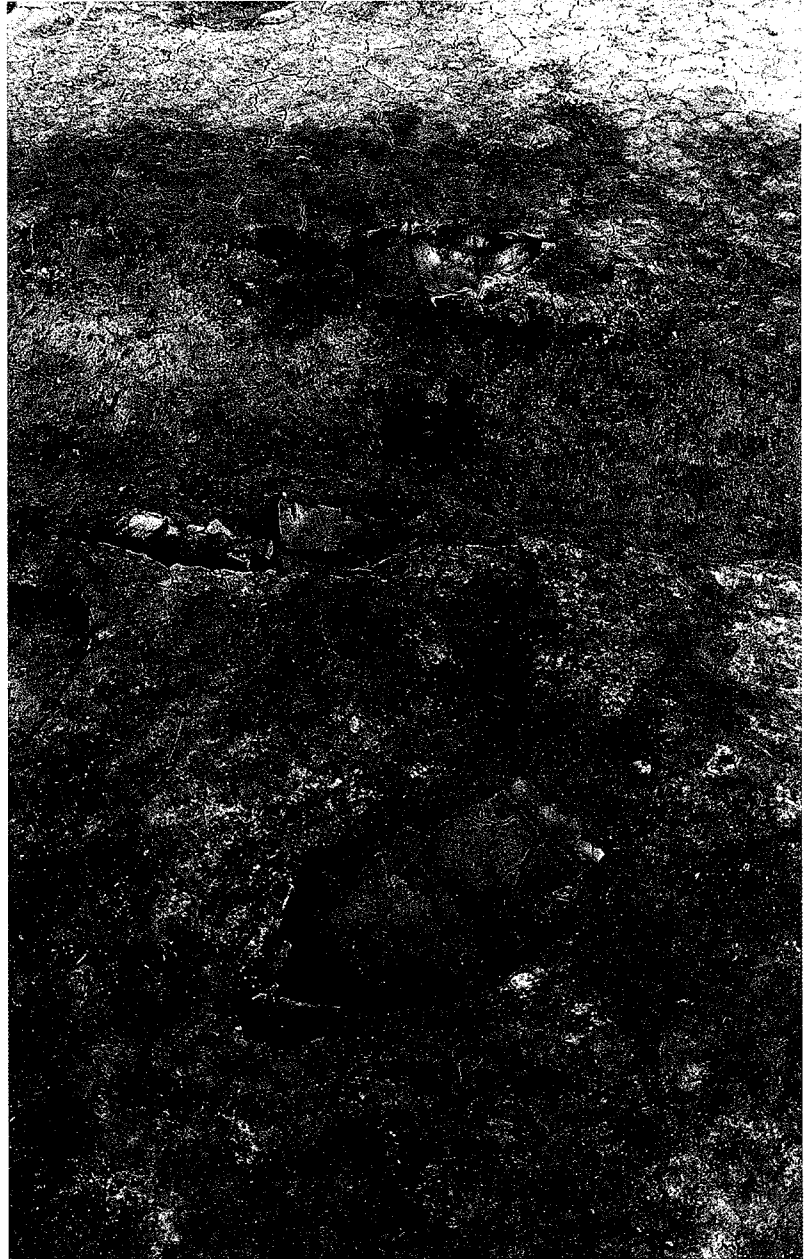


d. Ⅲ-E区 6号土坑 杓子形土製品出土状況

c. Ⅲ-E区 5号掘立柱建物(東から)



b. III-E区 1号甕棺墓検出状況



a. III-E区 甕棺墓全景（西から）



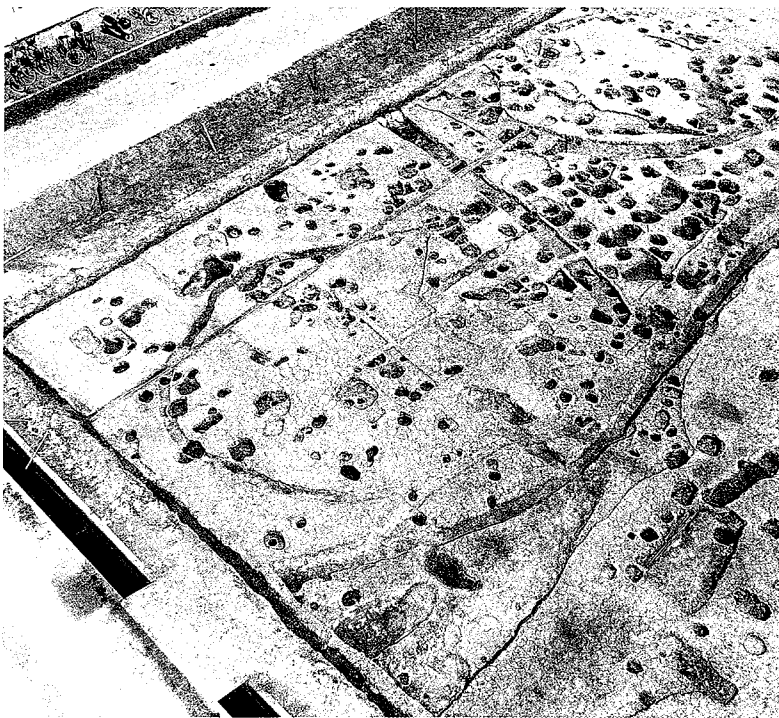
c. III-E区 3号甕棺墓検出状況



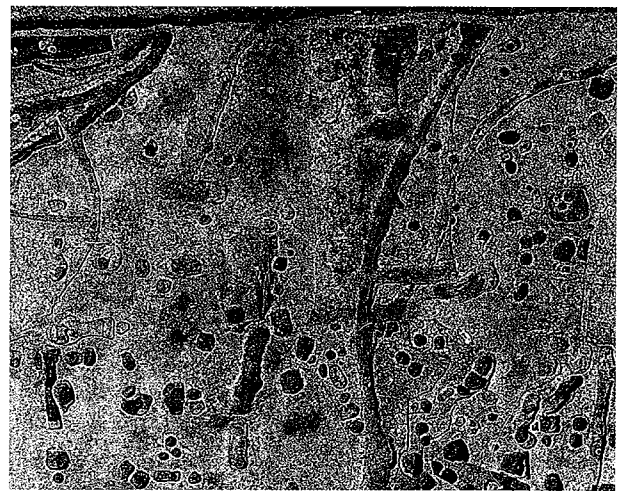
d. III-E区 2号甕棺墓検出状況



a. Ⅲ-E区 1号、4号堅穴住居および5号屋外周溝検出状況（西から）



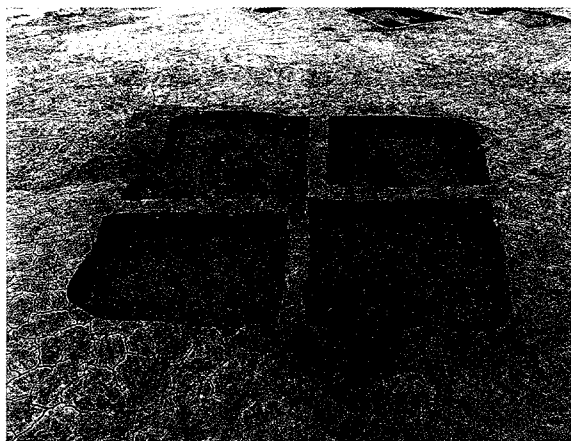
b. Ⅲ-E区 2号堅穴住居検出状況（北西から）



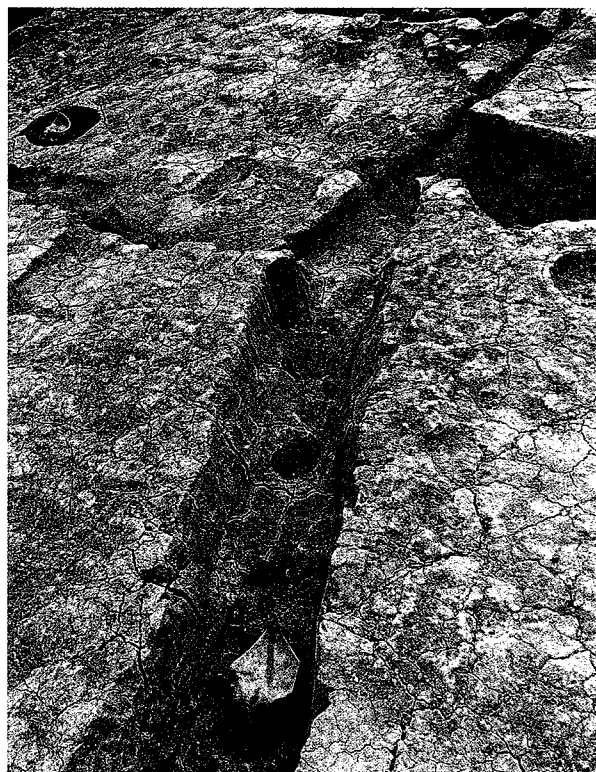
c. Ⅲ-E区 3号堅穴住居検出状況（南から）



a. Ⅲ-E区 1号堅穴住居近景（北東から）



b. Ⅲ-E区 1号堅穴住居床面検出状況（西から）



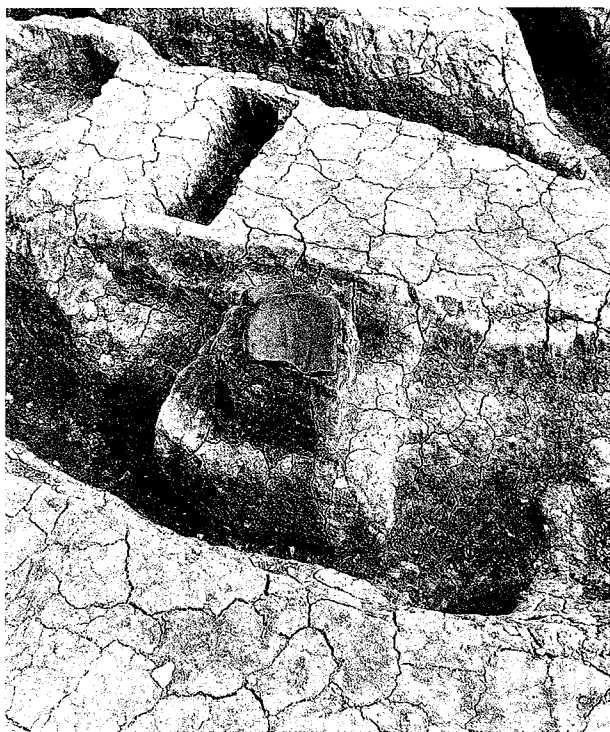
c. Ⅲ-E区 1号堅穴住居屋外排水溝（東から）



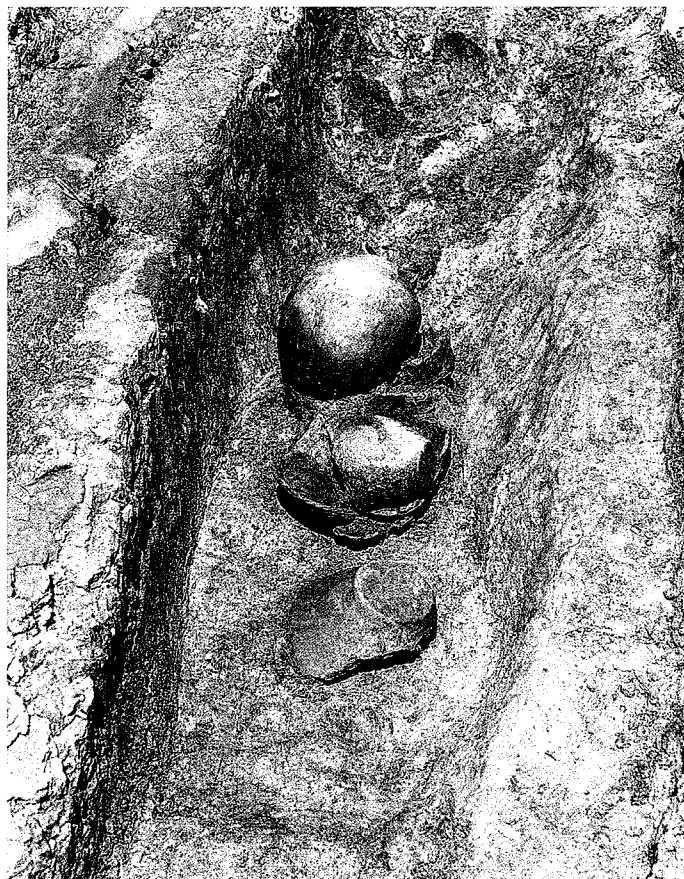
d. Ⅲ-E区 1号堅穴住居屋外排水溝 筋砥石出土状況



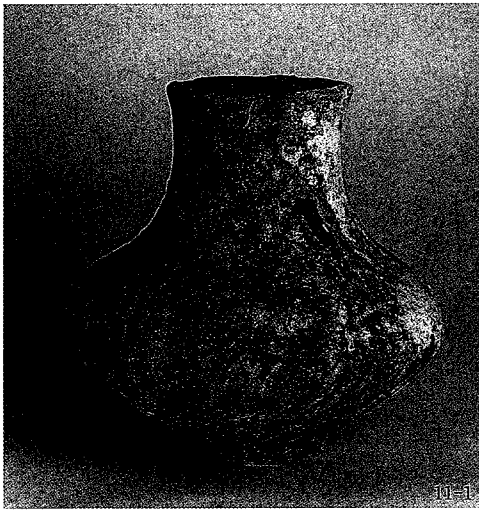
a. Ⅲ-E区 5号屋外周溝 筋砥石出土状況 (西から)



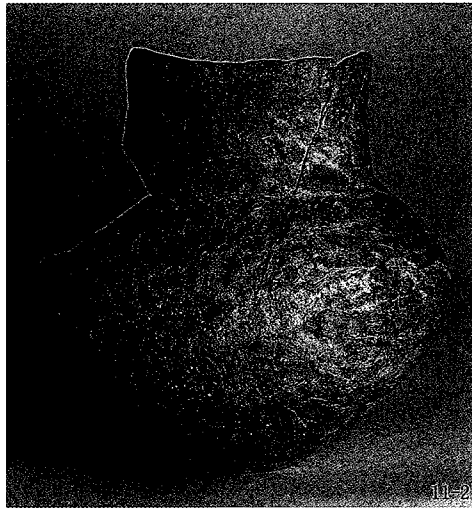
b. Ⅲ-E区 5号屋外周溝 筋砥石出土状況



c. Ⅲ-E区 5号屋外周溝 遺物出土状況



10-1



10-2



11-3



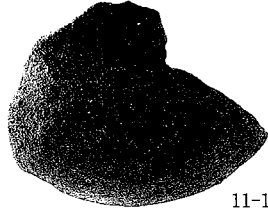
11-7



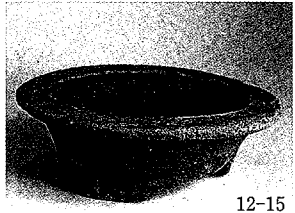
11-11



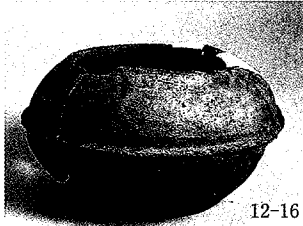
11-9



11-12



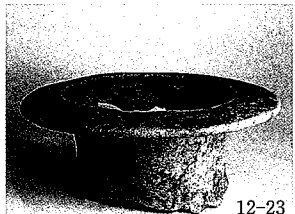
12-15



12-16



12-17



12-23



12-25



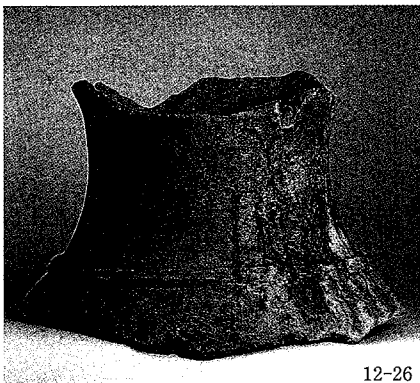
12-24



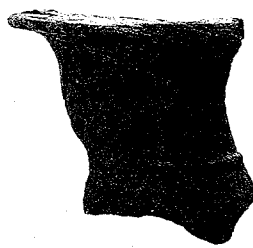
12-28



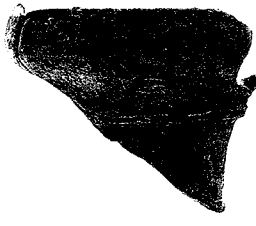
12-30



12-26



12-27



13-32



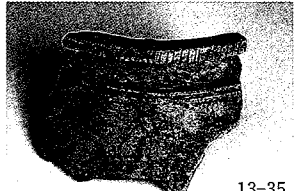
13-34



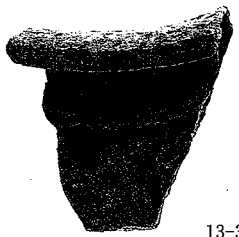
13-31



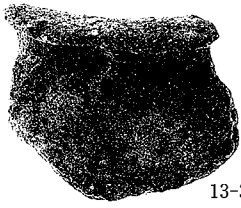
13-33



13-35



13-36



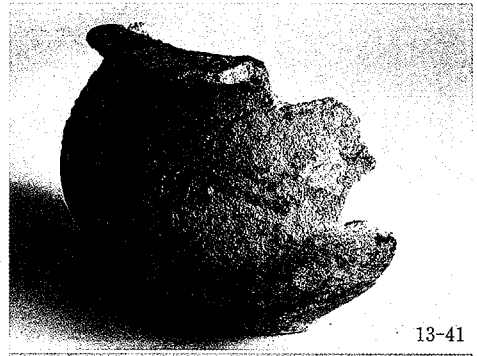
13-38



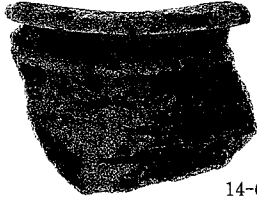
14-47



14-49



13-41



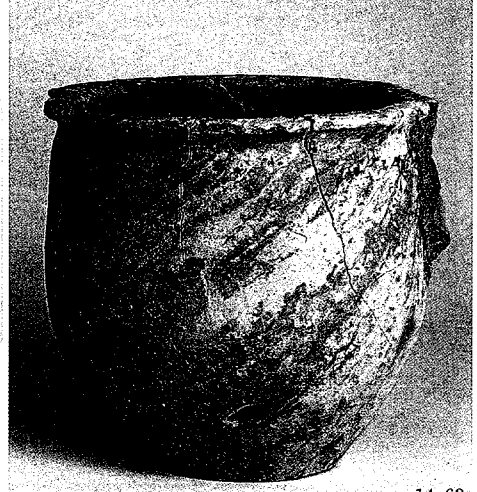
14-62



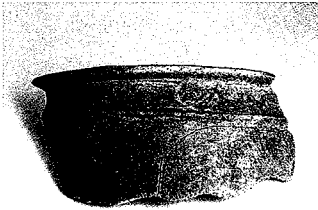
14-66



15-68



14-63



15-76



16-84



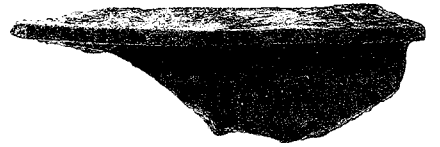
16-85



17-94



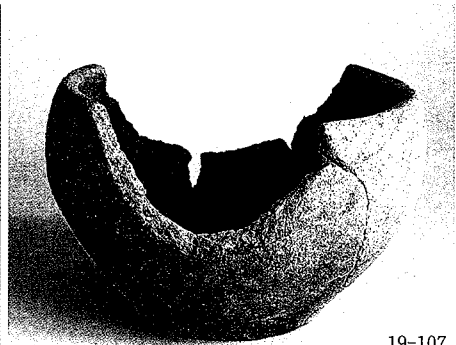
17-95



16-90



19-105



19-107



19-118



19-113



17-96

Ⅲ-E区 大溝A区上層出土遺物2



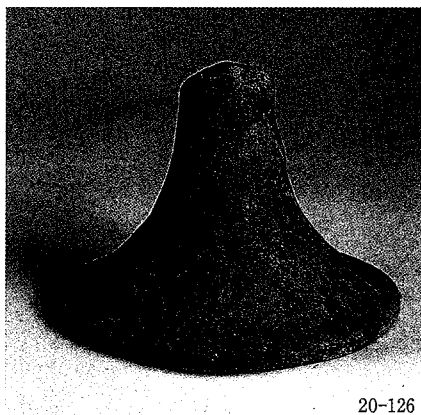
20-121



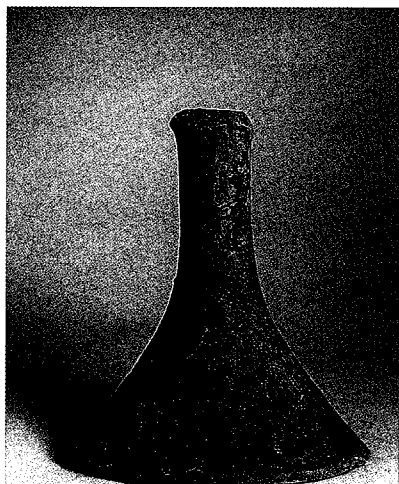
20-123



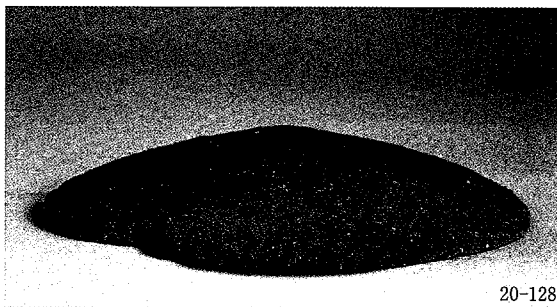
20-122



20-126



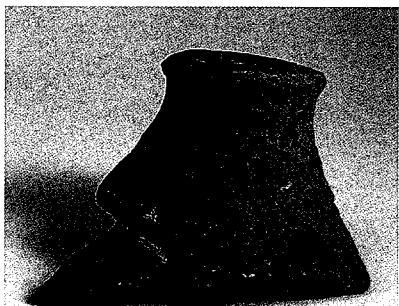
20-124



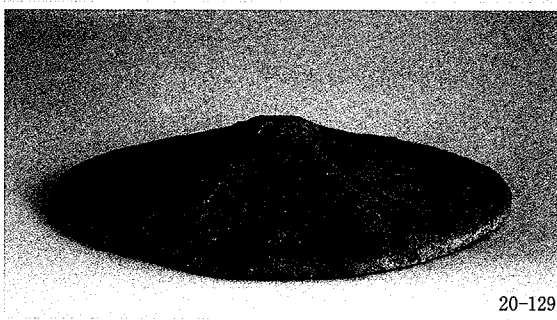
20-128



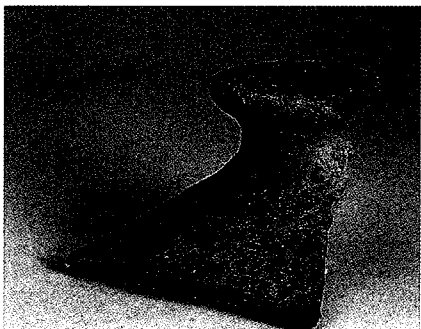
20-131



20-133



20-129



20-132



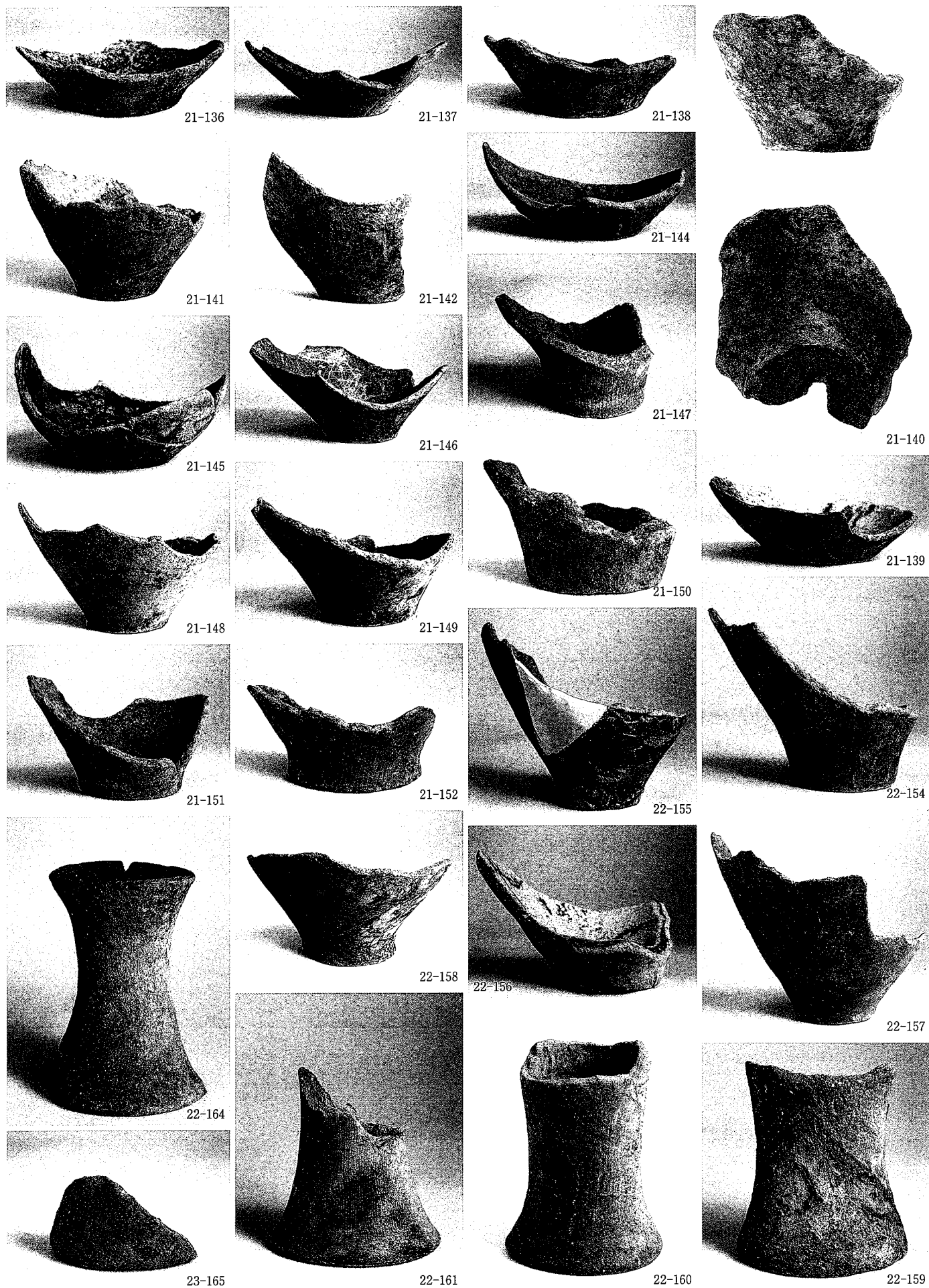
20-130

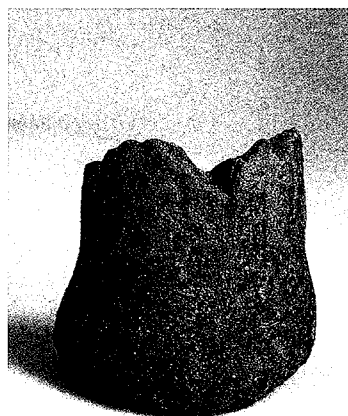


20-135

Ⅲ-E区 大溝A区上層出土遺物3

20-134





23-166



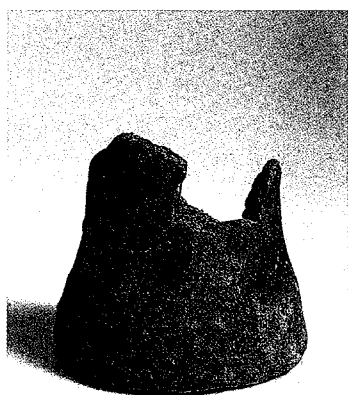
23-167



23-168



23-169



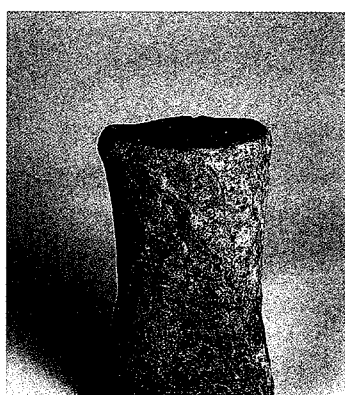
23-166



23-171



23-172



23-173



23-174



23-175



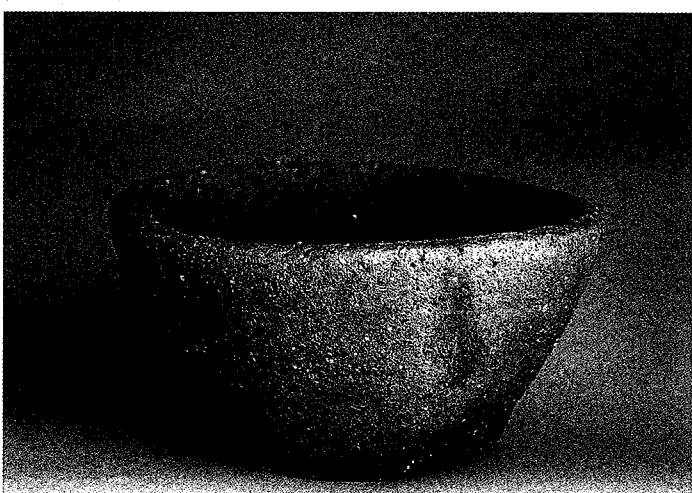
23-176



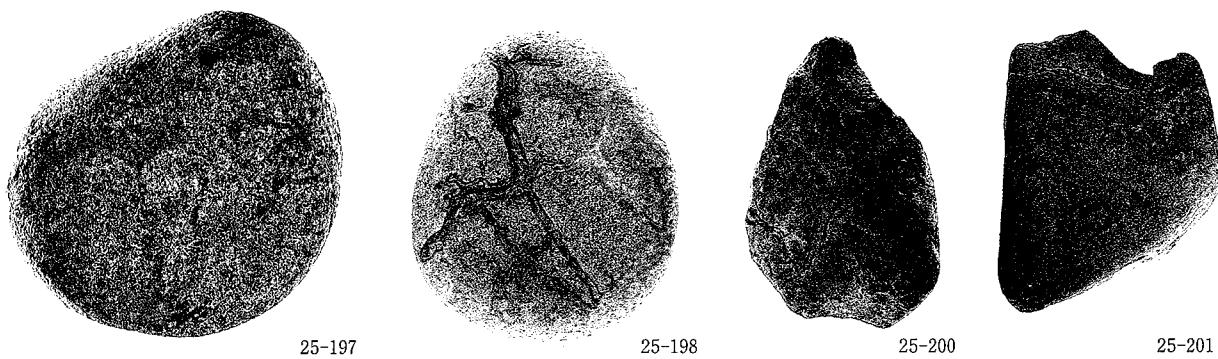
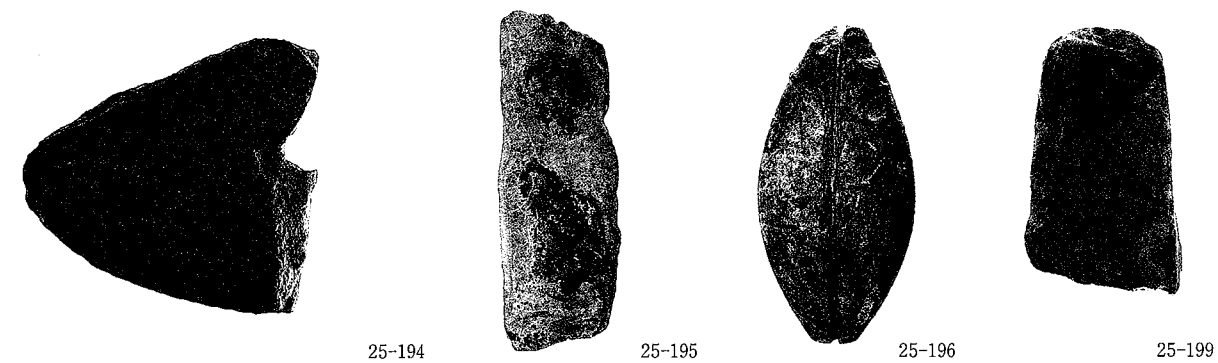
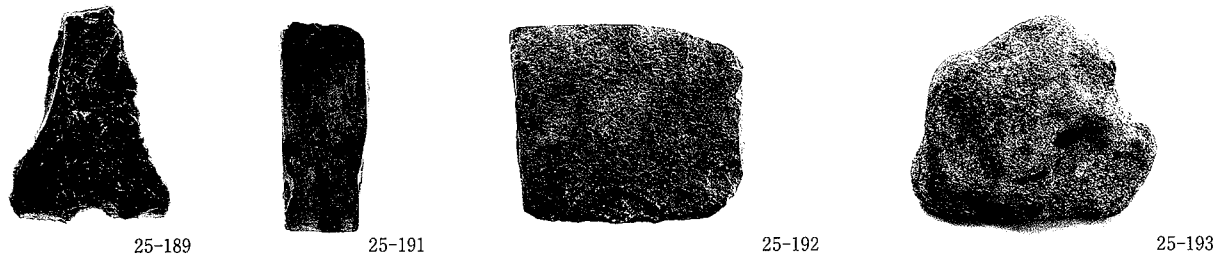
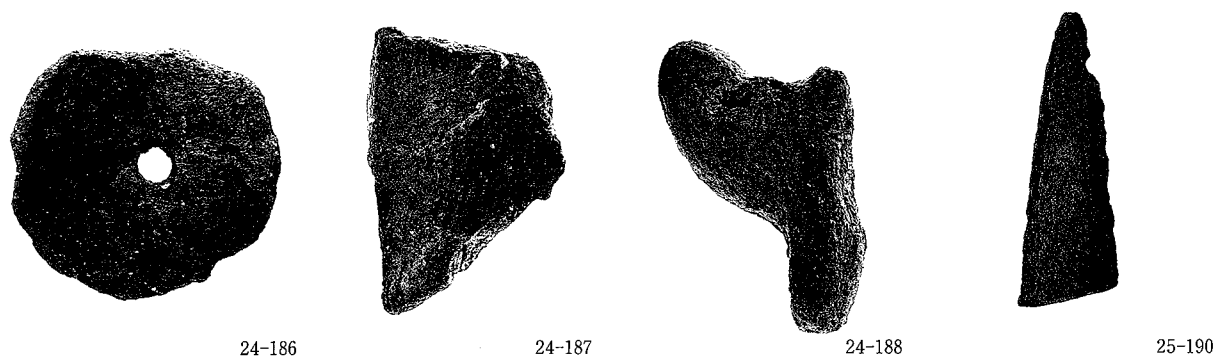
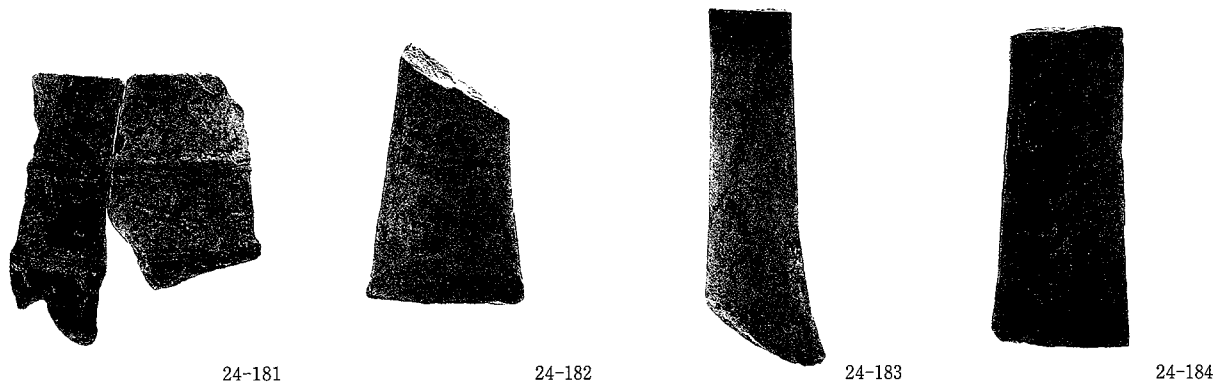
23-177

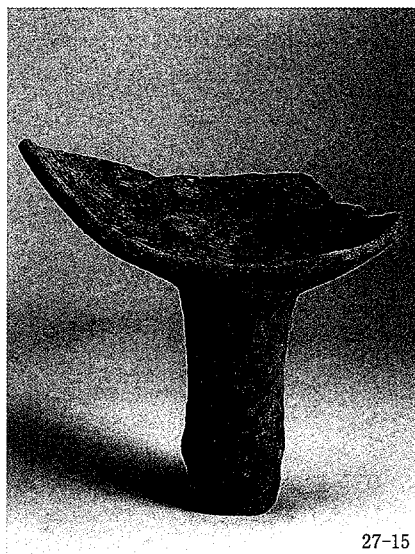


23-178

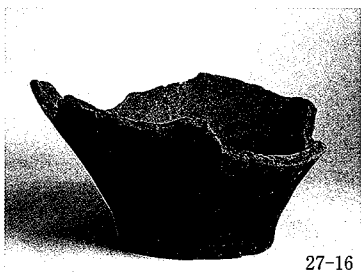


23-179

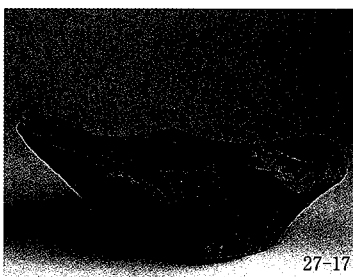




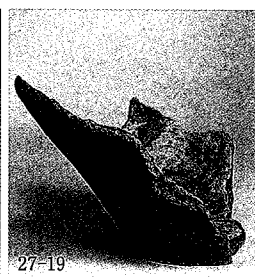
27-15



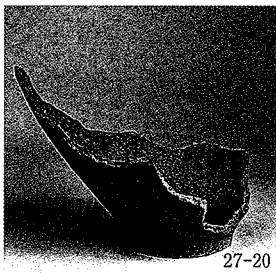
27-16



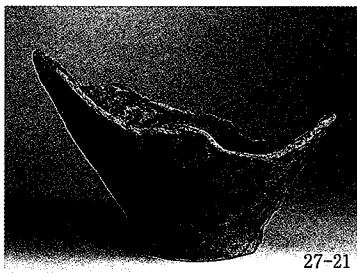
27-17



27-19



27-20



27-21

a. III-E 区
大溝 A 区下層出土遺物



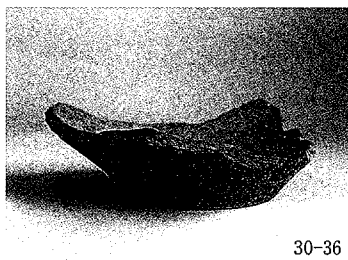
30-33



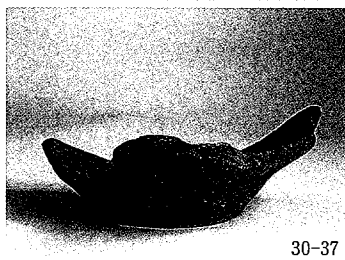
30-34



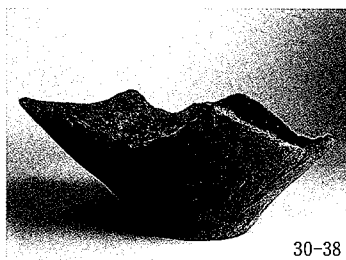
30-35



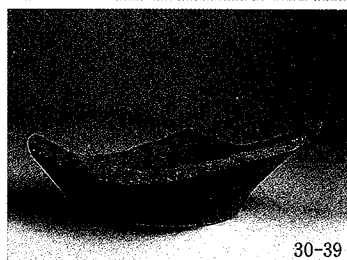
30-36



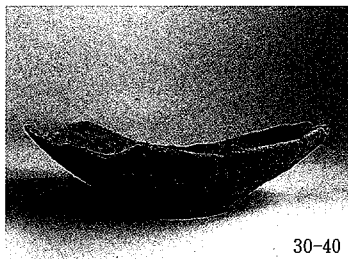
30-37



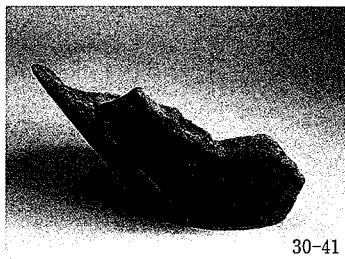
30-38



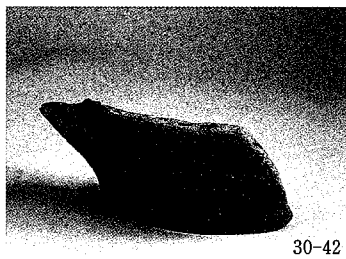
30-39



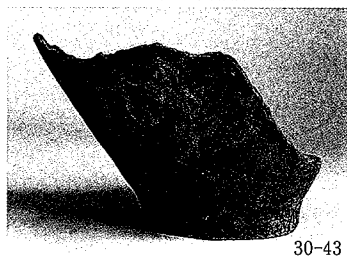
30-40



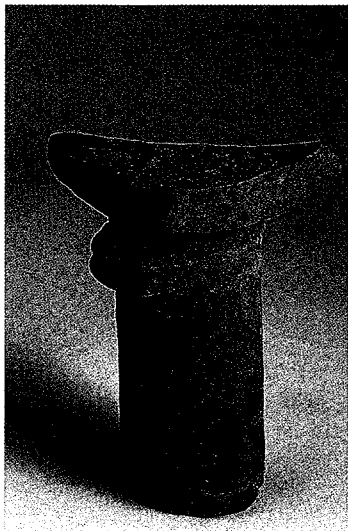
30-41



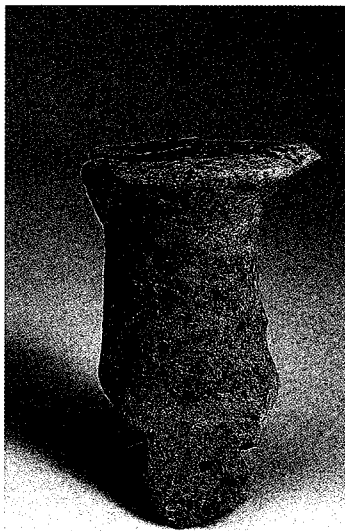
30-42



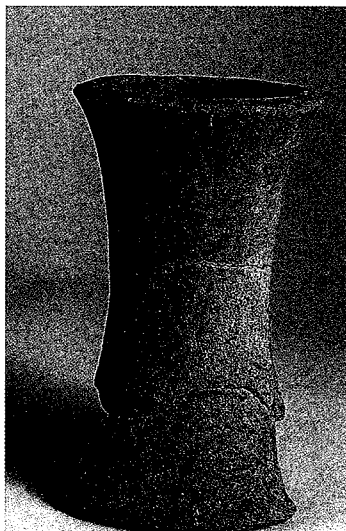
30-43



29-30



29-31



30-46

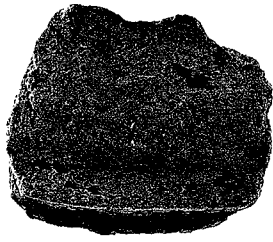


30-49

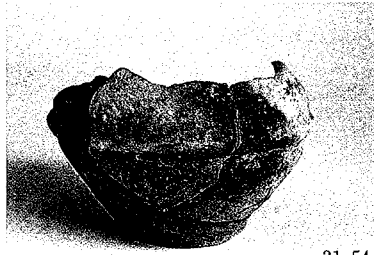
b. III-E 区
大溝 B 区上層出土遺物 1



31-59



31-53



31-54



31-55

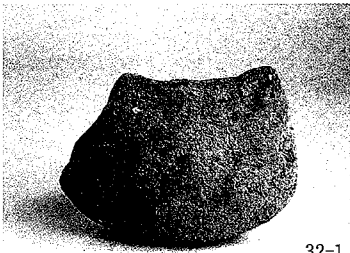


31-60



31-57

a. III-E 区
大沟 B 区上层出土遗物 2



32-1



32-12



32-5



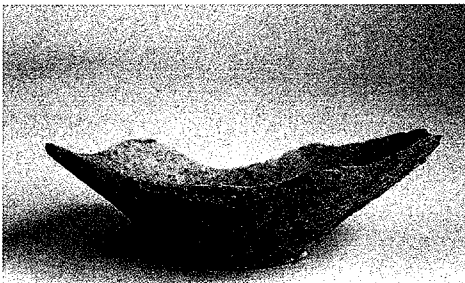
32-13



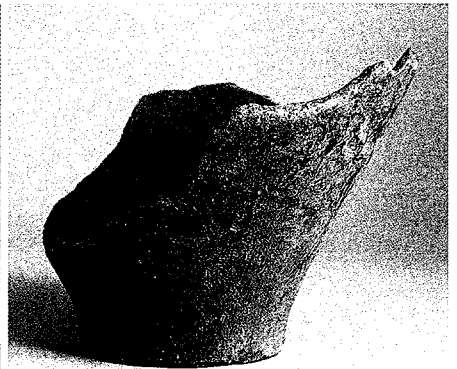
32-14



33-20



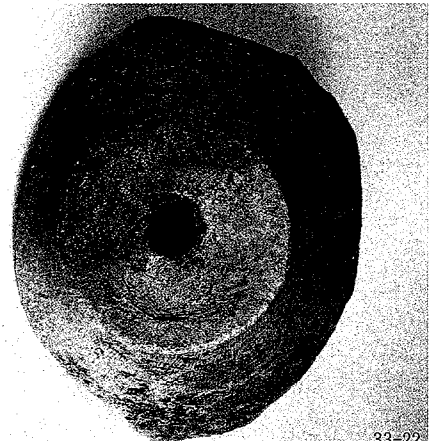
33-21



33-24

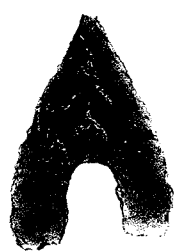


33-25



33-22

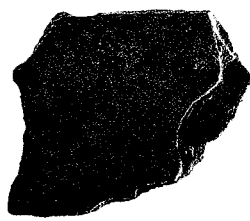
b. III-E 区 大沟 C 区上层出土遗物 1



34-27



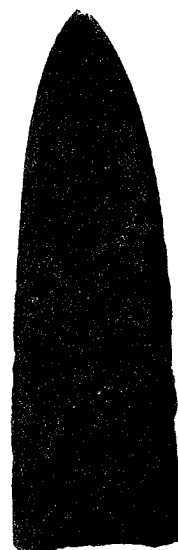
34-28



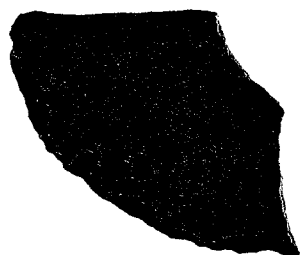
34-29



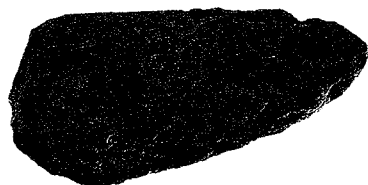
34-30



34-32



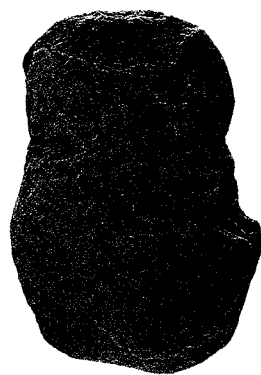
34-31



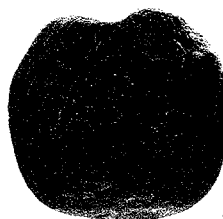
34-33



34-34



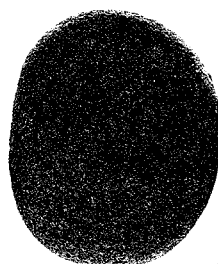
34-35



34-36



34-38



34-37



34-39

a. III-E 区 大溝 C 区上層出土遺物 2



35-10

b. III-E 区 大溝 C 区下層出土遺物 1



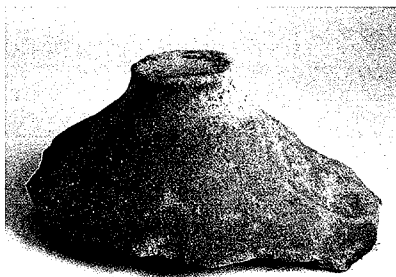
36-20



36-24



36-25



36-26



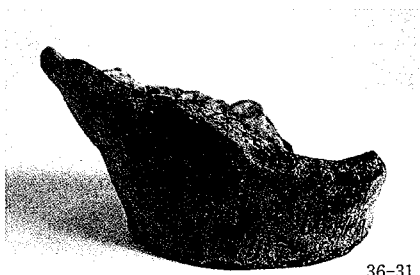
36-28



36-27



36-29



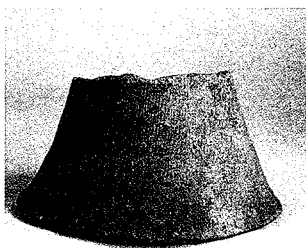
36-31



36-32



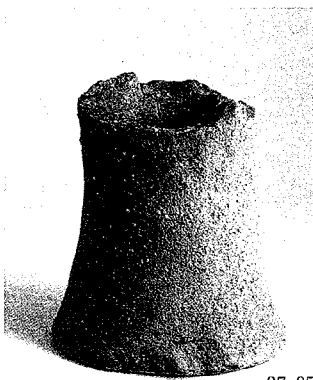
36-33



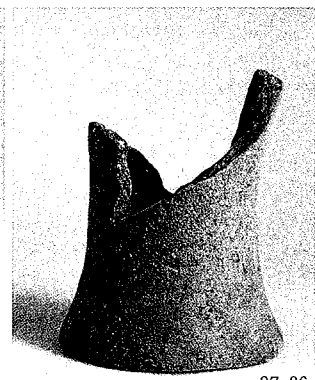
37-37



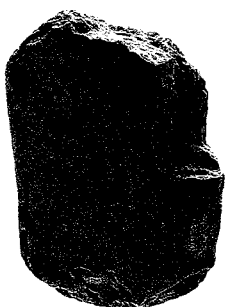
37-34



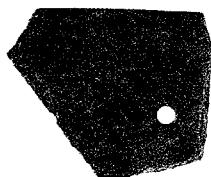
37-35



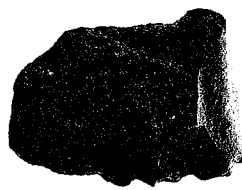
37-36



37-40



37-38

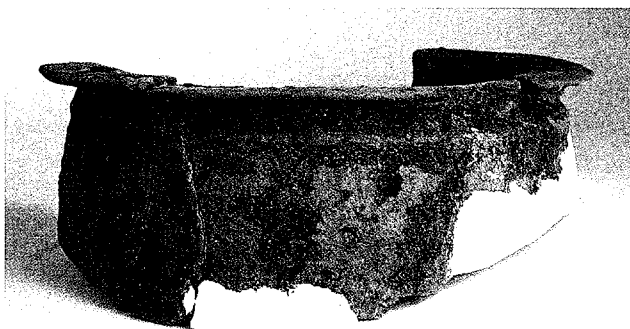


37-39

a. III-E 区
大溝 C 区下層出土遺物 2

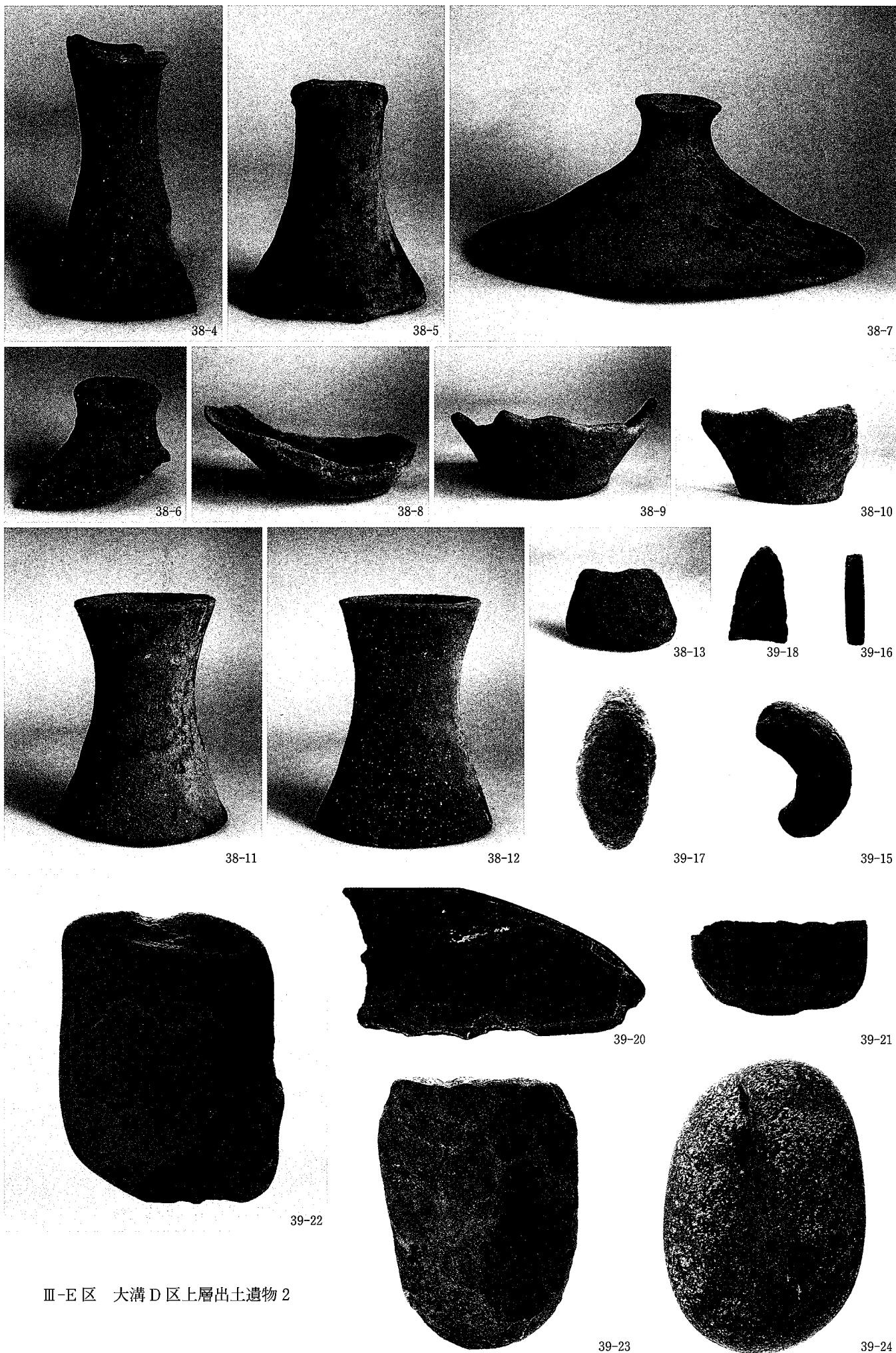


38-1

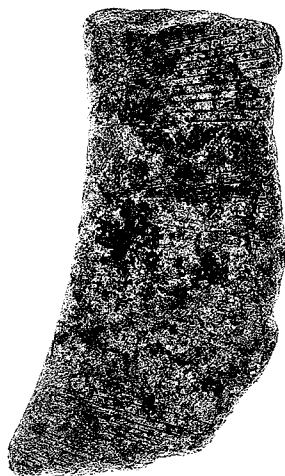


38-3

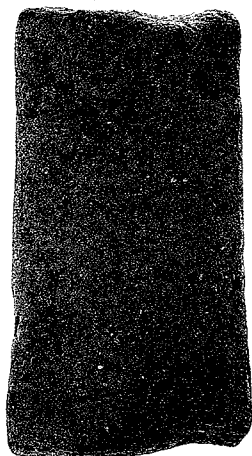
b. III-E 区 大溝 D 区上層出土遺物 1



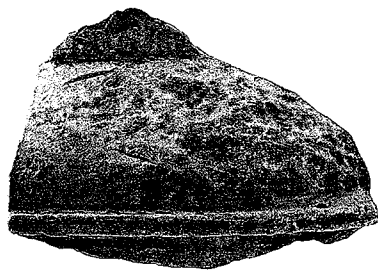
Ⅲ-E区 大溝D区上層出土遺物 2



40-3



40-5



40-2



40-6



40-7



40-8



40-11



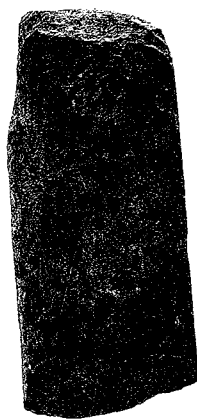
40-9



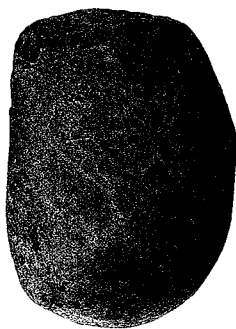
40-12



40-13



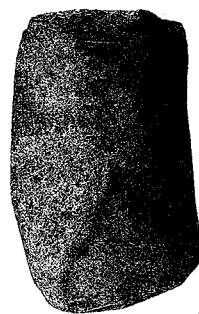
41-15



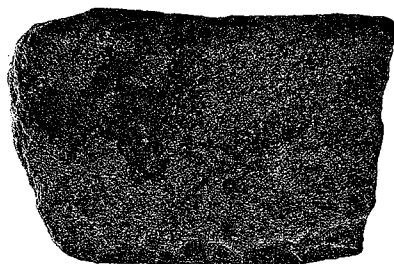
41-17



41-18



41-19

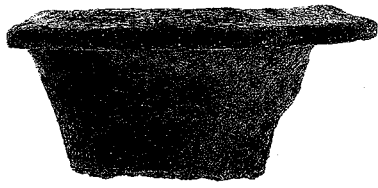


41-16



41-20

Ⅲ-E区
大溝D区中層出土遺物



42-6



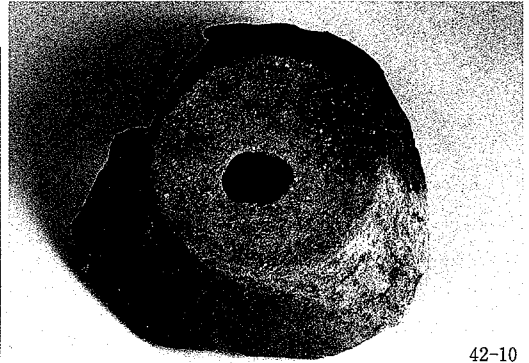
42-9



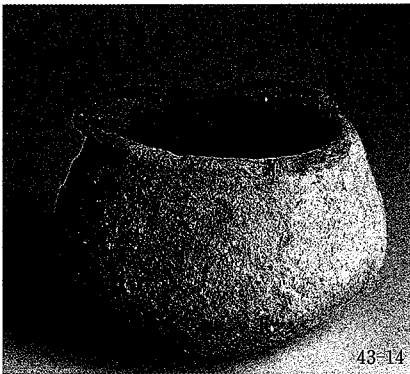
42-12



42-13



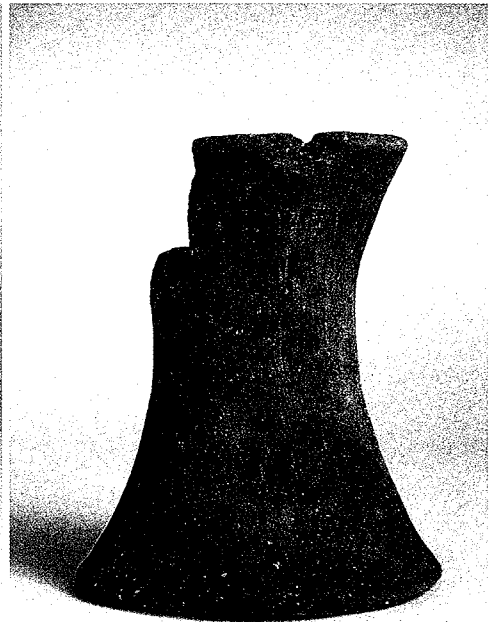
42-10



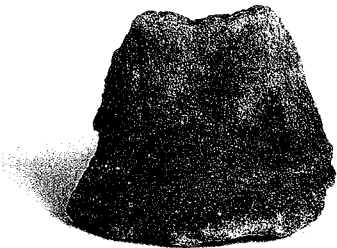
43-14



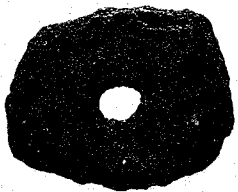
43-16



43-17



43-15



43-18



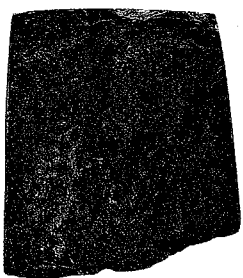
44-19



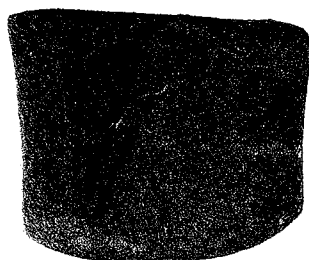
44-20



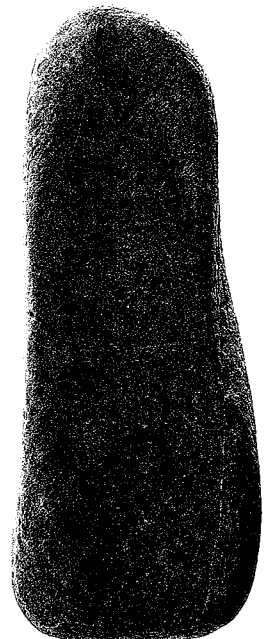
44-23



44-21



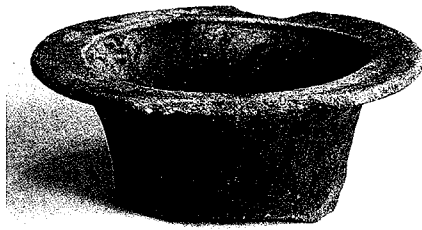
44-24



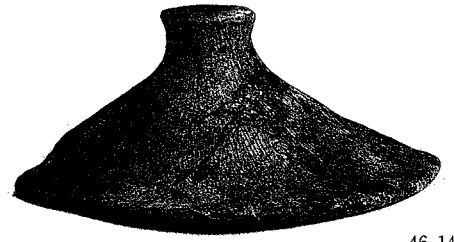
44-25



45-2



45-4



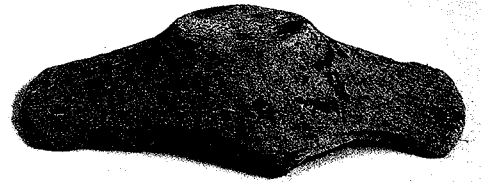
46-14



45-5



45-13



46-17



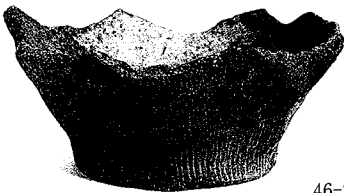
46-19



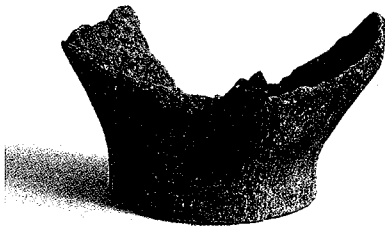
46-20



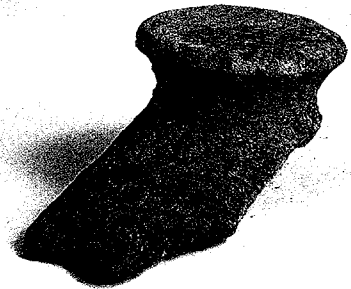
46-15



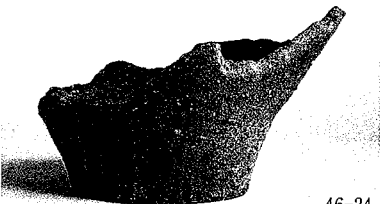
46-22



46-21



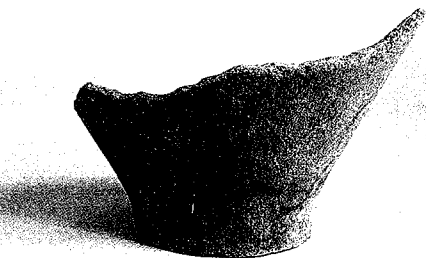
46-16



46-24



46-27



46-25



46-23



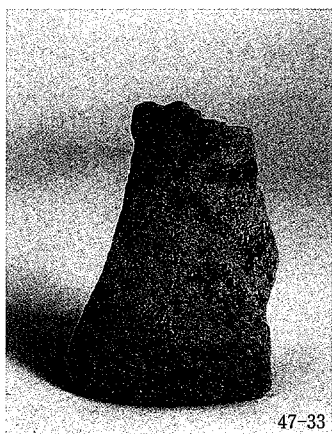
46-31



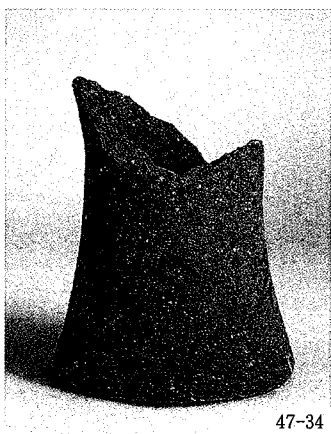
46-32



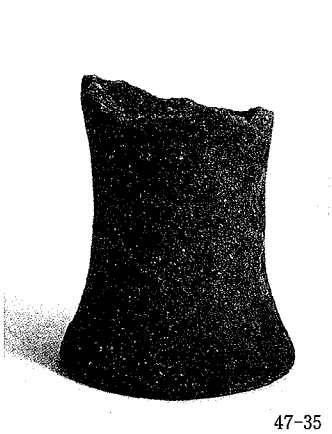
46-26



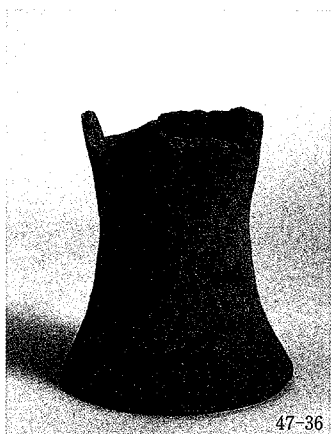
47-33



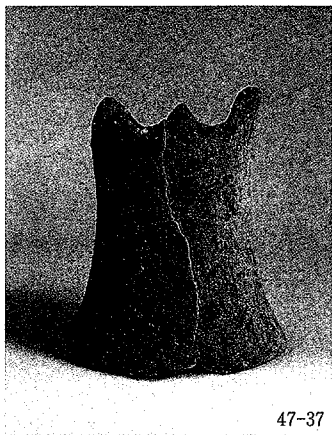
47-34



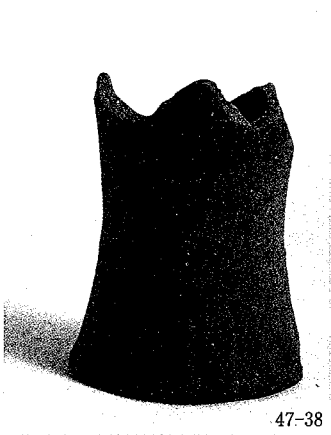
47-35



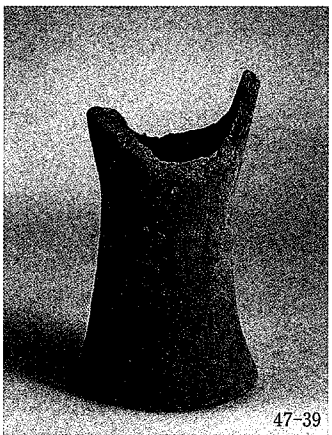
47-36



47-37



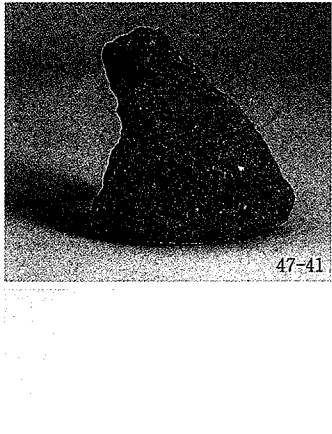
47-38



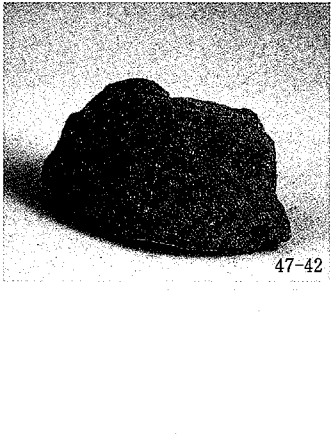
47-39



47-40



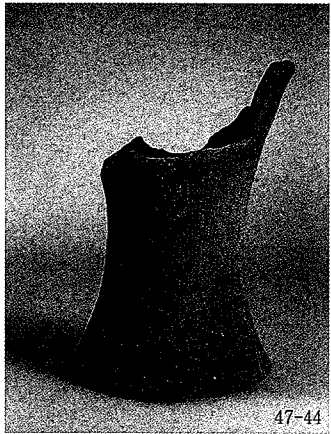
47-41



47-42



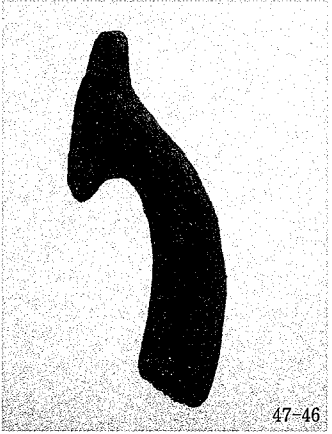
47-43



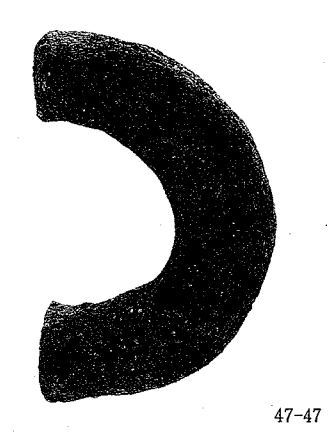
47-44



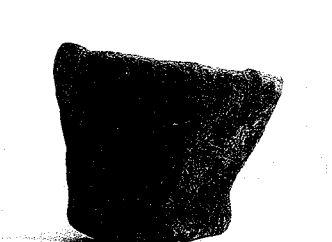
47-45



47-46

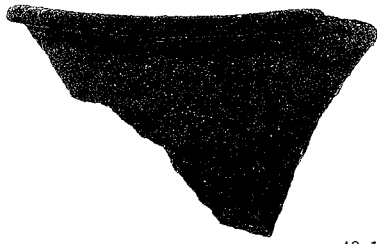


47-47



47-48

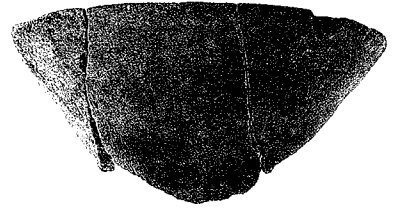
Ⅲ-E 区
大溝 F 区上層出土遺物 2



48-10



49-18



50-23



50-27



50-28



50-30



50-33



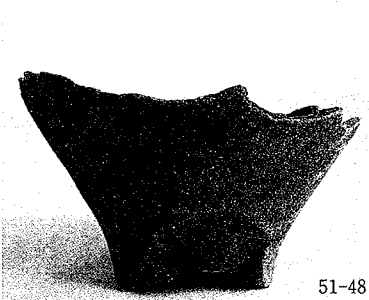
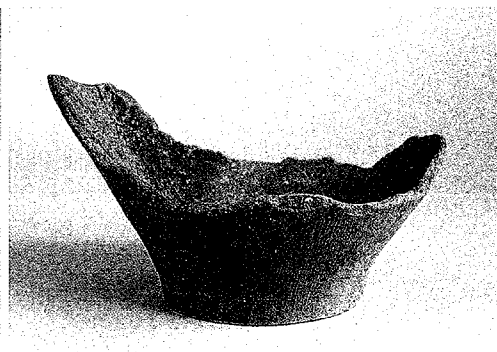
50-34



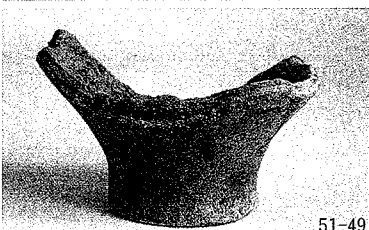
50-32



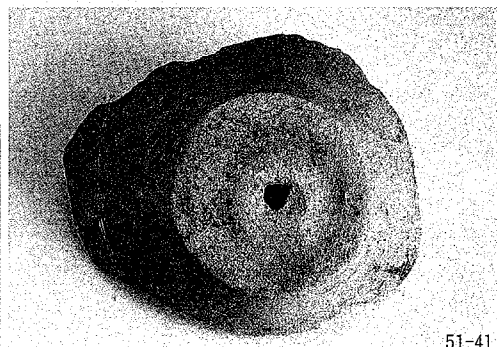
51-35



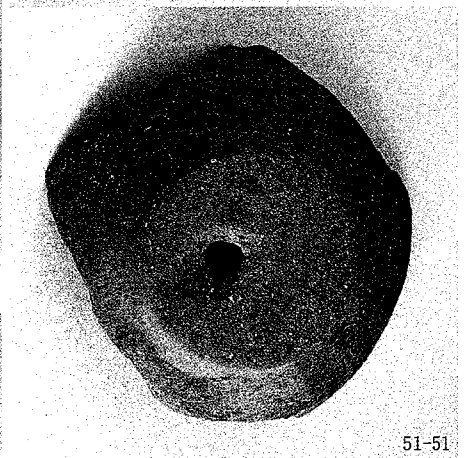
51-48



51-49



51-41



51-51

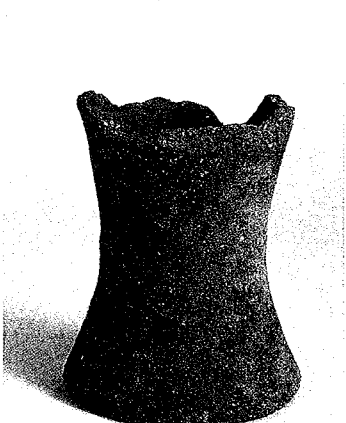
Ⅲ-E 区
大溝 G 区上層出土遺物 1



52-52



52-53



52-54



52-55



52-56



52-57



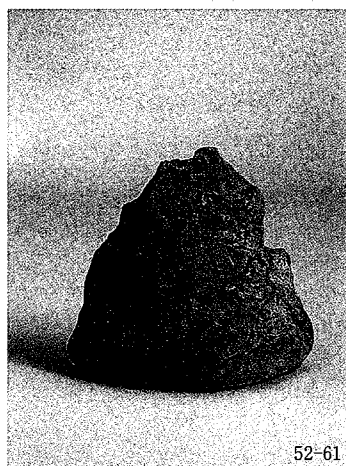
52-58



52-59



52-60



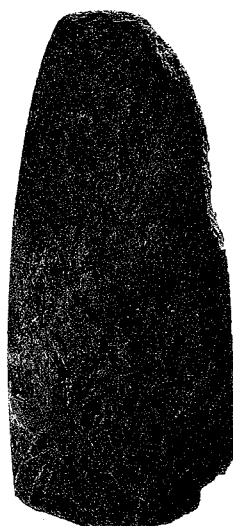
52-61



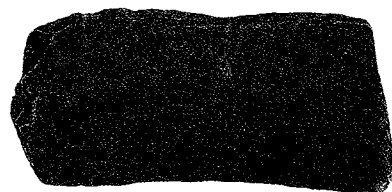
52-62



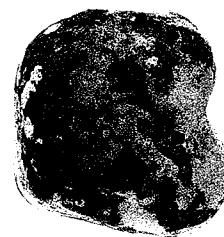
53-64



53-66

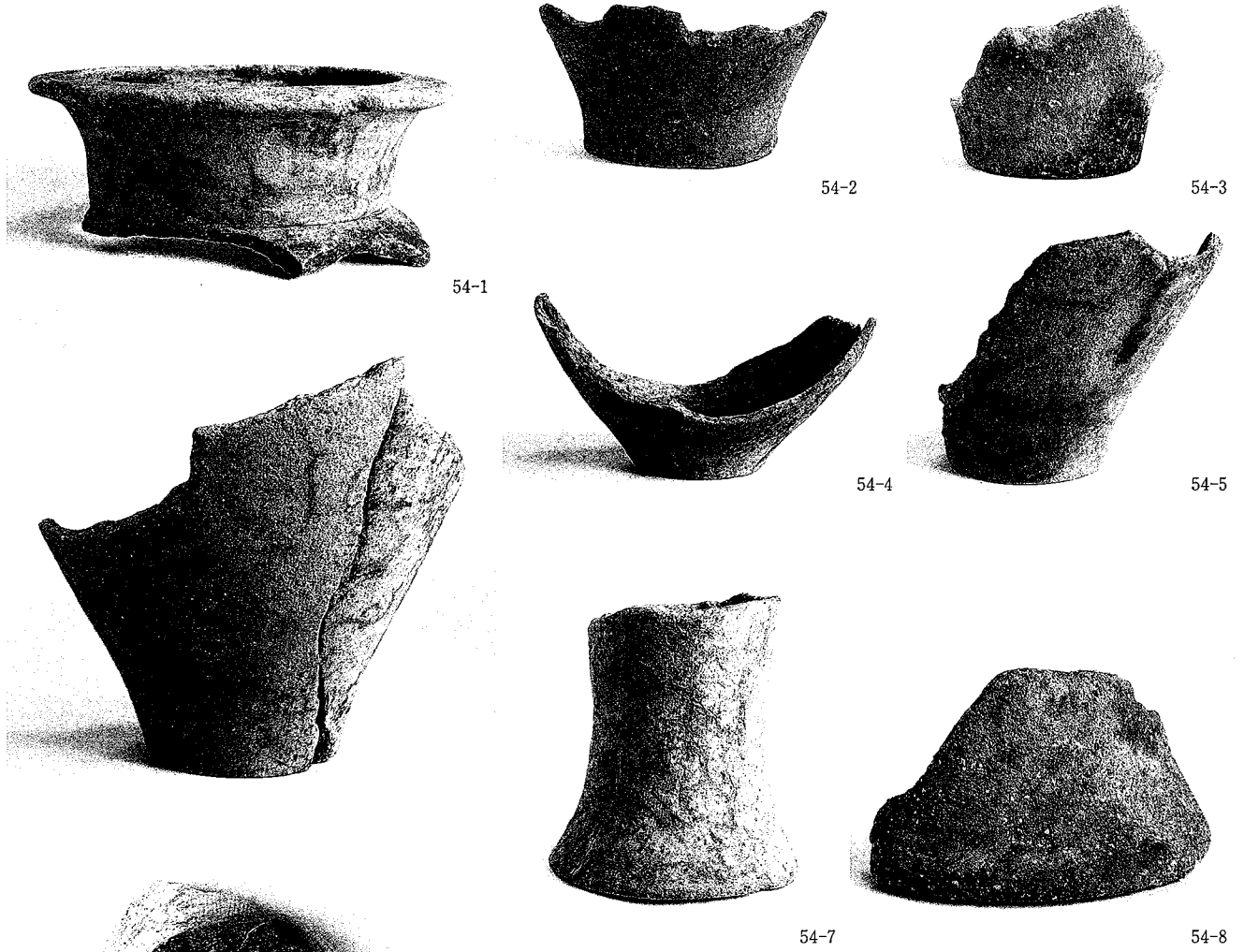


53-63



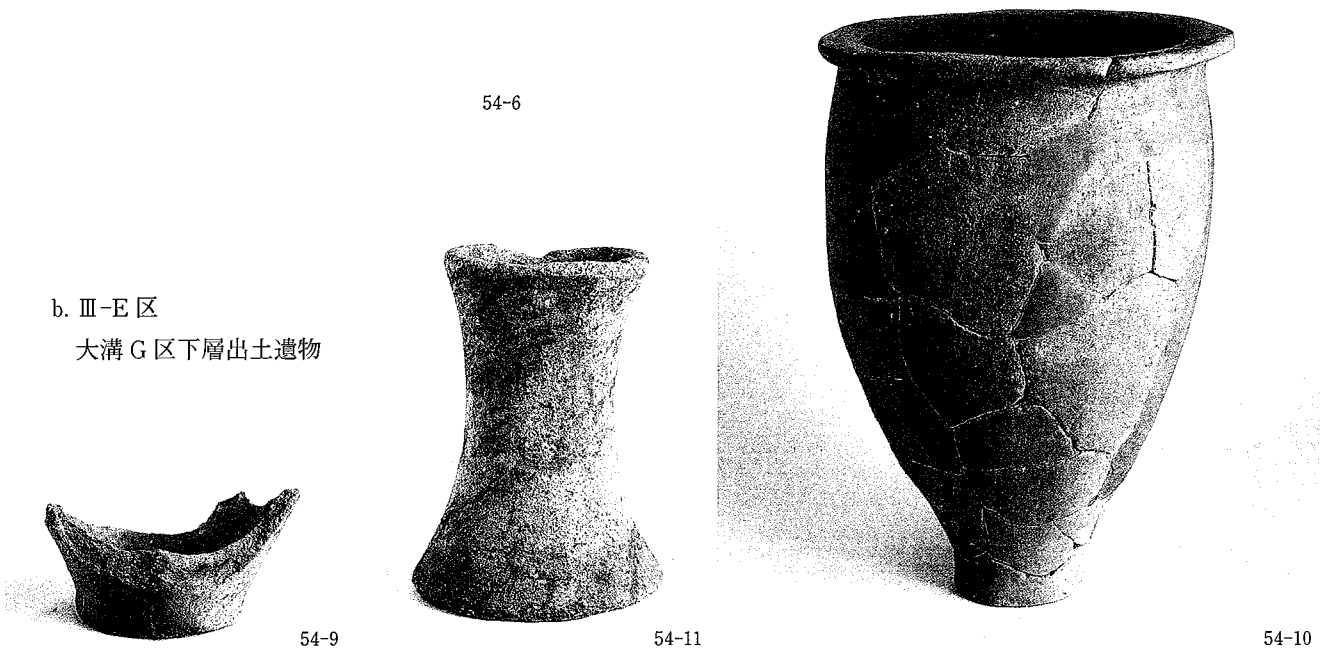
53-65

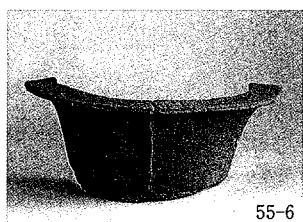
III-E 区
大溝 G 区上層出土遺物 2



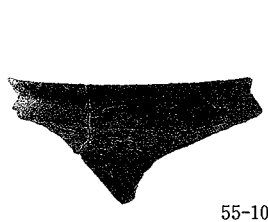
a. III-E区 大溝G区中層出土遺物

b. III-E区
大溝G区下層出土遺物

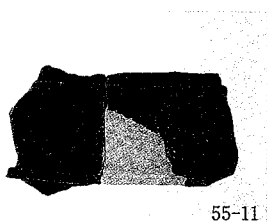




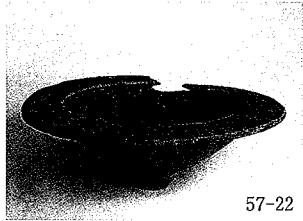
55-6



55-10



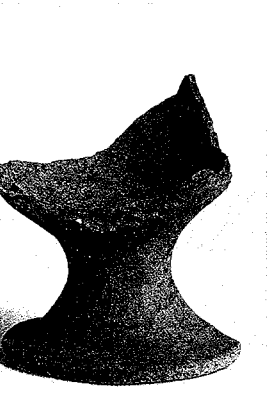
55-11



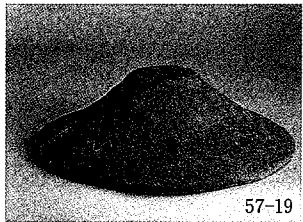
57-22



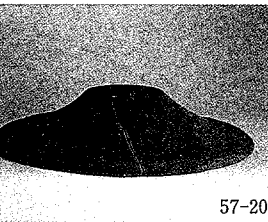
56-15



57-26



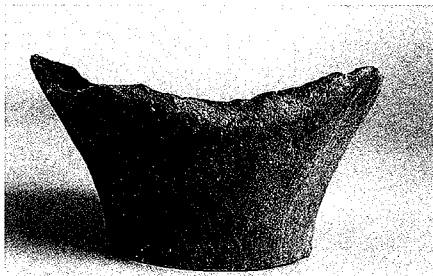
57-19



57-20



55-5



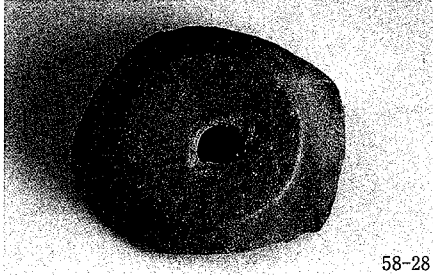
58-28



58-30



58-33



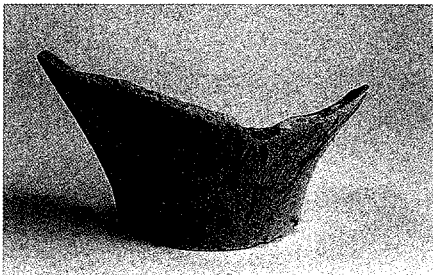
58-31



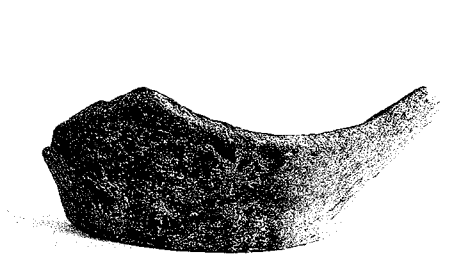
58-32



58-34



58-38

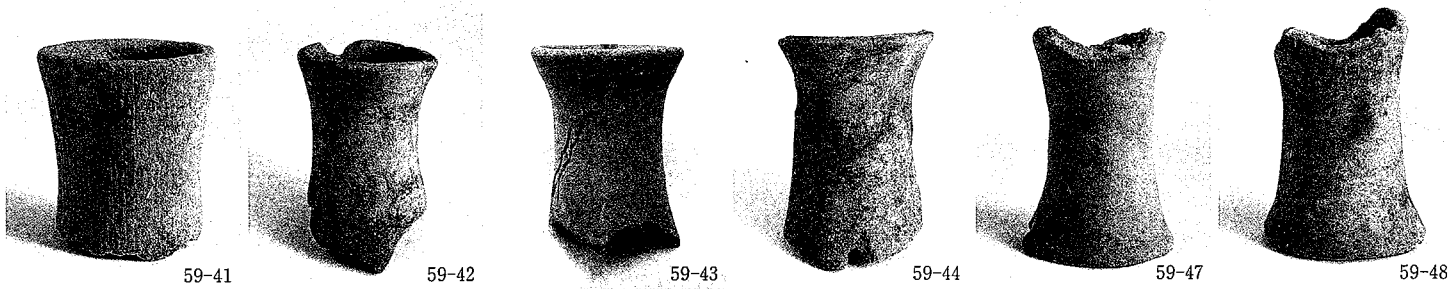


58-40



III-E 区
大溝 I 区上層出土遺物 1





59-41

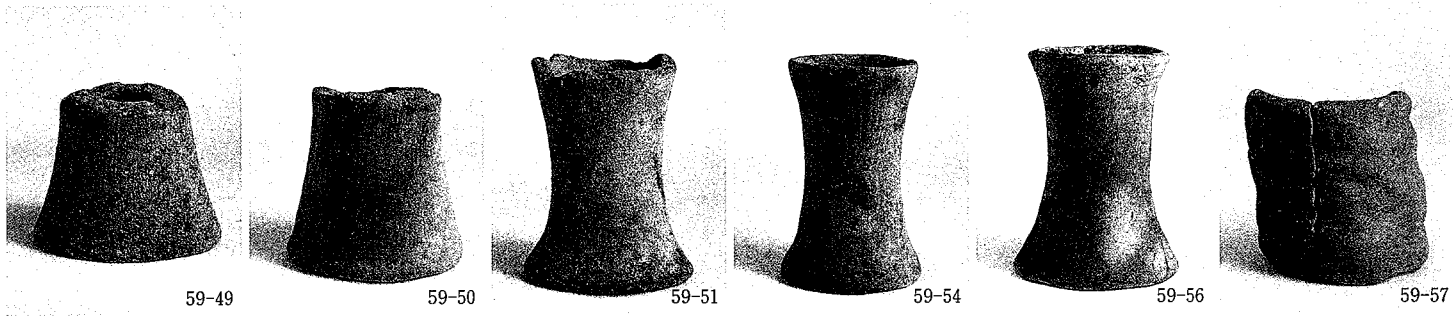
59-42

59-43

59-44

59-47

59-48



59-49

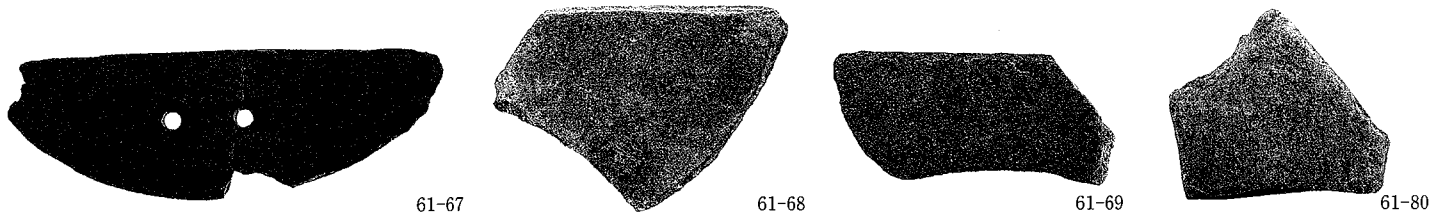
59-50

59-51

59-54

59-56

59-57

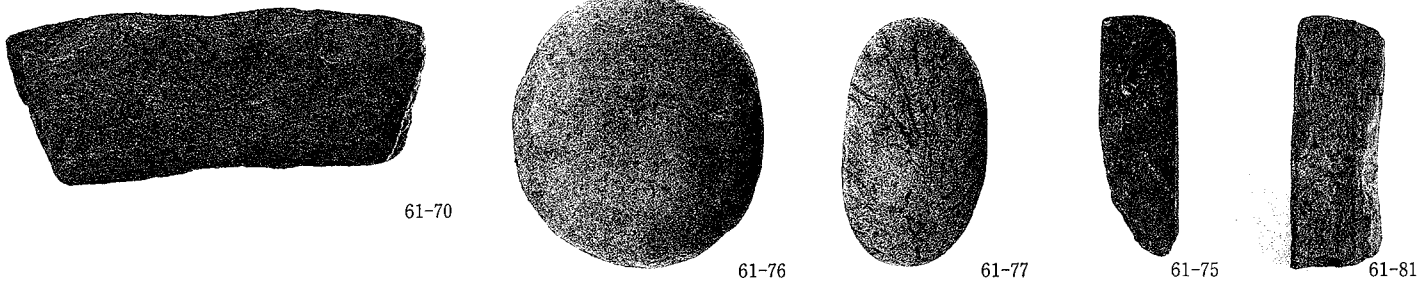


61-67

61-68

61-69

61-80



61-70

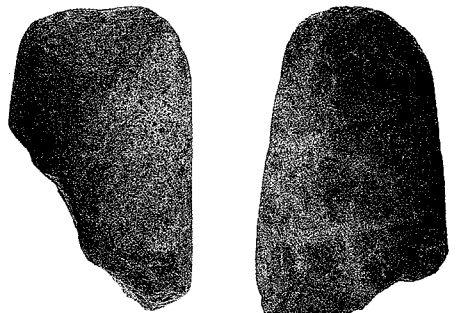
61-76

61-77

61-75

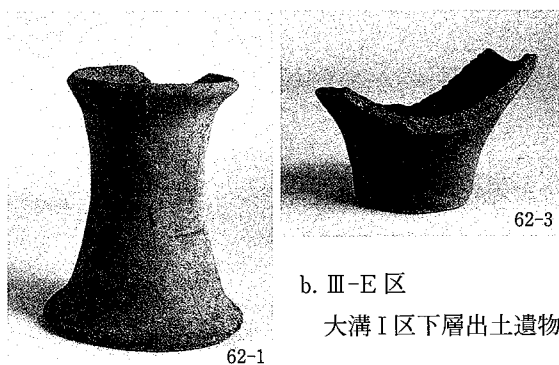
61-81

a. III-E 区 大溝 I 区上層出土遺物 2



61-74

61-82



62-1

62-3

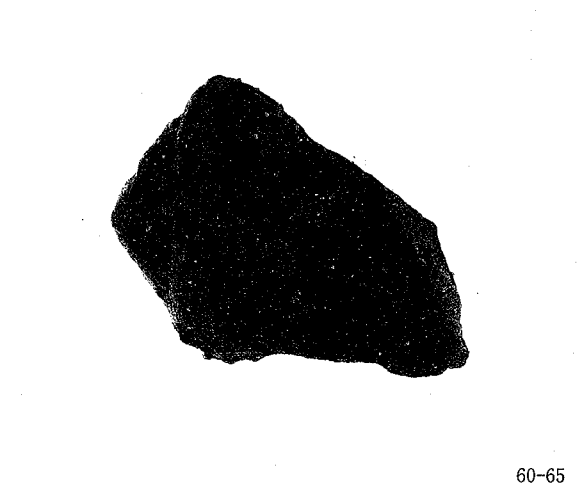
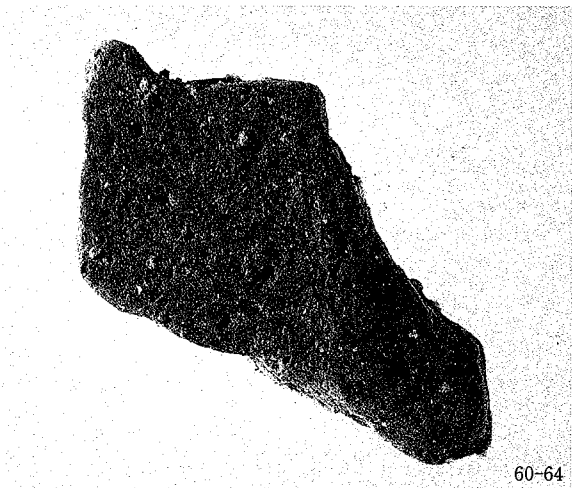
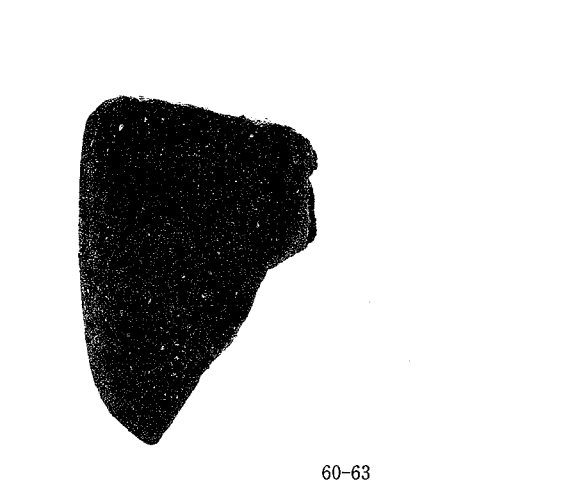
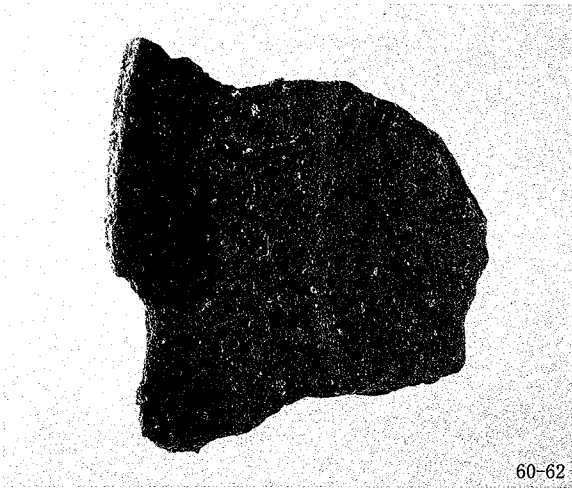
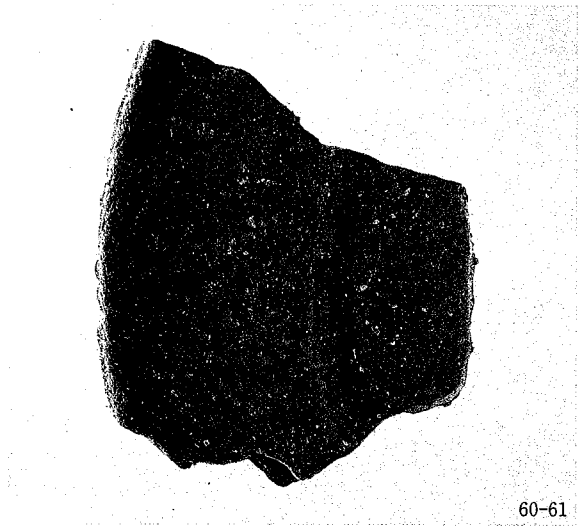
b. III-E 区
大溝 I 区下層出土遺物



63-2

63-3

c. III-E 区
大溝上部包含層出土遺物



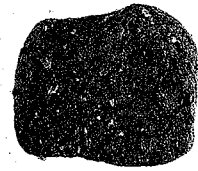


64-1

a. III-E区 1号掘立柱建物出土遗物



67-1



67-2

b. III-E区 3号掘立柱建物出土遗物



69-1

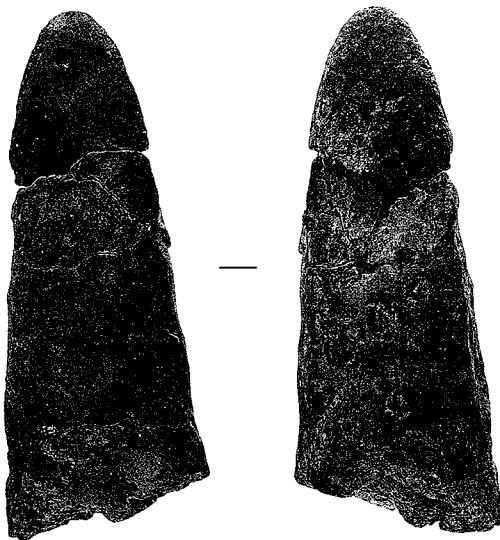


69-2

c. III-E区 4号掘立柱建物出土遗物



71-1

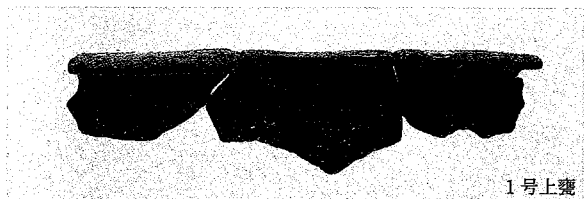


71-3



71-2

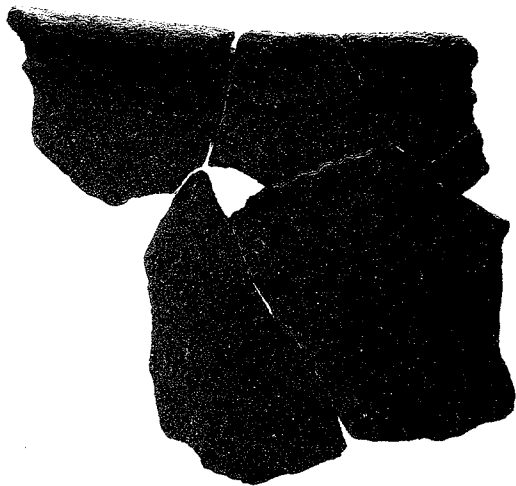
d. III-E区 5号掘立柱建物出土遗物



1号上甕

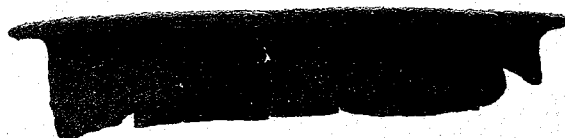


2号上甕



1号下甕

a. Ⅲ-E区 1号甕棺



2号下甕

b. Ⅲ-E区 2号甕棺



3号下甕

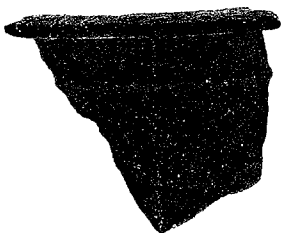
c. Ⅲ-E区 3号甕棺



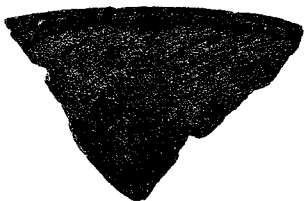
3号上甕



78-1



78-4



78-2



78-8



78-3



78-6



78-9



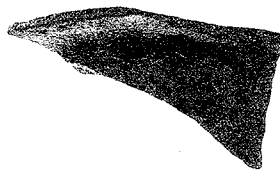
78-13



78-7



78-12



78-14



78-10



78-15



78-17



78-16

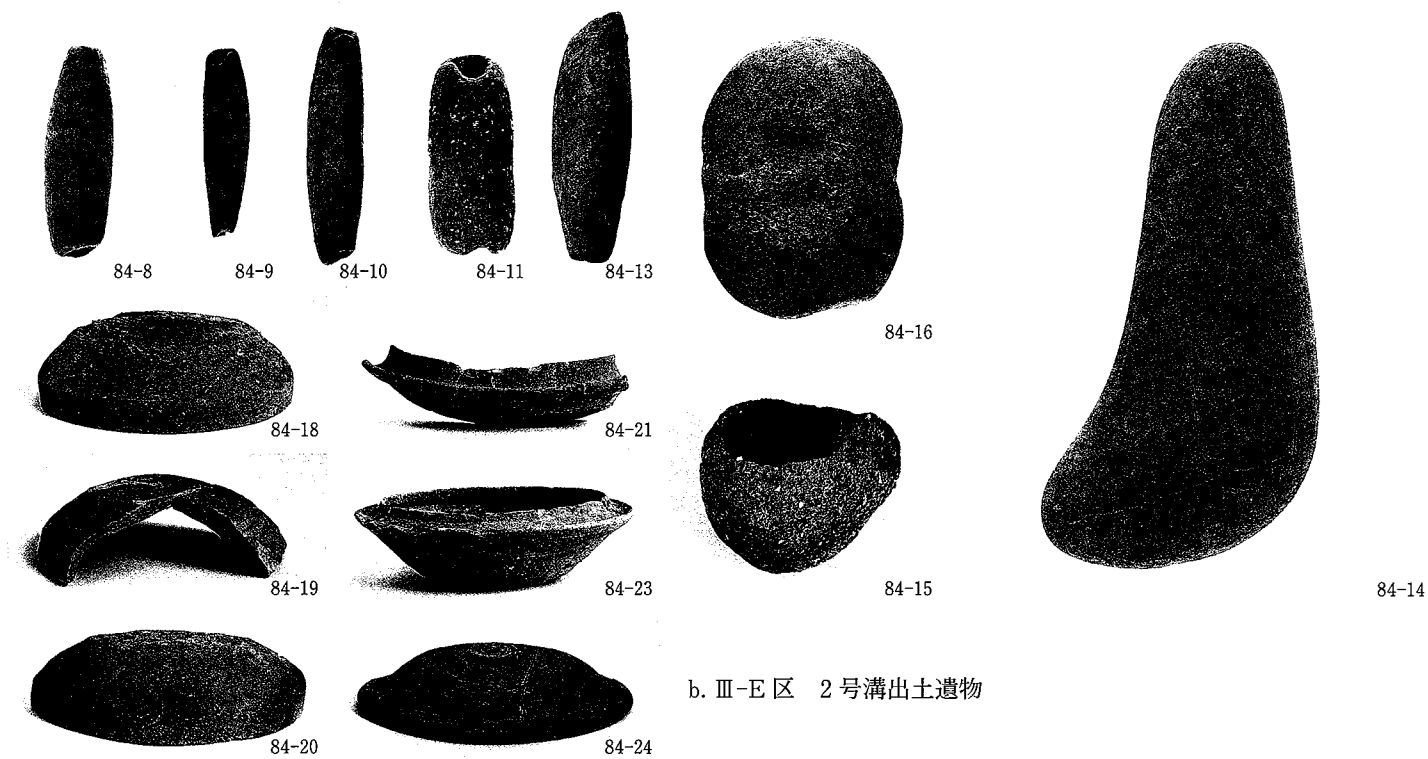


78-18

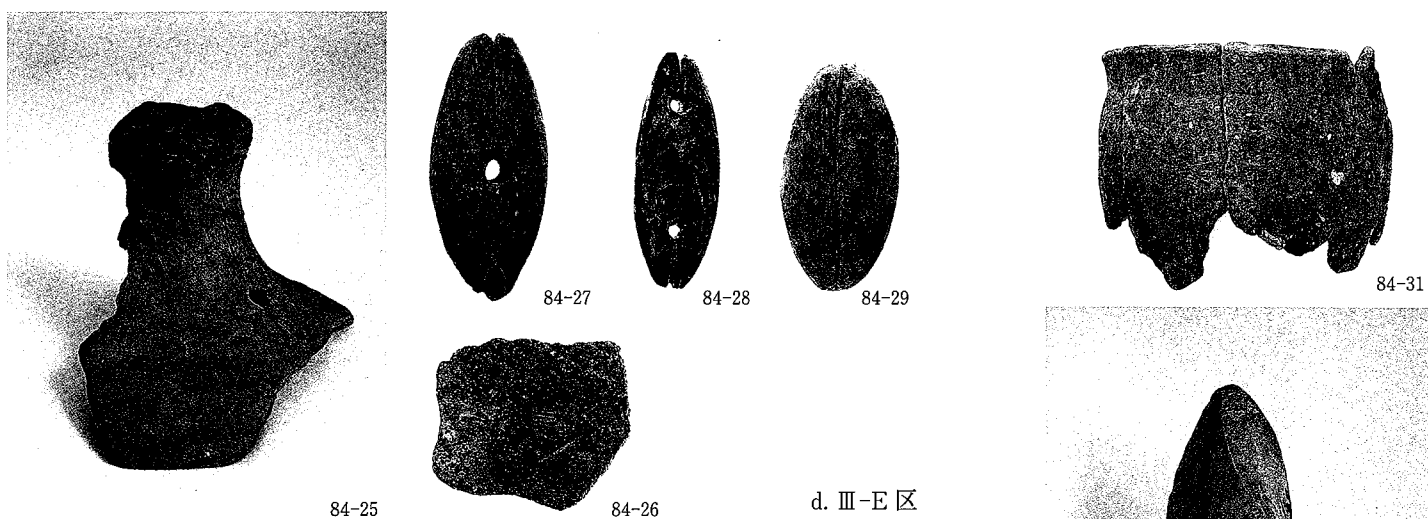
Ⅲ-E区 1、3~6号土坑 出土遗物



a. Ⅲ-E区 1号沟出土遗物

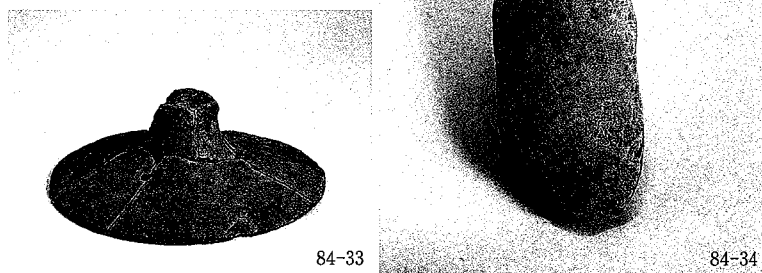


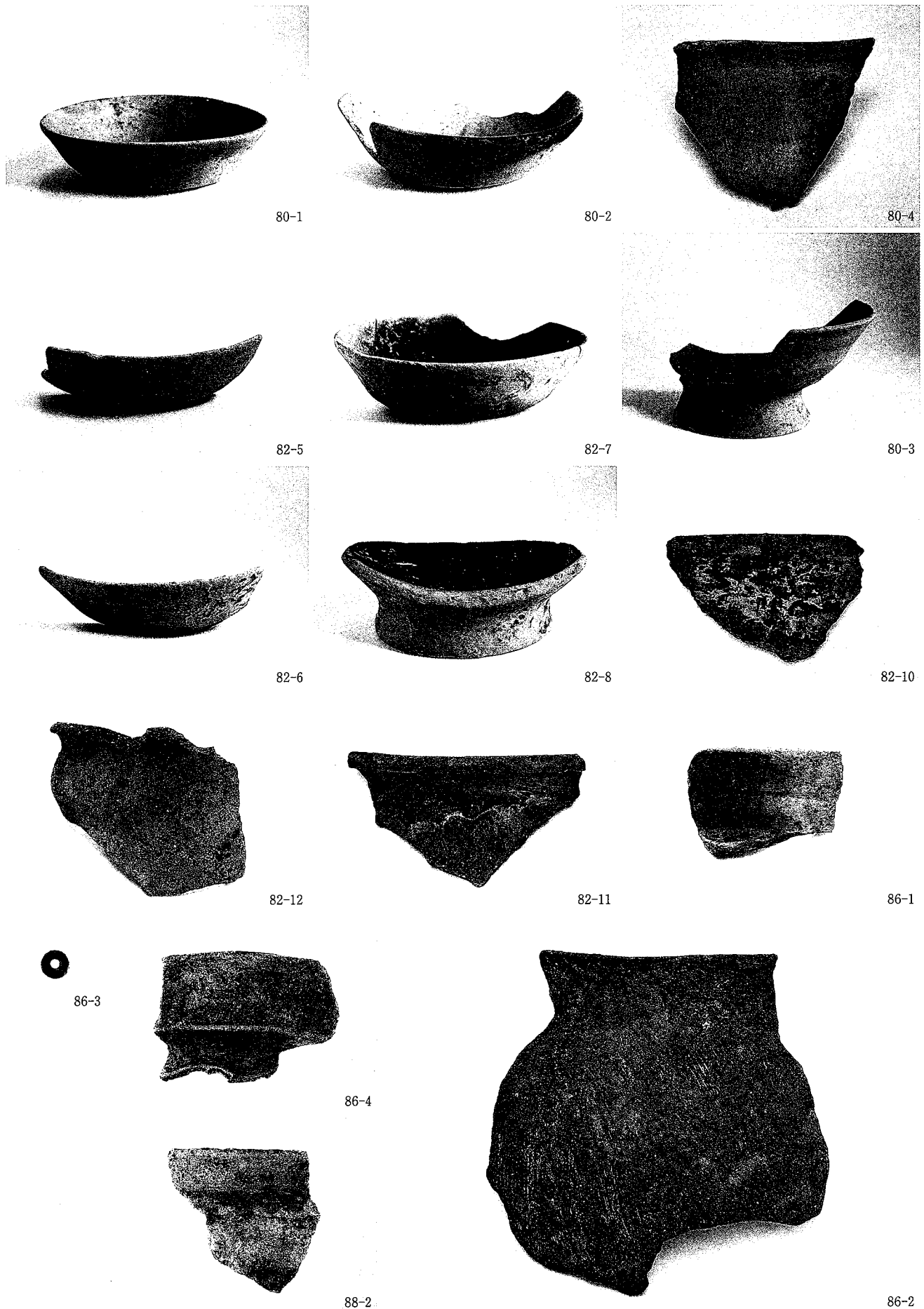
b. Ⅲ-E区 2号沟出土遗物



c. Ⅲ-E区 3号沟出土遗物

d. Ⅲ-E区 2-3号沟出土遗物

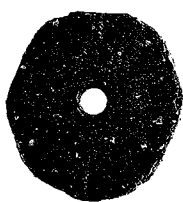




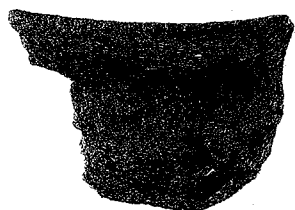
Ⅲ-E区 1、2号井戸および1、3号竪穴住居出土遺物



91-1



91-8



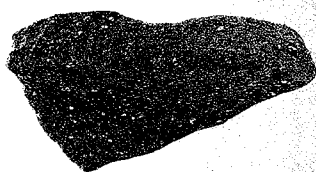
91-2



91-6



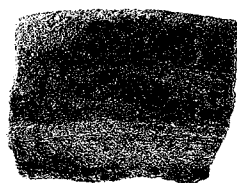
91-7



94-3



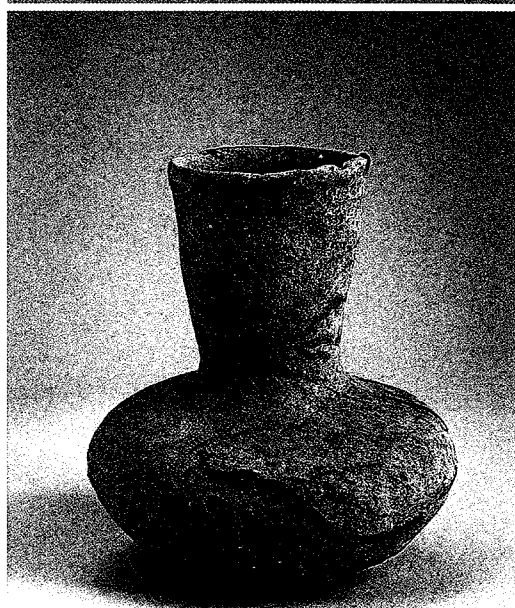
94-5



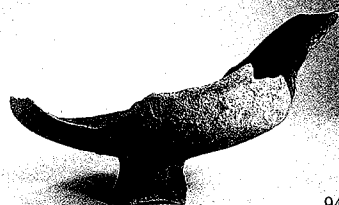
94-4



94-6



93-1



94-7



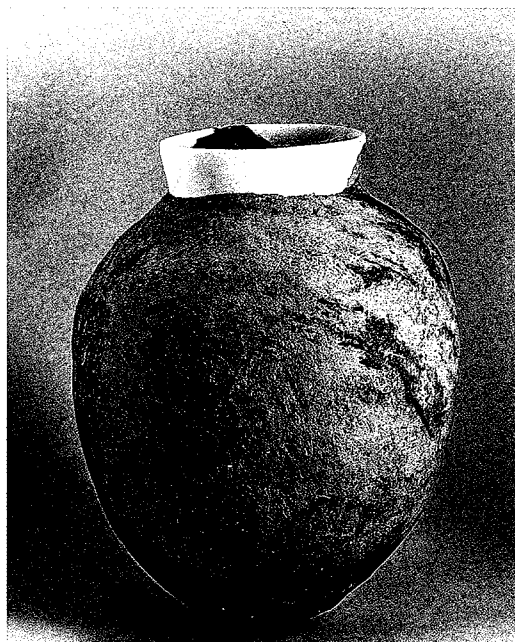
94-8



94-10

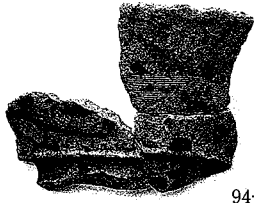


94-11



93-2

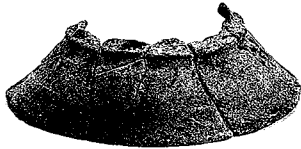
Ⅲ-E区 4号竪穴住居および5号屋外周溝出土遺物1



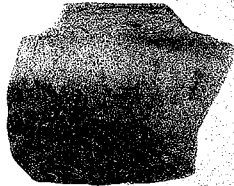
94-14



94-16



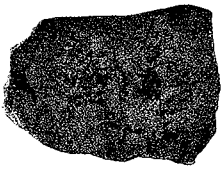
94-15



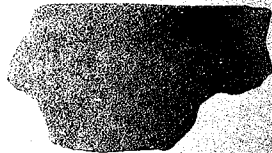
94-24



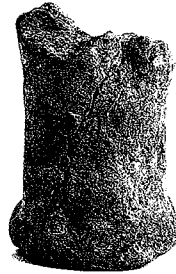
94-13



94-21



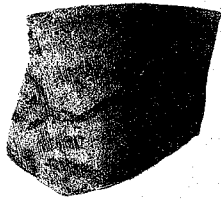
94-25



94-17



94-18



95-26



94-23



94-12



94-20



95-29



95-27



94-19



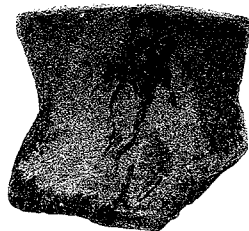
94-22



95-31

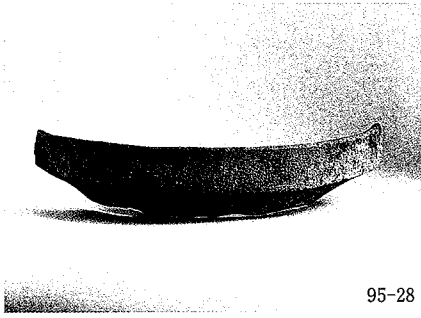


95-32

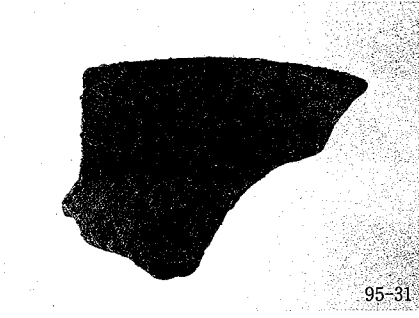


95-30

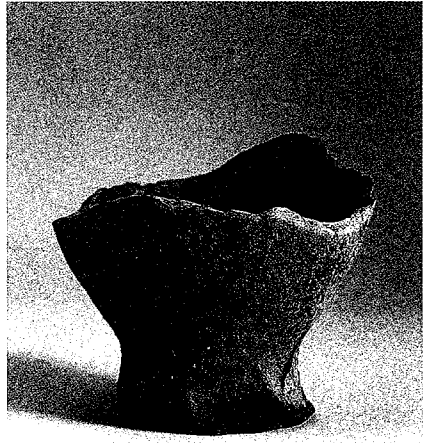
III-E 区 5 号屋外周溝出土遺物 2



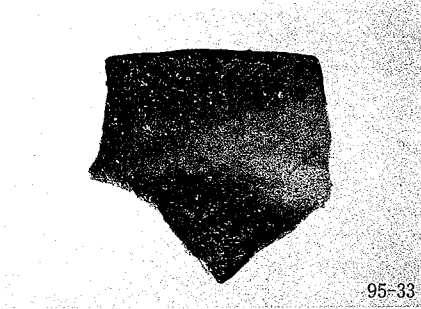
95-28



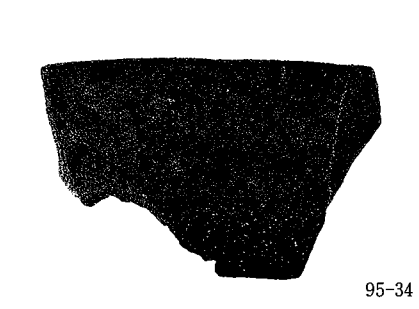
95-31



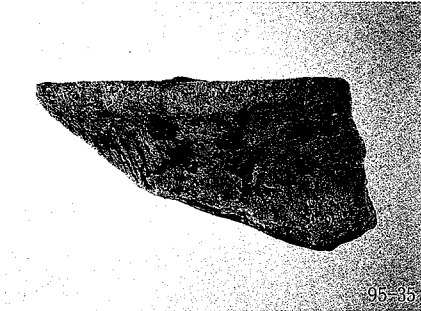
95-36



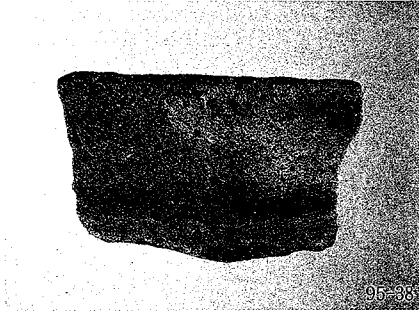
95-33



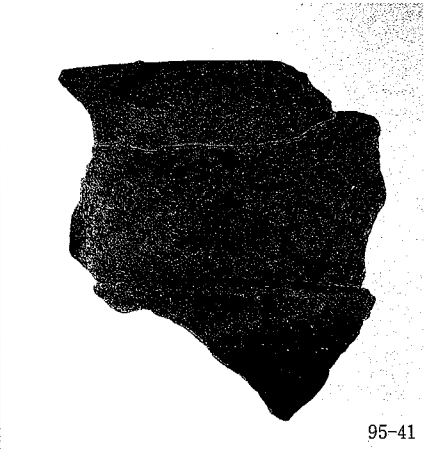
95-34



95-35



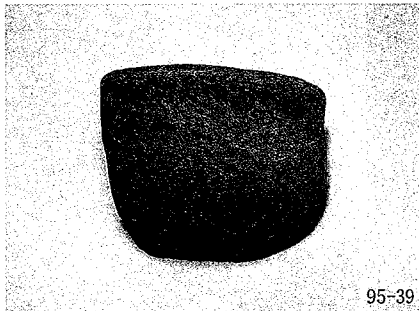
95-38



95-41



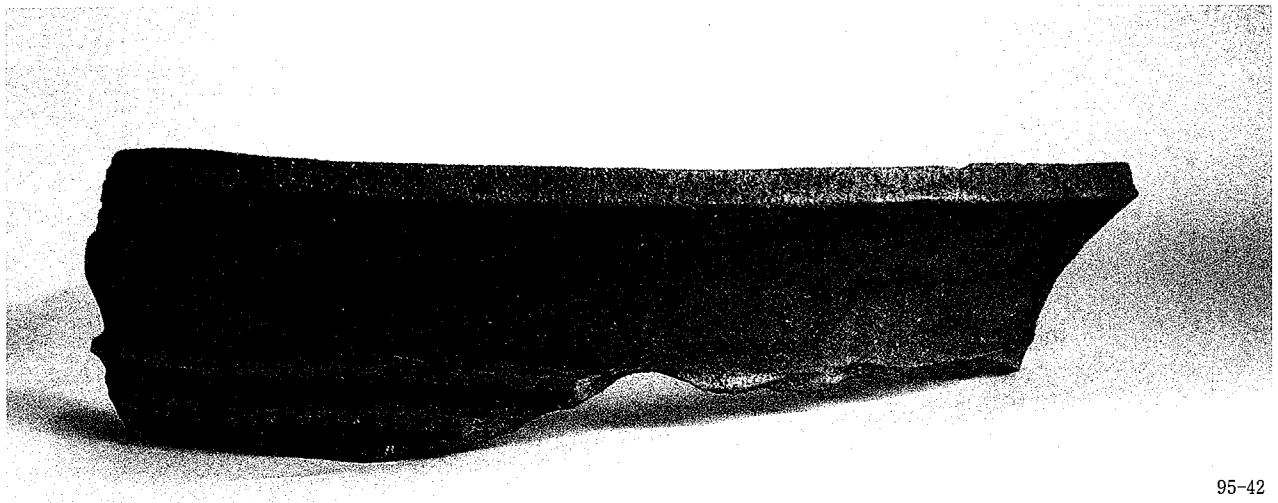
95-37



95-39



95-40



95-42



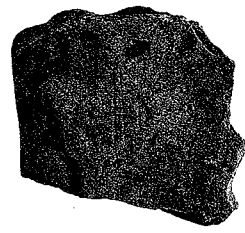
100-1



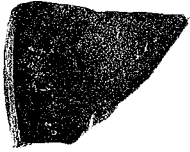
100-2



100-6



100-5



100-3



100-8



100-9



100-11



100-4



100-7



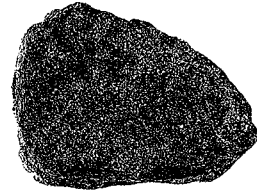
100-10



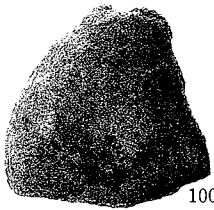
100-12



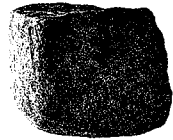
100-18



100-19



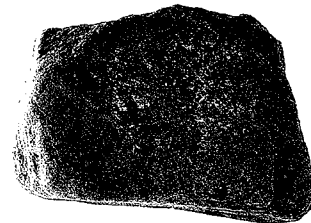
100-14



100-13



100-15



100-17



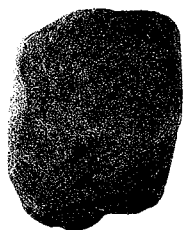
100-16



100-20



101-21



101-23



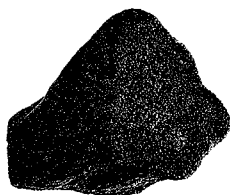
101-24



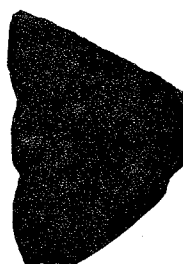
101-26



101-31



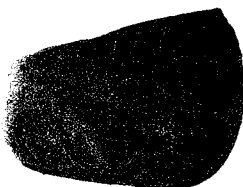
101-29



101-28



101-32



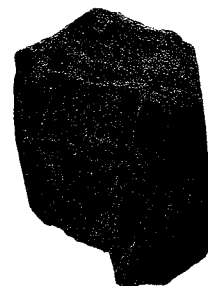
101-33



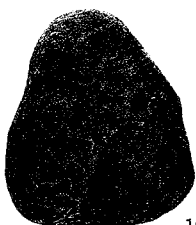
102-42



101-36



101-34



102-39



102-38



101-37



102-41



102-40

III-E 区 工具類 2



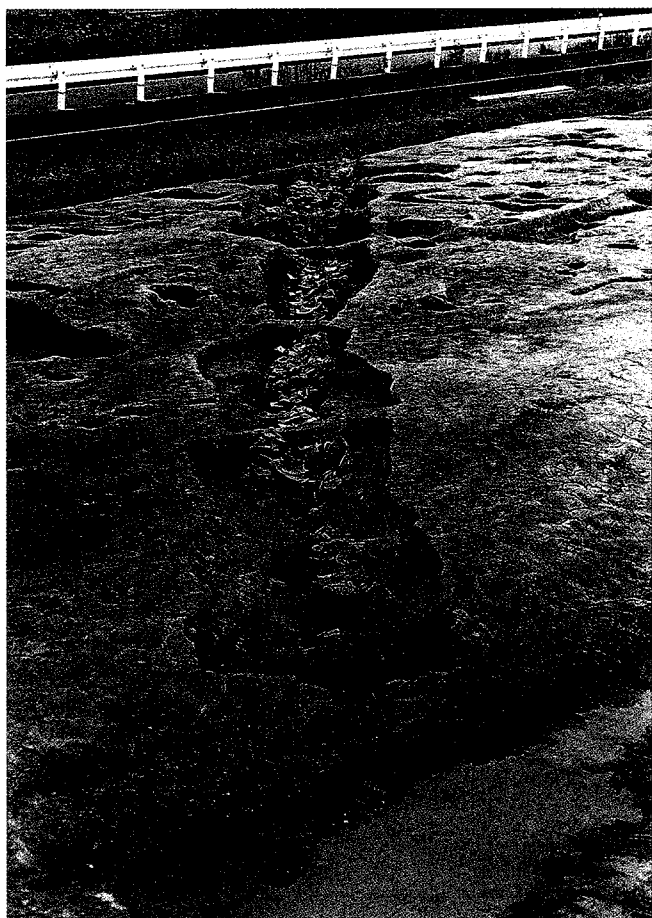
a. III-W 区から北を望む



b. III-W 区全景 (北から)



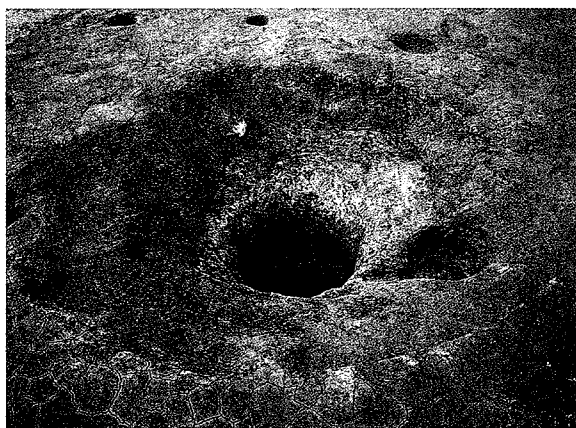
a. III-W 区南側全景 (南から)



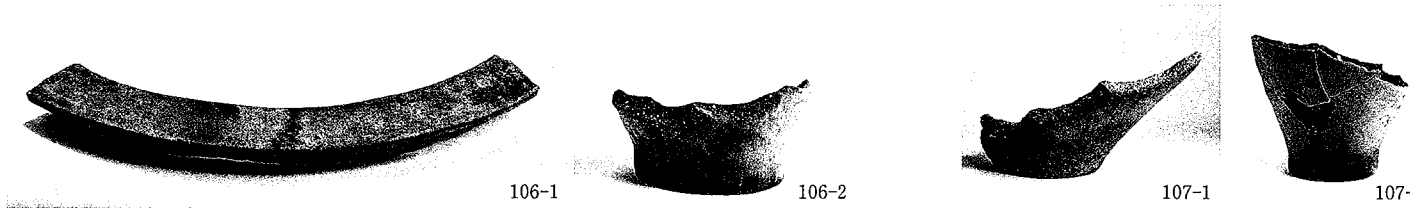
b. III-W 区 1号溝 (東から)



c. III-W 区 1号溝土層断面

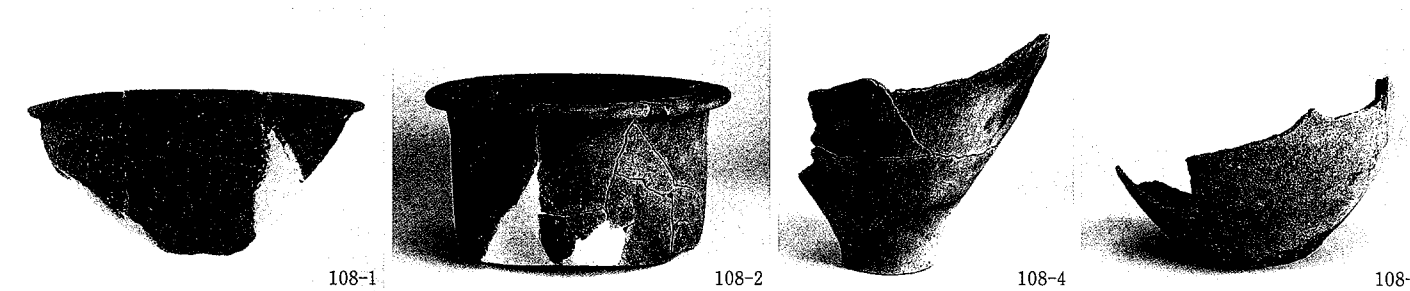


d. III-W 区 4号井戸

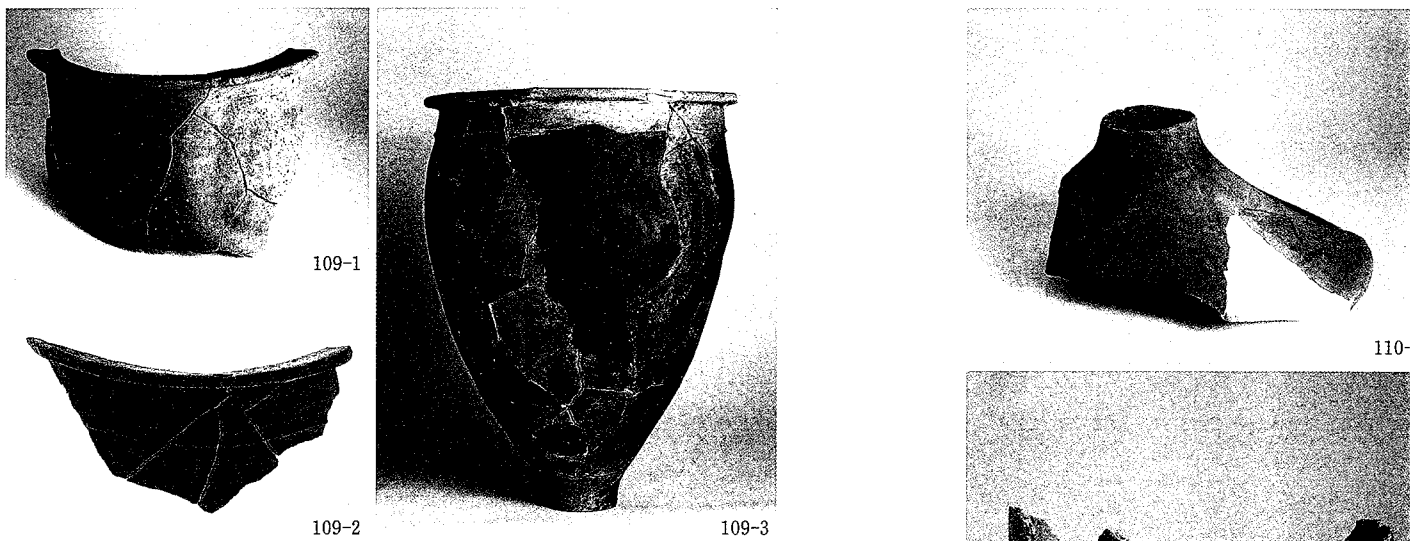


a. III-W 区 1号沟 A 群出土遗物

b. III-W 区 1号沟 B 群出土遗物

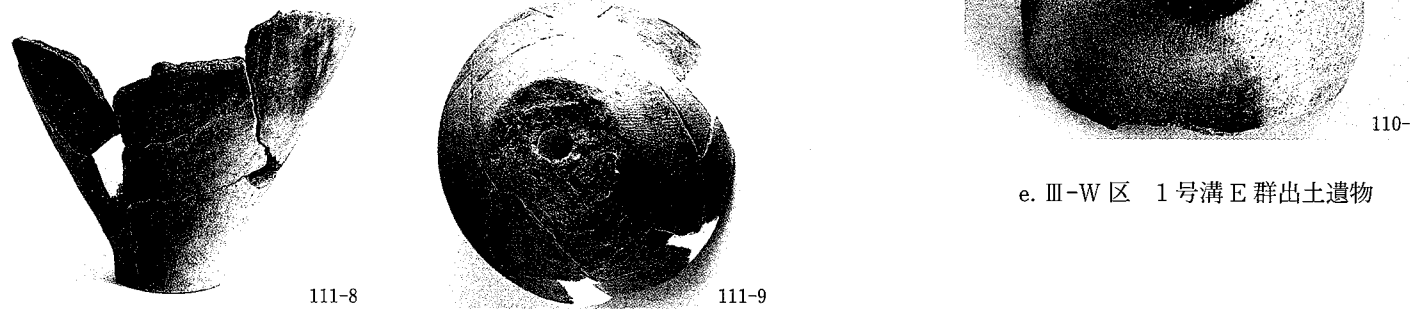


c. III-W 区 1号沟 C 群出土遗物

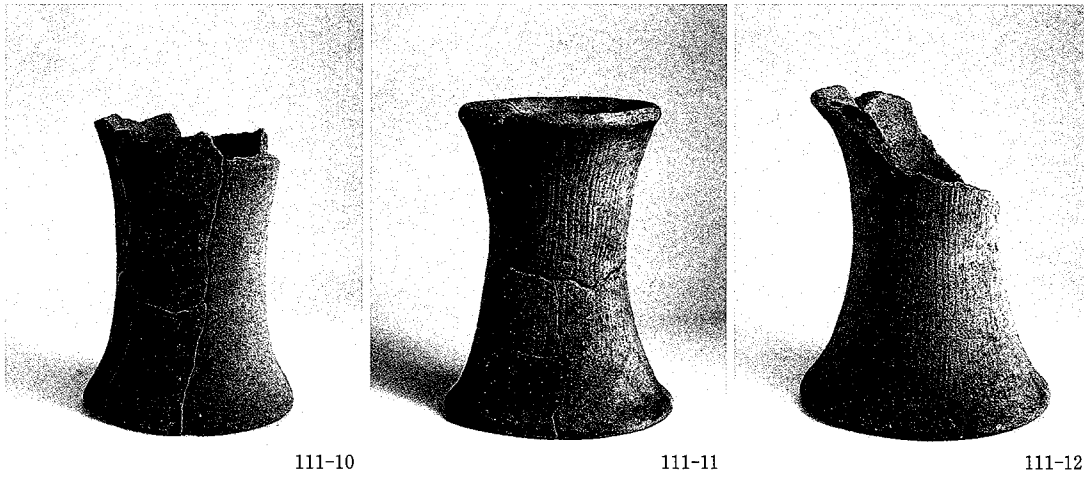


d. III-W 区
1号沟 D 群出土遗物

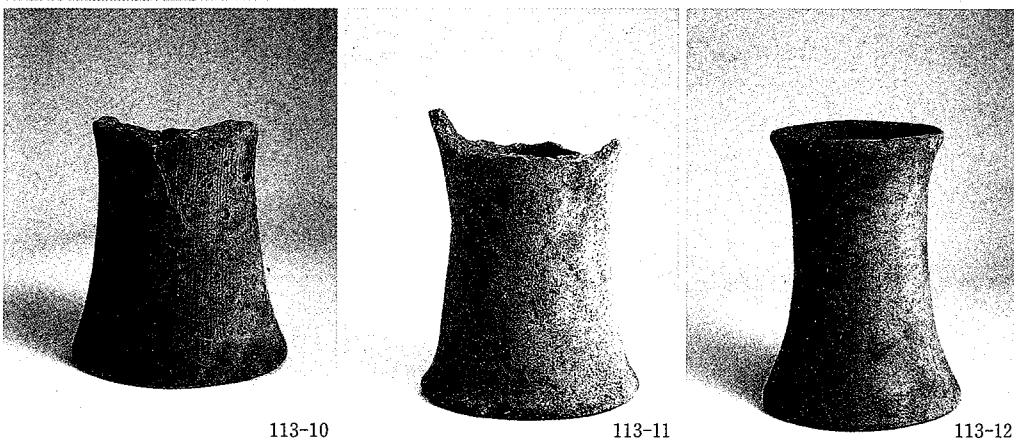
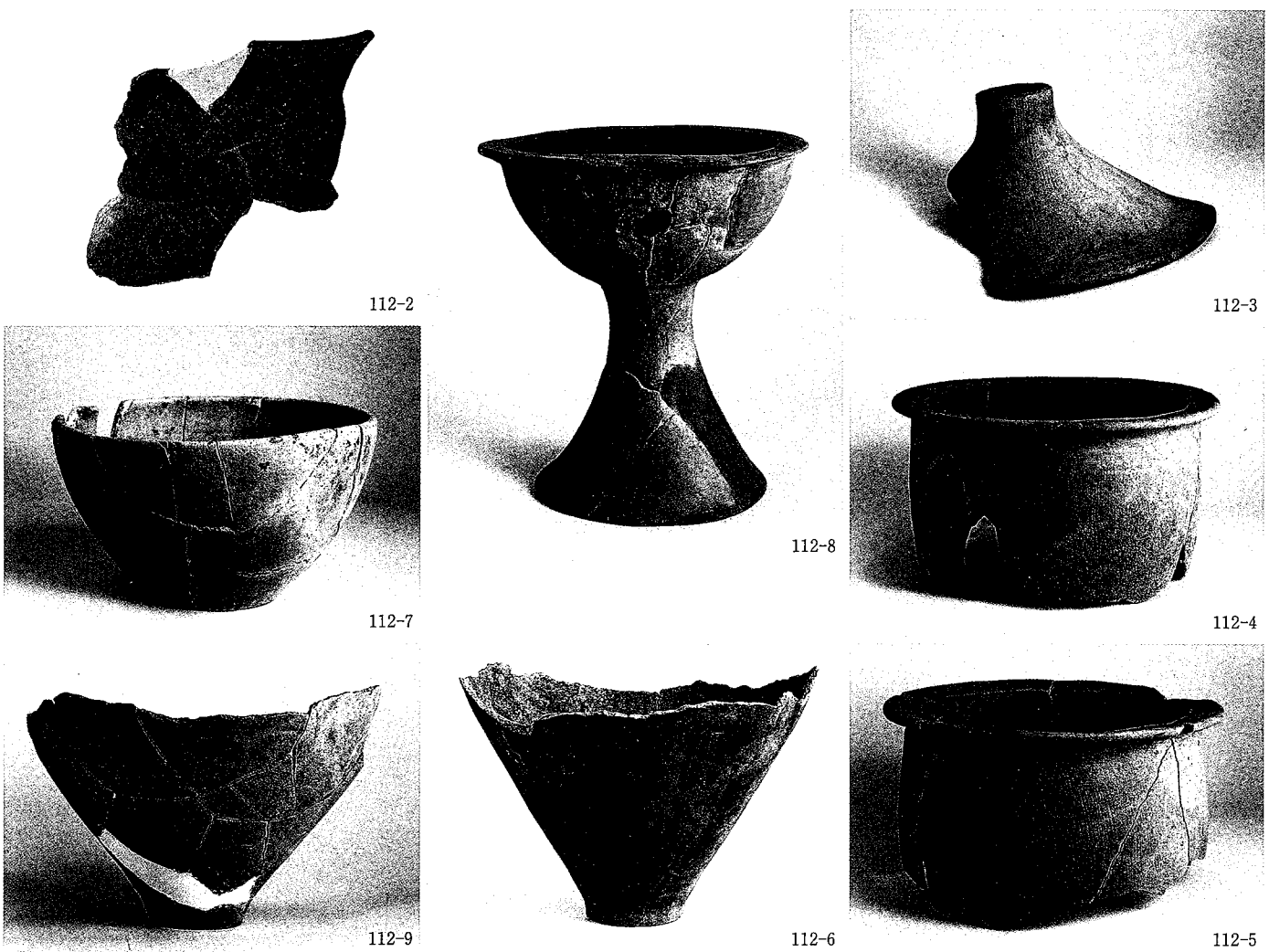
f. III-W 区
1号沟 F 群出土遗物 1



e. III-W 区 1号沟 E 群出土遗物



a. Ⅲ-W 区
1号沟 F 群出土遗物 2



b. Ⅲ-W 区
1号沟 G 群出土遗物



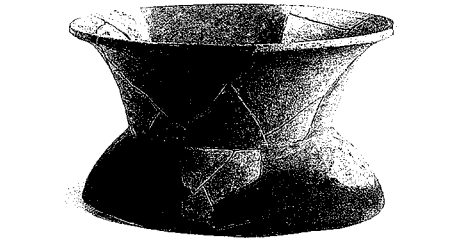
115-1



115-4



114-3



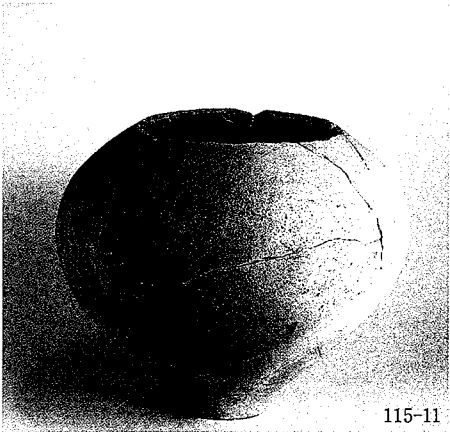
115-8



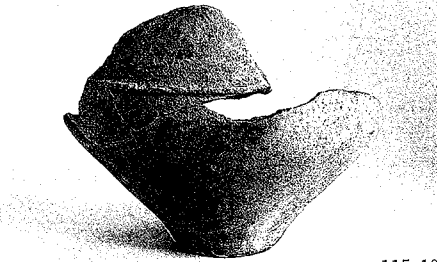
115-9



114-4



115-11

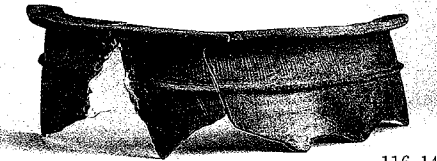


115-10

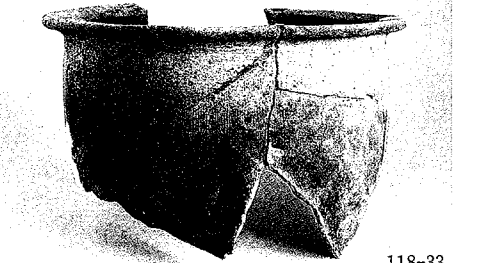
a. III-W区 1号沟H群出土遗物



117-18



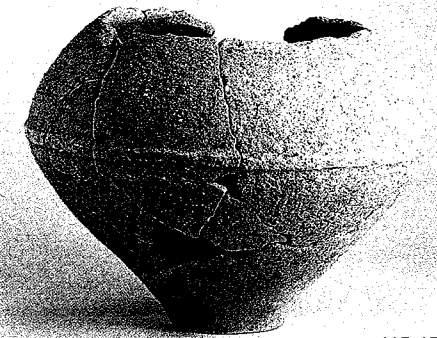
116-14



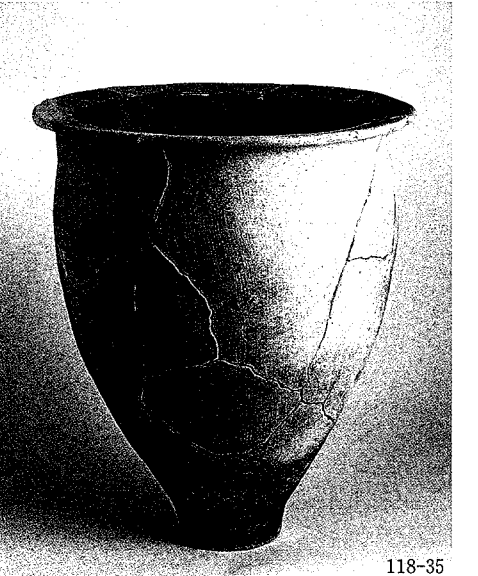
118-33



117-28

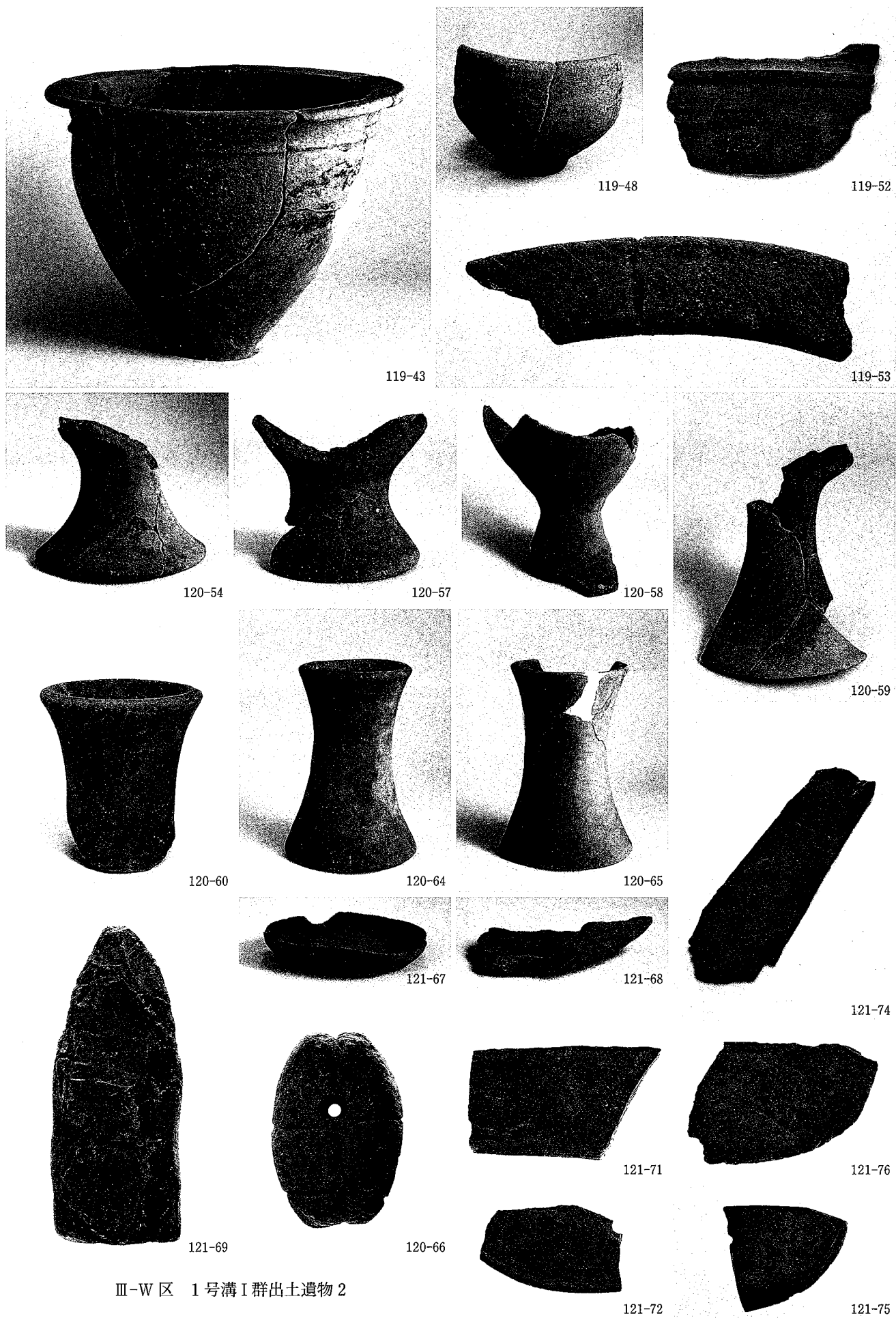


117-17

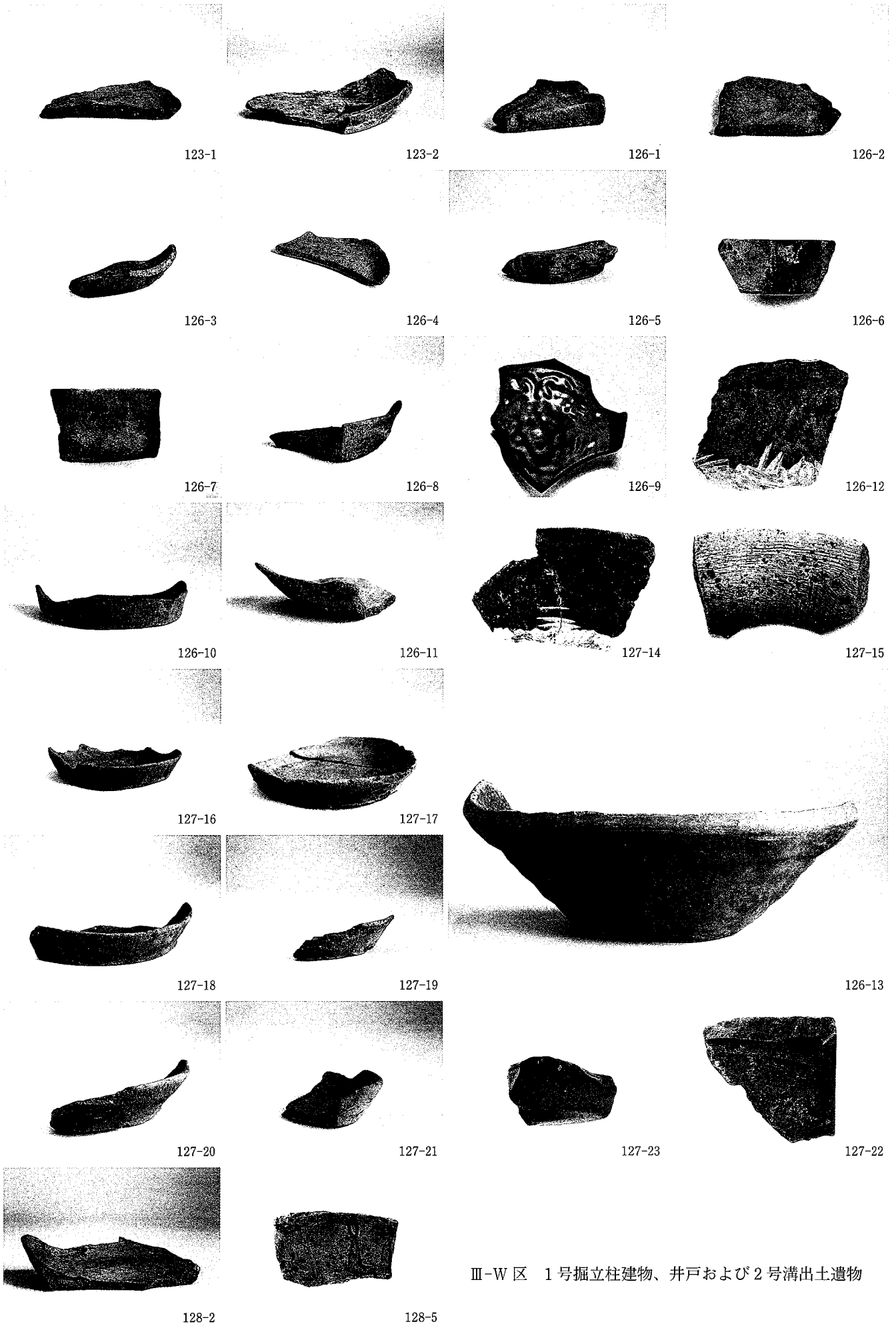


118-35

b. III-W区 1号沟I群出土遗物 I



III-W 区 1 号溝 I 群出土遺物 2



Ⅲ-W区 1号掘立柱建物、井戸および2号溝出土遺物

報告書抄録

ふりがな	うるう じとうきゆういせき いち							
書名	潤地頭給遺跡 I							
副書名	福岡県前原市立東風小学校建設に係る発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名	前原市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第93集							
著者名	江野道和							
編集機関	前原市教育委員会							
所在地	〒819-1192 福岡県前原市前原西一丁目8番14号							
発行年月日	西暦 2006年3月31日							
保管場所	〔写真〕〔図版〕〔遺物〕		前原市教育委員会					
保管場所所在地	福岡県前原市前原西一丁目8番14号							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
潤地頭給遺跡 Ⅲ-E区 Ⅲ-W区	福岡県前原市 大字潤字地頭給	40222		33° 33' 51" ～ 33' 52"	130° 13' 13" ～ 03"	2003.1～ 2004.3	7,035 m ²	小学校 建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物			特記事項	
潤地頭給遺跡 Ⅲ-E区 Ⅲ-W区	集落、 墓地、 生産遺跡	弥生時代中期、 終末期～古墳時 代初頭、古墳時代 ～平安時代、中 世	大溝、掘立柱建物、甕 棺墓、土坑、玉作関連 遺構、井戸	弥生土器、石剣、石庖丁、石斧、 石鏃、投弾、甕棺、杓子形土製品、 土製勾玉、土錘、石錘、土製紡錘車、 碧玉、水晶、玉作関連工具、須恵器、 土師器				

潤地頭給遺跡 I

前原市文化財調査報告書 第93集

2006年3月31日

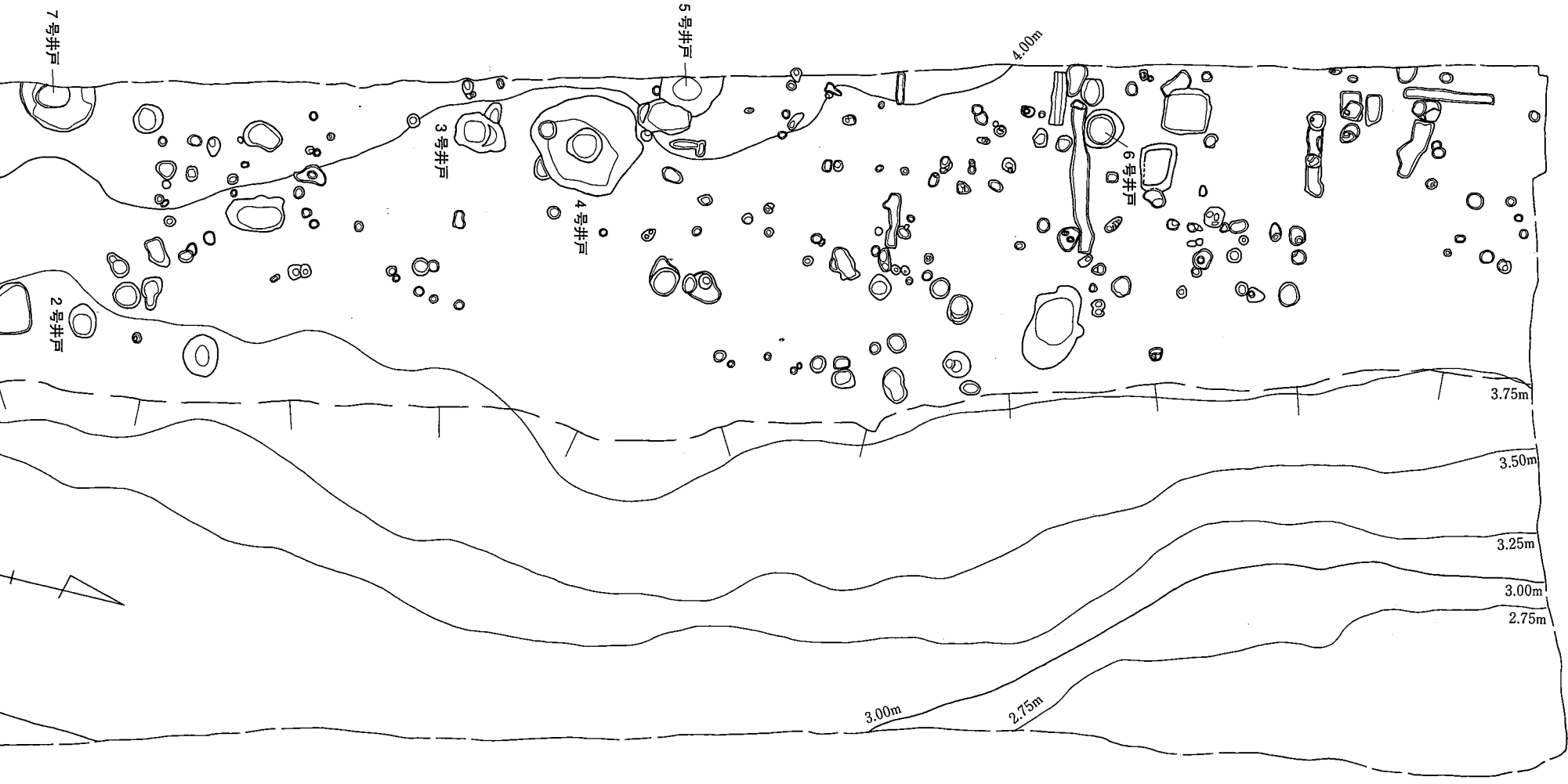
発行 前原市教育委員会

前原市前原西一丁目8番14号

印刷 (有)システム・レコ

福岡市東区土井1丁目11番7号

X=69750

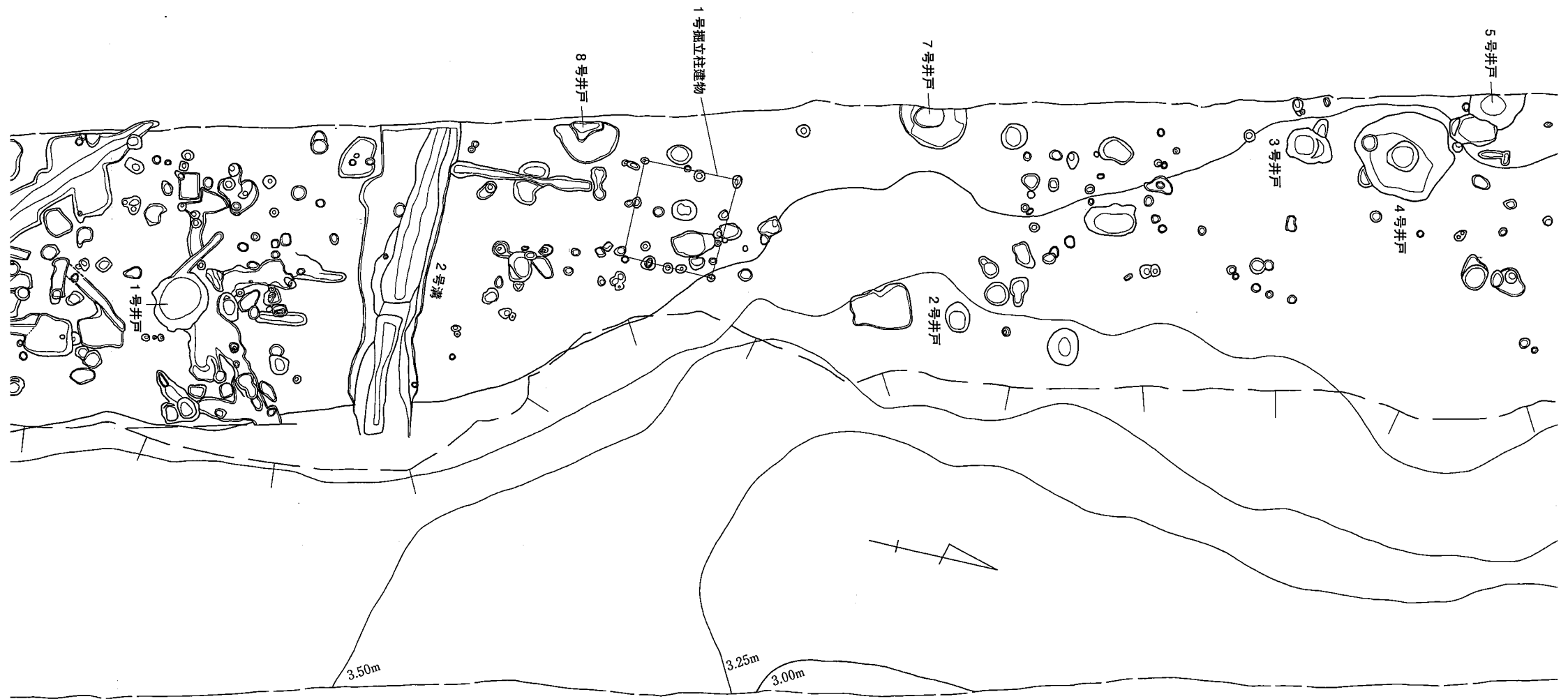


X=69750

Y=-72550

X-62750

X-62750



X-62750



第1图 III-E区 遺構配置図 (1/200)

